

平成 22 年度
神戸市埋蔵文化財年報



2 0 1 3

神戸市教育委員会

平成 22 年度
神戸市埋蔵文化財年報

2013

神戸市教育委員会



fig. 1 住吉宮町遺跡第49次調査
SX06出土 土師器・滑石製品



fig. 2 雲井遺跡第33次調査
SB202出土 玉未製品



fig. 3 雲井遺跡第33次調査
SB202出土 碧玉剥片



fig. 4 若松町東遺跡第4次調査
SK207出土 深鉢



fig. 5 日輪寺遺跡第14次調査
SB01・02出土 弥生土器

序

私たちが普段、何気なく過ごしている地面の下には、いにしえの人々が遺した様々な活動の痕跡が多く刻まれています。開発に伴いそれらは一時、姿を現しますが、発掘調査の後には、残念ながら失われてしまいます。

本書には平成22年度に実施しました発掘調査の概要を掲載しております。姿を消してしまう、先人たちの遺した生活痕跡を永く記録として残していくものです。これらが今後、大いに活用され、神戸の歴史を語る上での一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成22年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に
関わる発掘調査は下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工　樂　善　通　　大阪府狭山池博物館館長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	橋口秀志		
社会教育部長	大寺直秀		
教育委員会参事（文化財課長事務取扱）	柏木一孝		
社会教育部主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺伸行		
埋蔵文化財指導係長	丸山 潔		
埋蔵文化財調査係長	千種 浩		
文化財課主査	丹治康明	安田 滋	斎木 巍
事務担当学芸員	佐伯二郎		
調査担当学芸員	西岡巧次	口野博史	須藤 宏
	池田 毅	内藤俊哉	阿部敬生
	井尻 格	川上厚志	石島三和
	中谷 正		阿部 功
埋蔵文化財センター担当学芸員	黒田恭正	西岡誠司	山口英正
保存科学担当学芸員	中村大介		

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。

3. 各遺跡の概要については埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した調査担当学芸員が執筆し、I. 平成22年度事業の概要1～5については千種浩、6については斎木巖が執筆し、編集については藤井太郎が行った。なお、雲井遺跡第32次調査における花粉分析については株式会社パレオ・ラボに依頼し、同社の森将志氏の執筆による。

4. 挿図写真の撮影、遺構図等図版のトレースについては、各調査担当者が行った。

5. 表紙写真は雲井遺跡第32次調査（本文42頁）SD601出土の縄文土器で、裏表紙写真は兵庫津遺跡第53次調査（本文89頁）出土の「十二月三十日」「ふんこ（豊後）の國」と判読できる墨書土器である。巻頭カラー写真は、fig.1が住吉宮町遺跡第49次調査（本文31頁）出土遺物、fig.2・3が雲井遺跡第33次調査（本文64頁）出土玉作り関連遺物、fig.4が若松町東遺跡第4次調査（本文101頁）出土土器、fig.5が日輪寺遺跡第14次調査（本文136頁）出土土器で、撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。

6. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序 例言

I.	平成22年度 事業の概要	1
	平成22年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	10
	平成22年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	12
II.	平成22年度の発掘調査	15
1.	岡本梅林古墳第2次調査	15
2.	住吉宮町遺跡第47次調査	19
3.	住吉宮町遺跡第48次調査	26
4.	住吉宮町遺跡第49次調査	31
5.	雲井遺跡第32次調査	42
6.	雲井遺跡第33次調査	64
7.	生田遺跡第7次調査	68
8.	城ヶ口遺跡第1次調査	72
9.	楠・荒田町遺跡第46次調査	76
10.	楠・荒田町遺跡第47次調査	80
11.	楠・荒田町遺跡第48次調査	85
12.	楠・荒田町遺跡第49次調査	86
13.	楠・荒田町遺跡第50次調査	87
14.	兵庫津遺跡第53次調査	89
15.	若松町東遺跡第3次調査	99
16.	若松町東遺跡第4次調査	101
17.	若松町東遺跡第5次調査	105
18.	戎町遺跡第67次調査	109
19.	出合遺跡試掘調査	112
20.	出合遺跡第45次調査	115
21.	今津遺跡第23次調査	126
22.	新方遺跡第49次調査	128
23.	南別府遺跡第3次調査	130
24.	南別府遺跡第4次調査	132
25.	日輪寺遺跡第14次調査	136
III.	平成22年度の保存科学調査・作業の概要	142

挿 図 目 次

fig. 1	住吉宮町遺跡第49次調査 SX06出土 土師器・滑石製品〔巻頭カラー〕	
fig. 2	雲井遺跡第33次調査 SB202出土 玉未製品〔巻頭カラー〕	
fig. 3	雲井遺跡第33次調査 SB202出土 碧玉剥片〔巻頭カラー〕	
fig. 4	若松町東遺跡第4次調査 SK207出土 深鉢〔巻頭カラー〕	
fig. 5	日輪寺遺跡第14次調査 SB01・02出土 弥生土器〔巻頭カラー〕	
fig. 6	企画展示「縄文と弥生」	9
fig. 7	出張授業「火おこし体験」	9
fig. 8	古代衣装試着体験	9
fig. 9	大歳山まつり	9
fig. 10	「その道の達人に学ぶ体験講座」堅穴住居をつくろう	9
fig. 11	企画展示「昭和のくらし・昔のくらし5」旧車パレード	9
fig. 12	埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	12
fig. 13	調査地点位置図(1)	13
fig. 14	調査地点位置図(2)	13
fig. 15	調査地点位置図(3)	14

fig.16 調査地点位置図(4)	14	fig.55 第5遺構面全景〔写真〕	44
fig.17 調査地位置図	15	fig.56 第6遺構面平面図	46
fig.18 調査区平・断面図	16	fig.57 第6遺構面南半全景〔写真〕	46
fig.19 調査区全景〔写真〕	17	fig.58 包含層4出土遺物実測図	47
fig.20 石列検出状況〔写真〕	17	fig.59 第4遺構面遺構内出土遺物実測図①	48
fig.21 小石棺実測図	18	fig.60 第4遺構面遺構内出土遺物実測図②	49
fig.22 小石棺展示状況〔写真〕	18	fig.61 包含層5出土遺物実測図	50
fig.23 調査地位置図	19	fig.62 第5遺構面遺構内出土遺物実測図①	51
fig.24 第1遺構面平面図（第45次調査平面図合成）	20	fig.63 第5遺構面遺構内出土遺物実測図②	52
fig.25 第1遺構面全景〔写真〕	21	fig.64 第5遺構面遺構内出土遺物実測図③	53
fig.26 包含層1・包含層2及び黄色砂出土遺物実測図	23	fig.65 第5遺構面遺構内出土遺物実測図④	54
fig.27 第1遺構面遺構内出土遺物実測図	24	fig.66 包含層6出土遺物実測図	55
fig.28 第1遺構面及び第2遺構面遺構内出土遺物実測図	25	fig.67 第6遺構面遺構内出土遺物実測図①	56
fig.29 調査地位置図	26	fig.68 第6遺構面遺構内出土遺物実測図②	57
fig.30 調査区平面図	27	fig.69 第6遺構面遺構内出土遺物実測図③	58
fig.31 第48-1次調査区平・立面図	28	fig.70 第6遺構面遺構内出土遺物実測図④	59
fig.32 第48-1次1区（東半）全景〔写真〕	29	fig.71 第6遺構面遺構内出土遺物実測図⑤	60
fig.33 葦石検出状況〔写真〕	29	fig.72 第6遺構面遺構内出土遺物実測図⑥	61
fig.34 第48-1次2区（西半）全景〔写真〕	29	fig.73 花粉分析用土層断面採取試料プレパラートの状況〔写真〕	63
fig.35 周辺検出古墳群位置関係図	30	fig.74 調査地位置図	64
fig.36 調査地位置図	31	fig.75 第1遺構面平面図	66
fig.37 調査区平面図	33	fig.76 第1遺構面全景〔写真〕	66
fig.38 出土遺物実測図(1)	35	fig.77 SB201全景〔写真〕	66
fig.39 出土遺物実測図(2) SD08出土遺物	36	fig.78 第2遺構面平面図	66
fig.40 出土遺物実測図(3) SX06出土遺物(1)	37	fig.79 SB202全景〔写真〕	66
fig.41 出土遺物実測図(4) SX06出土遺物(2)	38	fig.80 SB203全景〔写真〕	66
fig.42 出土遺物実測図(5) SX06出土遺物(3)	39	fig.81 SD201平・断面図	67
fig.43 出土遺物実測図(6) SX06出土遺物(4)	40	fig.82 SD201全景〔写真〕	67
fig.44 第2遺構面全景〔写真〕	40	fig.83 第28次・第33次調査区全体平面図	67
fig.45 SX06遺物出土状況〔写真〕	40	fig.84 調査地位置図	68
fig.46 SX05検出状況〔写真〕	40	fig.85 調査区平・断面図	70
fig.47 SB01平・断面図	41	fig.86 調査区区割図	70
fig.48 SB01検出状況〔写真〕	41	fig.87 SX02出土遺物実測図	70
fig.49 SB01竪検出状況〔写真〕	41	fig.88 SX01出土遺物実測図	71
fig.50 調査地位置図	42	fig.89 調査地位置図	72
fig.51 第2遺構面平面図	44	fig.90 調査区平面図	74
fig.52 第4遺構面平面図	44	fig.91 Tr.1検出遺構平・断面図	74
fig.53 第5遺構面平面図	44	fig.92 Tr.1東半全景〔写真〕	74
fig.54 第4遺構面SX401全景〔写真〕	44	fig.93 SK01全景〔写真〕	74

fig.94 出土遺物実測図	75	fig.133 第10遺構面平面図	98
fig.95 調査地位置図	76	fig.134 第10遺構面東半全景〔写真〕	98
fig.96 第1遺構面平面図	77	fig.135 SP1007遺物出土状況〔写真〕	98
fig.97 SD01・02検出作業風景〔写真〕	77	fig.136 調査地位置図	99
fig.98 SD01・02土層断面図	78	fig.137 第3次調査調査区平面図	100
fig.99 SD01下層遺物出土状況ならびに層位関係図	78	fig.138 第4次調査第1遺構面平面図	102
fig.100 SD01下層遺物出土状況〔写真〕	78	fig.139 第4次調査第2遺構面平面図	102
fig.101 SD01出土遺物〔写真〕	79	fig.140 SB101平・断面図	103
fig.102 調査地位置図	80	fig.141 SB201平・断面図	103
fig.103 調査区平面図 上：第1遺構面 下：第2遺構面	81	fig.142 SB201全景〔写真〕	103
fig.104 SK01全景〔写真〕	82	fig.143 SK207平・断面図	104
fig.105 第2遺構面全景〔写真〕	82	fig.144 SK207検出状況〔断面〕〔写真〕	104
fig.106 遺構平・断面図 上：SK01 下：SK02	82	fig.145 SK207検出状況〔写真〕	104
fig.107 出土遺物実測図	83	fig.146 第5次調査第1遺構面平面図	108
fig.108 調査地位置図	85	fig.147 第5次調査主要遺構配置図	108
fig.109 調査区配置図	85	fig.148 調査地位置図	109
fig.110 第48次調査調査区平・断面図	88	fig.149 調査区平面図	110
fig.111 第50次調査調査区平・断面図	88	fig.150 SD01・02及びSK01検出状況〔写真〕	110
fig.112 第49次調査調査区平・断面図	88	fig.151 第67次調査地周辺の遺構	111
fig.113 調査地位置図	89	fig.152 調査地位置図	112
fig.114 第1遺構面平面図	92	fig.153 第9トレンチ平・断面図	113
fig.115 SX101全景〔写真〕	92	fig.154 第13トレンチ平・断面図	113
fig.116 第2遺構面平面図	92	fig.155 SK901平・断面図	113
fig.117 SB202全景〔写真〕	92	fig.156 第9トレンチ全景〔写真〕	113
fig.118 第3遺構面平面図	92	fig.157 SK901全景〔写真〕	113
fig.119 SX303全景〔写真〕	92	fig.158 第10トレンチ平・断面図	113
fig.120 第4遺構面平面図	94	fig.159 SK1001全景〔写真〕	113
fig.121 SX404全景〔写真〕	94	fig.160 調査地位置図	115
fig.122 第5遺構面平面図	94	fig.161 第14トレンチ平・断面図	116
fig.123 SB501全景〔写真〕	94	fig.162 第15トレンチ調査区平・断面図	118
fig.124 SB501礎石転用五輪塔（火輪石）	94	fig.163 第16トレンチ第1遺構面平面図	120
fig.125 第6遺構面平面図	94	fig.164 第16トレンチ第2遺構面平面図	121
fig.126 SK602全景〔写真〕	94	fig.165 第16トレンチ第3遺構面平面図	122
fig.127 第7遺構面平面図	96	fig.166 SK1606・1607全景〔写真〕	122
fig.128 SB701全景〔写真〕	96	fig.167 第16トレンチ西壁土層断面図	124
fig.129 第8遺構面平面図	96	fig.168 第16トレンチ第3遺構面全景〔写真〕	124
fig.130 SB801全景〔写真〕	96	fig.169 出土遺物実測図	125
fig.131 第9遺構面平面図	97	fig.170 調査地位置図	126
fig.132 SK902全景〔写真〕	97	fig.171 調査区北半全景〔写真〕	127

fig.172 調査地位置図	128
fig.173 調査区平面図	129
fig.174 調査区全景〔写真〕	129
fig.175 調査地位置図	130
fig.176 調査区平・断面図	131
fig.177 出土墨書き器実測図	131
fig.178 調査地位置図	132
fig.179 調査区土層断面図	133
fig.180 第1遺構面平面図	134
fig.181 第2遺構面平面図	134
fig.182 1区第1遺構面遺構検出作業〔写真〕	134
fig.183 2区第2遺構面全景〔写真〕	134
fig.184 2区SB02全景〔写真〕	135
fig.185 2区SD12遺物出土状況〔写真〕	135
fig.186 調査地位置図	136
fig.187 調査区平面図	137
fig.188 SB01平・断面図	138
fig.189 SB01全景〔写真〕	138
fig.190 SB01遺物出土状況〔写真〕	138
fig.191 SB02全景〔写真〕	139
fig.192 SB02平・断面図	139
fig.193 SB02出土遺物実測図	140
fig.194 SB02遺物出土状況〔復元〕〔写真〕	141
fig.195 転写用樹脂塗布作業〔写真〕	142
fig.196 塗布作業完了〔写真〕	142
fig.197 貼付作業〔写真〕	143
fig.198 土壌強化剤塗布作業〔写真〕	143
fig.199 完成状況〔写真〕	143
fig.200 鋸造鉄斧〔処理前〕〔写真〕	144
fig.201 同左(X線透過画像)〔写真〕	144
fig.202 同左(処理後)〔写真〕	144
fig.203 本山銅鐸〔写真〕	145
fig.204 復原鋳型〔写真〕	146
fig.205 鋸込み〔写真〕	146
fig.206 完成品〔写真〕	146

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1
表2 発掘調査面積	1
表3 発掘調査面積別件数	1
表4 写真・図面貸出一覧(1)	4
表5 写真・図面貸出一覧(2)	5
表6 写真・図面貸出一覧(3)	6
表7 平成22年度の企画展示	7
表8 講座「神戸の歴史散歩」	7
表9 平成22年度埋蔵文化財発掘調査一覧	10
表10 平成22年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧	11
表11 産出花粉化石一覧表	63
表12 平成22年度出土金属製品・木製品一覧	147
表13 平成22年度自然科学分析一覧	147
表14 平成22年度出土動物遺存体一覧	147

I. 平成22年度 事業の概要

1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成22年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、708件（前年度706件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が651件（前年度650件）であった。また、開発行為事前審査願115件（前年度119件）、試掘調査依頼は229件（前年度213件）であった。届出・試掘調査の件数は前年度に比べてほぼ横ばいの状況である。このように、周知の遺跡の範囲内では、開発事業は減ずることなく行われているようである。窓口での包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6,000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報を基に、可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査に至らずに建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	708件
i	民間の事業に伴う発掘届（93条）	651件
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94条）	57件
iii	発掘届・発見通知（92条）	0件
2	発掘調査の報告（99条）	23件
3	開発行為事前審査等各種申請	115件
4	分布調査依頼書（埋蔵文化財所在の有無の確認依頼書・調査件数）	158件
5	試掘調査（依頼件数）	229件
6	発掘調査（大規模確認調査も含む）	25件
i	民間事業に伴う発掘調査	20件
ii	公共事業に伴う発掘調査	5件
iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	0件
7	工事立会	53件
8	整理作業（復興調査整理作業を含む）	10件

2. 埋蔵文化財事業

平成22年度に実施した埋蔵文化財調査事業は25件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、192,227千円であった。

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費56,009千円であった。

このうち、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処置を継続した。また、復興調査整理として、平成8・9年度に調査を実施した震災復興事業に伴う上沢遺跡の出土遺物の整理を継続して行った。

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	4,013	2,628	6,641
延べ調査面積	10,319	4,128	14,447

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
100m ²	9件	36	1,001～2000m ²	1件	4
101～300m ²	11件	44	2001～5000m ²	0件	0
301～500m ²	2件	8	5,000m ² 以上	0件	0
501～1,000m ²	2件	8	合 計	25件	100

※調査件数37件は表1 発掘調査件数36件に出土遺物国庫補助金調査1件を加えた件数

市内発掘調査 発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により、発掘調査が回避された結果、昨年度よりも減少している。一方で回避を確認するための工事立会が増加している。

発掘調査面積は6,641m²（延べ14,447m²）で、このうち民間関連事業によるものが4,013m²（延べ10,319m²）と約6割を占めている。面積別でみると、300m²以下の件数が20件と昨年度以上の8割に達しており、一層、小規模化傾向が強まっている。大規模調査が減少したが、個人住宅や店舗等建替えなどの調査需要が、安定していることが明らかになった。

現地説明会等 発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感する機会として、現地説明会や近隣を対象とした現地公開を行った。平成22年7月24日、楠・荒田町遺跡第46次調査の現地説明会を開催し、猛暑の中64名の参加があった。平安時代末の平家に関連する二重壕が注目された。

平成22年6月29日、雲井遺跡第32次調査は近隣住民の要望もあり、現地と出土品の一部の公開を行い、約30名の参加があった。縄文時代の多量の土器が注目を集めていた。

平成21年度に現地調査を実施した、旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査の地質関連調査を、平成22年度も引き続き同志社大学の増田富士雄氏に依頼した。その結果、江戸時代の地震による津波痕跡と考えられる地層が確認された。この調査結果は、地域の災害史の資料として重要であることから、平成23年1月27日に記者発表を行った。その約50日後に東北地方太平洋沖地震が発生している。

資料の活用 発掘調査によって保存された資料には、主に出土品と写真や図面の記録類があり、これらは他の機関等からの要望があれば、貸出等を行っている。写真・図面については、平成22年度は61件の依頼があり132点を貸出した。貸出資料としては、五色塚古墳関係が最も多く、33件と半数を超えており。これらは主に学校教育関連、博物館等の展示、歴史関係図書類、情報誌類などへの掲載を利用目的としている。利用手段としては、印刷物の掲載だけでなく、インターネット上の公開やデジタル配布を手法とする依頼がさらに増えている。

出土遺物の貸出は5件、69点あり、祇園遺跡、西求女塚古墳、熊内遺跡、吉田南遺跡の出土品が、各地の博物館の展示で活用された。また、明石市文化博物館で始まった『発掘された明石の歴史展』では西区、垂水区の縄文時代の資料が多く利用された。

その他に、出土品について資料調査の依頼が14件、570点以上に対してあり、大学生、研究者が上池遺跡、神楽遺跡、本山遺跡、新方遺跡、神出古窯址群などの絵画土器、玉類、石器、瓦、埴輪など資料を調査している。

3. 刊行物一覧 平成22年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『郡家遺跡第85次発掘調査報告書』 頒価500円 『西岡本遺跡第8次発掘調査報告書』 頒価600円 『雲井遺跡第33次発掘調査報告書』 頒価900円 『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』 頒価900円 『楠・荒田町遺跡第42・43・46次発掘調査報告書』 頒価1,200円 『兵庫津遺跡第51次発掘調査報告書』 頒価2,000円 『兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書』 頒価400円 『出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次発掘調査報告書』 頒価2,200円 『頭高山遺跡発掘調査報告書』 頒価1,500円 『上池遺跡第3次発掘調査報告書』 頒価700円 『平成20年度神戸市埋蔵文化財年報』 頒価1,500円 『神戸市埋蔵文化財分布図(平成23年度版)』 頒価450円 『神戸の遺跡シリーズII たるみの遺跡』 頒価200円

頭高山遺跡の調査は震災復興の住宅地供給に伴い、平成7年から同10年の3年間に、57,000m²を対象に実施した。調査終了後10年以上を経て、ようやく中世寺院に関する報告書をみなし総局の協力を得て刊行することができた。しかし、弥生時代の高地性集落についての報告は今後の課題である。出合遺跡については、平成17年からの圃場整備事業に伴う発掘調査の報告である。その他は、平成20・21年度に発掘調査を実施したものである。

4. 史跡名勝天然記念物

国指定史跡「和田岬砲台」保存修理事業

史跡和田岬砲台は江戸幕府の摂海防備策の一つとして、勝海舟の指導により元治元年(1864)に完成した。大正10年(1935)には国史跡に指定されている。近年、石造部の一部が剥落し、内部木組みの腐食も進行したため、所有者の三菱重工業株式会社を事業主体とし、文化庁・兵庫県・神戸市の補助事業として平成19年度から保存修理事業を行っている。平成22年度は、石造部について、石材間の目地に漆喰を充填し空隙からの雨水の浸入を防ぐための工事を行い、先年度解体した内部木組みの木材については、腐朽部の切除、新材による補填等の木材の修理および欠損材の製作を行った。また内部床面に積もった塵芥を除去し、築造当初の床面タタキや梯子を据えるための石材を確認した。

市指定天然記念物「妙善寺のソテツ」の修理

灘区新在家南町の妙善寺の境内にあるソテツは、枝張り約8m、樹高約4mの大樹で、平成16年に神戸市指定天然記念物となっており、樹齢170年と推定される。近年、一部、枝葉の枯損部が発生し、樹勢の衰えが見られたため、平成23年3月、所有者の妙善寺を事業主体として神戸市の補助事業として修理事業を実施した。内容は枯損枝葉・主幹部の切除と腐朽部の治療、および樹勢回復のための排水対策・土壤改良である。

5. 連携事業

北区道場町連合自治会より、神戸市農村環境改善センターで行われている道場町文化祭での展示依頼があり、平成22年11月2・3日に『平城京が栄えたころ・奈良時代の道場町』と題し、道場町周辺から出土した奈良時代の遺物を展示、約500人の見学者があった。

兵庫区役所との共催事業として、和田岬砲台の保存修理事業と関連し、平成22年12月18日に兵庫歴史講演会『品川御台場築造から和田岬砲台へ』を兵庫区公会堂で開催した。講演は財団法人建築研究協会伊藤誠一郎氏による『和田岬砲台修理工事について』、品川区立品川歴史館学芸員富川武史氏による『江戸湾防備から摂海防備へ～品川御台場から見た和田岬砲台～』を行った。また、金具や木材等の実物を展示し、155名の参加があった。

同じく兵庫区役所との連携事業として、平成24年NHKの大河ドラマ『平清盛』放映記念として、平成23年1月30日に兵庫歴史講演会『平清盛 福原の夢』が神戸市立会下山小学校体育館で開催された。神戸大学名誉教授高橋昌明氏と神戸大学大学院研究員樋口健太郎氏による講演が行われ、合わせて祇園遺跡や楠・荒田町遺跡から出土した土器や瓦ならびに二重濠の断面土層転写の展示を行った。550名の参加があった。

表4 写真・図面貸出一覧(1)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	(株)アルク	ナツメ社刊『目で楽しむ万葉集』に掲載のため	鉄製農耕具写真(センターHP掲載分) 4×5モノクロ 1点	1
2	(株)サンケイリビング新聞社	『リビング新聞』平成22年5月29日号「地元のパワースポット特集(仮)」に掲載するため	五色塚古墳 西側斜面(北から) 画像データ 1点	1
3	(株)スタジオ三十三	機関紙『スタジオ33通信 第8号』に記載のため	塩田北山東古墳出土 青銅鏡安定台写真 1点 (申請者撮影分)	1
4	神戸市立博物館	市立住吉小学校との連携事業において校区内の遺跡を知るための授業、および博物館でのオリエンテーション、調べ学習成果発表に使用するため	住吉宮町遺跡第9次調査地全景 1点 住吉宮町遺跡第9次住吉東古墳全景 1点 住吉宮町遺跡第9次堅穴住居 1点 住吉宮町遺跡第9次住吉東古墳出土馬形埴輪 1点 住吉宮町遺跡第32次調査地全景 1点 住吉宮町遺跡第24次2号墳出土人物埴輪 1点 住吉宮町遺跡第24次2号墳出土馬形埴輪 1点 住吉宮町遺跡第32次1号墳周溝出土遺跡 1点 住吉宮町遺跡第32次3号墳埋葬施設 1点	9
5	(株)吉川弘文館	岸本直文編『歴史で読む日本史2』に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ 1点 五色塚古墳 画像データ 1点	2
6	(株)育鵬社	『中学社会 歴史教科書』に掲載するため	五色塚古墳全景 カラー写真データ 1点 同墳丘に置かれた円筒埴輪 カラー写真データ 1点	2
7	文化財写真技術研究会	会誌『文化財写真研究』「牛嶋茂写真特集」に掲載するため	吉田南遺跡木橋出土状況写真 4×5ポジ 1点 西求女塚古墳崩壊石室写真 4×5ポジ 1点	2
8	(株)小学館	『Jr.日本の歴史』第1巻に掲載するため	五色塚古墳空中写真(北から) 画像データ	1
9	(株)学研パブリッシング	『新歴史群像シリーズ 古代天皇列伝』に掲載するため	五色塚古墳空中写真 カラー写真	1
10	(株)岩波書店	広瀬和雄著『前方後円墳の世界』(岩波新書)に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ	1
11	財団法人武井報效会百耕資料館	財団法人武井報效会百耕資料館常設展示「板宿の歴史」のうち、原始・古代部門および中世部門で展示・配布する展示解説パネル・展示パネル・展示解説パンフレットの作成のため。	戎町遺跡第1次調査水田址全景 カラー写真 1点 戎町遺跡第1次調査弥生時代前期後半土器 カラー写真 1点 戎町遺跡第50-6次調査方形周溝墓 カラー写真 1点 大田町遺跡(平成3年度調査)第2遺構面全景 カラー写真 1点 戎町遺跡第24次調査井戸SE01 カラー写真 1点 大田町遺跡出土陶磁器類 カラー写真 1点 大田町遺跡出土錢貨・銅製帶金具・鈴の写真 1点	7
12	京都国立博物館	京都国立博物館「研究成果特別公開」「古代の輝きを求めて・・・ディジタル計測で蘇った古代青銅鏡の世界・・・」の展示に使用し、パンフレット・展示パネルを作成するため。	西求女塚古墳出土5号鏡 4×5ポジ	1
11	DNP メディアクリエイト	トヨタカローラ兵庫情報誌『Smile』に掲載するため。	五色塚古墳西側斜面(北から) 画像データ 1点 五色塚古墳後凹部から小壺古墳 画像データ 1点 五色塚古墳空中写真(北から) 画像データ 1点	3
12	(株)神泉社	西川寿勝・田中晋作著『巨大古墳時代の軍団』に掲載するため。	五色塚古墳航空写真(北から) 画像データ 1点 五色塚古墳 莢石で復元された墳丘 画像データ 1点 五色塚古墳 出土埴輪群 画像データ 1点	3
13	Fivestar Corporation	文藝春秋『CREA』ムック本に掲載するため。	五色塚古墳 画像データ 1点	1
14	西尾市岩瀬文庫	岩瀬文庫企画展「資料に見える温泉風景」の展示のため	湯山御殿跡蒸し風呂遺構 カラーポジ 1点 湯山御殿跡岩風呂 SX34 カラーポジ 1点	2
15	(株)ザッパラス	携帯向け無料サイト『スピチャ』内の全国名所情報検索コーナーに掲載するため	五色塚古墳後凹部 画像データ 1点 五色塚古墳前方部西側斜面と後凹部 画像データ 1点 五色塚古墳埴輪列と葺石 画像データ 1点 五色塚古墳空中写真(北から) 画像データ 1点 五色塚古墳東側くびれ部付近発掘調査状況 画像データ 1点	5
16	(株)ラムゼス	P C 及びモバイル用地図検索サイト「いつもNAVI」に掲載するため。	舞子砲台跡近景 画像データ 1点	1
17	垂水区まちづくり推進部市民課	『広報紙こうべ(垂水区版)』の「転入区民ツアー」募集記事および垂水区庁内掲示ポスターおよび区民配布ちらしに掲載するため。	五色塚古墳航空写真 画像データ 2点	2
18	(株)イメージング・ワークス	『神社・仏閣びあ一歳選!パワースポットをめぐる旅ー(仮)』の「一度は訪ねたい日本のパワースポット」に掲載するため	五色塚古墳前方部西側斜面と後凹部 画像データ 1点 五色塚古墳空中写真(北から) 画像データ 1点	2
19	近畿日本鉄道株式会社	『近畿文化』730号の「西摂湾岸の古墳と神社」(藤井直正氏執筆)に掲載するため	西求女塚古墳伏見地震で崩壊した竪穴式石室 4×5ポジ 1点 西求女塚古墳 出土した12面の青銅鏡 4×5ポジ 1点 処女塚古墳 整備後の処女塚古墳(昭和60年1月) 4×5ポジ 1点	3

表5 写真・図面貸出一覧(2)

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
20	日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集の表紙に掲載するため	西求女塚古墳画文帶環状乳神獸鏡（6号鏡） 画像データ 1点	1	
21	（株）小学館	『Jr.日本の歴史』第1巻に掲載するため	新方遺跡出土鹿角製指輪 4×5ボジ 1点	1
22	タマ D.T.P.（株）	『らいらっく10月号』の巻頭記事に掲載するため	五色塚古墳空中写真（北から） 画像データ 五色塚古墳後円部埴輪列と葺石 画像データ 五色塚古墳前方部西側斜面と後円部 画像データ 五色塚古墳後円部墳頂から明石海峡を望む 画像データ	4
23	播磨町郷土資料館	平成22年度播磨町郷土資料館特別展における展示および図録・広報掲載のため	長田神社境内遺跡 鏡出土状況 画像データ 吉田南遺跡 SD209遺物出土状況 画像データ 吉田南遺跡 SB208・SD209検出状況 画像データ 吉田南遺跡 内行花文鏡（破鏡） 画像データ	4
24	タマ D.T.P.（株）	『らいらっく11月号』の巻頭記事に掲載するため	五色塚古墳空中写真（北から） 画像データ 五色塚古墳後円部埴輪列と葺石 画像データ 五色塚古墳前方部西側斜面と後円部 画像データ 五色塚古墳後円部墳頂から明石海峡を望む 画像データ	4
25	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催秋季特別展「奈良時代の匠たち—大寺建立の考古学—」への展示のため	吉田南遺跡出土木製車輪 4×5ボジ 1点	1
26	兵庫区役所まちづくり課	兵庫区発行リーフレット『平清盛ゆかりのまち（仮題）』および表五区ホームページ「平清盛ゆかりの史跡」に掲載するため。	祇園遺跡 庭園遺構 画像データ 祇園遺跡 玳瑁天目小椀 画像データ 祇園遺跡 京都産軒瓦 画像データ 楠・荒田町遺跡 二重壕 画像データ	4
27	（株）雄山閣	『邪馬台国－唐古・鍵遺跡から箸墓古墳へ』の西川寿勝氏論考「鏡がうつす邪馬台国体制の成立と崩壊」に掲載するため。	西求女塚古墳出土半肉彫獸帶鏡 画像データ 西求女塚古墳出土鏡集合写真 画像データ 西求女塚古墳出土山陰系土器 画像データ	3
28	（株）河出書房新社	武末純一・森岡秀人・設楽博己著『列島の考古学－弥生時代』（仮題）に掲載	新方遺跡第13号人骨 画像データ 1点 新方遺跡第3号人骨 画像データ 1点	2
29	（株）交通新聞社西日本支社	JR西日本字パン具俱楽部会員誌『旅のアトリエ12月号』に掲載するため	祇園遺跡出土 玳瑁天目小椀 画像データ 1点	1
30	兵庫区まちづくり課	歴史講演会に係る広報こうべ兵庫区版及び告知ちらし・ポスターに掲載するため	祇園遺跡出土 玳瑁天目小椀 画像データ 1点	1
31	青葉図書（株）	小学校向け図書教材『社会科作業帳6年』に掲載するため	五色塚古墳空中写真 画像データ 1点	1
32	（株）文溪堂	社会科資料集6年に掲載するため	五色塚空中写真（北から） 画像データ 1点	1
33	（株）スタジオダンク	『バランス風水で探す！あなたのベストパワースポット』の「全国のパワースポットガイド特集」に掲載するため	五色塚古墳空中写真（北から） 画像データ 1点 五色塚古墳前方部西側斜面 画像データ 1点	2
34	（株）帝国書院	「帝国書院デジタル教科書 楽しく学ぶ小学生の地図帳」に掲載するため	五色塚古墳航空写真（北から） 画像データ 1点	1
35	（株）がくげい	小学生及び中学生を対象としたソフトウェア教材に掲載するため	五色塚古墳空中写真 画像データ 1点	1
36	エムディエー（株）	ヤンマー農機株式会社の『ワンダーフィールドvol.18』巻頭ページおよび同社ホームページに掲載するため	日輪寺遺跡出土U字形鋤先ほか 画像データ 1点 （『神戸考古百選』 図版24掲載写真）	1
37	（株）ゼンリン神戸支店	地域情報メディア『Actiz』の神戸市垂水区プロフィール情報に掲載するため	五色塚古墳航空写真（北から） 画像データ 1点	1
38	フィールドミュージアムトーカ 史遊会	歴史講演会会場での古墳パネル展に展示するため	五色塚古墳空中写真（北から） 画像データ 1点 五色塚古墳と明石海峡空中写真 画像データ 1点 五色塚古墳復元された埴輪列 画像データ 1点 五色塚古墳沖合いからのC G復元 データ 1点 C Gで復元した五色塚古墳と周辺の地形 データ 1点	5
39	（有）エディターズ・キャンプ	小学館『女性セブン』（12月24日発売号）パワースポット特集に掲載するため	五色塚古墳空中写真（北から） 画像データ 2点	2
40	東近江市教育委員会	『東近江市史 能登川の歴史』第1巻 原始・古代編に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点 （『史跡五色塚小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』 図版2（上））	1
41	島根県立古代出雲歴史博物館	企画展『古代出雲の壮大なる交流』（H.23.3.4～5.16）において展示するため	西求女塚古墳出土品 4×5ボジ 計5点 後方部墳頂部出土鼓形器台と有稜小型丸底壺 図版37-1 出土鏡群 卷頭図版7 出土鉄製品 卷頭図版8 西求女塚古墳遠景 卷頭図版1 紡錘車形石製品 図版37-4 （『西求女塚古墳発掘調査報告書』より）	5

表6 写真・図面貸出一覧(3)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料点数
42	(株)プランプール	フリーペーパー BRAN BRAN 2011年1月号の特集記事に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 計5点 航空写真 1点 五色塚古墳と小壺古墳航空写真 1点 埴輪列と葺石 1点 後円部墳頂と小壺古墳 1点 後円部墳頂から明石海峡大橋と淡路島 1点	5
43	高砂市役所	『高砂市史第一巻』通史編(地理・原始・古代・中世)の本文に掲載するため	西求女塚古墳出土5号鏡 画像データ 1点	1
44	神戸婦人大学 事務局	神戸婦人大学平成22年度卒業記念論文集本科に掲載するため	楠・荒田町遺跡二重壕遺構 画像データ 1点 祇園遺跡園池遺構 画像データ 1点 祇園遺跡出土玳波天目小椀 画像データ 1点 祇園遺跡出土山城系軒瓦 画像データ 1点	4
45	(株)ジェイコムウエスト	J:COM 自主番組「歴史街道」～平家ゆかりの史跡を訪ねて～(H23年2月1日～2月15日放送)で使用するため	祇園遺跡出土玳波天目小椀 写真 1点 祇園遺跡園池遺構 写真 1点 楠・荒田町遺跡二重壕遺構 写真 1点 雪御所遺跡発掘調査現場 写真 1点	4
46	兵庫県立考古博物館	平成23年度特別展「木のうつわ 六千年的技」における展示および図録・展示パネル・広報資料に掲載するため	新方遺跡野手・西方地区第1・2次調査出土 木製櫃 カラーボジ写真 1点	1
47	(株)ゼンリン Actiz 編集課	地域情報誌『mi-ru-to 垂水区版』の「歴史スポットコーナー」に掲載のため	五色塚古墳 画像データ	1
48	堺市	『堺市文化財講演会録第2集 百舌鳥野の幕開け一大王墓築造開始の謎に迫る』に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点 『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』図版2(上)	1
49	兵庫県立歴史博物館	ウェブ文館「ひょうご歴史ステーション」のコンテンツ「歴史ステーションセミナー」のうち、「絵解き源平合戦図屏風」で参考図版として掲載するため。	祇園遺跡第5次調査出土遺物 (土師器小皿と渥美窯甕) 画像データ 1点	1
50	大手前学園 大手前大学	大手前大学のオンデマンド配信によるeラーニング授業におけるコンテンツ内に利用するため	五色塚古墳円筒埴輪列 画像データ 1点	1
51	神戸市教育委員会指導課	『まとめの達人資料集』の「五色塚古墳」に使用するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 2点 『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』図版2・15)	2
52	東京法令出版㈱	中学歴史資料「ビジュアル歴史」に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点	1
53	(株)育鵬社	『市販本 歴史教科書』『第一章課題学習』に掲載するため	五色塚古墳全景 カラー写真 1点 墳丘に置かれた円筒埴輪 カラー写真 1点	2
54	尼崎市教育委員会	第40回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の集落」での展示及びパンフレットへ掲載するため	熊内遺跡第3次調査 4×5ポジ 1点 『熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書』巻頭図版2) 大開遺跡 4×5ネガ 1点 『大開遺跡発掘調査報告書』図版5)	2
55	神戸市垂水区役所まちづくり課	『第7回れんげまつり』の広報用チラシに掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点	1
56	高槻市教育委員会	高槻市立今城塚古代歴史館の常設展示室解説パネル及び展示図録に掲載するため	白水瓢塚古墳出土埴輪 カラー写真 1点 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』図版76-1)	1
57	(株)フクト	昨年、発行した『学習定着診断シート 確かめシート』の再版のため	五色塚古墳航空写真 データ 1点 (H21.3.6付神教委文第633号で貸出許可済み)	—
58	(株)キャメル	『ひょうご旅ネット』の「モデルコース」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点	1
59	三豊市教育委員会	『古代の三豊』(三豊市教育委員会発行)に掲載するため	五色塚古墳写真 画像データ 1点 『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』図版3-1)	1
60	(株)どりむ社	『小学生の「日本の歴史」学習辞典』(PHP研究所発行)に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点 西岡本遺跡出土須恵器 画像データ 1点 滝ノ奥遺跡出土銭貨 画像データ 1点	3
61	姫路市文化国際交流財団	季刊誌『BanCul』2011夏(80)号「播磨人の原風景 先人の遺跡」に掲載するため	五色塚古墳航空写真 画像データ 1点 『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』図版2-1)	1

合計

132

6. 普及啓発事業（埋蔵文化財センター）

企画展示・体験講座・学校連携・地域連携等を中心に、各種事業を展開した。本年度の埋蔵文化財センターへの入館者数は43,299名を数える。

企画展示の開催と講演会

今年度も別表（表7）のとおり、4回の企画展示を開催した。例年どおり、春季の企画展示では小学校の6年生の歴史授業の参考になるような展示を行っている。また、冬季の企画展示では小学校3年生が学習する「ちょっとむかしの暮らし」をテーマに展覧会を開催している。

秋季の企画展示のテーマに合わせて、11月13日（土）に『前期古墳築造の背景を巡って』と題して講演会を開催した。埋蔵文化財センター研修室で実施し、65名の参加を得た。

冬季の企画展示では、2月13日（日）に『阪神各地の近代から昭和』と題して尼崎市教育委員会、西宮市教育委員会、三田市教育委員会から講師を招いて講演会を埋蔵文化財センター研修室で実施し、30名の参加を得た。

各種講座の開催

体験考古学講座

勾玉づくり・土器づくり・鏡づくり・ガラス玉づくり等、古代の技術を学びながら、親子参加型の講座を、夏休みを中心に行った。

「その道の達人に学ぶ体験講座」

「江戸時代の庄屋で草木染め」講座を11月6日（土）に北区の内田家住宅で、「豊穴住居をつくろう（みんなで古代のくらし体験）」講座を11月21日（日）に埋蔵文化財センターで実施した。

講座「神戸の歴史散歩」の開催

7回シリーズの講演会で、本年度は縄文時代から近世までの各時代のテーマを学芸員が行った。受講生は全講座で288名であった。

表7 平成22年度の企画展示

展示会名	開催期間	開催日数	入館者数
縄文と弥生	4月14日（水）～6月6日（日）	51日	10,748名
中世の港湾都市神戸	7月17日（土）～8月29日（日）	37日	3,270名
王の誕生と前方後円墳	10月9日（土）～11月28日（日）	42日	4,997名
昭和のくらし・昔のくらし5	1月15日（土）～3月6日（日）	45日	10,157名

表8 講座「神戸の歴史散歩」

月 日	講 座 名	参 加 者 数
1 5月22日（土）	縄文人の知恵	30名
2 6月5日（土）	米作りと鉄の時代	33名
3 9月18日（土）	前方後円墳の誕生	50名
4 10月23日（土）	巨大古墳の出現	42名
5 12月4日（土）	駅家と地方への文字の普及	28名
6 1月15日（土）	中世の村々と福原京	63名
7 2月19日（土）	近世の町屋と津	42名

学校連携事業

大学との連携

連携協定を結んでいる大手前大学の協力を得て、講演会を11月13日（土）に開催した。

テーマを『前期古墳築造の背景を巡って』と題して、大手前大学准教授森下章司氏、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総括学芸員岡林孝作氏を講師に迎え、神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施した。参加者は65名である。

啓明学院中学校・高等学校との連携

平成19年度より、啓明学院中学校・高等学校が実施する土曜講座のプログラムを神戸市埋蔵文化財センターが担当し、『神戸の文化遺産について学ぼう』というカリキュラムで前期・後期あわせて14回の講座を埋蔵文化財センターで行った。そのうち4回については神戸港や須磨離宮公園等を訪れて現地で講座を実施した。7名が受講した。

高等学校との連携

昨年度に続き、兵庫県立須磨友が丘高校・神戸市立六甲アイランド高校・啓明学院で、考古学の講義、遺跡の見学、拓本実習等の授業を行った。

神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ（中央区）にて開催される『神戸市小学校社会科作品展』（9月11日～19日）において優秀作品18点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

小学校への出張講座・出張授業

小学校に出張して、勾玉づくり・土器づくりの体験考古学講座を16校で行い、出張授業を4校で行った。出張講座・授業の利用者は1,676名である。

地域連携事業

地域行事への参加

「第28回 みどりと太陽のまつり」（5月15日）、「櫛谷川まつり」（9月4日）「押部谷明石川リバーウォーク」（11月23日）等、地域の活動に参加し、埋蔵文化財センターのパネル展示や遺跡の説明等を行い、文化財の普及啓発に務めた。

おおとし山まつりの開催

垂水区役所と連携して、11月3日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の竪穴住居の公開や古代衣装の試着、地域の協力得て実施した古代米のおにぎり試食、勾玉づくり等、古代体験を満喫する一日となった。参加者604名を数えた。

西区地域学の開催

西区役所と連携して行う事業で、『中世の山城を巡ろう』と題して、12月4日（土）には「城跡巡りウォーク」を開催し、福谷城等を巡り、講演会を行った。また、翌日12月5日（日）には、「城跡巡りバスツアー」で枝吉城、端谷城から三木城を見学した。参加者は139名であった。



fig. 6 企画展示「縄文と弥生」



fig. 7 出張授業「火おこし体験」



fig. 8 古代衣装試着体験



fig. 9 大歳山まつり



fig.10 「その道の達人に学ぶ体験講座」竪穴住居をつくろう



fig.11 企画展示「昭和のくらし・昔のくらし5」旧車パレード

表9 平成22年度埋蔵文化財発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	岡本梅林古墳 第2次調査	東灘区岡本6丁目6	神戸市教育委員会	川上厚志	90m ² 90m ²	22.10.01～ 22.10.22	石室の一部と考えられた石列の確認調査。6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土した谷状地形を検出した。	公園整備
2	住吉宮町遺跡 第47次調査	東灘区住吉宮町7丁目79番	神戸市教育委員会	口野博史	130m ² 260m ²	22.08.09～ 22.10.25	2面の遺構面を検出し、古墳時代中期の水田状遺構、古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物、飛鳥・奈良時代の土坑や落ち込み等を検出した。	商業ビル建設
3	住吉宮町遺跡 第48-1・2次 調査	東灘区住吉本町1丁目 東灘山手中央7街区 8-23符合、307番8	神戸市教育委員会	阿部敬生	98m ² 98m ²	22.09.17～ 22.10.29	古墳に伴う葺石・周溝を検出したほか、土坑状落ち込み1基、ピット4基を検出した。	市有地売却
4	住吉宮町遺跡 第49次調査	東灘区住吉本町1丁目 570-1	神戸市教育委員会	須藤宏	300m ² 600m ²	22.11.11～ 22.12.24	2面の遺構面を検出し、古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物、飛鳥時代から室町時代までの遺構を検出した。	共同住宅建設
5	雲井遺跡 第32次調査	中央区琴ノ緒町4丁目 360～370, 372-2, 373, 375, 376-1, 377	神戸市教育委員会	口野博史	270m ² 1,426m ²	22.04.05～ 22.07.08	中世、弥生時代、縄文時代中期の遺構面6面を検出した。縄文時代中期の堅穴建物状遺構、土坑、溝、流路状遺構、落ち込み状遺構を検出し、同時期の多量の遺物が出土した。	共同住宅建設
6	雲井遺跡 第33次調査	中央区旭通4丁目	神戸市教育委員会	川上厚志	200m ² 600m ²	22.05.24～ 22.12.28	弥生時代後期末～古墳時代前期、弥生時代中期、弥生時代前期末～弥生時代中期前半の3面の遺構面を検出し、弥生時代中期の玉作り工房と考えられる堅穴住居等を検出した。	民間再開発
7	生田遺跡 第7次調査	中央区中山手通2丁目 4番1～4, 22号	神戸市教育委員会	池田毅・ 浅谷誠吾	200m ² 200m ²	22.09.13～ 22.09.30	弥生時代中期の柱穴や溝、古墳時代～奈良時代の落ち込み等を検出し、落ち込みからは須恵器提瓶・横瓶、綠釉陶器片等が出土した。	共同住宅建設
8	城ヶ口遺跡 第1次調査	中央区山本通4丁目 97-104	神戸市教育委員会	内藤俊哉	80m ² 80m ²	22.04.21～ 22.05.19	中世～近世の遺物が出土し、溝、土坑、水溜め状遺構、ピット等を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
9	楠・荒田町 遺跡第46次調査	中央区楠町7丁目 5-1	神戸市教育委員会	富山直人・ 中谷正	500m ² 700m ²	22.05.12～ 22.08.30	福原京に連なる平安時代後期の二重壕を検出し、京都系土師器皿等の土器が出土した。下層から平安時代中期の井戸、掘立柱建物を検出した。	大学施設建設
10	楠・荒田町 遺跡第47次調査	中央区楠町3丁目 17-5	神戸市教育委員会	富山直人	300m ² 400m ²	22.09.22～ 22.10.14	平安時代末～鎌倉時代初期の土坑を検出し、京都系の土器が出土した。縄文時代中期の土坑、溝、ピットを検出し、同時期の土器が一定量出土した。	保育園園舎建設
11	楠・荒田町 遺跡第48次調査	兵庫区馬場町19-16	神戸市教育委員会	池田毅	41m ² 41m ²	23.02.21～ 23.03.02	平安時代後期の京都系土師器皿等が出土し、柱穴、溝、土坑、落ち込みを検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
12	楠・荒田町 遺跡第49次調査	兵庫区馬場町19-16	神戸市教育委員会	池田毅	39m ² 39m ²	23.03.03～ 23.03.09	平安時代後期の京都系土師器皿等が出土し、落ち込みを検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13	楠・荒田町 遺跡第50次調査	兵庫区馬場町19-16	神戸市教育委員会	池田毅	39m ² 39m ²	23.03.10～ 23.03.16	平安時代後期の京都系土師器皿等が出土し、落ち込みを検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
14	兵庫津遺跡 第53次調査	兵庫区七宮町2丁目 1-2	神戸市教育委員会	内藤俊哉・ 井尻格	250m ² 2,390m ²	22.10.12～ 23.02.04	13世紀代から近世の10面の遺構面を検出し、多様な遺物が出土した。近世では町屋建物と屋敷地裏手のゴミ捨て坑、中世では蔵跡と考えられるバラス敷きの礎石建物等を検出した。	共同住宅建設
15	若松町東 遺跡第3次調査	長田区若松町3丁目4	神戸市教育委員会	中谷正	940m ² 940m ²	22.09.13～ 22.11.22	縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑や溝、平安時代の柱穴等を検出した。	市街地再開発
16	若松町東 遺跡第4次調査	長田区若松町4丁目1	神戸市教育委員会	中谷正	1,100m ² 1,100m ²	22.11.29～ 23.03.04	縄文時代晩期～弥生時代前期の堅穴建物状遺構や土坑、埋甕遺構や柱穴、中世の掘立柱建物、柱穴、土坑、溝、耕作痕を検出した。	市街地再開発
17	若松町東 遺跡第5次調査	長田区若松町3丁目2	神戸市教育委員会	西岡巧次	400m ² 400m ²	23.01.21～ 23.03.17	中世、あるいは弥生時代と考えられる掘立柱建物や柱穴、縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる遺構面で柱穴を検出した。	市街地再開発
18	戎町遺跡 第67次調査	須磨区寺田町2丁目1	神戸市教育委員会	浅谷誠吾・ 川上厚志	75m ² 75m ²	23.01.24～ 23.02.03	弥生時代中期の溝4条と土坑、ピットを検出した。	寺院建設 (国庫補助事業)
19	出合遺跡 試掘調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	須藤宏・ 阿部功	80m ² 240m ²	22.04.13～ 22.04.30	古墳時代前期～中世、弥生時代前期～古墳時代前期、弥生時代前期の3面の遺構面を確認し、土坑や溝等の遺構を確認した。	宅地開発
20	出合遺跡 第45次調査	西区平野町中津字厚張 872番2ほか	神戸市教育委員会	須藤・浅谷 内藤・阿部 功	640m ² 1,920m ²	22.05.17～ 22.08.03	古墳時代前期～中世、弥生時代前期～古墳時代前期、弥生時代前期の3面の遺構面を検出し、古墳時代前期の堅穴住居、弥生時代前期の堅穴住居、土坑、溝等の遺構を検出した。	宅地開発
21	今津遺跡 第23次調査	西区玉津町今津 586-10	神戸市教育委員会	西岡巧次	58m ² 58m ²	22.10.04～ 22.10.15	湿地状堆積を検出し、弥生時代中期の土器が出土した。	個人住宅 (国庫補助事業)
22	新方遺跡 第49次調査	西区玉津町新方字北方 335番1	神戸市教育委員会	井尻格	170m ² 170m ²	22.06.15～ 22.06.30	中世の溝状遺構、平安時代の土坑と流路状の落ち込みを検出した。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
23	南別府遺跡 第3次調査	西区南別府3丁目 18-7の一部	神戸市教育委員会	須藤宏・ 浅谷誠吾	150m ² 150m ²	22.10.29～ 22.11.10	溝と土坑を検出し、奈良時代から室町時代の遺物が出土した。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
24	南別府遺跡 第4次調査	西区南別府3丁目 1-9	神戸市教育委員会	須藤宏・ 川上厚志	200m ² 200m ²	23.02.21～ 23.03.18	2面の遺構面を検出した。第1面では古墳時代中期から以降の溝、土坑を検出し、第2面では古墳時代初頭の堅穴住居3棟、柱穴、土坑、溝、土器溜りを検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
25	日輪寺遺跡 第14次調査	西区玉津町二ツ屋字 西山656-1ほか	神戸市教育委員会	口野博史・ 阿部敬生	160m ² 160m ²	23.02.07～ 23.03.17	弥生時代末頃の堅穴住居2棟、落ち込み状遺構、柱穴を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
調査面積合計					6,510m ²			
延調査面積合計					12,376m ²			

表10 平成22年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	実施期間	調査内容	調査原因
1	郡家遺跡 第85次調査		神戸市教育委員会	井尻格	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	共同住宅建設
2	西岡本遺跡 第7次調査		神戸市教育委員会	西岡巧次	0 m ² 0 m ²	22.05.10～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	宅地造成
3	旧外交人居留 地遺跡第1次調査		神戸市教育委員会	西岡誠司・ 阿部功・ 中村大介	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	市危機管理 センター建設
4	楠・荒田町 遺跡第45次調査		神戸市教育委員会	石島三和	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 22.12.28	出土遺物整理・報告書作成	店舗改築
5	兵庫津遺跡 第51次調査		神戸市教育委員会	石島三和	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 22.12.28	出土遺物整理・報告書作成	共同住宅建設
6	兵庫津遺跡 第52次調査		神戸市教育委員会	阿部敬生・ 川上厚志・ 西岡誠司	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	神社本殿建替
7	上池遺跡 第3次調査		神戸市教育委員会	西岡巧次	0 m ² 0 m ²	22.05.01～ 22.12.28	出土遺物整理・報告書作成	福祉施設建設
8	出合遺跡 第34・35・37 39・40・43・44次調査		神戸市教育委員会	西岡誠司・ 阿部功・ 中村大介	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	集落基盤整備
8	出合遺跡 第34・35・37 39・40・43・44次調査		神戸市教育委員会	西岡誠司・ 阿部功・ 中村大介	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	出土遺物整理・報告書作成	(国庫補助事業)
9	淡河城跡 地形図作成		神戸市教育委員会	佐伯二郎	0 m ² 0 m ²	23.02.01～ 23.03.31	遺跡確認調査及び保存活用等の計画策定のための基礎 資料とするため地形図を作成	(国庫補助事業)
10	兵庫津遺跡 出土遺物保存処理		神戸市教育委員会	中村大介	0 m ² 0 m ²	21.04.01～ 22.03.31	兵庫津遺跡第14次調査出土鉄製遺物の梱包	(国庫補助事業)
11	端谷城出土 遺物保存処理		神戸市教育委員会	黒田恭正・ 佐伯二郎・ 中村大介	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	端谷城跡第5次調査出土の鉄製甲(胴丸)保存処理	(国庫補助事業)
12	復興調査整理		神戸市教育委員会	黒田恭正・ 佐伯二郎・ 中村大介	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	国庫補助事業調査の遺物整理。兵庫津遺跡(H10・11)	(国庫補助事業)
13	復興調査整理		神戸市教育委員会	西岡巧次・ 西岡誠司	0 m ² 0 m ²	22.04.01～ 23.03.31	国庫補助事業調査の遺物整理。復興事業に伴う上沢遺 跡(H8・9)	(国庫補助事業)

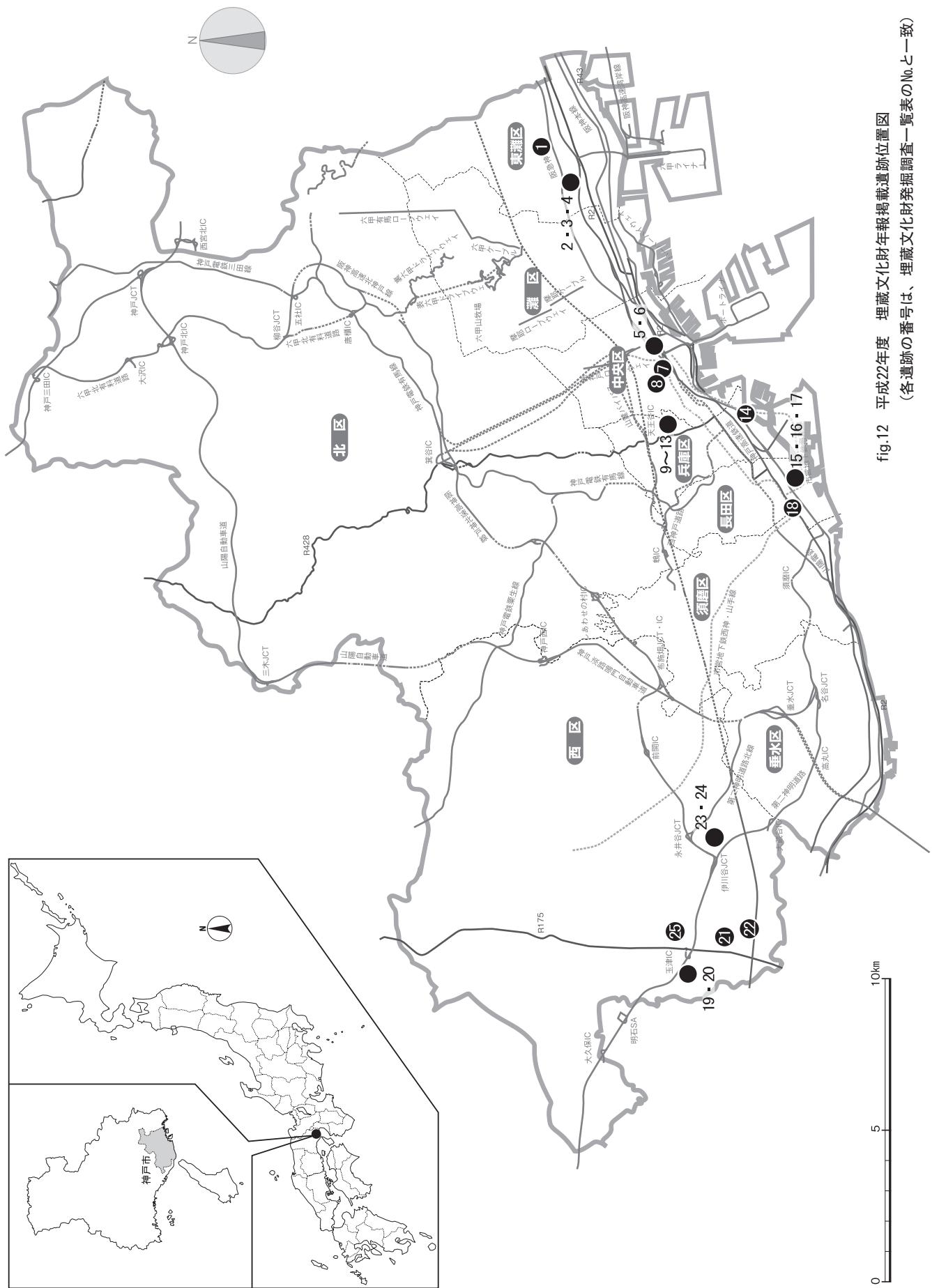


fig.12 平成22年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図
(各遺跡の番号は、埋蔵文化財発掘調査一覧表のNoと一致)

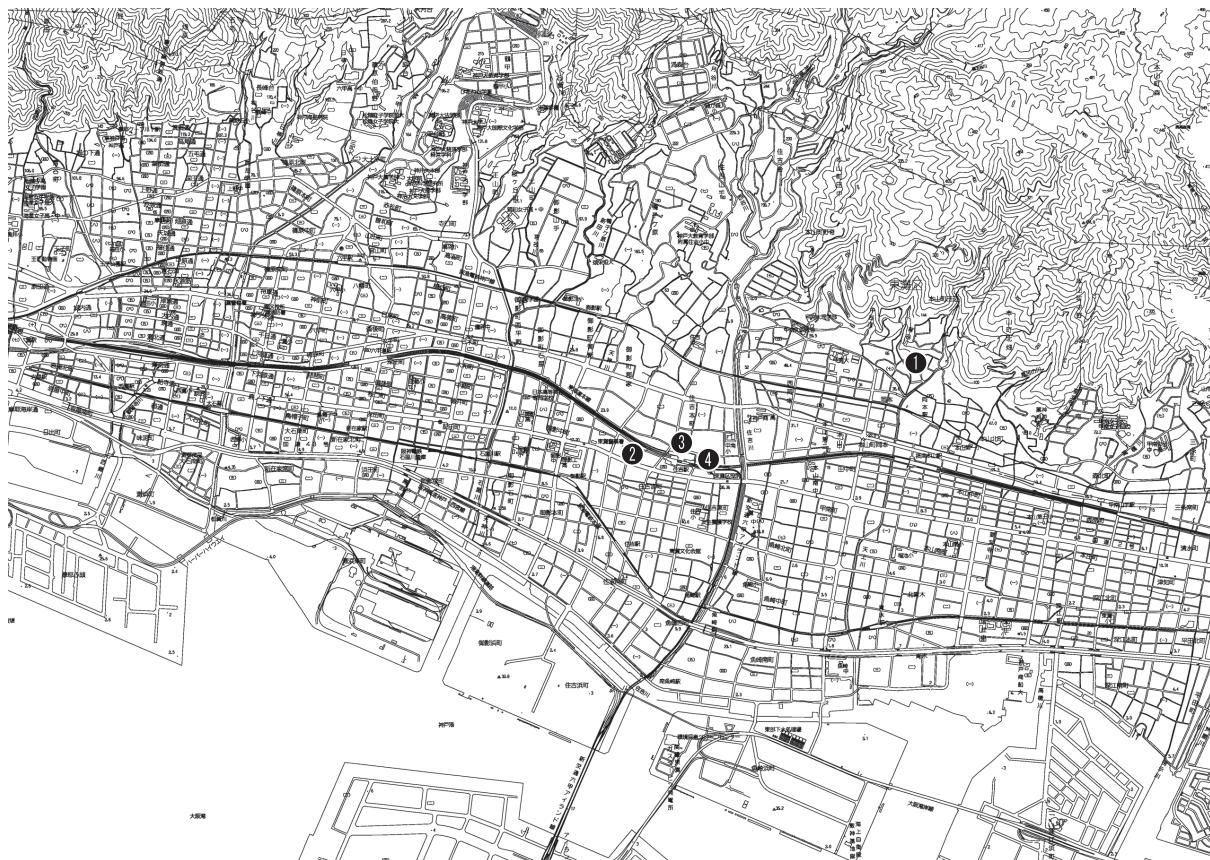


fig.13 調査地点位置図(1) 1 /50,000



fig.14 調査地点位置図(2) 1 /50,000



fig.15 調査地点位置図(3) 1 /50,000

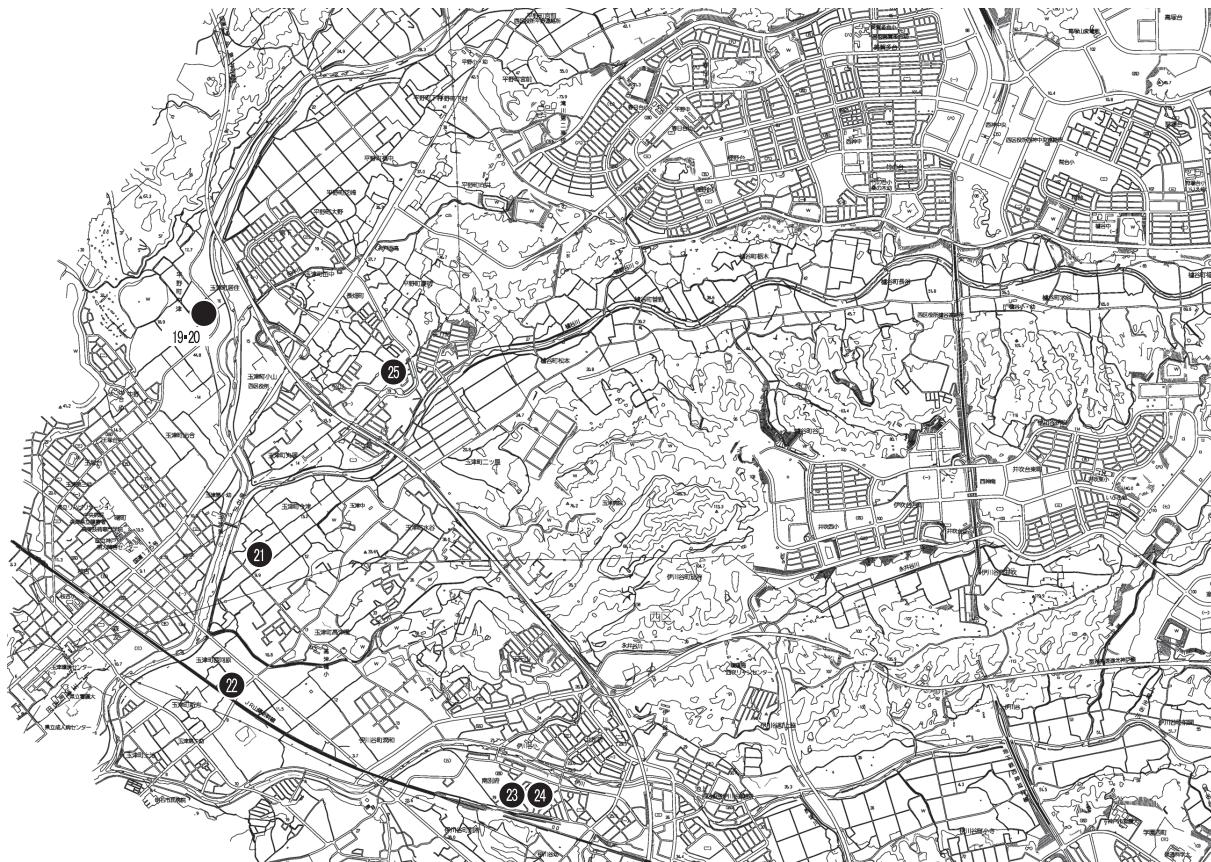


fig.16 調査地点位置図(4) 1 /50,000

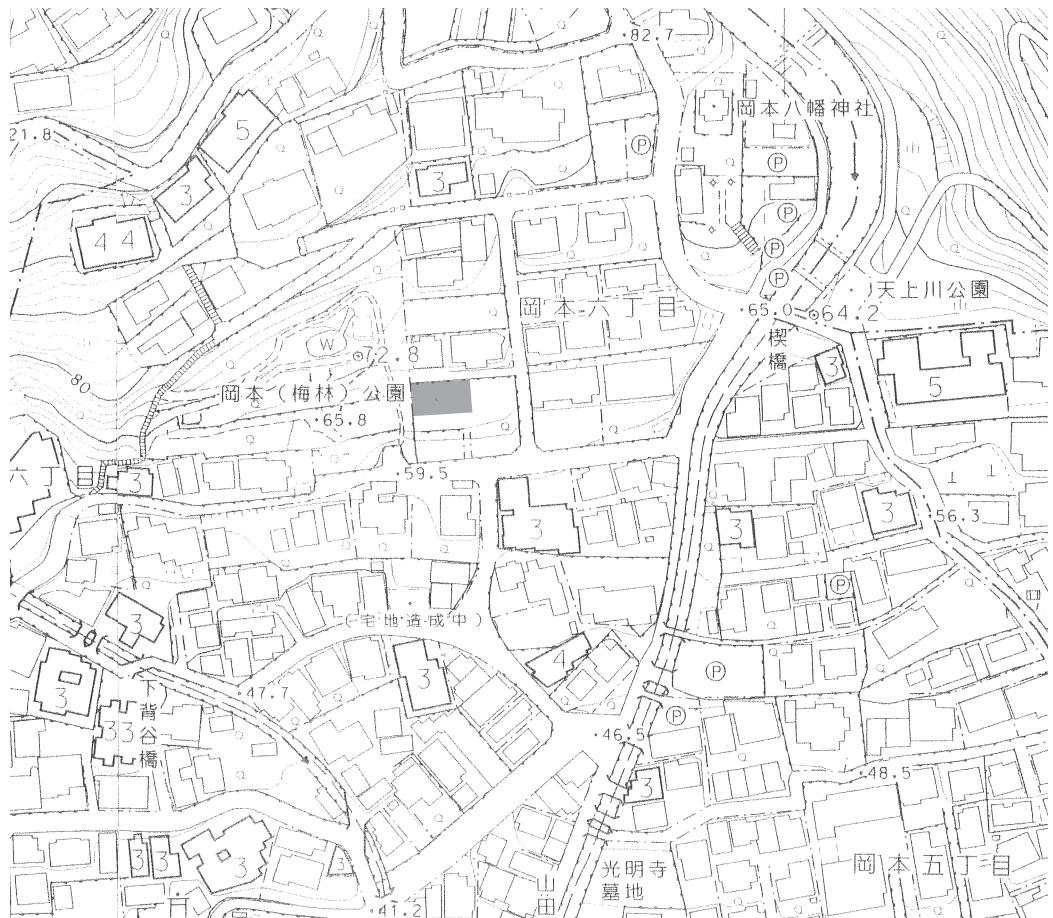
II. 平成22年度の発掘調査

1. 岡本梅林古墳 第2次調査

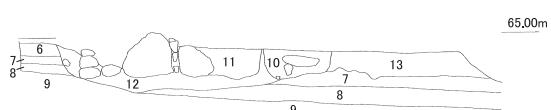
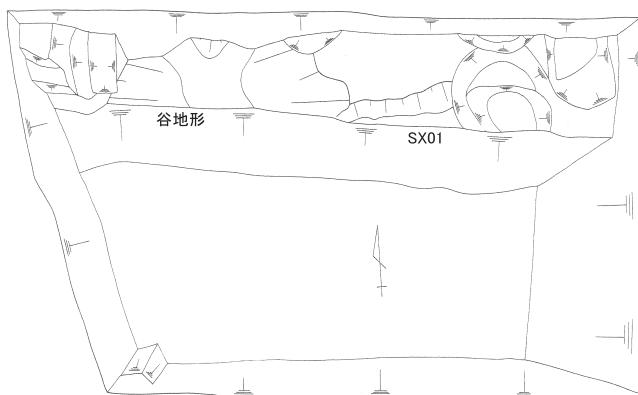
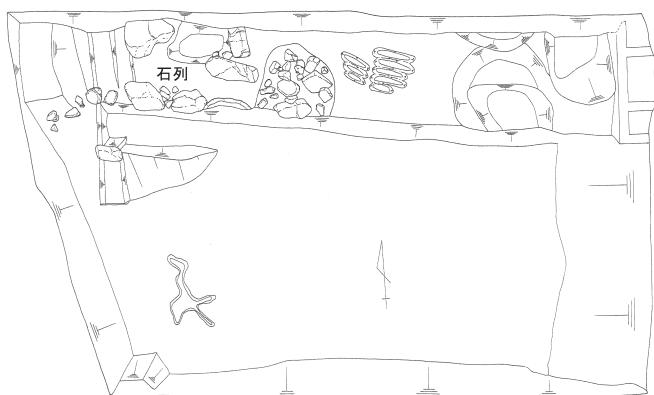
1. はじめに

岡本梅林は江戸時代に書かれた「摂津志」や「摂津名所図会」にも紹介されるように、古くから六甲山の梅林の名所として人々に親しまれてきた。その梅林の中に存在する古墳群として明治時代からその存在が知られており、小石棺が出土していることが研究論文として紹介されている。しかしながら早くからの鉄道の開通に伴い、当地は急激に住宅開発が進行したため、発掘調査による古墳に関する資料は長らく得られなかった。平成14年の第1次調査においてはじめて発掘調査によりその存在が明らかになった。調査の結果、墳丘はほとんど削平されていたものの横穴式石室の基底石と床面、それに伴う7世紀初頭の土器類、鉄釘、人骨などが出土した。

今回の調査は岡本公園の改修工事に伴うものであり、試掘調査を数度にわたり行った結果、当該地点において古墳の石室を想起させる石列と古墳時代の須恵器が出土したため、発掘調査を行うこととなった。



調査区の北辺から2.0mは現地表から0.5mが盛土及び旧宅地に伴う整地層であり、その直下で地山である明黄褐色土と試掘時に検出した石列を検出した。その石列から南側には大規模な埋め立てにより現地表面から2.0mほどの盛土層がある。石列には据え付けた時の掘形があり、掘削の結果、ガラス片や瓦、陶器片などが伴うことが判明した。このことから、石列は旧宅盤の段差に設けられた土留め用、あるいは現在でも周辺の宅地に見られる石垣の一部と考えられる。石列南側の一段下がった宅盤にも旧地表面が残されており、ガラス片、瓦、陶磁器類とともに電線の絶縁に用いる碍子も出土した。また植栽と考えられる木の根を検出した。



- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 乳黄灰色粘性砂質土 | 8 淡青灰色砂質土 |
| 2 暗褐灰色中砂土 | 9 明黄褐色土（円角礫含む） |
| 3 乳褐灰色細砂土 | 10 濁黄灰色粘性土 |
| 4 乳灰褐色粘性砂質土 | 11 乳黄灰色粘性土 |
| 5 淡褐色中砂土（1～5造成時の埋土） | 12 暗灰黄色土 |
| 6 乳墨灰色砂質土（礫含む） | 13 黄灰色粘性土（SX01埋土） |
| 7 乳青灰色砂質土（礫含む） | |

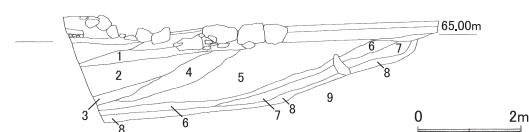


fig.18 調査区平・断面図

検出遺構 石列掘形を掘削した結果、新しい時期のものであることが判明したため、石列を撤去したのち流土を掘削した。その結果、北側の上段でその石列に延長して続くような溝状遺構(SX01)を検出した。また石列の下では山に見られる谷状の地形を検出した。

SX01 SX01は、北側の上段で石列を設置するときに西半分が削平された状態で検出された。北側の落ち込みの肩は存在するが、南側の肩については造成時の削平により失われているため、幅については不明である。北側の検出面からの深さは0.45mを測る。埋土（黄灰色粘質土）からは小さな素焼きの土器片が出土したが、時期については特定できない。

谷地形 北側の上段の石列を外した下には、流土である暗灰黄色土が堆積していた。地山である明黄褐色土とは見分けがつきにくいものであったが、礫の入り方と土の固さが違うことにより掘削することができた。形状としては山で見られる降雨の際に水が流れ形成されていく溝状の筋が一部だけ削り残されたものと考えられる。埋土である流土の暗灰黄色土からは6世紀末から7世紀初頭の須恵器が出土した。



fig.19 調査区全景



fig.20 石列検出状況

小石棺 今回の事業対象地となった敷地には、庭に設置されていた石灯籠などの石製品が数多く残されている。その中で手水鉢が飾り壁とともに、設置された状態で残されていた。試掘調査時にも指摘されていたことであるが、当地を造成した折に出土した石棺が複数あったことが研究者により記録されており、この手水鉢についても石棺である可能性が高い。その根拠として、石材が石棺によく使用されている竜山石の特徴を備えていること、小石棺として報告されている古墳出土の石棺と形状、規模が共通していることなどが指摘される。

石棺の規模は棺身長132cm、東端幅69cm、西端幅68cm、内刳長105cm、東端幅44cm、西端幅43cm、内刳の深さは東端で24cm、中央で26cm、西端で22cmを測る。内刳の縁となる上端面は丁寧に平滑に仕上げている。それに対して内刳内面と棺の外面は成形時のノミ跡が顕著に残されている。なお、岡本梅林古墳から出土した小石棺を東灘区魚崎北町の民家に庭石として転用しているとの記録があることから、造成時には複数の古墳と石室が破壊され石棺が取り出されたものと考えられる。

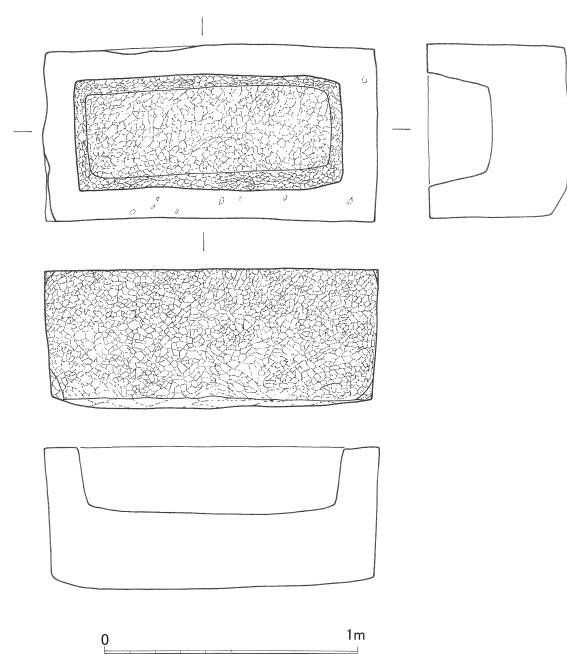


fig.21 小石棺実測図

3. まとめ

発掘調査により地形としては宅地造成時に大きく削平されていることが判明した。また当初の宅盤造成の形状からさらに埋め立てて最上段の宅盤の平坦部を広げる再造造成を行ったことが明らかとなった。現状では南側に擁壁が設けられ、狭小な平坦面があることから、元々はこの狭小な平坦面に続く2段目の宅盤があったものと考えられる。試掘調査で指摘されていた石列に関しては、自然地形を削平して宅盤の段差に設けられた土留め、もしくは石垣の一部と考えられるが、造成時に掘り出された古墳の石室の石材を転用したこととも考えられる。旧地形の谷状の流水から須恵器が出土することから、造成前には周辺に古墳が存在したことが考えられる。なお、事業地内に設置されている手水鉢は石の材質やその他の古墳出土の石棺規模、形状、棺身と蓋石とを合わせる面を平滑に仕上げている特徴からも小石棺の棺身であると推定できる。

調査終了後、この石棺を埋蔵文化財センターの玄関前に移設し、常時見学できるようにしている。



fig.22 小石棺展示状況

2. 住吉宮町遺跡 第47次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、昭和60年にJR住吉駅南西での共同住宅建設に伴い発見された遺跡である。大小様々な調査を重ね、当調査が第47次調査となる。当遺跡は東西約800m、南北約600mの範囲に国道2号線沿いに東西にひろがり、六甲山から流れる石屋川と住吉川により形成された標高20m前後の複合扇状地上に位置する。弥生時代から中世におよぶ複合遺跡であり、幾度となく繰り返された洪水による堆積層上に形成された遺跡である。

今回の調査対象地は、遺跡の中心からやや西側に位置する。住吉宮町遺跡の特徴として昭和60年の第1次調査や駅周辺の再開発事業（第9・32次調査）などで発見された古墳群があげられる。これまでに76基の古墳が検出されており、近接して築造された古墳群は、まもなく洪水砂によって地上に痕跡を残すことなく埋もれてしまった。この古墳群以前の弥生時代の周溝墓や竪穴住居なども発見されている。また古墳群と相前後する時代の竪穴住居やさらに新しい時代では、奈良時代の掘立柱建物や井戸なども発見されている。

調査対象地は、国道2号線に面した平成20年度に行なった第45次調査地と同一の敷地である。事業計画の変更により、第45次-I区調査区を取り囲む調査区である。

なお、第45次調査については平成21年度に『住吉宮町遺跡第45次調査発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。



2. 調査の概要

第1遺構面では、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、溝状遺構4条、土坑3基、落ち込み状遺構7箇所、ピット約100箇所が検出された。第2遺構面では、水田状遺構、溝状遺構1条、土坑4基、ピット約10箇所が検出された。その他水田状遺構面等で噴砂が検出された（遺構数は、第45次調査分の遺構は含まず）。第1遺構面では、上記のように数多くの遺構が検出されたが、第2遺構面では、これに比して極端に遺構は少なかった。遺物量についても第1遺構面では28ℓ入コンテナボックス12箱、第2遺構面では、同ボックス3箱であった。

基本層序 基本層序は、第45次調査と同様に現代盛土層、旧耕土、黃褐色砂（中世以前の洪水砂）、茶褐色泥砂（遺物包含層1）、暗褐色泥砂（遺物包含層2）、黃褐色泥砂となる。包含層1、2を取り除いたそれぞれの面が第1遺構面、第2遺構面となる。東壁では、旧耕土層を覆う洪水砂層が観察される。おそらく昭和13年の水害（阪神大水害）に伴う砂層の堆積と考えられる。それぞれの遺構面の上層には、部分的な堆積層が存在する箇所もあった。調査に際して基準点測量を実施し、前回調査との整合性を保持することとした。遺構面の標高は約19m前後である。

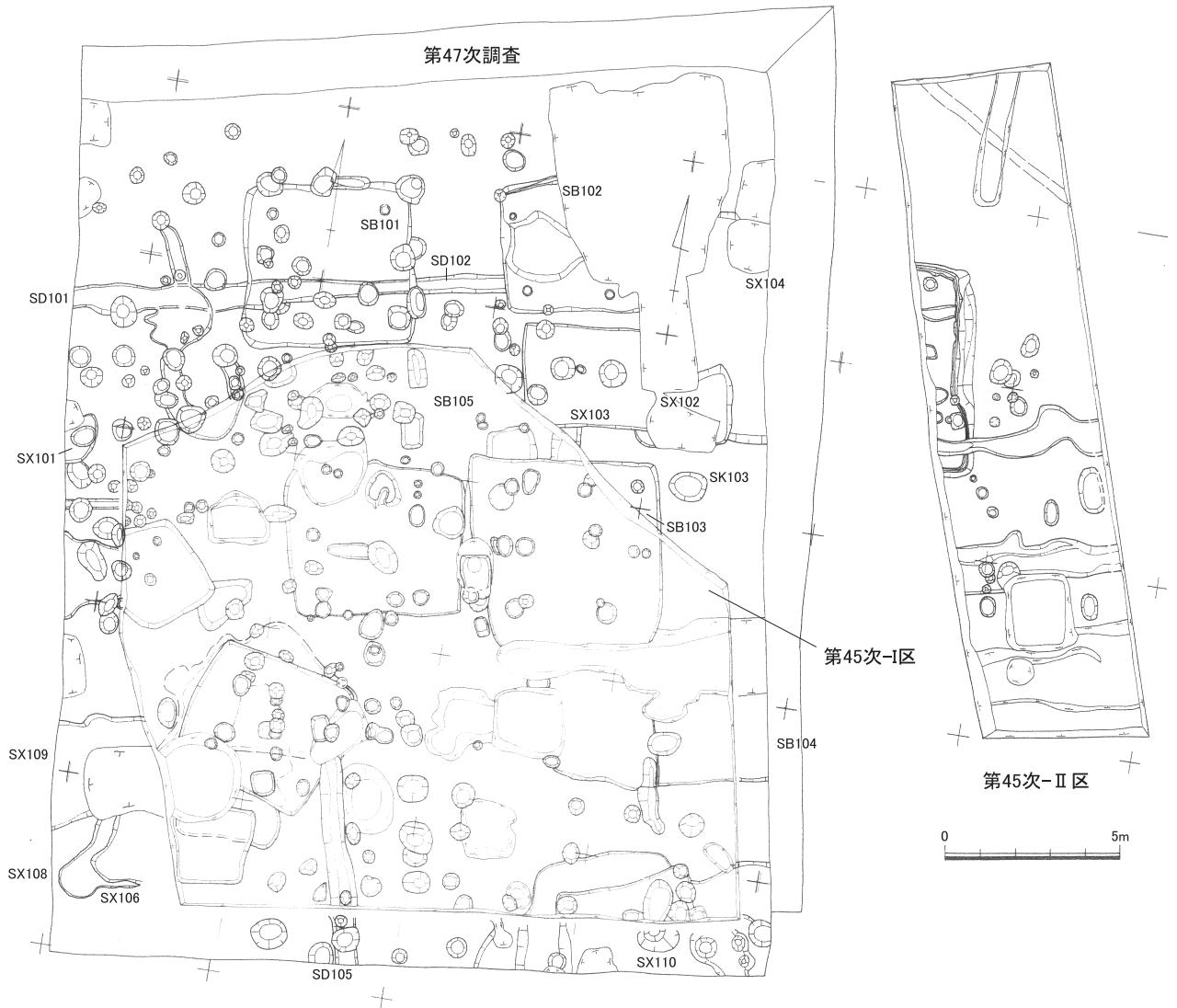


fig.24 第1遺構面平面図（第45次調査平面図合成）

第1遺構面 竪穴建物 SB101は、東西約5.0m、南北約4.5m、深さ0.1mの方形竪穴住居である。遺構の北辺、東辺などは新しいピットに切られ、南ではSD102に切られる。北東と北西隅にそれぞれ1箇所ずつ、直径約0.3m、深さ0.2mのピットが検出された。支柱穴と考えられる。古墳時代後期に属する土師器、須恵器が出土したが、特に顕著な遺物は出土しなかった。

SB102は、南北約3.5m、深さ0.1mの方形竪穴住居である。遺構の東北部分は、近代の搅乱によって損なわれている。北辺に僅かに周壁溝らしき凹みを検出したが、他の辺では検出されなかった。支柱穴と考えられるピットが3箇所検出された。遺構中央から西辺に

かけて直径約2.0m、深さ0.1mほどの落ち込みが検出された。上面では焼土、炭、骨片などが出土した。

SB103は、45次SB106の東北隅部として検出された。径0.4m、深さ0.2mのピットが検出され、土師器、須恵器、管状土錐などが出でた。

SB104は、45次SB108の東部として検出された。遺構底面からピットなどは検出されなかった。土師器、須恵器が出土した。



fig.25 第1遺構面全景

掘立柱建物 多くの柱穴が検出されたが、組み合わせについては検討材料が多くある。SB101の南側に第45次調査の柱穴を加えて、東西棟で 2×3 間の掘立柱建物（SB105）が1棟考えられる。南辺では、45次SB110（ 2×2 間）に西側のみであるが南P107が検出され、 2×3 間以上になることが判明した。45次SB111も南側へ伸びる可能性がある。

溝状遺構 北半区西端でSD101が検出された。幅0.5~0.7m、深さ0.1mの規模で、不整形なY字状に検出された。45次SB104との関連も考え調査を行ったが、現状では不明である。

SD102は、SD101の下層からSB102にかけて、東に直線状に検出された溝状遺構である。東から西に流れる推定され、東側は浅く幅も狭い。西側では幅0.8m、深さ0.1mの規模となる。SB102上では、図化できないほど深いものであった。遺構の切り合い関係から、古代から中世にかけての水田などの区画溝と考えられる。形状はやや異なるが同様の性格の溝状遺構が、45次-II区でも検出されている。SD105は、45次SD101の南伸する部分が検出された。

落ち込み状遺構 SX101は、西端部で検出された深さ0.1mの落ち込み状遺構で、下層からはP162が検出された。

SX102は、SX104を切る深さ0.2mの落ち込み状遺構で、平面形は不明である。

SX103は、北辺約3.5m、西辺約2.5m、南辺約2.5m、深さ0.2mの方形で、底面は平らな落ち込み状遺構である。西南隅は、第45次調査では検出されなかった。古墳時代後期に属する土師器、須恵器が出土した。

SX104は北辺がわずかに検出され、南辺はSX102に切られる。平面形が不明な落ち込み状遺構である。規模は、南北6.5m、深さ0.2~0.3mである。飛鳥時代頃の土師器、須恵器とともに焼石、焼土、炭、骨片などが出土した。

SB102、SX104両遺構から炭、骨片が出土したため、土壤サンプリングを行い、土壤洗

淨、選別作業を現地で実施した。土器片、炭化物、骨片が検出された。

SX106は、位置、堆積土及び出土遺物より45次SX102が西側に広がっていくことが確認された。飛鳥時代の土師器、須恵器が出土した。

SX108は、SX106が上層に乗ったような状態で検出された遺構である。使い込まれた砥石や土師器、須恵器が出土した。SX106とは時期差は大きくないと考えられる。

SX109の上面で、石製紡錘車が出土した。すぐ北側の45次SB103では、滑石製有孔円盤が出土しており、両者の関連性等について検討が必要であろう。

SX110は、南辺東で検出された東西7.5m以上、深さ0.1~0.3mほどの、南へ下がる落ち込み状遺構である。底面にはピット状の凹みが検出された。飛鳥から奈良時代にかけての土師器や須恵器、鉄製品など比較的多く遺物が出土した。

第2遺構面 北半の西部では、SK201、SK202の土坑やピットなどが検出された。

土坑 SK201は、直径0.8m、深さ0.1mの円形の土坑で、須恵器小型壺口頸部が出土した。

SK202は、直径0.8m、深さ0.1mの隅丸方形の土坑である。東辺では、土坑、落ち込み状遺構、ピットなどが検出された。

SK203は、長径1.6m、短径0.9m、深さ0.3mの楕円形土坑、SK204は、直径0.9m、深さ0.3mの円形土坑で、それぞれ土師器、須恵器が出土した。

落ち込み状遺構 SX201は、SK203やSX202に切られる深さ0.1mの落ち込み状遺構で、土師器、須恵器とともに棒状土錐などが出土した。SX202は、深さ0.1mの落ち込み状遺構で、土師器、須恵器が出土した。SX201やSX202については、第45次調査では不分明であった。

溝 SD201は、西辺で検出された溝状遺構である。幅0.4~0.5m、深さ0.1mの規模で、遺構内堆積土は黄色粗砂で、微量の土師器が出土した。SD201の南には、ピット2箇所が検出された。洪水の結果としての遺構であろうか。南辺では、第45次調査と同様に黄色の洪水砂が検出され、洪水砂を取り除くと褐色砂泥層の水田面が検出される。南辺中央では、第45次調査の畦畔が南西から西方向に伸びるようである。南辺東部は、上層のSX110によって水田面は損なわれている。南辺西部はやや高くなり、水田は南方向に広がっていくようである。幅2.0m足らずの調査区ではあるが、水田面が継続して検出された。水田状遺構を覆う黄色砂からは少量の須恵器、土師器が出土した。遺物の時期は第45次調査同様、古墳時代中期頃と考えられ、同時期以降の洪水の所産である。

3.まとめ

当調査では、2面の遺構面が検出された。第1遺構面は、古墳時代後期から飛鳥、奈良時代にかけての時期で、竪穴住居、掘立柱建物などが検出され、周辺で検出されている古墳群より遅れる時期の集落址である。第2遺構面は、古墳時代中期頃の水田状遺構などが検出された。概ね第45次調査の結果を踏襲する調査内容となった。また当然のことながら遺跡が連続して四方に面的に広がっていくことも確認できた。

住吉宮町遺跡では、これまでの調査で墓域、生産域、集落域を構成する遺構が検出されている。時代と遺構を整理することによって遺跡の動向について知ることのできる重要な要素を兼ね備えた遺跡である。

今回の調査では、前回第45次調査の結果とともに集落址や水田状遺構の検出されたことは当遺跡にとって多くの資料を得たこととなり、重要な意義をもつ。

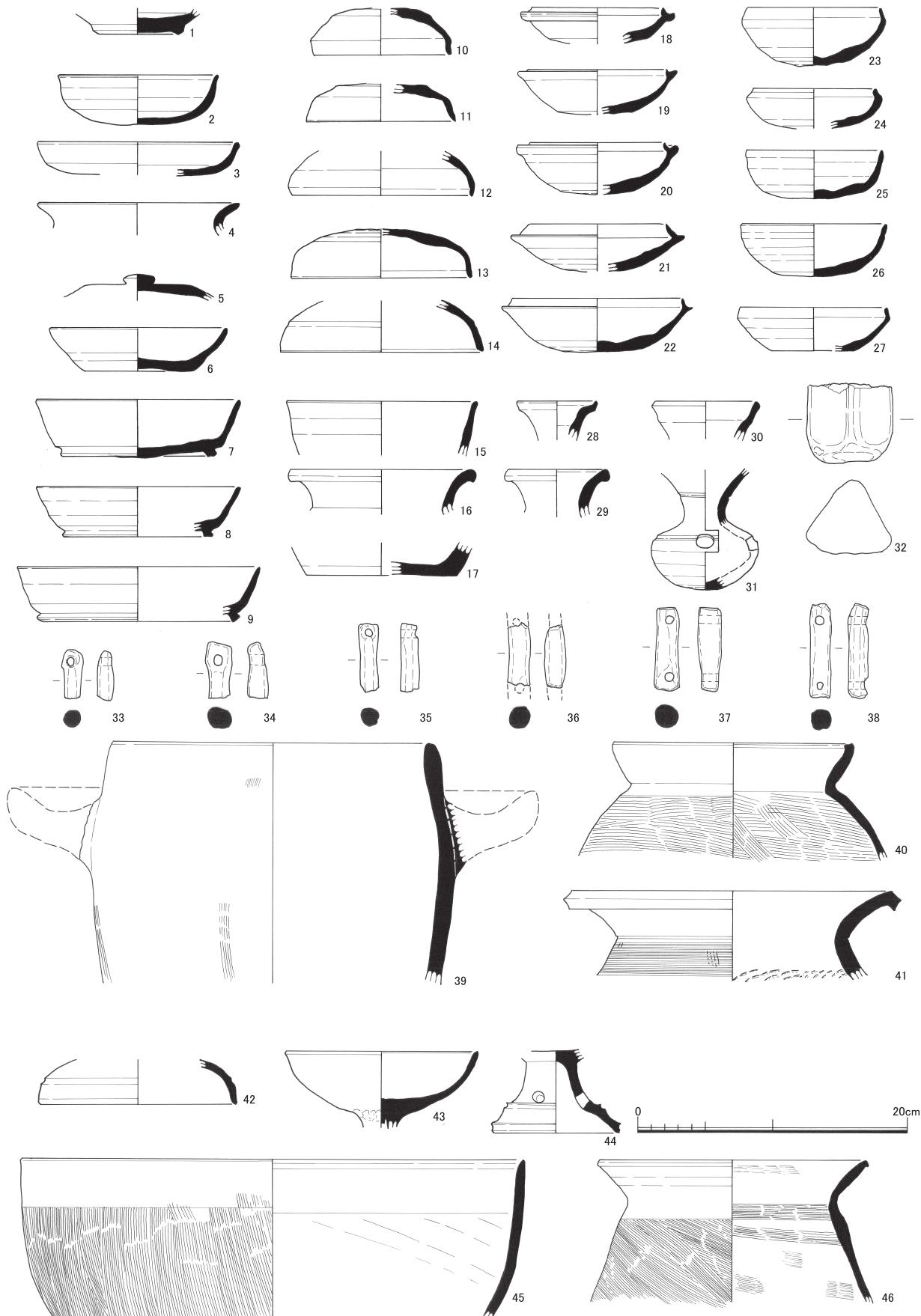


fig.26 包含層1・包含層2及び黄色砂出土遺物実測図

1~41：包含層1 42・45・46：包含層2 43・44：黄色砂 1：白磁 32：磨石 33~38：棒状土錘

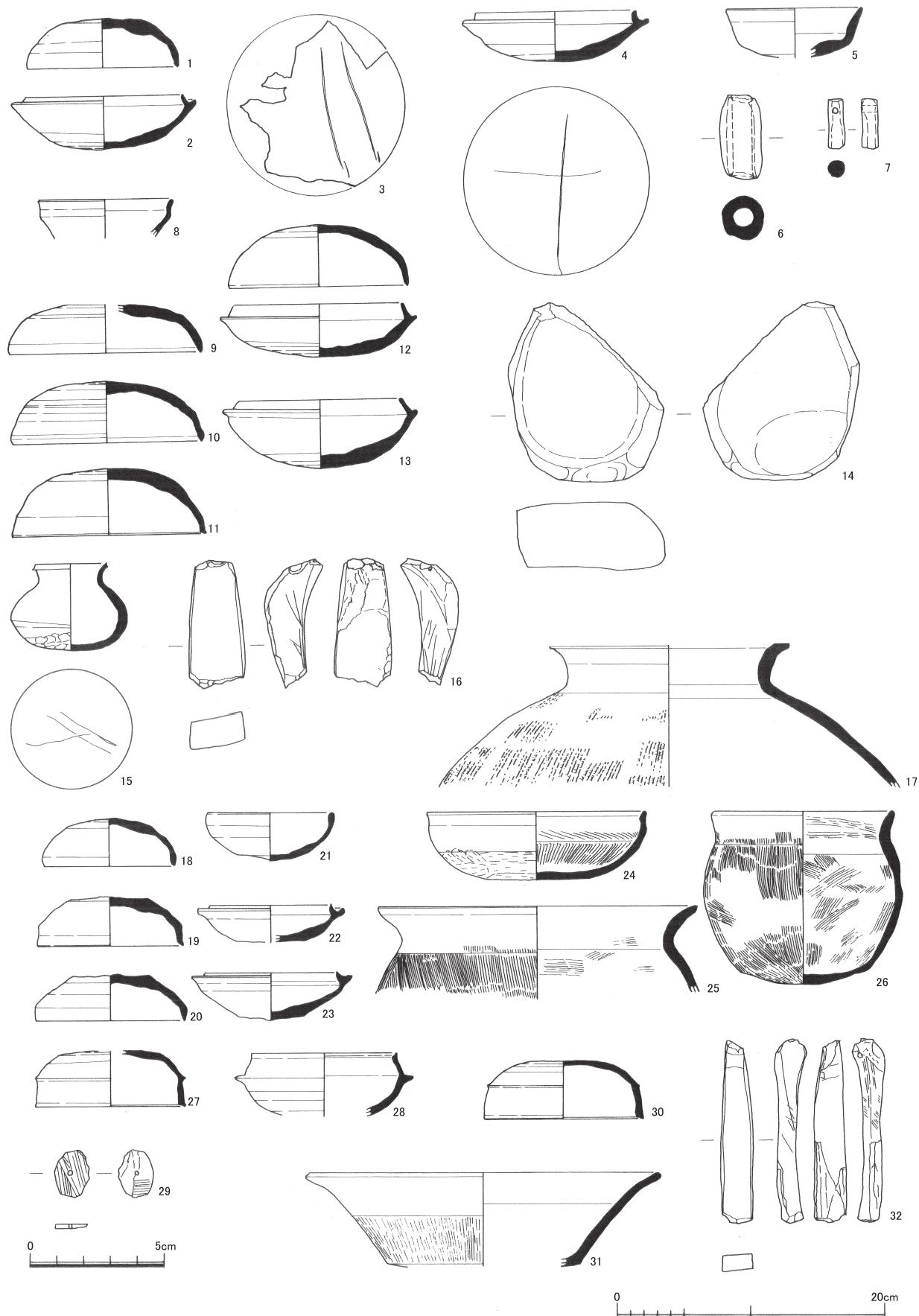


fig.27 第1遺構面遺構内出土遺物実測図

1・2:SB101 3~6:SB103 7:SB102 8:SD102 9~14:土器群出土遺物 15・16:SX104
 17:SX105 18~26:SX106 27・29:SX107 30~32:SX108 6:管状土錘 7:棒状土錘
 14:磨石 16・32:砧石 29:有孔円盤

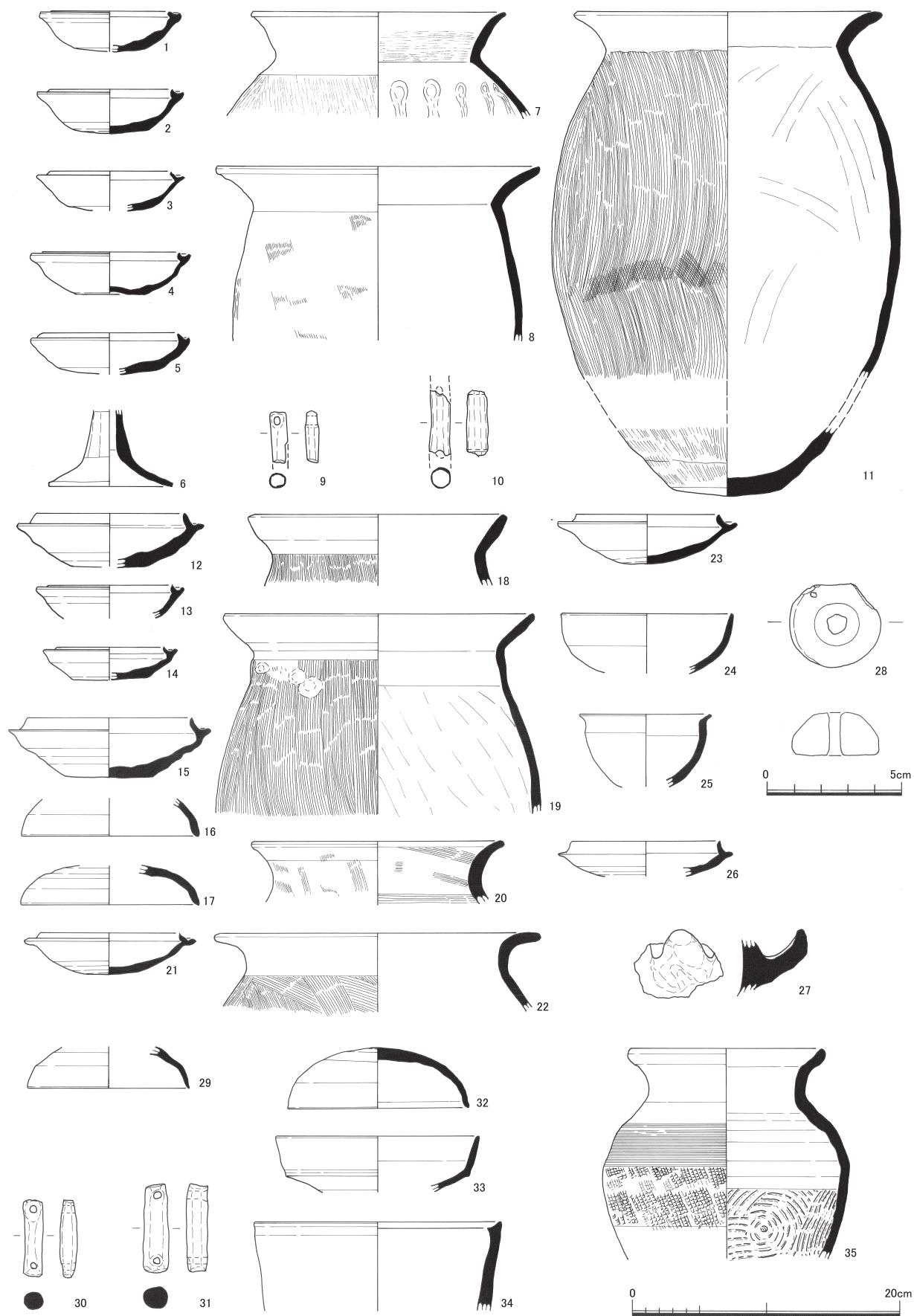


fig.28 第1遺構面及び第2遺構面遺構内出土遺物実測図

1~28 : 第1遺構面遺構内出土遺物 29~35 : 第2遺構面遺構内出土遺物
 1~11 : SX110 12 : P106
 13 : P114 14 : P141 15 : P172 16 : P164 17 : P165 18・19 : P119 20 : P143 21・22 : 西P105
 23 : 東P104 24 : 南P104 25 : 南P105 26 : 南P107 27 : P168 28 : SX109 29 : SK203 30 : SK204
 31~34 : SX201 35 : SK201 9・11・30・31 : 棒状土錐 27 : 甌把手 28 : 石製紡錘車

3. 住吉宮町遺跡 第48次調査

1. はじめに

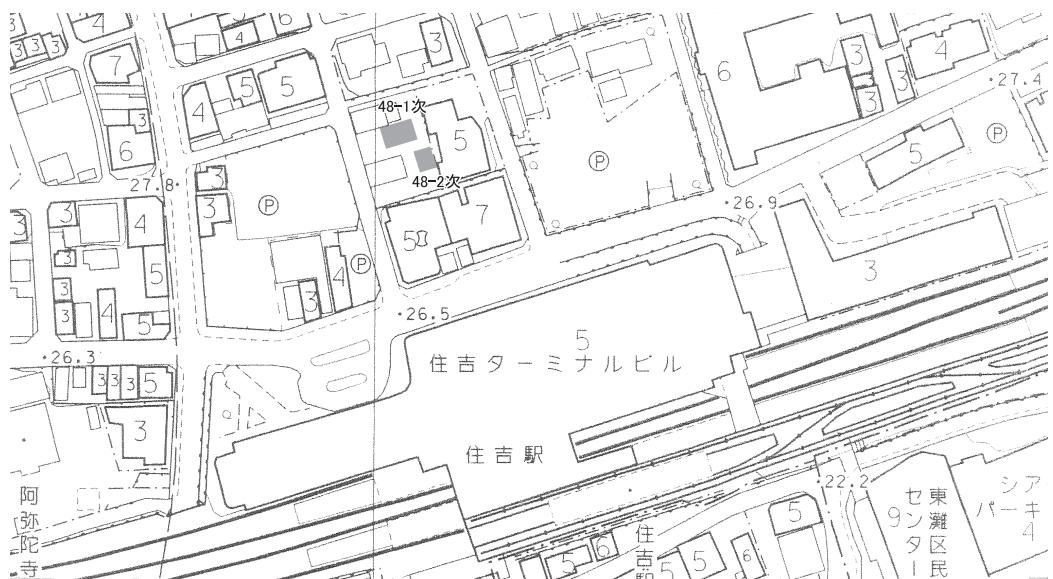
住吉宮町遺跡は神戸市東灘区、JR住吉駅の周辺一帯に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡で、住吉川によって完新世に形成された扇状地上に立地している。

これまでに50回近い調査が実施され、各時代の遺構・遺物が確認されているが、特に古墳時代においては前方後円墳である坊ヶ塚古墳や帆立貝式古墳である住吉東古墳の盟主墳を中心に70基以上の、主に方墳によって形成される古墳群が確認されている。古墳群は現在、国道2号線以北の地域で確認されているが、本住吉神社を挟んで東・西の両群として捉えられる分布を示している。

今回の調査は、市有地売却に伴う既存の基礎撤去による埋蔵文化財への影響を確認するために実施した。

調査地は、4基の方墳が検出された第24次調査地の西側に隣接する地区にあたり、調査対象地が2ヶ所に分かれており、北側の調査地を第48-1次調査地、南側の調査地を第48-2次調査地として同時進行で調査を実施した。

fig.29 調査地位置図
S=1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査では、第48-1次調査において古墳1基、土坑状落ち込み1基、ピット4基を検出した。

第48-1次調査 残土置場を確保するため、2回に分けて実施することとし、東半部より調査を開始した。

東半部を1区、西半部を2区とした。1・2区にまたがって古墳を1基検出しており、1号墳と呼称する。

1号墳

調査地全体では墳丘の南半分程度を検出したものと考えられる。以下検出した墳丘、葺石及び周溝について記述する。

墳丘

現地表下約1.1~1.2m、T.P. 27.5m付近で1号墳墳丘上面を検出した。上部が旧耕土等により削平されているため本来の墳丘上部の状況については不明な点が多い。墳丘が1段であったのか2段以上築かれていたのかも不明である。墳丘上では主体部や埴輪を樹立したような痕跡は認められなかった。

墳丘は調査区外へと伸びており、本来の規模は不明である。また今回の調査区内では古墳のコーナーを完全な形では検出していないため、古墳の墳形も断定できないが、検出した形状から判断すれば方墳である可能性が高いといえよう。

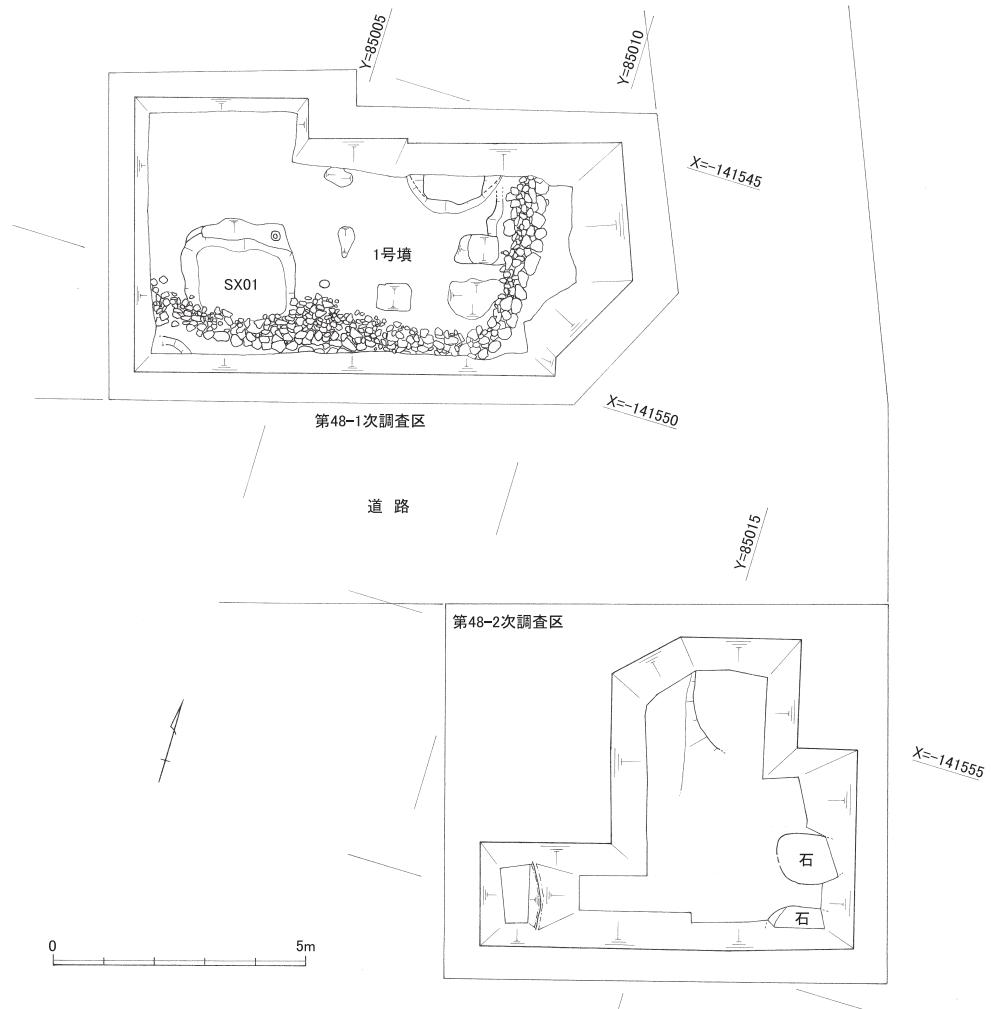


fig.30 調査区平面図

葺石

1号墳の東斜面及び南斜面で葺石を検出した。1区で検出した東側葺石は調査区の北側へと伸びている。また2区で検出した南側葺石は調査区の西・南側へと伸びている。

東側葺石の基底石には径20~45cmを測る花崗岩を使用している。基底石の使用方法は長辺を周溝側に向けるものと短辺を向けるものが混在している。

南側葺石については西側約半分程度の検出にとどまり、東半分は調査区南壁より外に伸びているため、基底石も検出できていない。西半分の基底石の使用方法は東側葺石と同様であるが、検出した範囲では南側の基底石は東側の基底石よりやや小振りである。基底石より上位の葺石についても、南側葺石の方が東葺石よりも小振りの石が多く用いられているようである。

調査区南東隅で基底石が西へ弧を描くように曲がる部分を検出したため、この部分が1号墳の南東コーナー付近にあたると考えられる。この部分についてはfig.31に示した葺石立面図から南東隅の基底石のレベルが高くなっていることが読み取れる。2区南西隅の基底石についても同様にその東側よりも基底石のレベルが高くなっている、2区のすぐ西側

付近に1号墳の南西コーナーが存在するものと考えられる。

葺石を設置する際の基準線の存在の有無については判然としない。

葺石に用いられている石材については、肉眼による観察では大半は花崗岩と考えられる。わずかに青灰色系の色調を呈する石材も含まれている。

周溝

1区では1号墳の東周溝を、2区では南周溝を検出した。1区で検出した東周溝は幅1.1m、深さ0.3mを測り、埋土は暗褐灰色～淡褐灰色シルト質極細砂～細砂である。2区で検出した南周溝の検出した規模は調査区南西隅で幅1.4m、深さ0.5mを測る。

2区南西部で検出した周溝の南肩部がやや弧を描くようにみえることは葺石のところで考察したように南西コーナーがすぐ西側に存在することの傍証と考えられる。

周溝内から1号墳に伴う遺物は出土していない。

そのほか2区において1号墳墳丘上面検出面とほぼ同一面で土坑状落ち込み1基、ピット4基を検出した。



fig.31 第48－1次調査区平・立面図

SX01

2区南西部で検出した大型の土坑状落ち込みで、北側は搅乱によって削平を受けている。検出した規模は径2.25×1.90m、深さ約0.4mを測る。須恵器、土師器、磁器が少量出土しているが、細片のため時期については不明である。

SP01～04

2区南半でピットを4基検出した。いずれも径0.2m前後で、深さはSP01が0.14m、SP02は0.26m、SP03は0.54m、SP04は0.11mを測る。SP03・04は近接しており、検出レベルは違うが、底面のレベルはほぼ同一である。SP03・04は1号墳の周溝埋土を切っており、時期差があることは明確であるが、SP03・04から遺物が出土していないため、どれくらいの時期差があるのかは不明である。ピットは調査区内では4基のみの検出であり、掘立柱建物としての明確なまとめは確定できない。



fig.32 第48-1次1区(東半)全景



fig.33 葦石検出状況



fig.34 第48-1次2区(西半)全景

第48-2次調査 既存の基礎撤去時の搅乱により埋蔵文化財が削平されている部分を確認するために調査を実施した。残土置場を確保するため4回に分けて調査を実施した。

対象地北端部(4区)の現地表下約1.25m付近で西側に落ち込む旧地形を確認した。その南側(3区)では洪水砂中などから須恵器、土師器の小片が出土しているが遺構は検出されなかった。出土遺物は出土状況から判断して周辺より流入したものと考えられる。

第48-2次調査では遺構が確認されず、第24次調査や第48-1次調査で検出したような古墳が当調査地まで広がっていないことが判明した。当調査地の西側は未調査のため古墳の分布が当調査地以西にも広がらないのかどうかは不明であるが、今回の調査区内の堆積土層の観察からは、元来古墳が存在したが、後世の洪水などにより全て消失したとは考えにくいため、今回の調査地が古墳の空白地に位置しているといえよう。

3. まとめ

今回の調査では第48-1次調査地において古墳1基を検出した。1区と2区の検出部分を合わせて考えると検出した古墳は方墳と考えられ、葦石の検出状況から判断すれば1区南壁のすぐ南側に南東コーナーが存在し、2区西壁のすぐ西側に南西コーナーが存在するものと考えられる。その場合1辺7~8m程度の規模が考えられる。

1号墳の墳丘及び葦石、周溝からは出土遺物がなく1号墳の築造時期については不明である。今回の調査地の東側隣接地で実施された第24次調査では古墳のコーナー部分にのみ遺物が出土する傾向がみられるため、今回検出した1号墳についても調査区外のコーナー部分に遺物が存在する可能性は十分考えられるが、現段階では不明である。

なお、1号墳の主体部については、調査範囲内では検出されなかった。墳丘の中央に存在するのであれば調査区中央のすぐ北側の調査区外に所在する可能性もある。

住吉宮町遺跡内においてはこれまでに50回近い調査が実施されており、前方後円墳の坊ヶ塚古墳や帆立貝式古墳である住吉東古墳を中心としてその周囲に方墳が70基以上存在したことが判明している。今回の調査地周辺においても東隣接地で実施した第24次調査において方墳4基が、また北東側約30mで実施した第35次調査では墳形や規模は不明であるが古墳1基を検出しており、今回の調査で古墳の分布域がさらに西側に広がることが判明した。

今回検出した1号墳は、土器や埴輪などの出土遺物がなく、築造時期については確定することができない。これまでの当遺跡内で検出された他の古墳の状況からは、今回のように墳丘斜面全面に葺石を施す古墳は、時期的に古く大型の古墳であると推定できる。

第24次調査で検出された古墳との位置的な関係はfig.35の通りであるが、古墳の主軸方向は第24次調査1～3号墳に近い。ただし、第24次調査で検出された4基の古墳はいずれも葺石をもたないものである。また第24次調査では主体部として箱式石棺等が検出されているが、今回の調査範囲においては主体部も検出されなかった。以上のように、第24次調査検出の古墳と今回の1号墳には相違点がある。

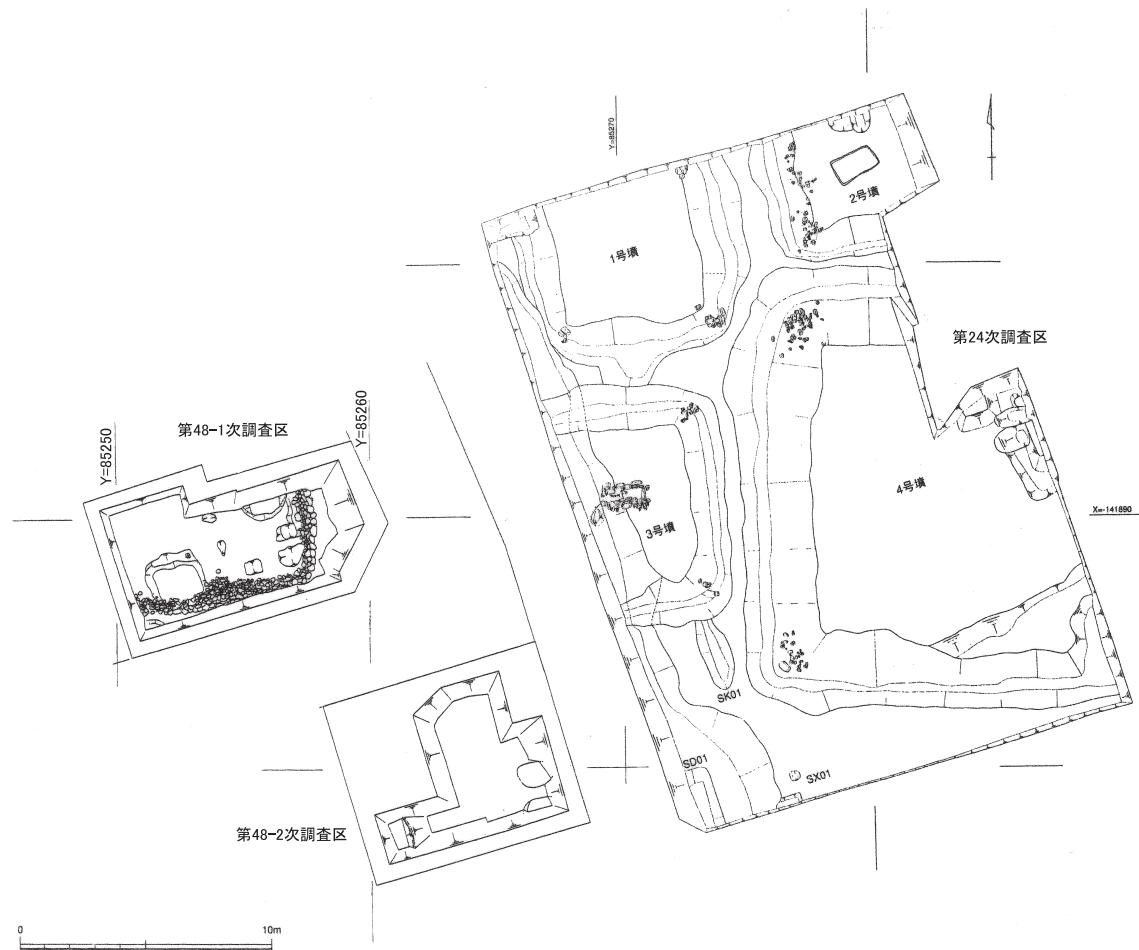


fig.35 周辺検出古墳群位置関係図

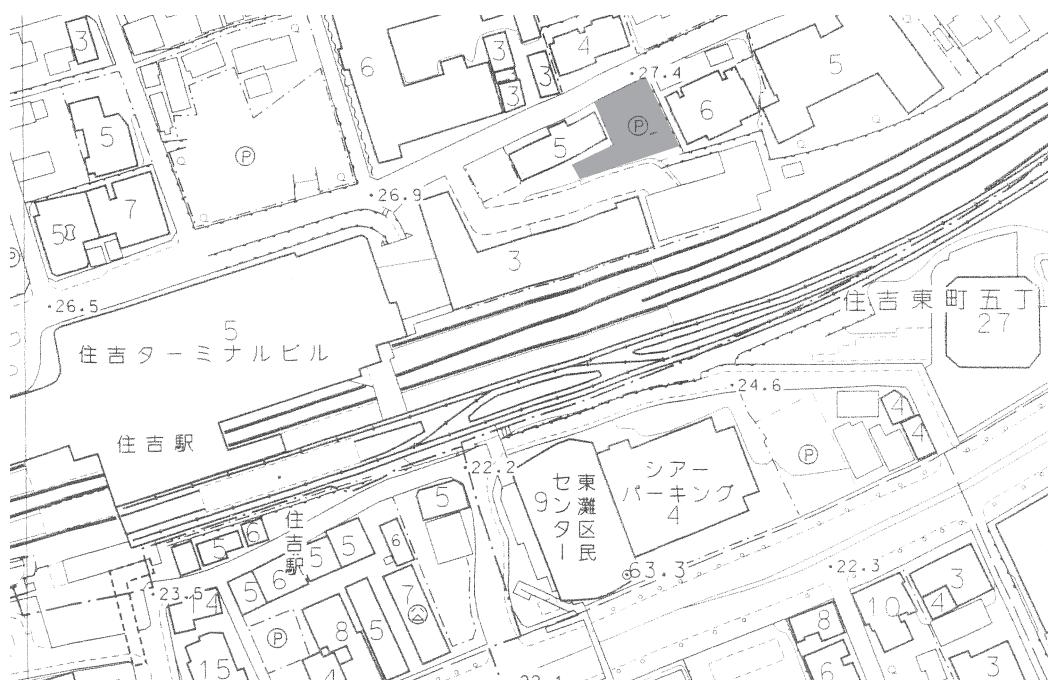
4. 住吉宮町遺跡 第49次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は六甲山南麓、住吉川右岸の沖積地に位置する。氾濫により堆積した砂に埋没した古墳時代後期の古墳群として著名である。昭和60年以降これまでに48次にわたる発掘調査が行われ、良好な状態で遺存する古墳のほか、弥生時代末ないし古墳時代初めの周溝墓・土坑墓群、また弥生時代・古墳時代・奈良時代、さらにそれ以降の集落などが確認されている。今回の調査地は、住吉川に近い遺跡北東部の斜面地にあたる。

2. 調査の概要

今回の発掘調査は、集合住宅の建設に伴って遺跡が影響を受ける部分について行った。その結果、2面の遺構面を確認し、第1遺構面では飛鳥時代から室町時代までの遺構が、氾濫により堆積した砂に厚く覆われる第2遺構面では古墳時代後期の遺構を確認した。



物もほとんどなかったため、遺構面とは認定しなかった。

7c層を除去すると古墳時代後期に氾濫で埋没した表土層8aを検出した（第2遺構面）。第2遺構面の基盤層となる8c層以下の氾濫により堆積した砂の間にも数枚の表土層（9a層・10a層）を確認し、10a層では立ち木の燃え跡も確認したが、土器などの出土はなく、今回の調査地には第2遺構面よりも下に遺跡はないものと判断した。

第1遺構面 飛鳥時代から室町時代の遺構・遺物を確認した。調査区北部および西部には遺構が少ない。西の第44次調査地でも、該当する時期の遺物はあったが、第1遺構面で遺構は検出されていない。検出された遺構には柱穴多数のほか、溝、土坑、石組み土坑などがある。また、この面を切る噴砂を調査区全域で検出している。

噴砂 土層断面の観察によって第1遺構面を切る噴砂は1938年に埋没した水田土壤には影響を与えていないことを確認しており、この噴砂は1995年の兵庫県南部地震によるものとは考えられない。さらに、この噴砂による影響を受ける第1遺構面の遺構には室町時代のものがあることを考え合わせれば、その原因となった地震は1598年の慶長伏見の大地震であると考えられる。噴砂の亀裂は北西から南東方向のものが多い。

SD08 調査区の北西で検出された北北東から南南西に流れる溝である。幅2.0～3.0m、遺構検出面からの深さ約0.3m。奈良時代末頃の遺物が多く出土している。

SR01 調査区を蛇行しながら南流する流路である。最も狭い部分で幅4.0m以上、遺構検出面からの深さ1.4mを測る。出土遺物は少ないが、下層から飛鳥時代の蓋杯の蓋が出土している。SR01の埋没後、多くの遺構が掘削されている。

SK01 東西約1.5m、南北約0.8m、遺構検出面からの深さ約0.2mを測る隅円長方形の土坑である。およそ東西方向に主軸をもつ。白磁・須恵器・土師器・瓦器等、鎌倉時代の遺物が出土している。周辺には、主軸方向を90度異にするが、同様の形状を呈する土坑SK06など土坑が複数存在し、それらからは鎌倉時代を中心とする遺物が出土している。

SK01 調査区の南部で検出された石組みの壁をもつ土坑。石組みの壁は北辺と東辺が遺存するが、他の2辺には原位置を保つものはなかった。但し、石材は周辺に散乱し、西辺では石材を据えつけるための掘り込みが残っていたことから、当初は四辺に石組みの壁があったものと推測される。石組みは平面が方形に復元でき、内法は約1.8m=1間ほどと推定できる。壁面は高さ0.5mほどが残るが、横方向に置かれる石、縦方向に置かれる石と目地は通らず、石の大きさも様々で、あり合わせの石材を積んだように見える。また、北辺の背面には裏込め状に栗石が詰められるが、同様に搅乱を受けていない東辺には裏込めの石が存在していない。

裏込め状の集石部分、また、石組みの内側の埋土から室町時代の土器類が出土している。

第2遺構面 気溢による堆積砂7c層下面、また8a層下面で検出される遺構面。調査区の東部は1.0mほどの段差をもって低くなる。この遺構面の表土層である8a層中の2箇所において、古墳時代後期の高杯あるいは手捏ね土器などの土器、また滑石製模造品・鉄鋌などがなからば埋没した状態で出土している（SX05・06）。そのほか、第44次調査区で確認された44次-2号墳の東辺及び周溝・土坑などの遺構を検出した。8a層下面では竪穴建物、溝、土坑3基などを検出した。

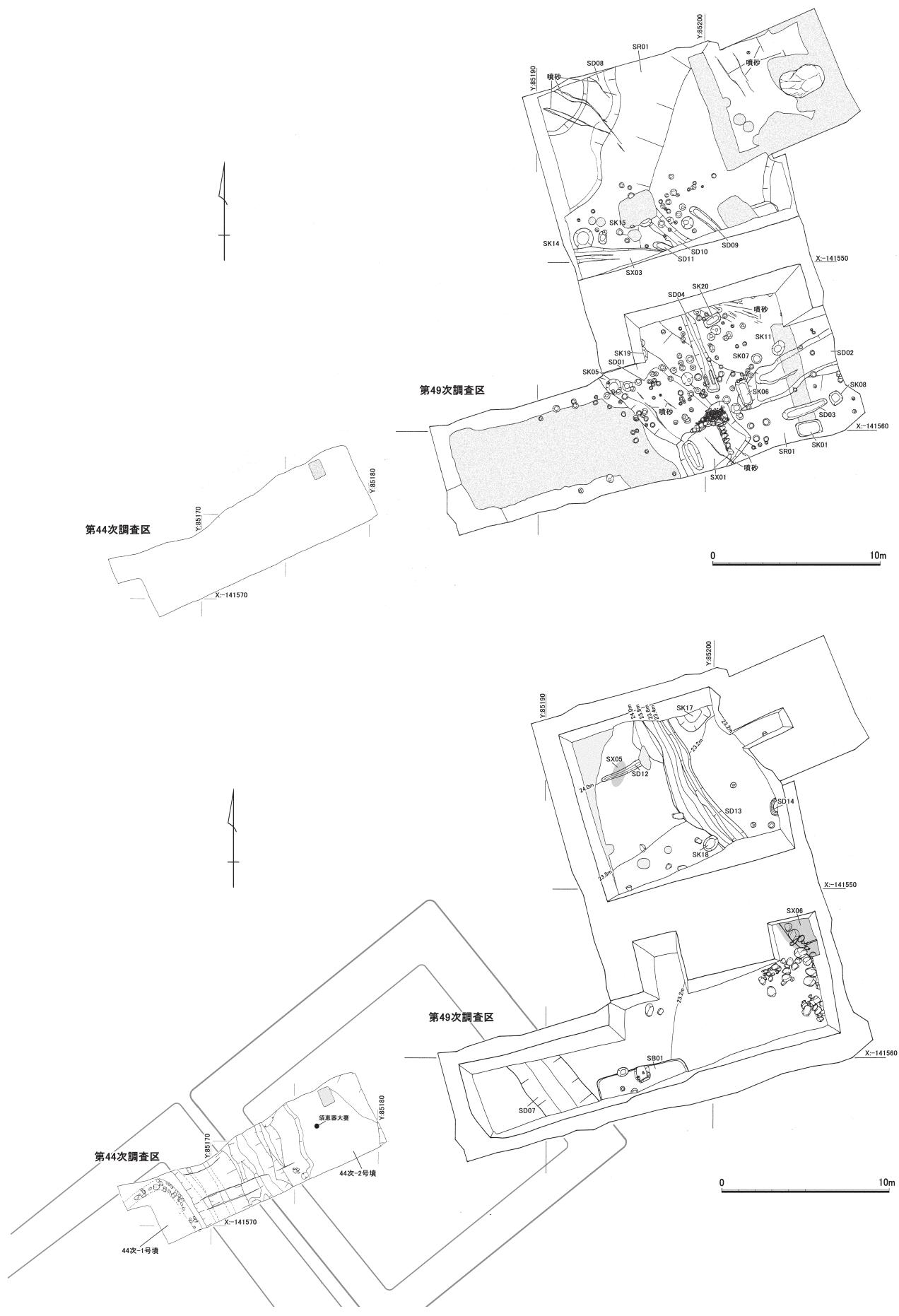


fig.37 調査区平面図 上：第1遺構面 下：第2遺構面

- SX05 調査区北部で検出された祭祀遺構で、手捏ね土器4、土師器甕1のほか、鉄鋌と推定できる鉄片が多数、8a層中に埋没していた。滑石製臼玉などの存否を確認するために周辺の土壤を水洗したが、出土しなかった。
- SX06 調査区東部、8a層中で検出された祭祀遺構。49次調査地の東部には古い埋没谷があり、第2遺構面の段階でも1.0mほどの段差となり、東側が低くなっている。この段差の斜面部分に投棄されたような状況で遺物が出土した。遺物の出土範囲は調査区外に拡がる。多量の土師器高杯・小壺などのほか、土師器甕、須恵器などの土器、また、大量の有孔円板、勾玉、臼玉などの滑石製模造品、梯子状の鋳造鉄斧1、さらにこれらの遺物の下から鉄刀1振りが出土している。
- 出土した土器の構成は須恵器が無蓋高杯1と蓋杯の蓋1の2点のみで他はすべて土師器である。土師器は高杯が90点以上、手捏ねの小壺が20点以上、壺2点以上、甕9点以上で、他の共伴遺物の性格を合わせ、これらは祭祀を行う際に供えものを盛り付けた食器であると推定できる。祭祀用の食器という性格もあってか、複合口縁の手捏ね小壺、脚部に円形スカシを穿つ高杯、高杯の杯部内面の放射状暗文など、その形態に古様な要素を保持するものがあり、注目される。その一方、fig.41の87のようにきちんと穿孔されているスカシと、穿孔が途中で止まり、スタンプ文となっているものが同一個体に共存したり、土器の整形がいい加減な個体が目につくなど、土器の一回限りの使用を前提とするだろうと推測できるものもある。
- 鉄刀はやや内反りの直刀で、調査時に折損してしまい確定できないが80.3cm以上。刃部長は64.9cm以上、最大幅3.4cm。切先形状は折損のため不明。関は片関で、8.5mm切れ込む。中子は関からやや幅を減じながら直線的に中子尻に達し、中子尻は角が少し丸みを帯びた一文字で、腹側に切り欠きがある。目釘穴は2箇所である。鉄鋌と推定できる鉄片は幅15.0～35.0mmほど、厚さ2.0mm内外の薄い板状のもので、遺物を含む土壤水洗が完了していないが、現在までに重量約250g分を確認している。梯子状鋳造鉄斧は全長15.0cm・刃部幅6.9cmをはかる。
- SK17 調査区北東部の段の下で検出された土坑。東西約2.0m、南北1.0m以上をはかる隅円方形の土坑。北部は調査区外に拡がる。8a層上面からの深さ約0.8m、土坑底面が0.05～0.15mほど埋もれた段階で7a層によって一気に埋没している。
- 44次－2号墳 墳丘の東部が調査区の西部で検出された。墳丘は噴砂によって大きく破壊される。東周溝の幅は約3.0m、8a層上面からの深さは約0.8mである。今回東溝が確認されたことにより、この古墳の大きさは東西約14mであることが確定した。墳丘上に埴輪、葺石はない。
- SB01 調査区南部8a層下面で検出した東西5.4mをはかる隅円方形の堅穴建物。南4分の3以上は調査地外となり、北部のみの調査にとどまった。北辺に竈が設置される。竈の焚口側に花崗岩3個を袖と天井に組み、これを心材として粘土質の土で塗りこめている。竈口の下には花崗岩の支柱が立ったままで残されていた。床面から土師器甕、須恵器甕などが出土地している。

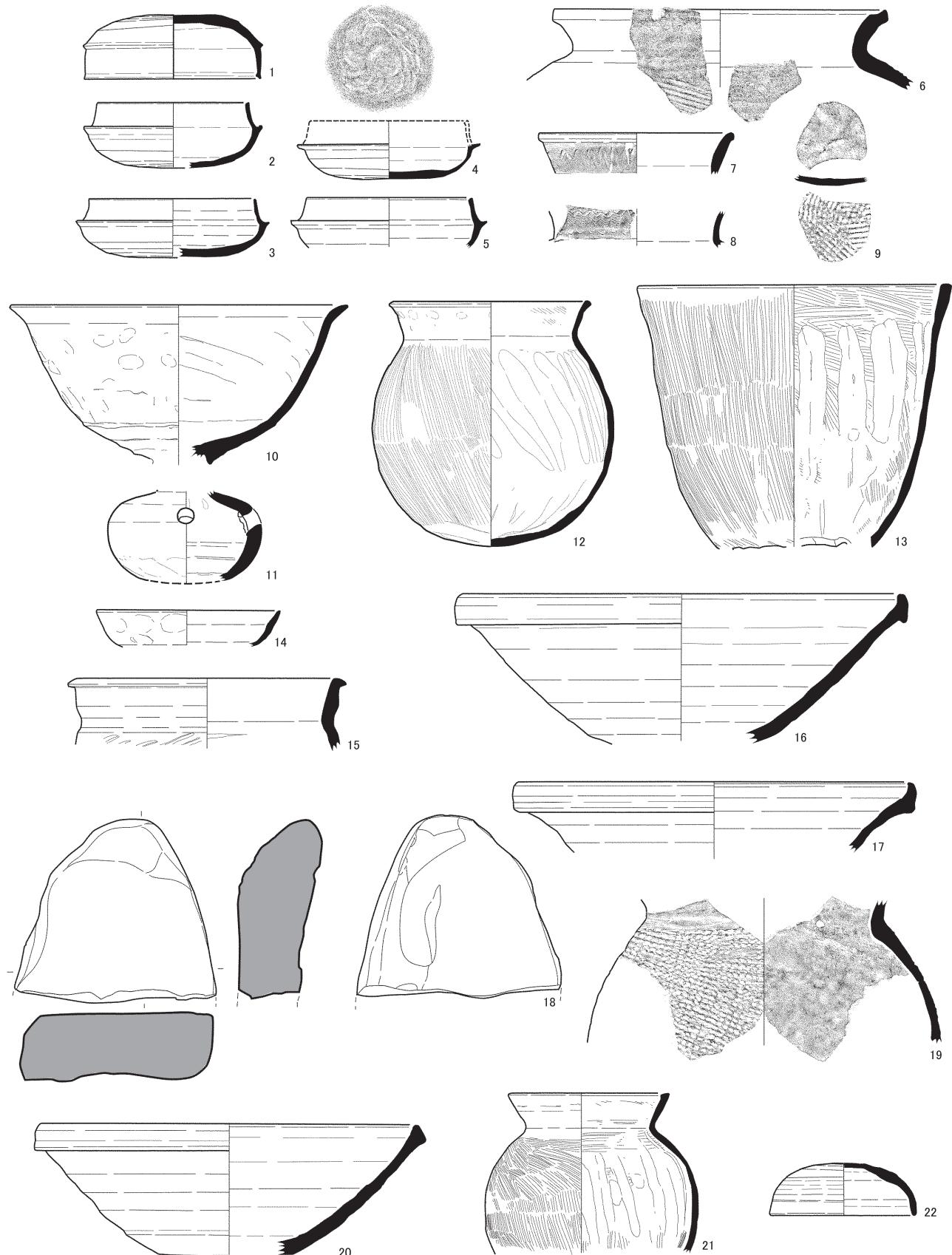


fig.38 出土遺物実測図(1)

1～9：8a層 10～13：SB01 14～18：SK04 19：SK13 20：SX01 21：SX05 22：SR01出土
(1～9・11・16・17・20・22：須恵器 10・12～15・21：土師器 18：砥石、19：亀山焼)



fig.39 出土遺物実測図(2) SD08出土遺物
23~26・28~40: 土師器、27: 須恵器

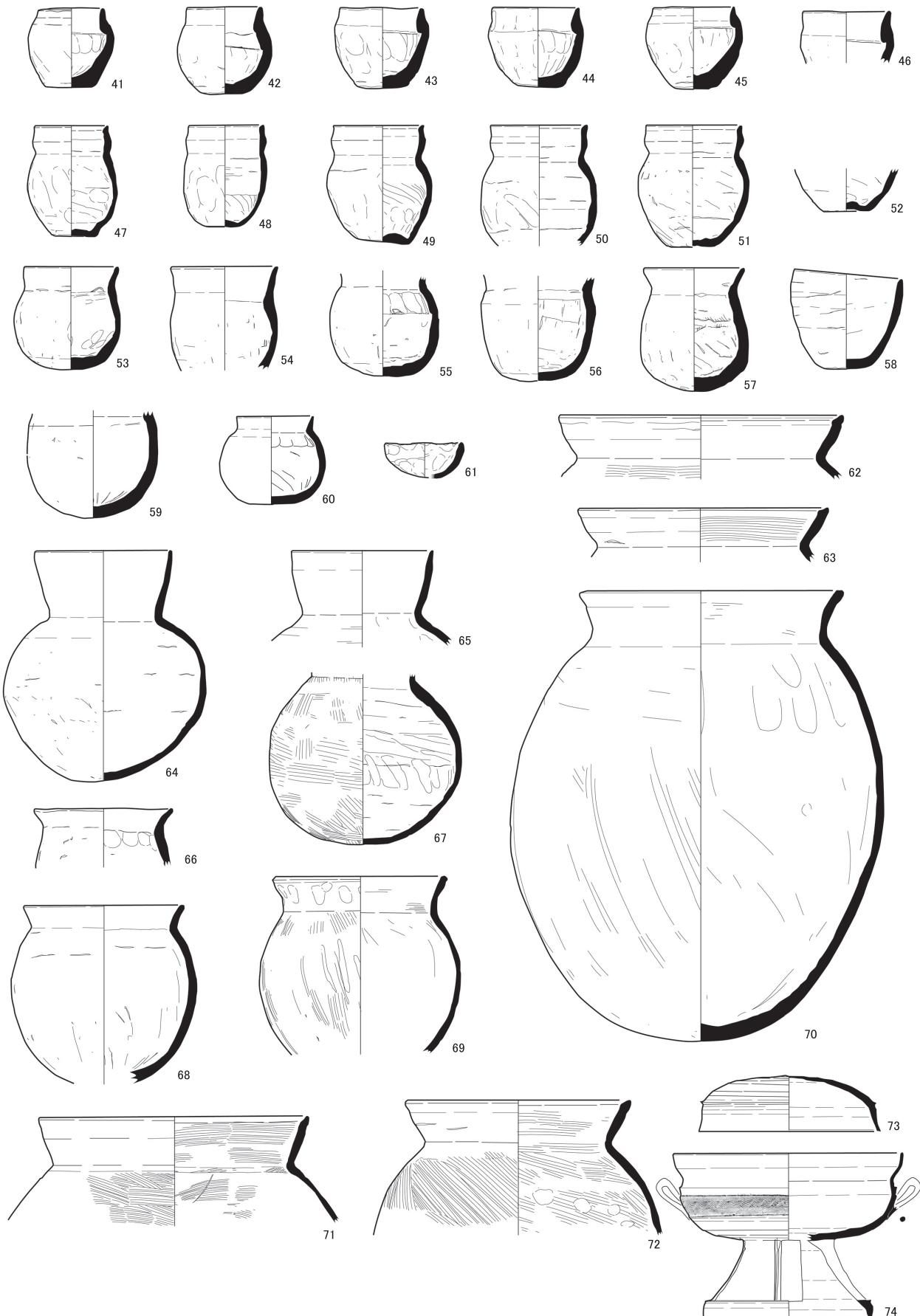


fig.40 出土遺物実測図(3) SX06出土遺物(1)

41~72：土師器、73・74：須恵器

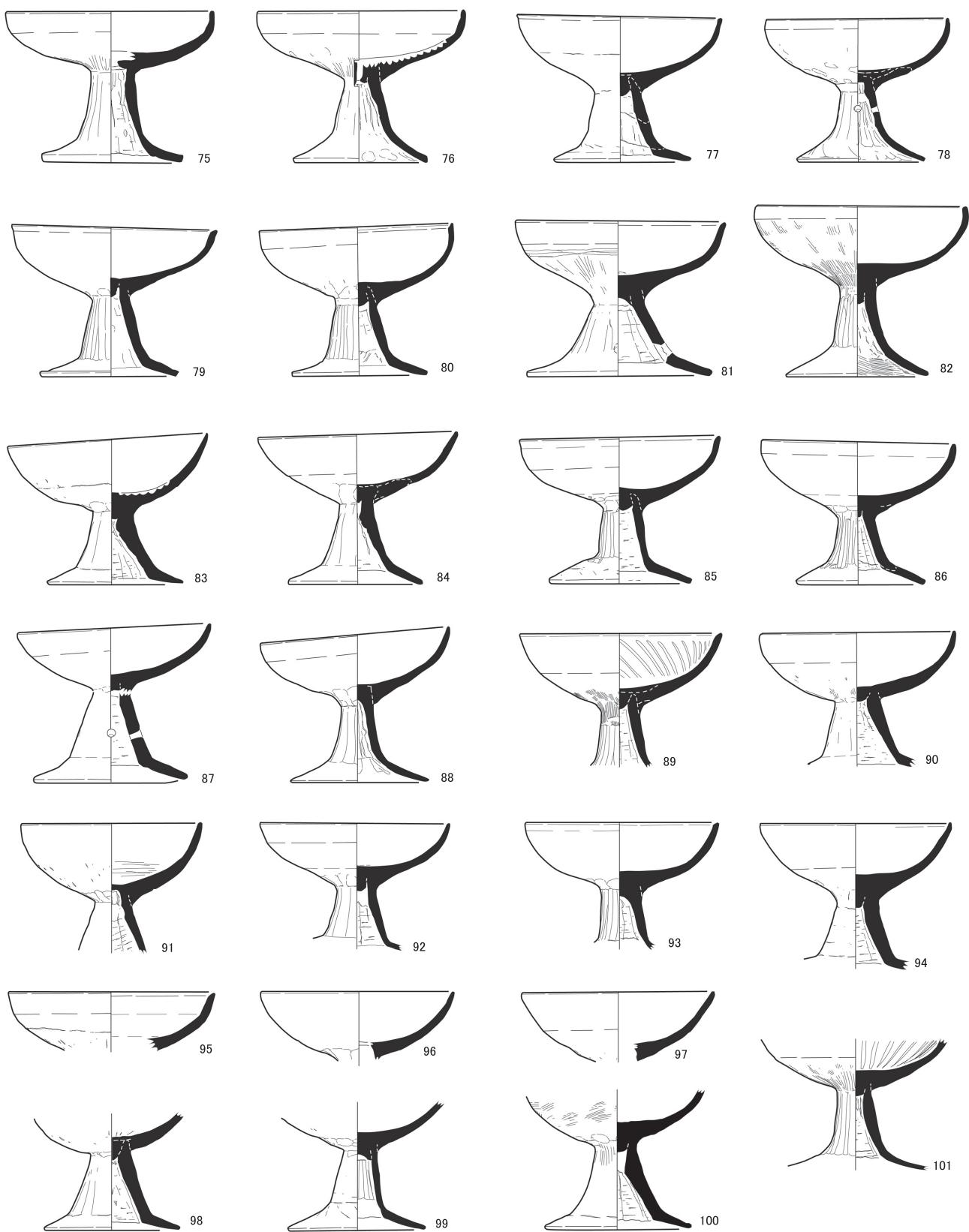


fig.41 出土遺物実測図(4) SX06出土遺物(2)
すべて土師器

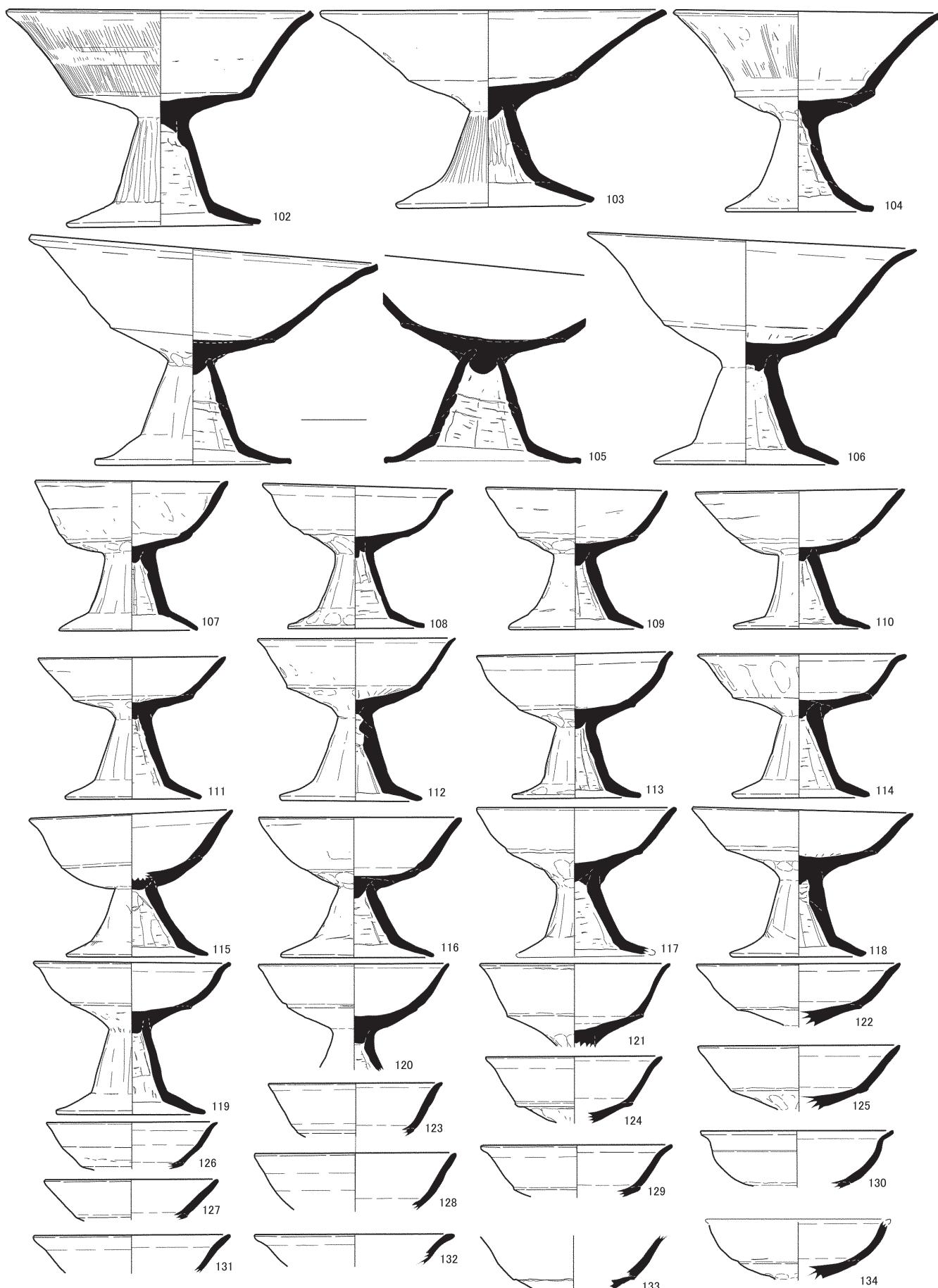


fig.42 出土遺物実測図(5) SX06出土遺物(3)
すべて土師器

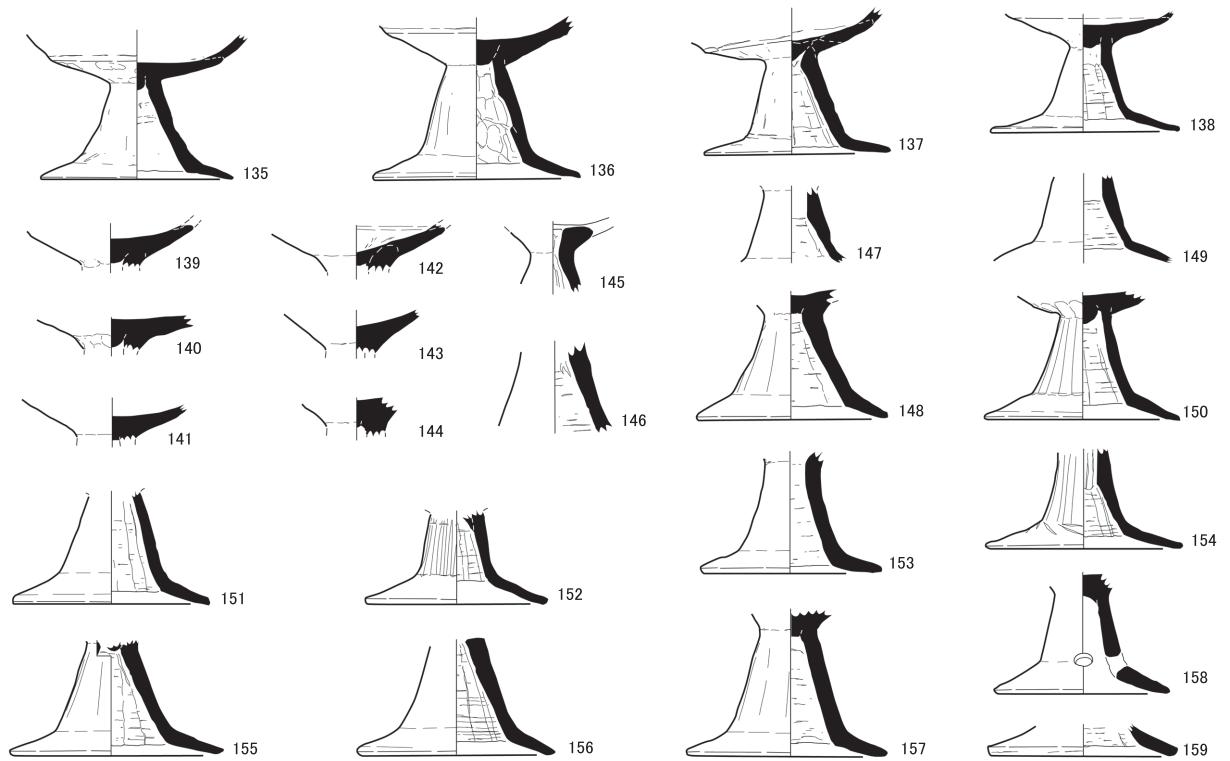


fig.43 出土遺物実測図(6) SX06出土遺物(4)
すべて土師器



fig.44 第2遺構面全景



fig.45 SX06遺物出土状況



fig.46 SX05検出状況

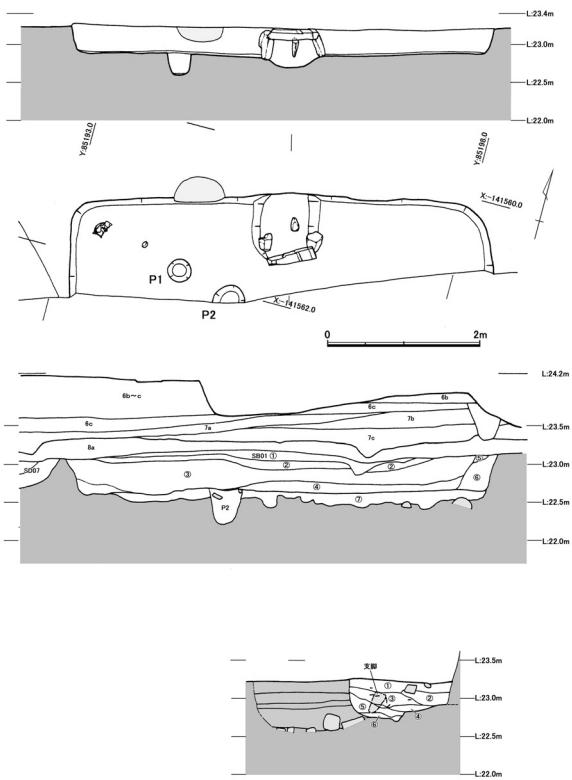


fig.47 SB01平・断面図



fig.48 SB01検出状況



fig.49 SB01竪検出状況

3. まとめ

第1遺構面では飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の遺物・遺構を確認しており、当地において人々の生活の営みがあったものと推測される。

第2遺構面では古墳および竪穴建物を確認した。9次調査・30次調査でみられたように住吉川に近い地域には古墳が存在せず、竪穴住居が確認される地域となっていることを改めて確認した。

ところで、調査区内では確認できなかったが、位置的に見て今回確認したSB01と44次-2号墳は切り合い関係、すなわち時期差をもつことが確実である。ただし両者はともに古墳時代後期の近接した時期の遺構であり、常識的にみて、古墳を壊して、あるいは古墳に隣接して竪穴建物を建てるとは考えにくく、古墳が竪穴建物よりも新しい可能性が高い。古墳の築造数が増え、墓域が居住域を侵蝕していく状況を示している可能性もある。

また、祭祀遺構を2箇所で確認できたことも特筆される調査成果である。手捏ね土器等を使用した祭祀遺構は、住吉宮町遺跡のなかではこれまで確認されていなかった。この種の土器は古墳の祭祀=喪葬儀礼には用いられず、集落内での祭祀、あるいは自然を対象とする祭祀に用いられることが多い。

SX06は表土層中、段差の斜面部分に投棄されたような状況で多量の遺物が出土している。供献用の土器である高杯が90点以上ある。滑石製白玉などは、これを含む土器も水洗途中であるが、すでに1000点を超える数が確認されている。さらに鉄刀・鉄斧・鉄錠状鉄製品・滑石製有孔円板・同勾玉などが出土しており、これらの遺物は集落内の祭祀遺構に伴うものか、古墳群への祭祀に伴うものか、今後の周辺の調査事例を待ちたい。

5. 雲井遺跡 第32次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、昭和62年に駅前再開発ビル建設に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。同年この発掘調査（第1次調査）より、その後都市改造事業や再開発ビル建設などに伴う発掘調査によって、調査を重ね当調査が32回目（第32次）の調査となる。現在遺跡の規模は、JR三ノ宮駅周辺に東西約600m・南北約500mの範囲の遺跡として周知されている。遺跡の時期と種類は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。六甲山に源を発する旧生田川によって形成された扇状地に位置する。これまでの調査で、縄文時代早期の土坑やこれに伴う土器、石器が検出され、また別の地点では弥生時代中期の周溝墓や玉作りを行っていた竪穴建物などが発見されている。

調査対象地はJR三ノ宮駅の北側約300m、フラワーロードから東へ約100mの二宮商店街に位置する箇所である。付近での既往の調査地としては、当調査地の南約100mに第20次調査地があり、縄文時代晚期の土坑、古墳時代後期の掘立柱建物などが検出され、また東約150mの第14-1次調査では平安時代後期の遺構や弥生時代中期の大型竪穴建物が検出されている。



2. 調査の概要

調査範囲は東西約13m、南北約18mの矩形と東西約5m、南北約7.5mの矩形をつけた約270m²の調査区である。前年度に現代の盛土等を重機により掘削し、それ以下を人力によって調査を開始した。掘削による残土を置くため北と南に二分割して調査を行う。北半部を1区、南半部を2区として調査を行う。前年度に北半の1区より調査に着手し、北半1区第1遺構面の調査を完了している。今年度は、北半1区第2遺構面から調査に着手し

た。ただし第6遺構面に関しては、掘削深度と土留めを配慮して土留め矢板よりおおよそ1m内側へ控えて調査を実施したため、調査面積は北半と南半とあわせて約197m²となる。

基本層序は、単純化すると上層から現代盛土層、黄橙色泥砂（中近世の堆積土）、黄色混礫泥砂（中近世の洪水砂）、黄灰色泥砂（包含層1）、褐灰色泥砂（包含層2）褐色泥砂（包含層3）、茶褐色泥砂（包含層4）、黒褐色泥砂（包含層5）、黄褐色泥砂（包含層6）となりこの下層は、黄褐色混礫砂である。それぞれの包含層を削除した面が遺構面となる。遺構面の標高は第1遺構面で16.80m、第6遺構面では15.70mとなる。遺構面は、調査区の北西（旧生田川方向）が最も高く南東に向かって下がる地形のようである。

黄橙色泥砂、黄色混礫泥砂には中近世の摩滅した遺物が含まれる。第1遺構面から第3遺構面が、中世に属する遺構面である。第4遺構面は、一部弥生時代の遺構を含む縄文時代の遺構面である。第5、6遺構面は、これに続く縄文時代の遺構面である。茶褐色泥砂（包含層4）は、0.3～0.4mの厚さがある。

第1遺構面 1区北半部の流路状遺構SD101とSD102が南半へと続く。SD101を切るSD103や土坑など（2区南半）が検出された。第1遺構面で検出された遺構は、流路状遺構2条、土坑1基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構1基、ピット1箇所またSD101は西方向に流れを変える。SD101からは、土師器片、須恵器片のほかに縁釉片、鉄釘、弥生土器片、サヌカイト片などが出土した。

第2遺構面 第2遺構面では、土坑17基、溝状遺構3条、落ち込み状遺構5基、ピット27箇所が検出された。SK201は、長径1.1m、短径0.8m、深さ0.1mの橢円形の遺構で、堆積土に多くの炭が含まれていた。遺物は土師器、須恵器が少量出土した。遺構の性格は不明である。

SK207からは、須恵器鉢片が出土した。SD202からは土師器皿、瓦器塊などが出土した。

SD201は、幅0.5～1.5m、深さ0.3mの砂礫が堆積したL字状に検出された溝状遺構で、より大きな洪水堆積の痕跡かと考えられる遺構である。SX202からは土師器片、須恵器片のほかに口縁部は欠損しているが褐釉壺が出土した。

SX206は、東西1.5m、南北1.7m、深さ0.2mの方形に検出された遺構で、SX204も東西2.6m、南北4.4m、深さ0.1mの方形に検出された遺構である。SX204はSK206に切られ調査区西端で検出された。

調査区南西では、直径1m、深さ0.2m前後の規模の土坑が10基ほど検出された。規模や検出箇所に規則性などは見られず、遺構の性格については不明である。

第3遺構面 第3遺構面では、土坑10基、溝状遺構3条、ピット51箇所が検出された。ピットの多くは、西部中央に集中して検出されたが、建物としてまとまる状況ではなかった。P322はP323を切るそれぞれ直径0.3m・深さ0.3mのピットで、一辺10cm、長さ30cmほどの花崗岩の角礫が収まっていた。遺構の性格については不明である。

SD302は調査区北端から南西部にJ字状に検出された、幅3.5～1.0m、深さ0.1mの溝状遺構である。少量の土師器、須恵器、弥生土器が出土した。

第1遺構面から第3遺構面で出土する遺物からそれほど大きな時期差はないようである。現状でおおよそ13世紀の中におさまる時期と考えられる。

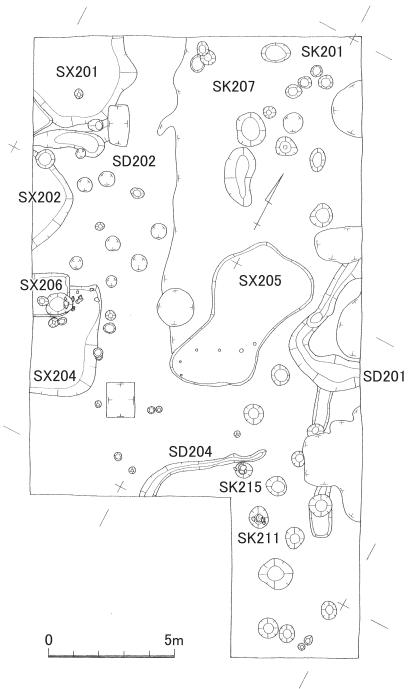


fig.51 第2遺構面平面図

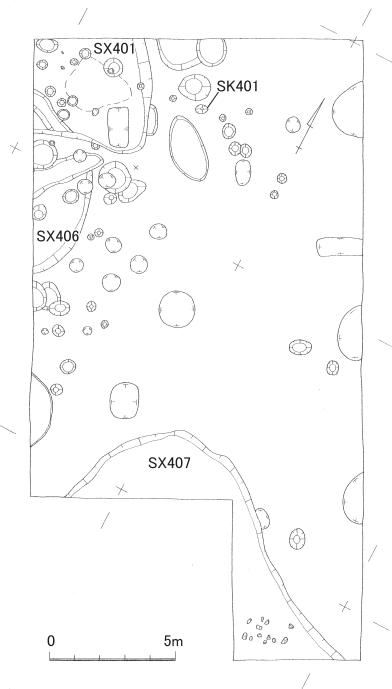


fig.52 第4遺構面平面図

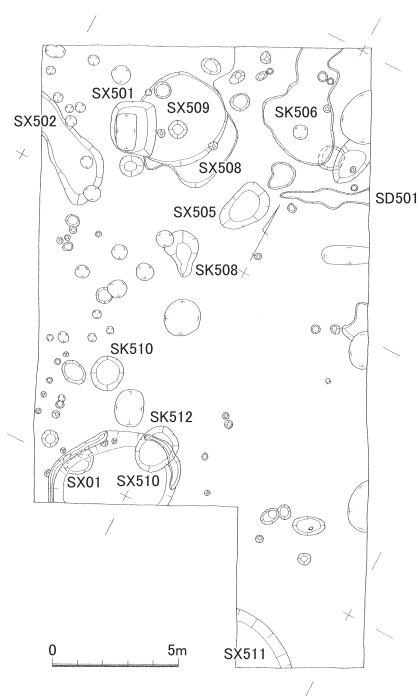


fig.53 第5遺構面平面図



fig.54 第4遺構面SX401全景



fig.55 第5遺構面全景

第4遺構面 包含層4からは、縄文土器および弥生土器、土製円板2点、サヌカイト片などが出土した。遺物出土量の多くは縄文土器が占める。また弥生土器の大半は中期に属するものようである。遺構面検出時にSX401南辺で黒曜石1片が出土した。

第4遺構面では、土坑14基、竪穴建物状遺構1基、落ち込み状遺構7基、ピット19箇所が検出された。遺構の多くは、西側で検出された。

北半で検出されたSK401は、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.2mの橢円形の土坑で、弥生時代中期後半の壺片とサヌカイト製石鏃が1点出土した。遺構のすぐ西側で、砂岩製磨石が出土している。

竪穴建物状遺構SX401は、調査区北西隅で検出された。東辺と南辺はそれぞれ4.5m、深さ0.3mで、遺構の西辺と北辺は調査区外にあるものと考えられる。遺構底面では、径0.5~0.8m前後、深さ0.2mほどの土坑3基、径0.2~0.4m前後、深さ0.1mほどのピット7箇所、深さ0.1mほどの落ち込み状遺構1基が検出された。また遺構中央には2.0m×2.0mほどの範囲に粘土質の固く締まった土がひろがる部分が検出された。遺構底面から磨石片2片やSX401-SK02上面からは、径30cm足らずの花崗岩の台石やSX401-P06やSX01からは径5cmのサヌカイト片が出土している。

南半の遺構は少なく、南にひろがると考えられる深さ0.2mのSX407からは、縄文土器とともに5cmのサヌカイト片2片や石鏃が1点出土した。SX407南端部では径20~40cmほどの花崗岩20から30個ほどの堆積がみられた。

第5遺構面 包含層5からは、縄文土器、石鏃、サヌカイト片などが出土した。遺構面検出時にはSK508の西側で石匙1点が出土した。

第5遺構面では、土坑12基、溝状遺構1条、竪穴建物状遺構2基、落ち込み状遺構9基、ピット29箇所が検出された。SX509とSX510が竪穴建物状遺構と考えられる遺構である。

北半で検出されたSX509は、直径3.8m、深さ0.2mの円形の遺構で、西端を試掘坑およびSX501に切られる。遺構底面から径0.7m、深さ0.2mほどの土坑2基、径0.2m前後、深さ0.2mほどのピット2箇所が検出された。遺構内からは縄文土器やサヌカイト片が出土した。遺構の形状などから竪穴建物状遺構と考えたが、遺構内のピットなどが柱痕と捉え難い状況である。

南半で検出されたSX510は、図上で反転すると一辺2.8mの不整形な六角形に復元される。深さ0.15mの竪穴建物状遺構と考えられる。北辺は途切れるが、東と西に幅0.3m前後、深さ0.15mの周溝が検出される。遺構の東側はSK512に切られる。西側周溝には縄文土器とともに焼土塊が検出された。周溝からは、遺構内堆積土に比べやや炭化物が多く観察された。東側周溝の一部は、SK512の下層から検出される。遺構内からやその他ピットなどからは炭化物は検出されなかった。西側周溝の下からは、東西1.2m、南北0.8m、深さ0.2mのSX510-SX01が検出された。焼土塊と縄文土器が出土した。遺構内から柱痕と捉えられるピットは検出されなかった。SX510検出時に遺構北辺で石匙1点が出土した。

第6遺構面 第6遺構面では、流路状遺構1条、土坑4基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構1基、ピット2箇所が検出された。

流路状遺構SD601は、北西方向から南東方向に流れる幅約6m、深さ0.2mの遺構であ

る。遺構底面には、土坑状の凹みが三箇所ほど検出された。遺構からは、縄文土器、石鏃、10cm角、厚さ2cmのサヌカイト片など28ℓ入りコンテナに3箱分出土した。

SD601の南側では、東西2.4m、南北3.2m、深さ0.2mのSX601やSX601に切られる直径2.0m、深さ0.15mのSK604から縄文土器やサヌカイト片が比較的多く出土した。

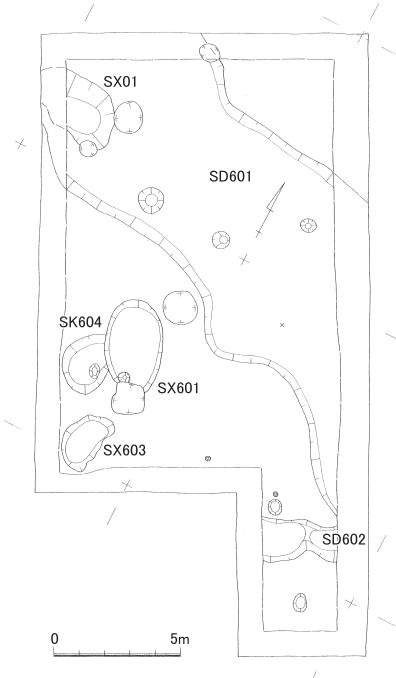


fig.56 第6遺構面平面図



fig.57 第6遺構面南半全景

古環境分析 縄文時代の古環境を分析するために現地で土壤のサンプル採取を行い、土壤分析を実施した。

3.まとめ 6面の遺構面が検出された。上層の3面は中世13世紀代、下層の3面は縄文時代中期の時期に属す。

中世の遺構に関しては、遺跡の性格を明確に示すような遺構は検出されなかったが、周辺の既往の調査より周辺に中世のこの時期に属する集落が存在することが考えられる。

基本層序の項でも触れたが、第3遺構面から第4遺構面にいたる茶褐色泥砂（包含層4）の堆積の厚さが約0.4mある。出土遺物の年代だけを捉えると単純に2000年以上の時間差が存在する。周辺調査地点の同様の資料などと比較検討することにより当調査地点を取り巻く地形環境の変化を物語る資料となる。今後の検討課題としたい。

第4遺構面から第6遺構面で出土する縄文土器について、立命館大学矢野健一氏に現地指導を得た。調査の結果、「縄文時代中期の末期、近畿地方の編年で北白川C式1期～4期におさまる資料である。近畿地方と岡山瀬戸内地方の間隙を補完する良好な資料である。」などの指導を得た。

上記のコメントを含めて、今回検出された縄文時代の遺構は、遺物より縄文時代中期末頃、おおよそ4000年前であろうことが判明した。出土遺物量や検出された遺構などから、比較的定住性の高い集落が営まれていたことも判明した。

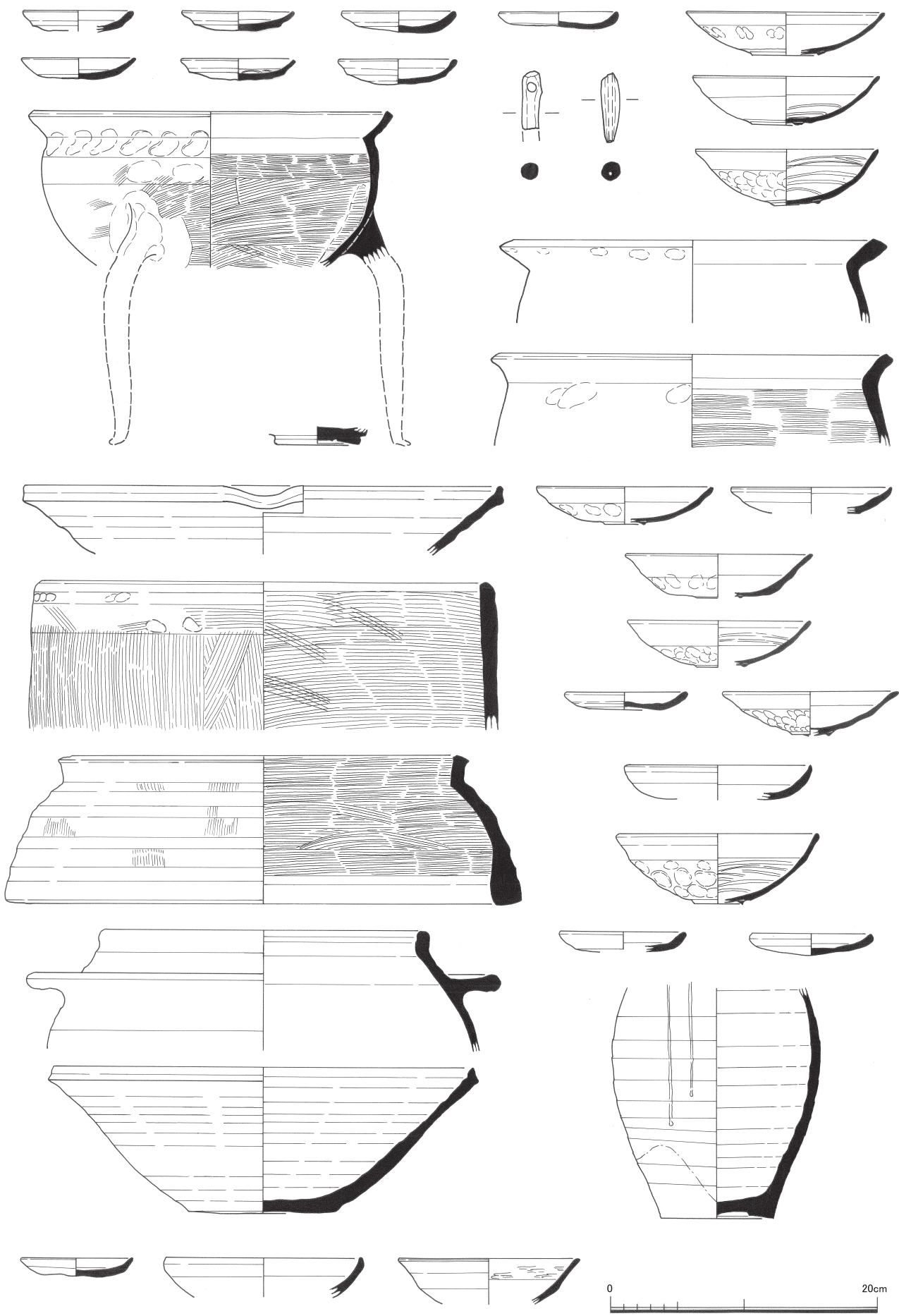


fig.58 包含層4出土遺物実測図

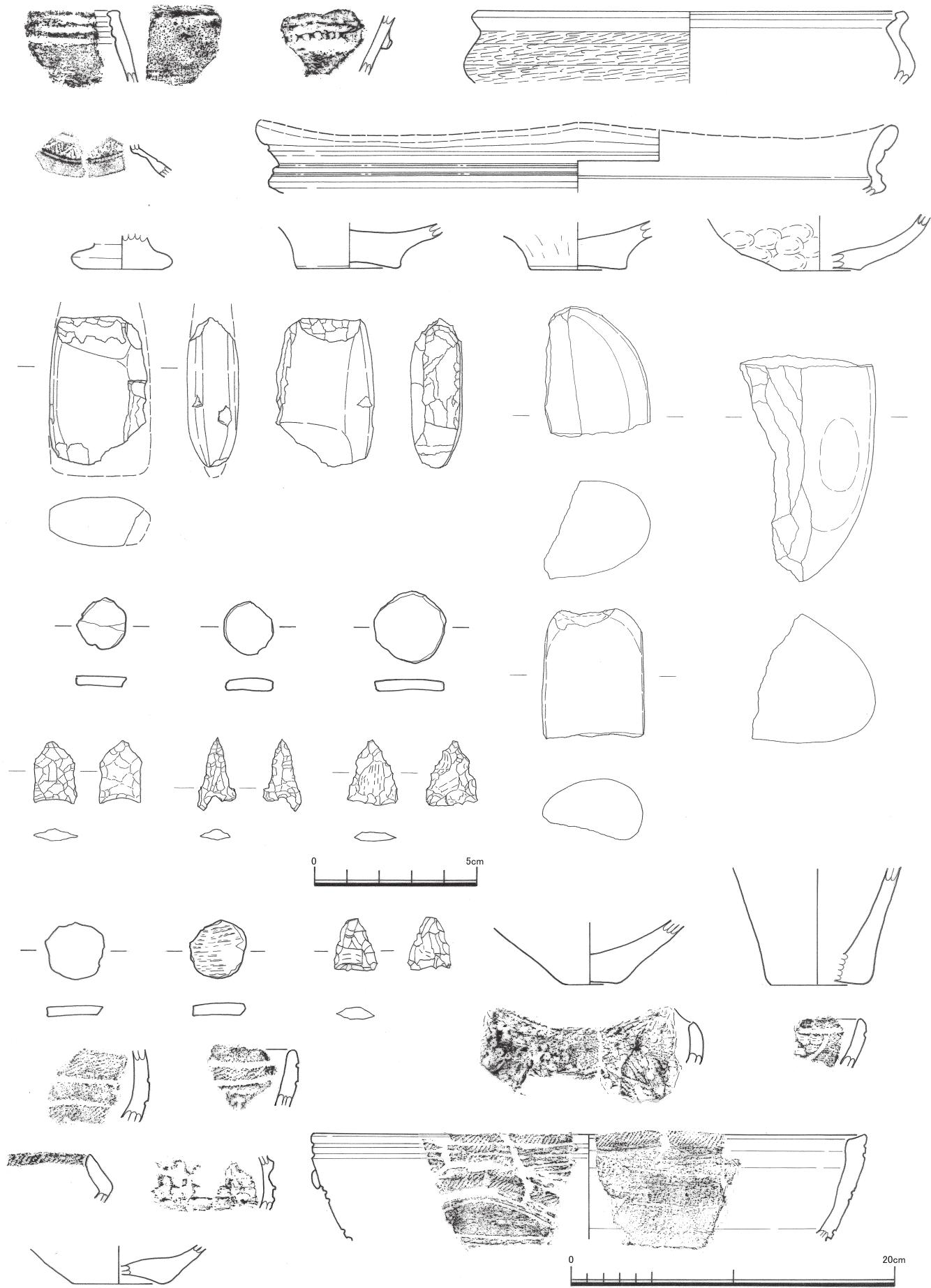


fig.59 第4遺構面遺構内出土遺物実測図① (SK401、SX401)

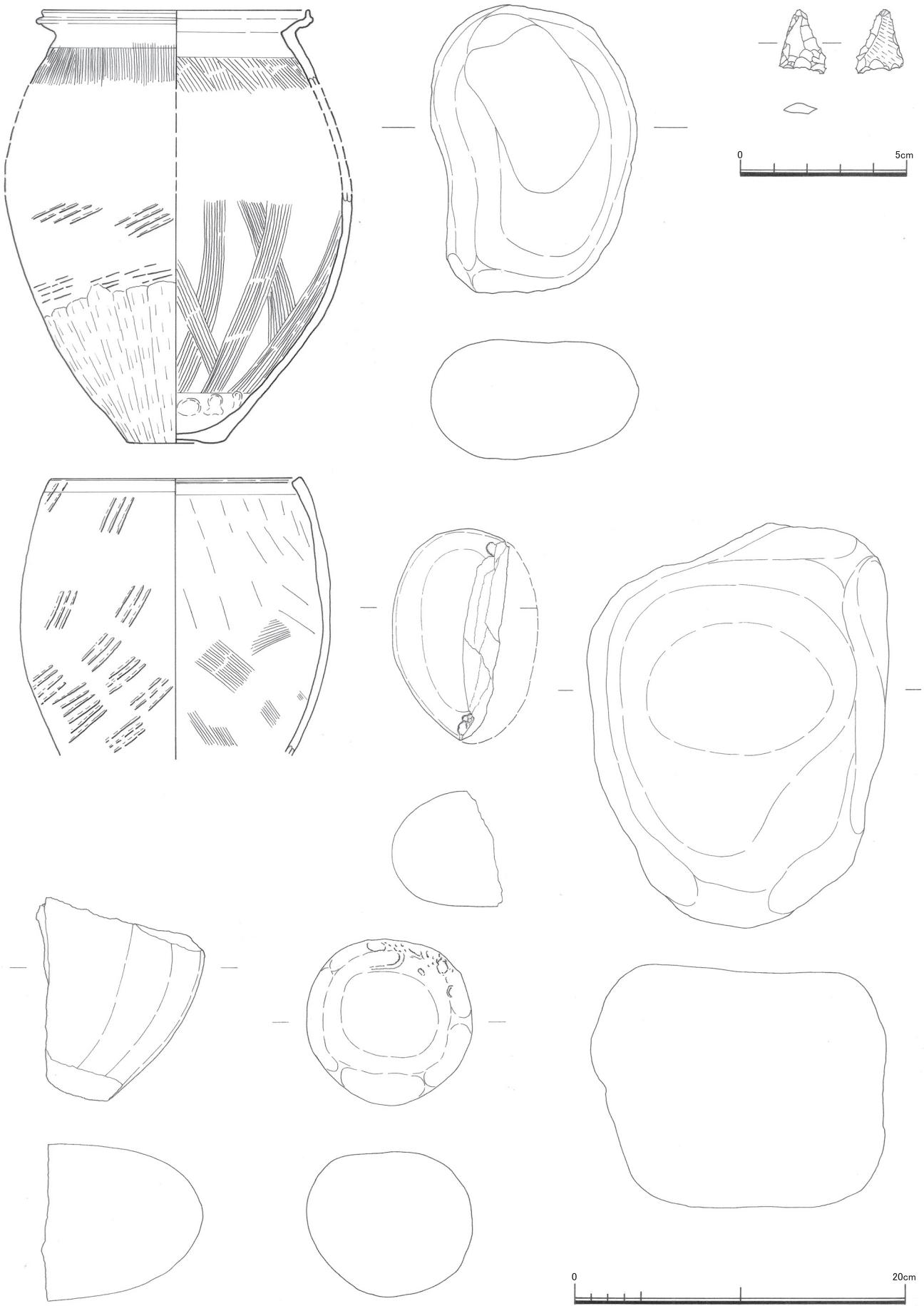


fig.60 第4遺構面遺構内出土遺物実測図② (SX401)

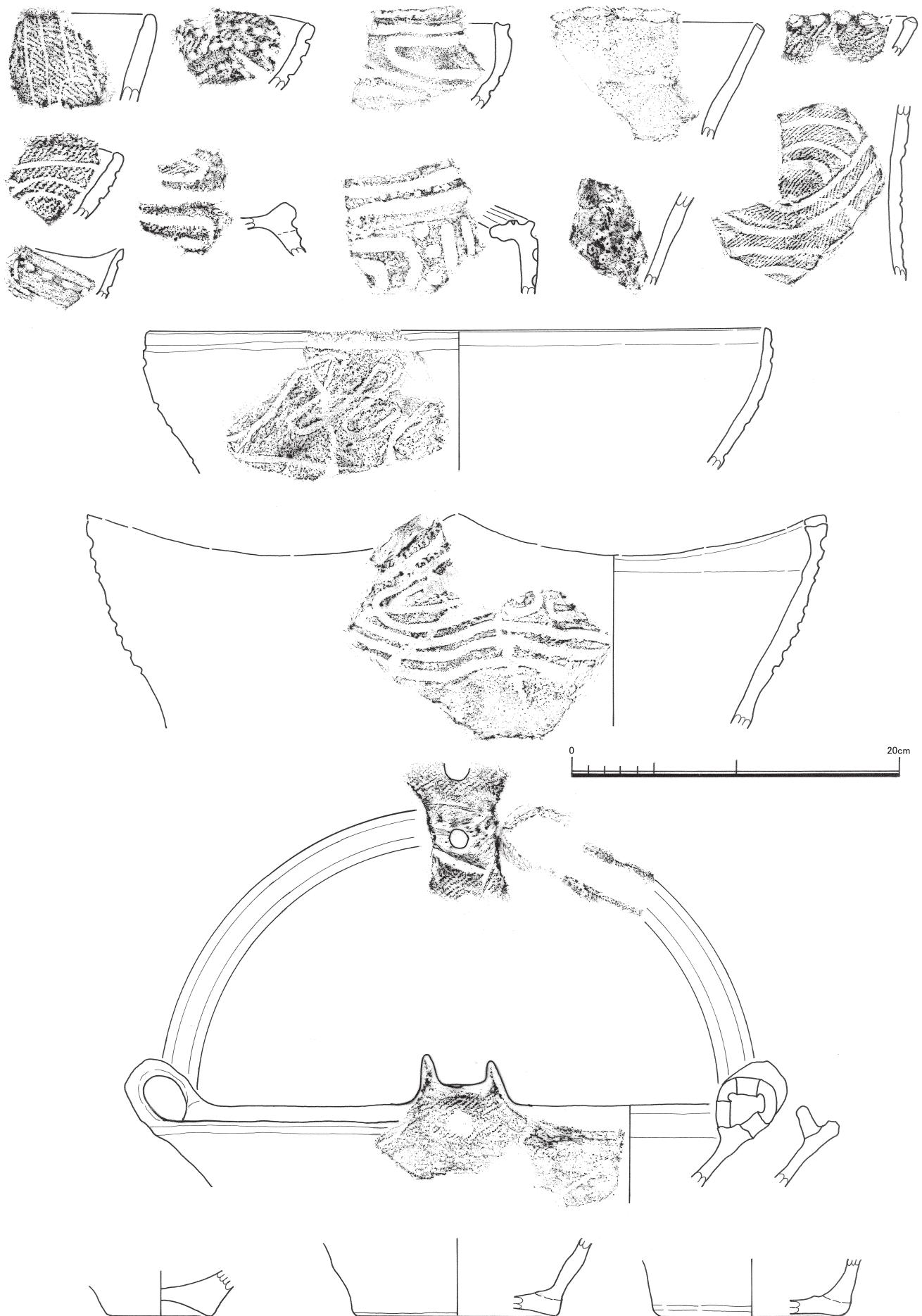


fig.61 包含層5出土遺物実測図



fig.62 第5遺構面遺構内出土遺物実測図① (SX502)

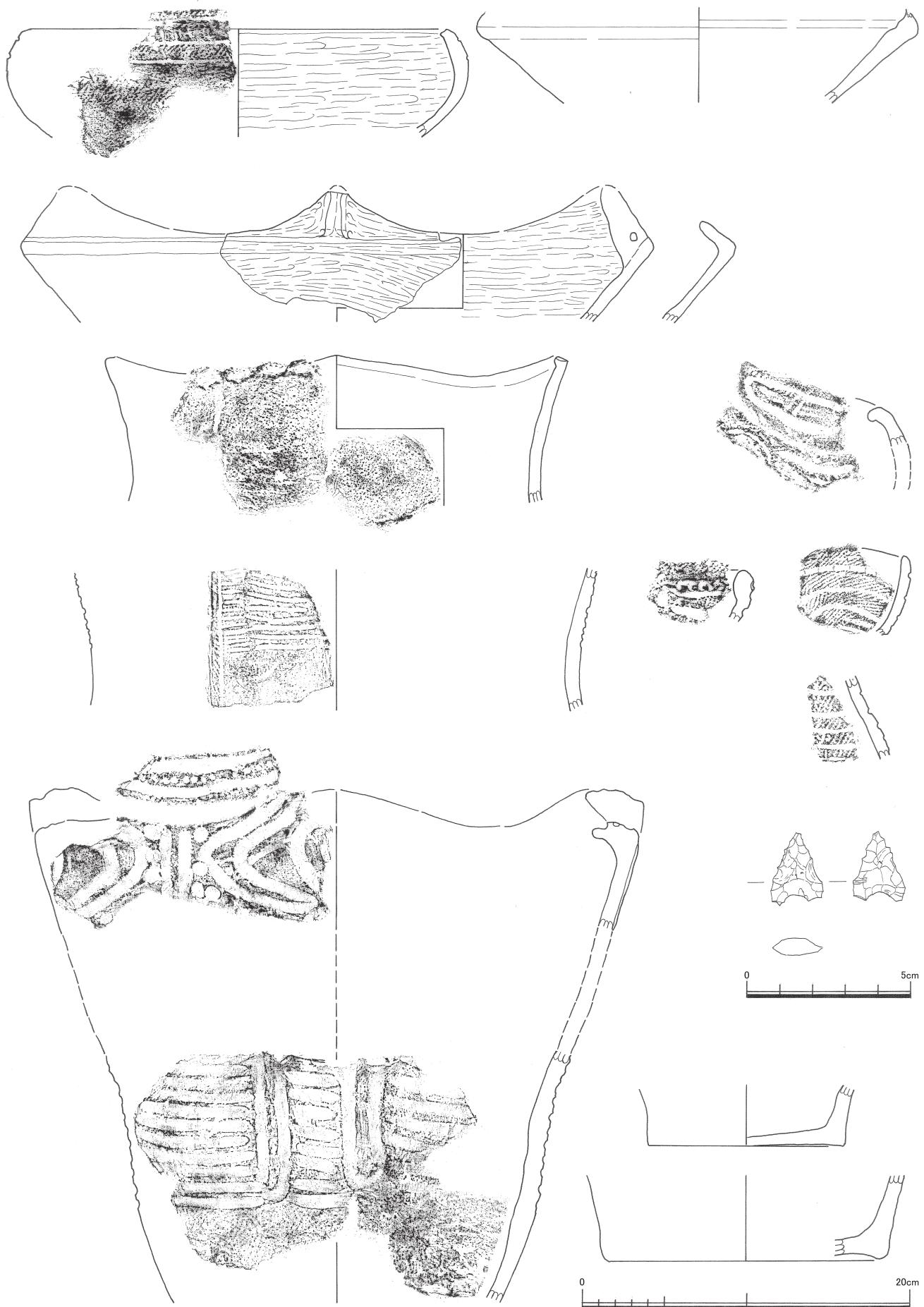


fig.63 第5遺構面遺構内出土遺物実測図② (SK502・504・507・508・512、SX501・503・504・505、P534)



fig.64 第5遺構面遺構内出土遺物実測図③ (SX508・509)

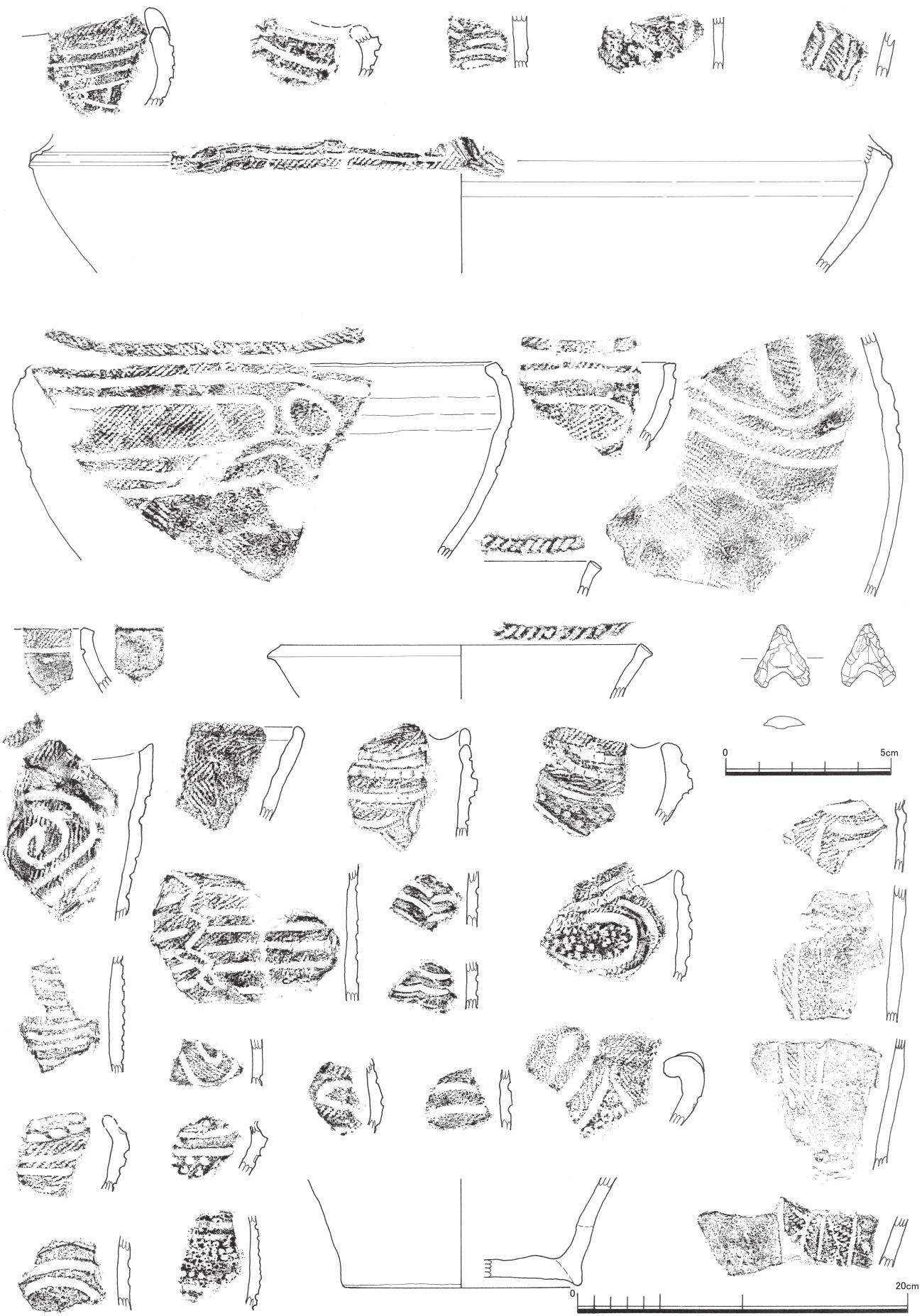


fig.65 第5遺構面遺構内出土遺物実測図④ (SX510)



fig.66 包含層6 出土遺物実測図

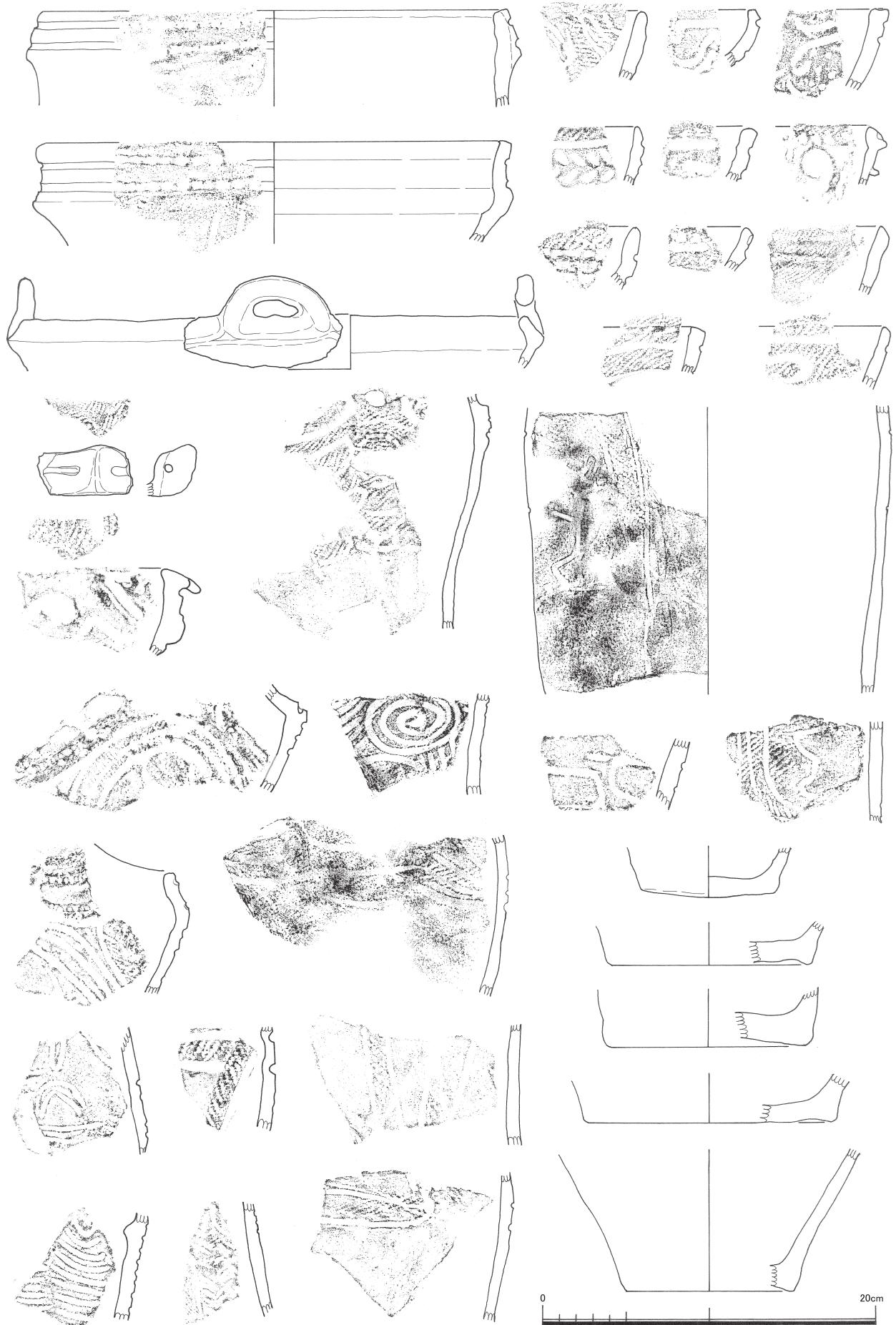


fig.67 第6遺構面遺構内出土遺物実測図① (SD602、SK601・603・604、SX601)

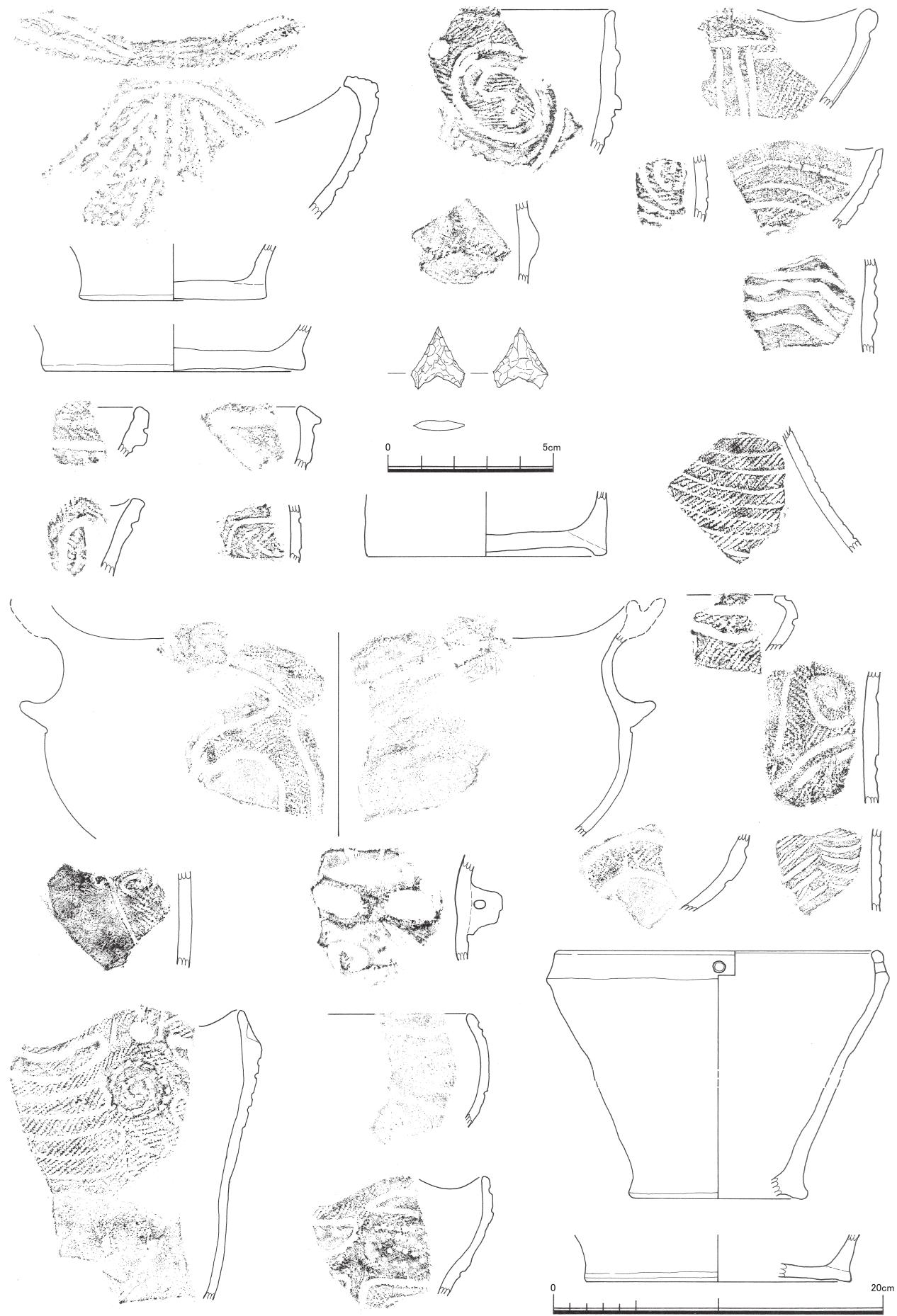


fig.68 第6遺構面遺構内出土遺物実測図② (SD601①)



fig.69 第6遺構面遺構内出土遺物実測図③ (SD601②)



fig.70 第6遺構面遺構内出土遺物実測図④ (SD601③)

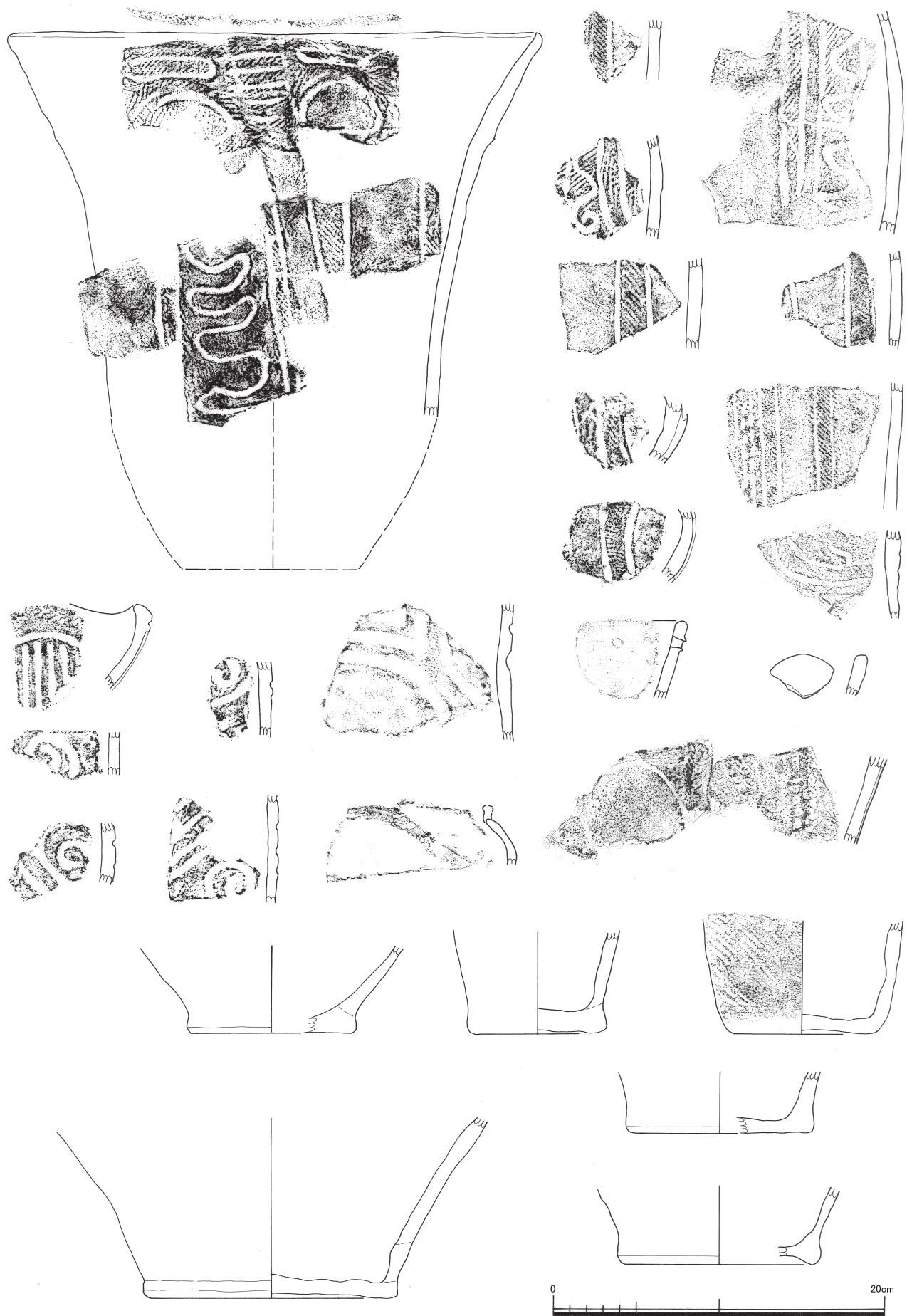


fig.71 第6遺構面遺構内出土遺物実測図⑤ (SD601④)



fig.72 第6遺構面遺構内出土遺物実測図⑥ (SD601⑤)

雲井遺跡の花粉分析

1. はじめに

兵庫県神戸市中央区琴ノ緒町に位置する雲井遺跡で第32次発掘調査が行われた。この調査で縄文時代中期の遺物が出土し、当時の古植生を調べるために花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析結果とその考察について記す。

2. 試料と方法

分析試料は調査区中央東西断面に露出した土層から2つのブロック片が採取された。このブロック片は4つの層からなり（上位からSX204、SD302、SD303、P342）、2つを合わせておよそ50cmの厚さがある。花粉分析に供した試料は上位から黒褐色泥質砂（標高15.97m）、細礫混じり黒褐色泥質砂（標高15.91m）、オリーブ褐色泥質砂（標高15.7m）、細礫混じりの黒褐色泥質砂（標高15.62m）の4つ（上位から試料No.1～4）である。これらの試料から次の手順で花粉化石を抽出した。

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え10分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。

3. 結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉3、草本花粉2、形態分類を含むシダ植物胞子1の総計6である。これらの花粉・胞子の一覧表を表11に示した。今回はプレパラート全面を検鏡しても樹木花粉数が200個に届かず、ほとんど花粉化石が保存されていなかった。そのため分布図は示していない。また、各試料のプレパラートを検鏡すると微粒炭を多く含む試料があった。

4. 考察

今回の試料には花粉化石がほとんど保存されていなかった。一般的に花粉粒の大きさは直径0.02mm～0.06mmの範囲に入るものが多く、泥の大きさとほぼ同じである。よって、植物から散布された花粉は陸域や水域に落下した場合、泥などの細粒な粒子と同じような挙動を示すと思われる。今回分析した試料は泥質な部分もあるものの砂を主体とした粗粒堆積物であり、砂粒と花粉は堆積環境における挙動が異なるため、砂を主体とする試料には花粉化石がとどまりにくいものと思われる。今回分析した試料にはヤナギ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属、タンポポ亜科、イネ科などの僅かな産出が見られるが、極端に数が少ないと、この結果から当時の植生について述べることはできない。

表11 産出花粉化石一覧表

学 名	和 名	試料番号			
		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4
樹木					
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	—	—	—
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属 コナラ亜属	2	1	—	—
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	—	1	—	—
草本					
Gramineae	イネ科	—	1	—	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	1	—	—	—
シダ植物					
Monolete type spore	单条型胞子	—	1	—	—
Arboreal pollen	樹木花粉	3	2	—	—
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	1	—	—
Spores	シダ植物胞子	0	1	—	1
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	4	4	—	1
Unknown pollen	不明花粉	—	—	—	2

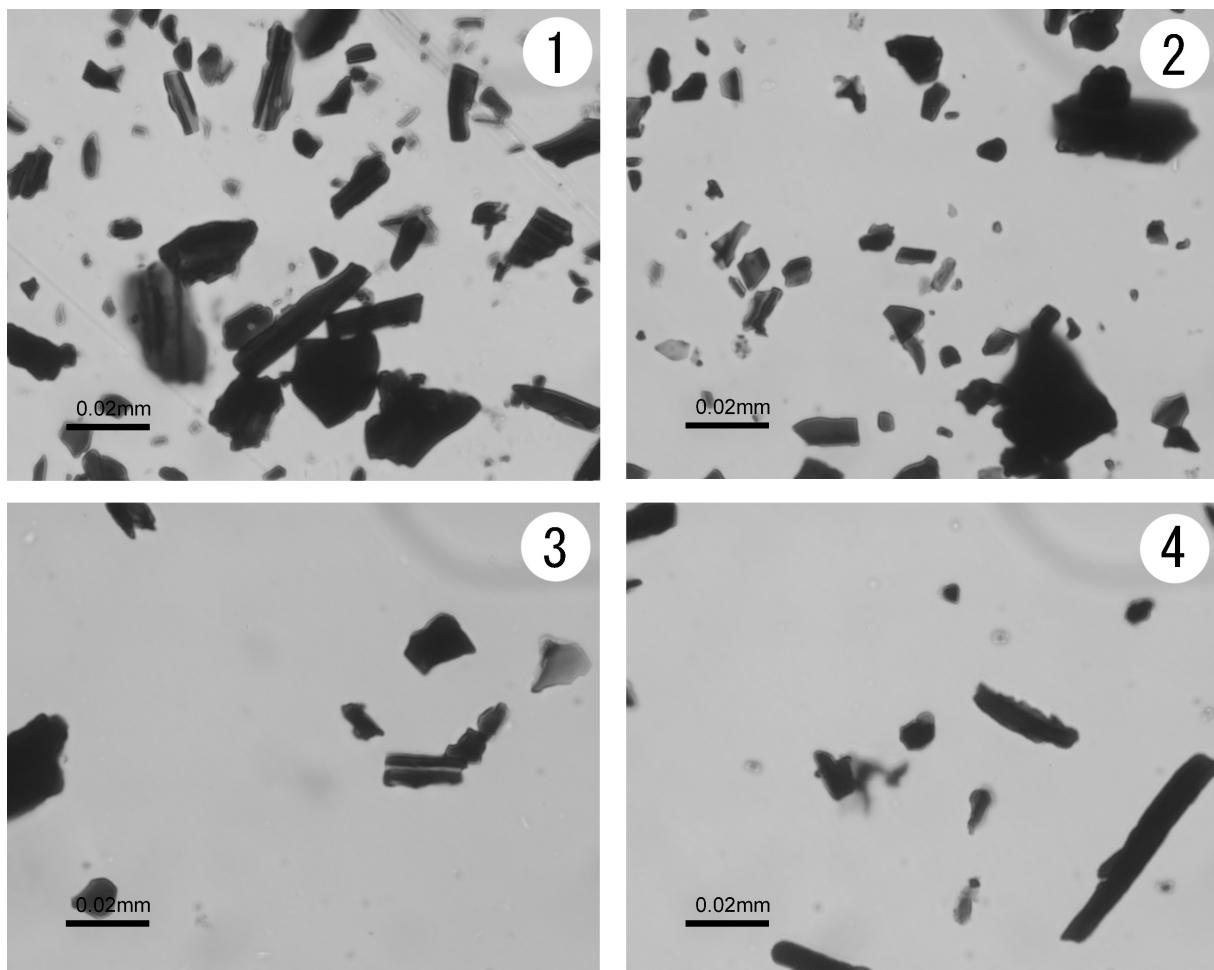


fig.73 花粉分析用土層断面採取試料プレバラートの状況

1. 試料No. 1 2. 試料No. 2 3. 試料No. 3 4. 試料No. 4

6. 雲井遺跡 第33次調査

1. はじめに

雲井遺跡の範囲内での再開発事業となるため、昭和63年10月と平成15年10月に埋蔵文化財試掘調査を実施した。その結果、弥生時代～中世の遺物が確認され、平成20年9月より7,082m²を対象に雲井遺跡第28次発掘調査が実施された。今回の調査は、同じ街区内で取り残されていた地区について、既存建物の解体後、発掘調査を開始することとなった。事業地周辺はすでに第28次調査の終了に伴い建設工事が開始されており、調査範囲の周囲5mを残して、掘削工事が行われると同時に発掘調査を行った。

2. 調査の概要

第28次調査を補完する調査となった。第28次調査の調査結果で明らかになっていたように、旭通4丁目街区のほぼ中央を南北に流れる大きな流路をはさんで、西と東とでは土地利用の変遷が異なっていた。今回の調査においても、西側の縄文時代早期から連綿と続く遺構面とは違い、後世の削平や攪乱もありまつて、第1遺構面は弥生時代後期末～古墳時代前期、第2遺構面は弥生時代中期、第3遺構面は弥生時代前期末～弥生時代中期前半の3面の遺構面が検出された。それぞれの遺構面では、第28次調査で検出していた遺構の続きや同様に群を形成する遺構を検出した。

なお、第28次調査については平成21年度に『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』を刊行し、また本調査については平成22年度に『雲井遺跡第33次発掘調査報告書』を刊行している。詳細については参考されたい。

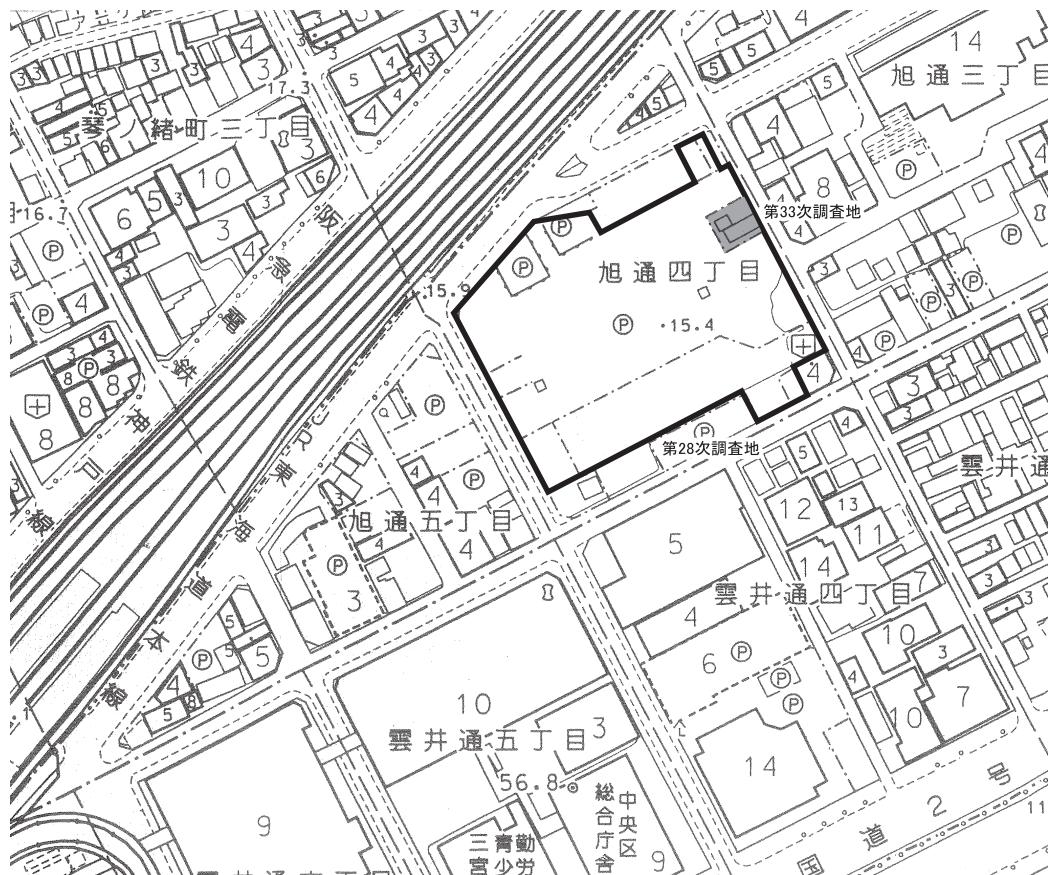


fig.74 調査地位置図
S=1:2,500

以下、調査の成果については、それぞれの遺構面での第28次調査検出遺構とのつながりを確認してまとめとする。

- 第1遺構面** 第28次調査の4区SB301の東半分にあたる方形の竪穴住居が検出できた。今回の調査で建物の規模が南北5.3m、東西4.2mの南北方向に長い長方形の建物と判明した。柱は4本柱で、建物の形状を反映して南北方向の柱間が長く、東西方向は短い。出土遺物はあまり多くはないが、碧玉製の破碎品や結晶片岩の石鋸が出土している。
- 第2遺構面** 当該地区の集落として中心をなす遺構面である。竪穴建物は第28次調査の続きで検出されたもの2棟に加え、新たに検出した1棟の合計3棟が検出された。
- SB201は調査区の南東隅で検出した。北端部が地下施設に攪乱されており、東は調査区の境となっているため、規模を確定する周壁溝が検出できていないため正確な規模や形状は不明である。西半分で検出できた周壁溝から推定すると、長径5.1m以上×短径5.0m以上の東西に長い楕円形もしくは多角形が考えられる。検出面からの深さ0.1~0.15mを測る。建物内で検出した遺構は西側で幅20cm、床面からの深さ10cmの周壁溝と、直径約0.3mの柱穴を6ヶ所で検出している。柱が6本であることと、周壁溝に緩い屈曲が2箇所存在することから、建物の平面形としては六角形の可能性がある。建物の中央では長径1.4m×短径1.1mの楕円形の中央土坑を検出した。深さは床面から0.2mを測る。
- SB202は第28次調査の4区SB502の東半分である。今回の調査で東西方向の規模が判明した。第28次調査の4区SB502の南端で東西方向の溝である4区SR403が検出されていた。今回、建物の東半分を検出する際にこの溝に続きを検出すべく精査を行ったが、検出することはできなかった。出土遺物としては玉作り関連の遺物が多く出土しており、建物規模が小さいことからも工房としての機能が考えられる。
- SB203では、焼土坑が検出されており、工房的な用途も考えられたため、埋土を篩いにかけて、詳細に遺物の検出作業を行ったが、金属屑や玉作りに関連するようなものは出土せず、僅かにサヌカイトの剥片が出土したのみである。このような建物内で検出した焼土坑は第28次調査でも複数検出したものである。焼土坑と記載したが、床面から掘り込んだものではなく、建物床面とほぼ同一レベルで炉床となる小型の炉のようなものが想定される。よって、何らかの上部構造があったものと考えられるが、炉壁など、その存在を想起されるものは今回の調査においても検出することはできなかった。
- 第3遺構面** SD201は第28次調査4区SR401の続きである。規模としては小さな流れのものであるが、遺構の底の立ち上がりは急激な流れによって抉り取られたように見られることから、大雨などの一過性の流れによって形成された「自然流路」として、第28次調査ではSRの遺構名をつけた経緯がある。今回も同様の抉りが見られるが、全体の流路の方向とは明らかに方向が違う。第28次調査4区SR401・第33次調査SD201の方向は座標軸の東西方向であり、その他の流路は座標軸の南北方向を流れている。地形から考えても南北に流れることが自然であることから、人為的に掘削された「溝」が一過性の急激な流水により抉りが生じたものと考えられる。

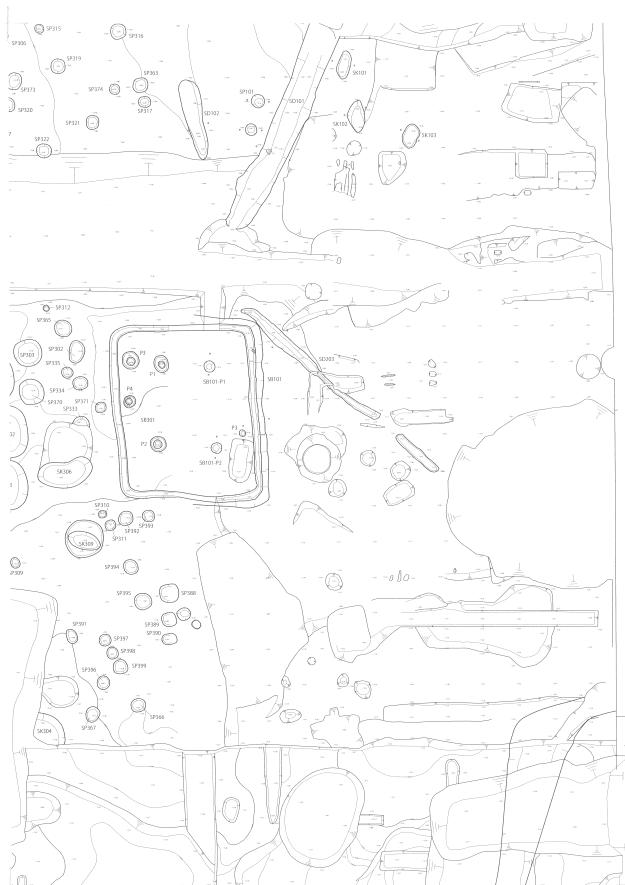


fig.75 第1遺構面平面図



fig.76 第1遺構面全景



fig.77 SB201全景

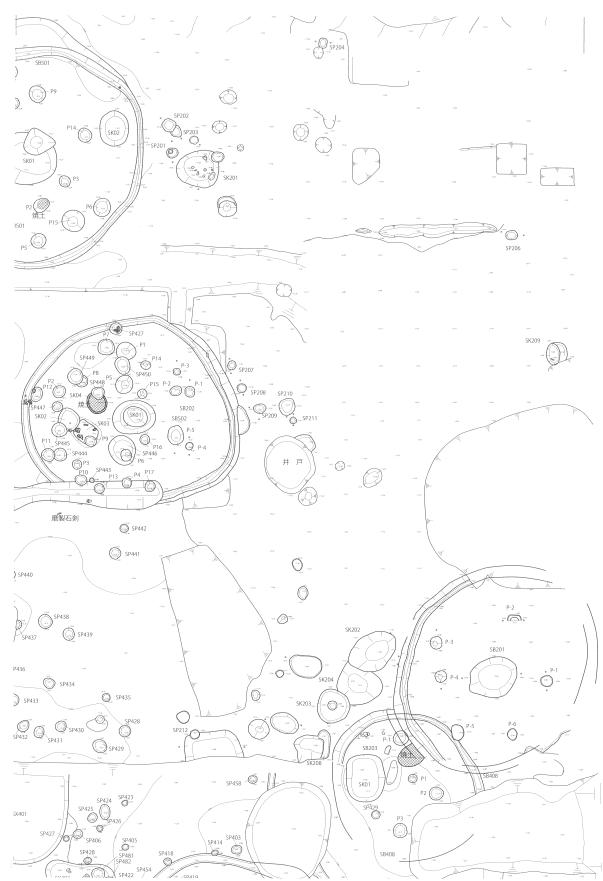


fig.78 第2遺構面平面図



fig.79 SB202全景



fig.80 SB203全景

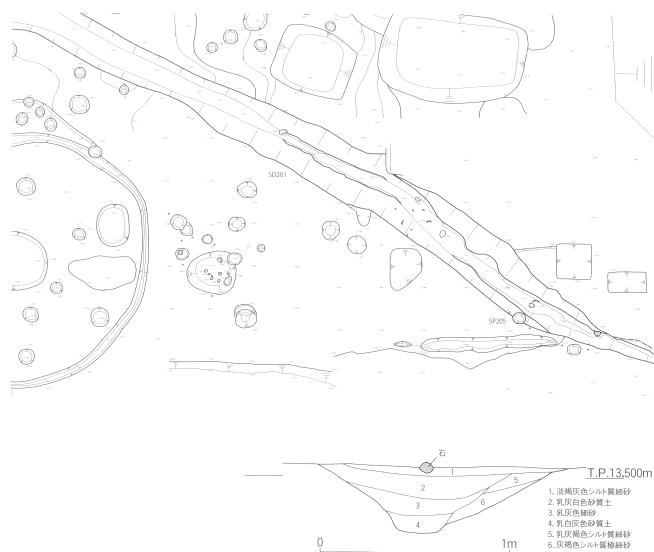


fig.81 SD201平・断面図



fig.82 SD201全景

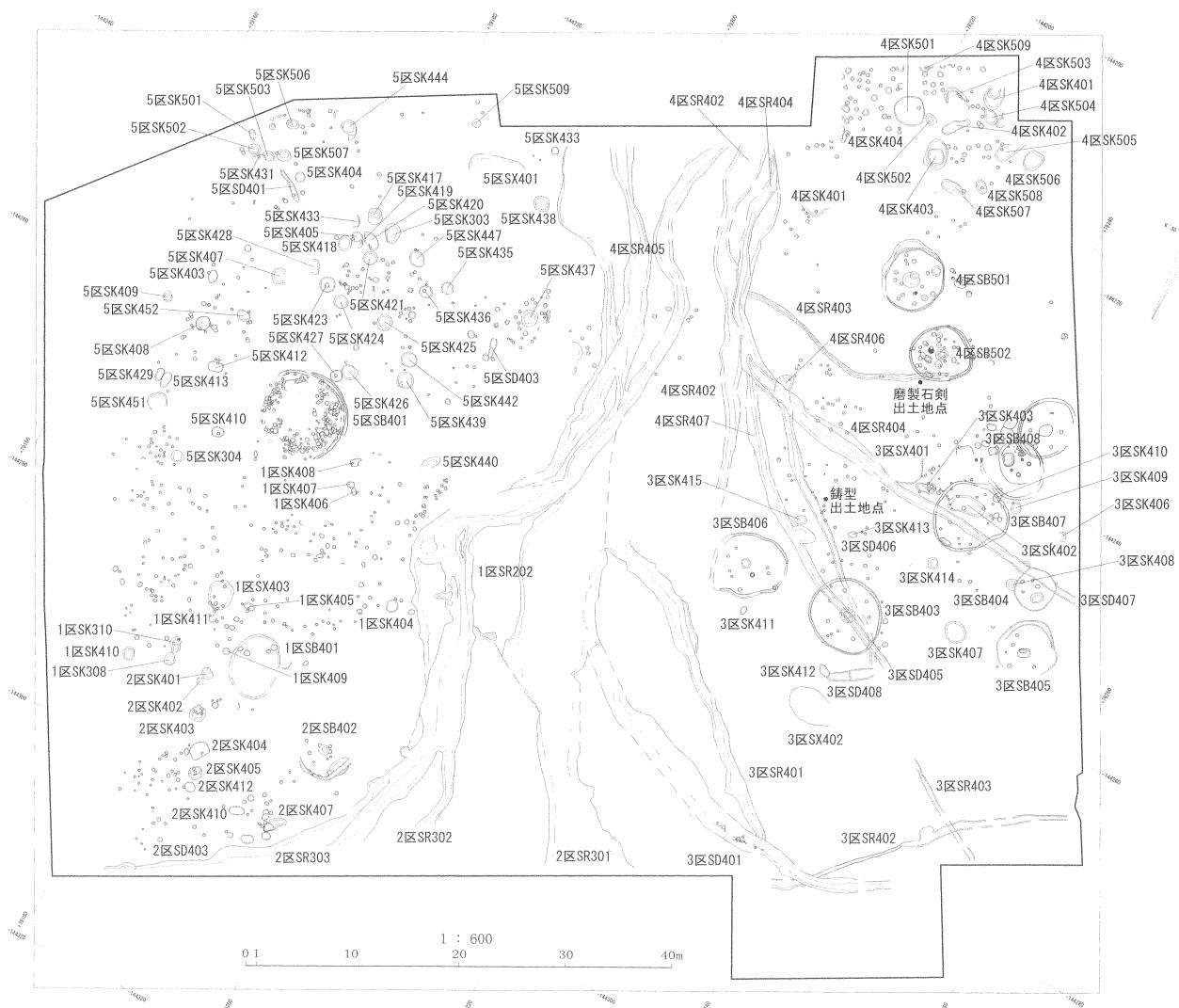


fig.83 第28次・第33次調査区全体平面図

7. 生田遺跡 第7次調査

1. はじめに

生田遺跡は六甲山系南麓の扇状地上に位置し、昭和62年度以来、6次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。特に、第4次調査（平成17年度）においては、縄文時代中期～後期末の遺構・遺物が数多く検出され、土偶やヒスイ製小玉などの特殊な遺物も確認されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査対象地内（敷地内）の遺構面の遺存する箇所において実施し、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出された。

2. 調査の概要

調査対象地内は建物基礎等により著しく攪乱されているため、敷地内の中央やや西寄り部分のみで遺構面が確認された。便宜上、東側より1区、2区、3区とし、調査を進めた。

fig.84 調査地位置図
S = 1 : 2,500



基本層序

箇所によって若干異なるが、現地表面より-0.1～1.4mは盛土および攪乱土が存在し、その下層が、上層より整地層、旧耕土層、遺物包含層の順で存在する。遺物包含層は攪乱により削平をうけているものの、0.1～0.2m程度の層厚で存在する。遺構面までの深度は、現地表面より-0.4～1.5mを測り、箇所によって盛土の層厚によって大きく異なる。遺構面の標高は18.4～19.2mである。

遺物包含層は攪乱を受けている箇所以外においては、ほぼ調査区全域に存在し、2区に関しては南半のSX01・02の上面において暗褐色粘砂土が存在し、飛鳥～奈良時代の遺物が多く含まれている。

遺構	ピット、溝、土坑、落ち込みなどの遺構が検出された。これらの遺構は弥生時代中期～奈良時代のものと考えられ、1・2区では、古墳～奈良時代、3区では、弥生時代中期に属するものが多い。
ピット	径0.2～0.8m、深さ0.1～0.6mを測り、大小さまざま存在する。しかしながら、限られた調査区域であることから、建物としてのまとまりは確認できなかった。また、3区には柱抜取り後に土器片を投入したもの（SP12・13）も存在する。これらは、概ね弥生時代中期中葉後半（畿内第Ⅲ様式新段階）前後に属すると考えられる。その他については詳細な時期は不明であるものの、3区で検出されたものは、その多くが弥生時代中期に、また1・2区で検出されたものは、その多くが古墳時代後期～古代に属するもの推察される。
溝	5条（SD01～05）検出されたが、いずれも小規模で、幅0.3～0.7m、深さ0.1～0.15mを測る。3区において検出されたSD04・05については、弥生時代中期中葉後半（畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式初頭）に属すると考えられるが、1区のSD01～03については須恵器が出土しているものの時期が不詳で、古墳時代後期～古代の範疇としか比定できない。
土坑	大小3基（SK01～03）検出されたが、いずれも全体の形状、規模が把握できない。規模が最大と考えられるものはSK01で、深さ約0.5mを測る。出土遺物からSK02は奈良時代、SK03は弥生時代中期に属すると考えられるが、SK01については不明である。
落ち込み	2箇所（SX01・02）検出された。SX01は1区南端より2区にかけて存在し、SX02はその西側に存在する。いずれも溝状の落ち込みと推測されるが、南側肩部が検出できなかたため詳細は不明である。仮に溝状遺構とした場合、幅2mを超える規模の大きいものと考えられ、検出箇所の最大深度は検出面より-0.7～-0.8mを測る。いずれも埋土上層より、古墳時代中期～奈良時代、埋土下層より古墳時代中期に属する土器片が出土した。また、SX01より木製品類が数点（曲物底板1点、杭1点、板材3点ほか）確認されている。
出土遺物	時期の明確なものとしては、弥生時代中期～奈良時代後期に属する遺物が確認されている。土器類が大半であるが、石製品や木製品類も確認されている。
	弥生時代の遺物は、特に3区の遺構内および遺物包含層からの出土が多い。確認できる器種としては壺、甕、鉢であるが、壺、甕が多く、壺も口縁部に加飾のある広口壺が目に付く。これらは概ね弥生時代中期中葉後半（畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式初頭）に属すると考えられる。
	古墳時代後期～奈良時代の遺物は、数量的にはSX01・02および1・2区の包含層からの出土が多い。土師器壺・甕、須恵器壺・高壺・提瓶・横瓶などが確認されている。時期的には6世紀中葉～8世紀後半の範疇と考えられる。
3. まとめ	今回の調査においては、大きく3時期〔弥生時代中期中葉後半（畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式初頭）・古墳時代後期～飛鳥時代（6世紀中葉～7世紀中葉）・奈良時代（8世紀代）〕の遺構・遺物が確認された。いずれも、西側に近接する第4次調査において検出された遺構・遺物に類するものが多く、さらなる集落の広がりと様相を確認するに至った。出土遺物に関してはSX01の須恵器提瓶・横瓶をはじめ、SX02の綠釉陶器片など、やや特殊なものも確認されており、遺構、あるいは集落の性格を検証する上で、重要な資料となり得ると考えられる。

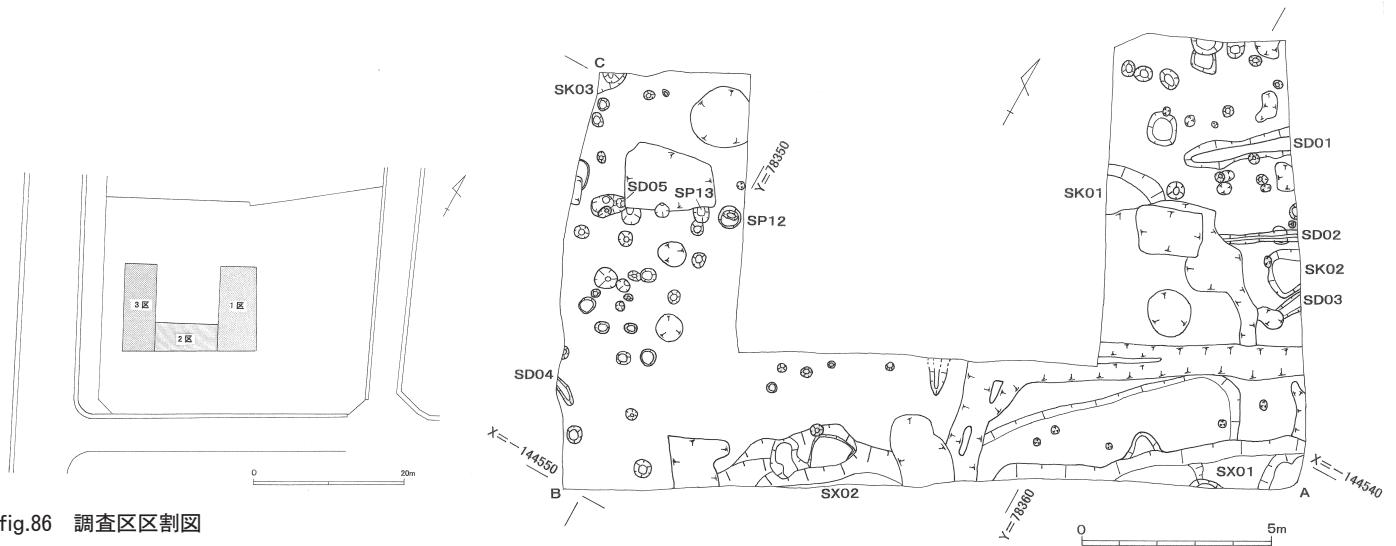


fig.86 調査区区割図

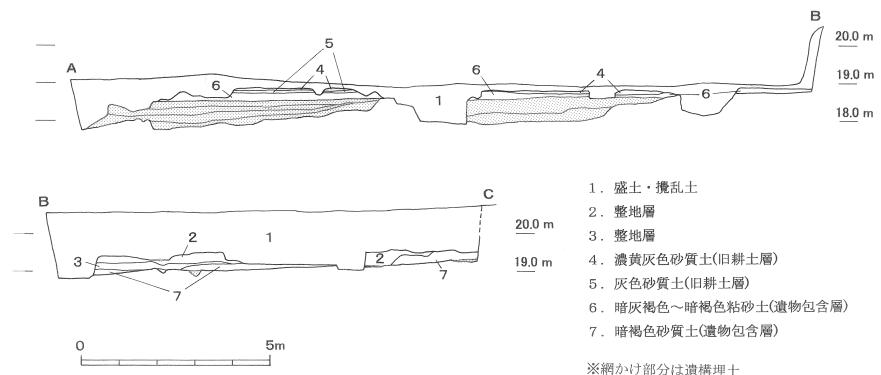


fig.85 調査区平・断面図

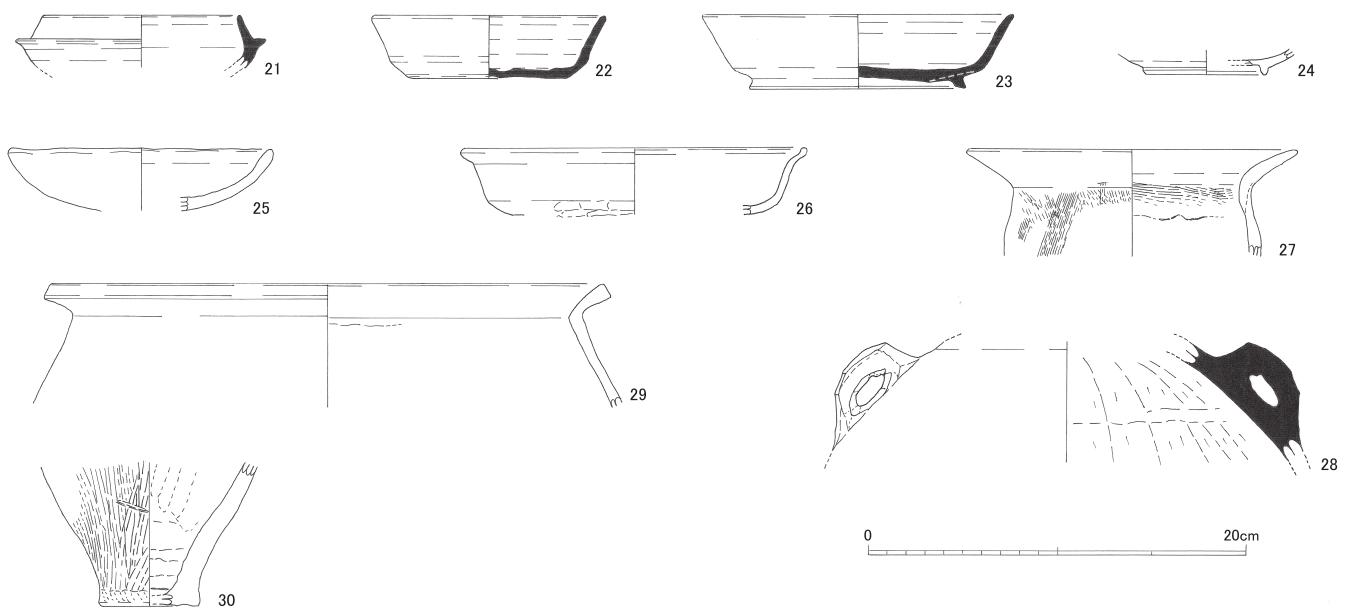


fig.87 SX02出土遺物実測図

21～23・28：須恵器 24：緑釉陶器 25～27：土師器 29・30：弥生土器

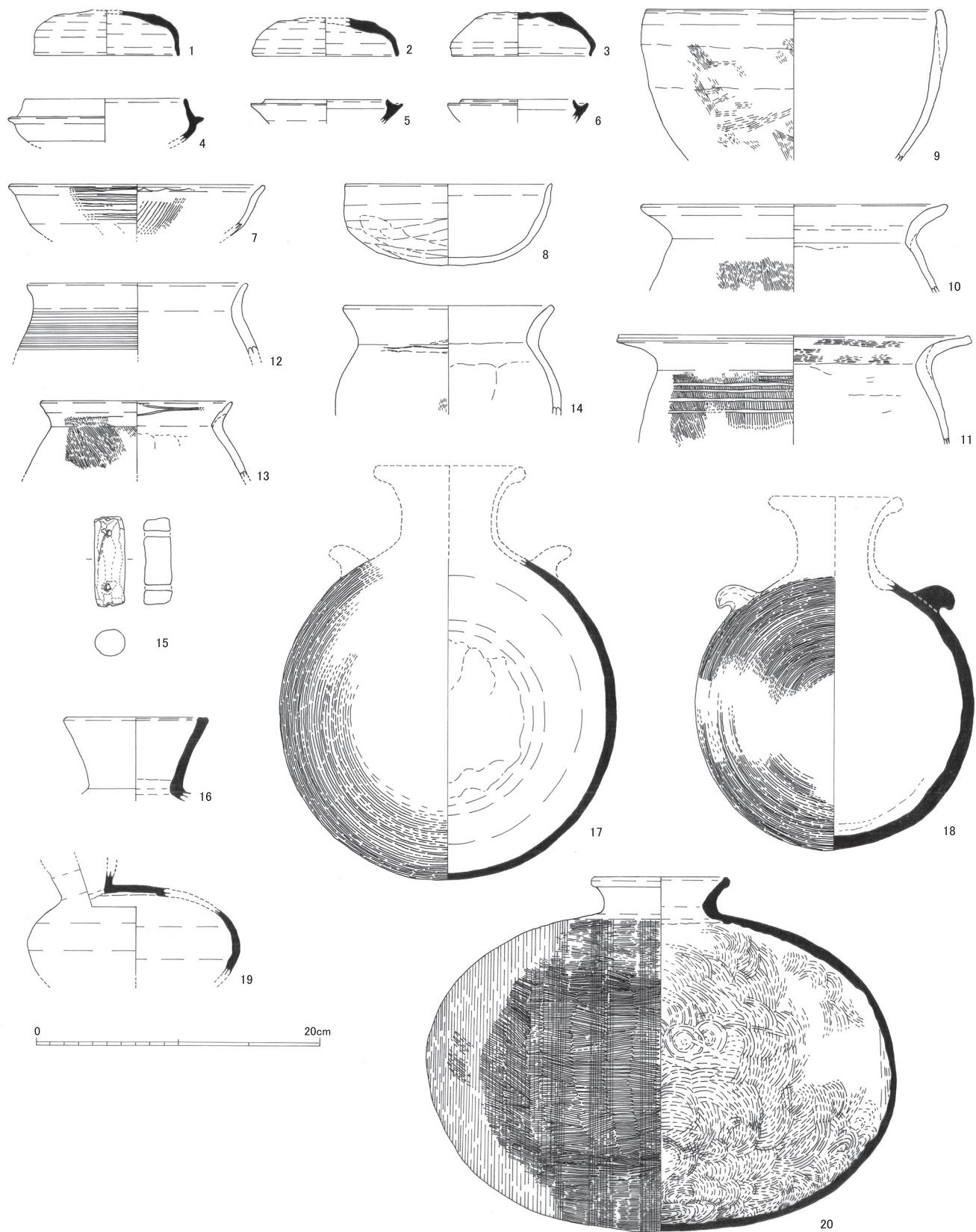


fig.88 SX01出土遺物実測図

1～6・16～20：須恵器 7～15：土師器

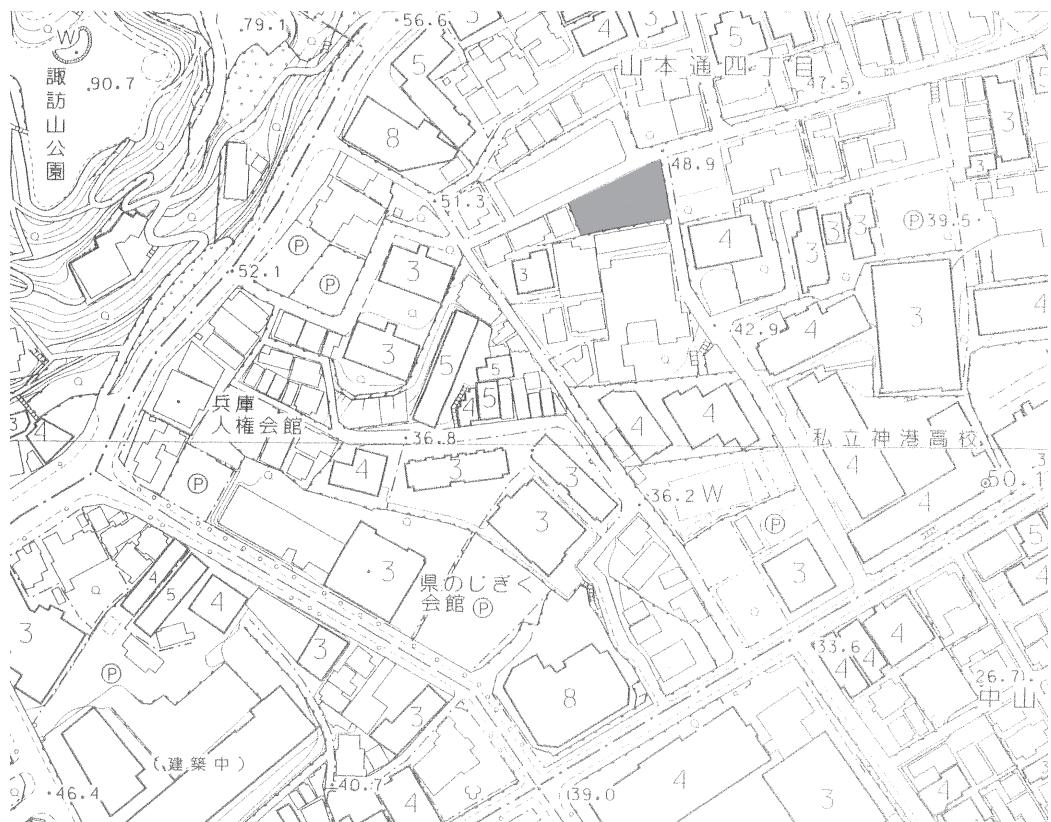
8. 城ヶ口遺跡 第1次調査

1. はじめに

城ヶ口遺跡は、平成19年に神戸市都市計画総局による市有地売却に伴う試掘調査によって新しく発見された遺跡である。この名称は、一帯に存在した「城ヶ口村」の旧地名によるものである。現在では遺跡の東側の谷筋を流れる城ヶ口川と呼ばれる小河川や、交差点名などに僅かに名を残しているのみであるが、かつては鯉川筋の山手幹線より北に繋がる坂道が、城ヶ口筋と呼ばれたりしていた。

この遺跡は、六甲山南麓に流れ出す宇治川の形成する扇状地の扇頂部付近の傾斜地に位置しており、標高は海拔48.0m前後を測る。

また周辺には、いくつかの遺跡が知られている。南東に隣接する中山手遺跡は、弥生時代から古墳時代と中世の集落遺跡である。また南西には、中世の柱穴や古墳時代の遺物や建物が確認されている中山手西遺跡が存在するほか、一帯にはすでに消滅した古墳も含めて6基前後の古墳があったとされている。これらのうち調査地の西方約200mには、両袖式の横穴式石室をもつ直径約10mの円墳である中宮黄金塚古墳が現存する。



2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うものであり、調査地は、地中杭埋設予定部分を繋ぐ形でグリッド(Gr)およびトレンチ(Tr)を設定し、順次調査を行った。

基本層序

基本層序は、調査区全体に整地の盛土が約0.8mみられ、その直下に多量の黄灰色粗砂を主体とする土砂の流入がみられる。層厚は0.9m前後におよび、遺物等を含まず一気に堆積したもののように、直下に近代～戦前の遺物を含む耕土を覆うことから昭和13年の阪神大水害にともなう洪水砂と考えられる。

この耕土層の下は、調査区の北側では直に、中央部では中世の遺物を含む褐灰色土を挟んで遺構面（地山）である褐灰色砂質土となる。また南半部では0.4～0.5mの近世の耕作に伴うと考えられる盛土の下に、中世の遺物を含む暗褐灰色土が0.1～0.2m堆積し、基盤層である明褐黄色砂質土となる。

- Gr.1 調査区の西端に設定した1.0×2.0mのグリッドでT.P. 46.2mで中世の遺物包含層である暗灰褐色砂質土が層厚0.3mほど堆積して地山面となる。遺構は確認されなかった。
- Gr.2 調査区の南西において設定した1.0×1.0mのグリッドでT.P. 46.3mで暗灰褐色砂質土が0.1m、その下に暗灰色土が0.2m堆積し、地山面となる。径0.2mほどのピット状の遺構が確認されたものの湧水が激しく、崩落の危険があったため調査を中止した。またこのグリッドの南および西側については、現在の石垣の掘形によって攪乱を受けており包含層および遺構面は削平されていると考えられる。
- Gr.3 調査区の南東隅に設定した、1.0×1.5mのグリッドである。旧耕土直下のT.P. 46.4mで0.5mの盛土が認められ、その下に中世の包含層と思われる暗灰色砂質土が0.1mほど堆積し、T.P. 45.8m付近で地山面となる。遺構は検出されなかった。
- Gr.4 Tr.3の南に設定した1.2×1.2mのグリッドである。旧耕土直下のT.P. 46.4mで0.4mの盛土が認められ、その下に中世の包含層と思われる褐灰色粘質土、暗褐灰色砂質土が0.3mほど堆積し、T.P. 45.7m付近で地山面となる。
- Gr.5 調査区の北端に設定した1.0×2.0mのグリッドである。旧耕土直下のT.P. 46.4m付近で地山面となる。東西方向の時期不明の溝1条を検出した。
- SD04 幅0.2～0.3m、深さ数cmの東西方向の溝である。
- Gr.6 調査区の北端、Gr.5の西に設定した1.0×2.0mのグリッドである。旧耕土直下に0.1mほど褐茶色粘質土が堆積し、T.P. 46.3m付近で地山面となる。
- Tr.1 調査区の北辺に沿って設定した、幅1.0m東西の長さ21mのトレンチである。溝、土坑、不整形の落ち込み等を検出した。
- SK01 トレンチの東で検出された径0.8mほどの土坑である。上層より0.25×0.4m、厚さ0.15mの風化した花崗岩が出土した。
- SX01 SK01に切られる、1.8×1.0mの不整形の落ち込みである。
- SE01 トレンチの中央部で旧耕土直下の中世の包含層の上面において検出された、径1.2m、深さ0.5mの水溜状の遺構である。
- SD01 トレンチの西端で検出された、幅0.5m、深さ0.1m前後の溝である。
- SD02 SD01のすぐ南に沿って流れる、深さ数cmの溝である。
- Tr.2 調査区の中央部から南端にかけて設定した1.5×5.0mのトレンチである。地山層を削って造られた段落ちや溝が検出された。
- 段落ち 1 中世の耕作面の区画に伴うと思われる段落ちを検出した。段落ちはトレンチの中軸を南北方向に築かれた段で、比高差約0.3mを測る。
- SD03 段落ちの裾に沿って流れる幅0.2m、深さ数～0.1mの溝である。土師器の皿が、比較的多く出土している。

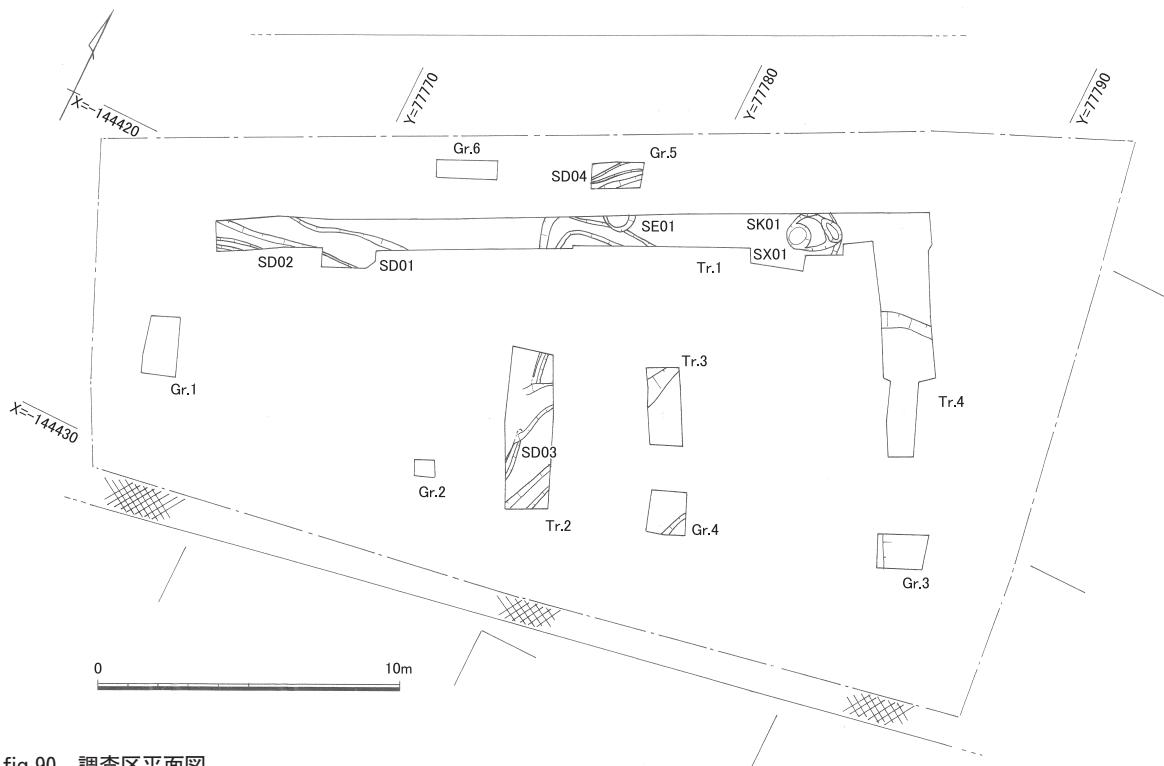


fig.90 調査区平面図

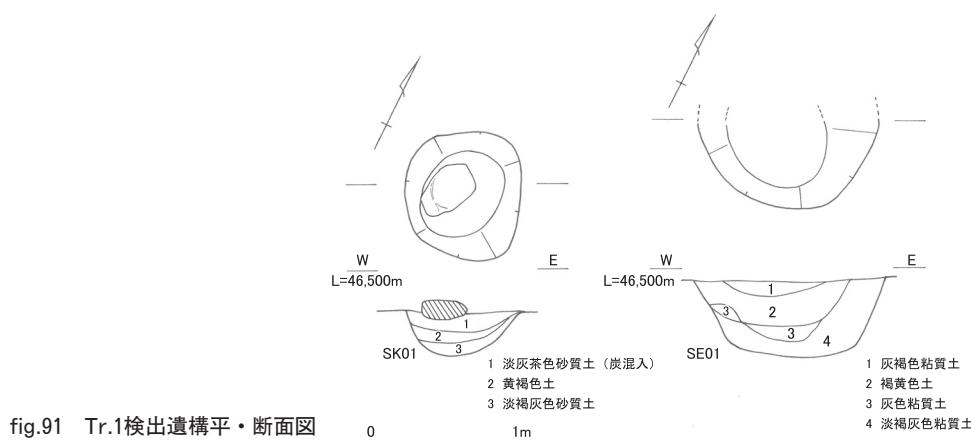


fig.91 Tr.1検出遺構平・断面図
左：SK01 右：SE01



fig.92 Tr.1東半全景



fig.93 SK01全景

- Tr.3 調査区の中央部に設定した1.0×2.5mのトレンチである。トレンチ北端部分においてT.P. 36.4mで中世の遺物を含む包含層の上面となる。南側で段落ちが認められる。
- 段落ち 2 調査区の南端において近世～近代の旧耕土である灰色土直下で検出された。北東から南西方向に走る、高低差約0.6mの段である。
- Tr.4 調査区の東辺に沿って設定した1.0～2.0×8.0mのトレンチである。北部では旧耕土直下に中世の包含層と思われる淡灰褐色砂質土が0.3mほど堆積し、T.P. 46.40m付近で地山面となる。南部では段落ちを境に0.3～0.5mの盛土が認められ、その下T.P. 46.50mで地山面となる。
- 段落ち 3 調査区の中央部において近世～近代の旧耕土である灰色土直下で検出された。東西方向に走る高低差約0.5mの段である。
- 出土遺物 調査区全体で、28ℓ入りコンテナに1箱の遺物が出土した。大半が近世～中世にかけての陶磁器、土師器である。

図化できたものは、Tr.1の包含層出土の土師器皿（1～3）、瓦器碗（4）、須恵器（14）のほかSK01出土の土師器皿（6）、SD01出土の土師器皿（9・10・13・15・16）、SX01出土の土師器皿（12）、Tr.3の包含層～遺構面上出土の土師器皿（5）や土師器鍋（8）などがある。また洪水砂直下の灰色土からは近世の陶磁器（7）が出土している。

包含層及び遺構からは13～15世紀の遺物の出土が多い。

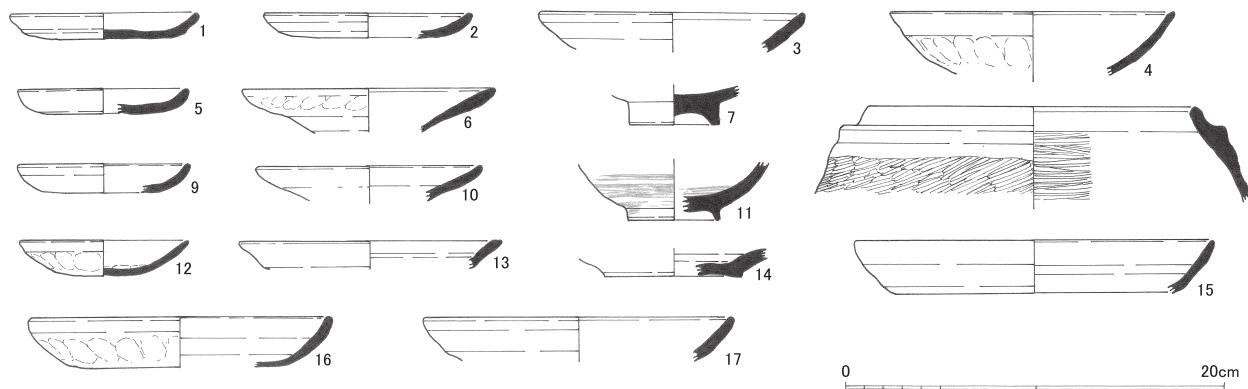


fig.94 出土遺物実測図

3.まとめ

城ヶ口遺跡は、今回はじめて本格的な調査が実施され、中世を中心とする遺物や遺構が確認された。遺構面は敷地の北側で削平されており、南では急に傾斜する部分にかかるようである。調査区の中ほどにおいては平安時代～中近世の包含層が比較的良好に認められ、遺構も確認されている。周辺には、緩斜面を利用したと考えられる小規模な遺跡がいくつか存在することが確認されており、本遺跡もそのような遺跡の一つであると考えられるが、時期的には周辺の遺跡とやや異なることから、どのような性格をもつ遺跡であるのか周辺での調査の進展が待たれる。

9. 楠・荒田町遺跡 第46次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の段丘上に位置する遺跡である。これまで42次におよぶ調査から弥生時代から中世に盛行した遺跡だということが判明している。特に、弥生時代前期における貯蔵穴、中期の竪穴住居・方形周溝墓等の遺構および出土遺物は、この遺跡がこの地域の中心的な集落であったことを示している。

また、平安時代後期の福原京の存在はいまなお判然としないが、近年、同時期の壕や溝が並んで検出され、建物も確認されている。今回の調査地点である神戸大学医学部付属病院内においても、1981・1982年度に神戸大学の多淵敏樹氏によって、いわゆる「福原宮」(平氏別邸群)に関連した遺構がはじめて確認された。その後は、兵庫県教育委員会によって数次の調査が行われており、平安時代末以外にも縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物や平安時代以降の掘立柱建物・溝・井戸などが確認されている。

2. 調査概要

今回の調査は大学の施設建設に伴う発掘調査である。工事掘削影響深度はG.L. -3.6mで、調査区を南北の2区に分けて調査を実施した。そのうち南半部分では良好な包含層の遺存が認められ、包含層の上面と下面の2面にわたって調査を実施している。

なお、調査の詳細については平成23年度刊行の『楠・荒田町遺跡第42・43・46次発掘調査報告書』を参照されたい。

fig.95 調査地位置図
S=1:2,500



基本層序

基本層序は、0.9mの盛土の下に淡黄灰色粗砂（層厚0.15m）がある。以下の層からが包含層となっており、淡褐色中～粗砂（層厚0.25m）、褐色シルト混中～細砂（層厚0.2m）で、いずれにも土器が含まれている。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてと考えられる。遺構を検出したのは、上記の層の下層にあたる暗褐色砂混シルト（層厚0.2m）で、上面と下面である、第1遺構面は、主に平安時代から鎌倉時代にかけての時期であり、第2遺構面は平安時代から奈良時代にかけての時期と考えられる。

第1遺構面 調査地の一部で確認された淡褐色中～粗砂の下面で壕や溝（SD01～SD05）を検出した。壕（SD01）は幅4m、深さ1.75mで、北東から南西に流れる。この壕は、以前に確認されている二重壕の続きと考えられる。

壕（SD02）は幅1.8m、深さ1.7mで、北東から南西に流れる。この壕は、以前に確認されている二重壕の続きと考えられる。

SD03～05は幅0.7～0.9m、深さ0.65～0.9mを測る北東から南西に流れる溝で、この溝は、いずれも以前に確認されている二重壕の南にあり、方向もほぼ一致しているが、出土遺物から、時期は幕末と考えられる。

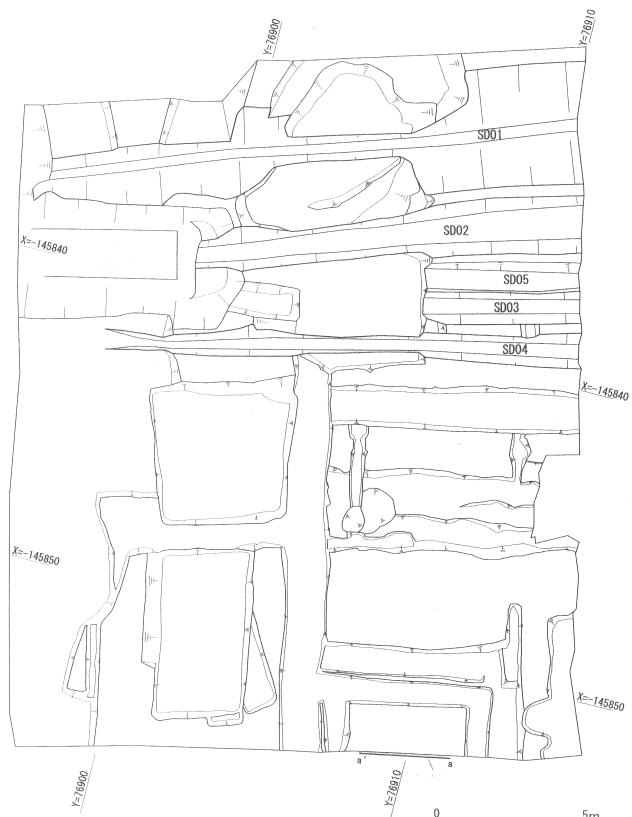


fig.96 第1遺構面平面図



fig.97 SD01・02検出作業風景

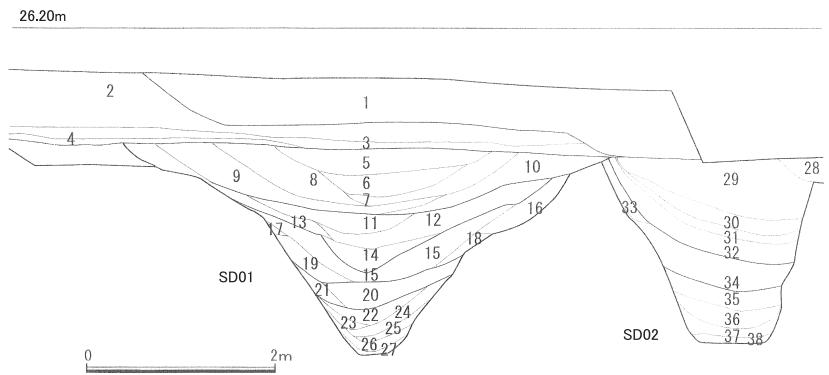


fig.98 SD01・02土層断面図

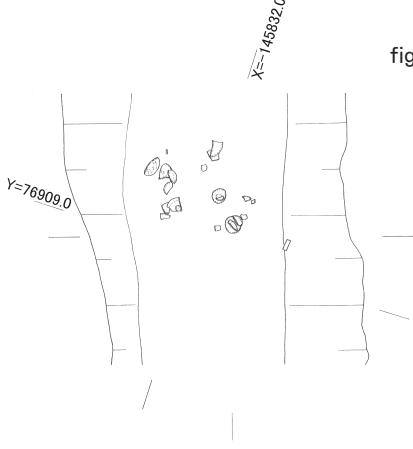


fig.99 SD01下層遺物出土状況ならびに層位関係図

24.80m

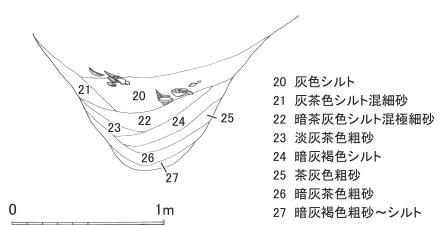


fig.100 SD01下層遺物出土状況

第2遺構面 暗褐色砂混シルト下面で確認された第2遺構面では、ピットと井戸を確認している。ピットはいずれも直径0.2~0.3mの円形で、10世紀から11世紀にかけての時期と考えられる。井戸(SE201)は、1辺1mほどの隅丸方形の堀方をもち、深さ4m以上を測る。出土遺物から、10世紀末に埋められたと考えられる。

SB01 2間×1間以上の掘立柱建物である。柱間は約0.9mと狭く、総柱建物とはならない。井戸(SE201)に柱の一部が切られており、井戸より古い時期の遺構と考えられる。



fig.101 SD01出土遺物

3. まとめ

今回の調査では、東側で実施された兵庫県教育委員会の調査で話題を呼んだ二重濠の続きを検出した。今回の調査において、懸案であった溝の切り合い関係が、最終堆積の段階ではあるが、SD01の方がSD02を切っているのが確認できた。なお、これらの濠の開削と埋没の時期が大いに注目を集めているところであるが、出土遺物から見て、問題が生じている。京都市内出土の土師皿からみた編年観からすれば、土師皿の端部外面の面取りの状況は新しい傾向を示しており、古く遡っても13世紀前半と考えられるのに対して、瓦器椀では、口径が15cmとまだ大型の部類に属しており、関西周辺や瀬戸内周辺での出土記年銘木簡と共に伴する瓦器の事例からすれば、新しく見積もっても12世紀末を下らないと考えられるのである。土師器と瓦器の編年観が一致せず、今後さらに検討が必要である。

また、調査区の北で調査した際に確認している11世紀代の遺構が、今回の調査区南半でも確認できている。これらの遺構は幾分削平を受けた状態となっており、12世紀代になんらかの造成がおこなわれた可能性がある。というのも、SD01の北側は調査が行えていため確実なことは断言できないが、濠の北側での遺物出土量が多く、それらの中に濠上層部分ではあるが、10世紀～11世紀代の遺物が一定量含まれている。これは、濠掘削時に周囲も含めて造成を行い、その造成時の土を使用して、濠の北側に土塁を築き、その土塁が時間の経過とともに、SD01の中に埋土として流れ込んだと推測することもできる。それゆえ、濠の周囲は何らかの形で使用されたと考えることはできるが、調査範囲における二重濠の南側では同時期の遺構が確認されておらず、少なくとも濠の南側に何も空間が広がっていたような状況となっている。

これについては本来、濠が区画を目的として造られたものが、改めて防御的な意味をもって、新たに築きなおされた可能性も考えることはできる。なお、この濠自体が、掘削された地山部分が水の流れを強く受けると崩壊しかねない砂地を含むため、若干の水の溜水はあったとしても濠は空濠と考えるべきであろう。防御強化のため、急遽この周囲を、再整備をおこなったものの、十分に土地利用をされないまま濠だけが残り、土地所有者の変更後、何度か改修されたものの、埋められてしまったとも考えられる。

10. 楠・荒田町遺跡 第47次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の段丘上に位置する遺跡である。これまで46次に及ぶ調査から弥生時代から中世に盛行した遺跡だということが判明している。特に、弥生時代前期における貯蔵穴、中期の竪穴住居・方形周溝墓等の遺構及び出土遺物からは、この遺跡がこの地域の中心的な集落であったことを示している。

また、平安時代後期の福原京の存在はいまなお判然としないが、近年、同時期の壕や溝が並んで検出され、建物も確認されている。近隣の調査地点である神戸大学医学部附属病院内においても、1981・1982年度に、いわゆる「福原宮」(平氏別邸群)に関連した遺構がはじめて確認された。その後は、兵庫県教育委員会によって数次の調査が行なわれており、平安時代末以外にも、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物、平安時代以降の掘立柱建物・溝・井戸などが確認されている。



2. 調査概要

今回の調査は宝地院の保育園園舎建設に伴う発掘調査である。工事掘削影響深度は最大G.L. -1.8mで、重機・人力掘削を行うとともに一部残土処分を実施している。なお、調査敷地内の関係から、南北に分けて調査を実施した。そのうち、南半部分では、良好な包含層の遺存が認められ、包含層の上層と下層の2面にわたって調査を実施している。北半部は既存の建物により、ほとんどが搅乱されていた。

基本層序

基本層序は0.7mの盛土の下に淡黄灰色粗砂（層厚0.1m）がある。以下の層からが包含層となっており、淡褐色中～粗砂（層厚0.2m）、褐色シルト混中～細砂（層厚0.1m）で、いずれにも土器が含まれている。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてと考えられる。暗灰褐色シルト混細砂（層厚0.15m）弥生時代包含層の上面と下面が遺構面である。第1遺構面は、鎌倉時代から平安時代にかけての時期であり、第2遺構面は弥生時代と考えられる。

第1遺構面 全体に搅乱が激しく、調査区の西半にしか包含層は残されていない。褐色シルト混中～細砂の下面にて検出した土坑（SK01）は、長辺1.8m、短辺1.05m、深さ0.45mを測る。埋土に多くの炭と焼土を含んでいる。また、土坑の最下層中には石を敷き並べたような礫群が存在している。出土遺物から、時期としては、平安時代末（12世紀末）～鎌倉時代初頭と考えられる。時期から考えれば、これらの焼土が源平合戦時の焼土である可能性が浮かび上がるが、土坑内部の埋土はあくまでも人為的に埋められたと考えられるため、戦死者を埋葬するための土坑であった可能性も残されている。

褐色シルト混中～細砂の下面にて検出した土坑（SK02）は、長辺2m、短辺1.3m、深さ0.65mを測る。埋土に多くの炭と焼土を含んでいる。出土遺物から、時期としては平安時代末（12世紀末）～鎌倉時代初頭と考えられる。なお、遺構検出面にて、土器の出土が認められ、土坑の上部に土器を並べて、何らかの祭祀を行っていた可能性がある。

ピットは2基確認している。いずれも東側の地山が高くなっている段に沿うように掘り込まれている。この地山は、周囲が搅乱によって削られているため、判然としないが、地山を削りだした何らかの施設であった可能性も残されており、その周囲に柱が立てられていたとも考えられる。削りだされた地山の上部が何に使用されていたかは不明としか言いう�がない。

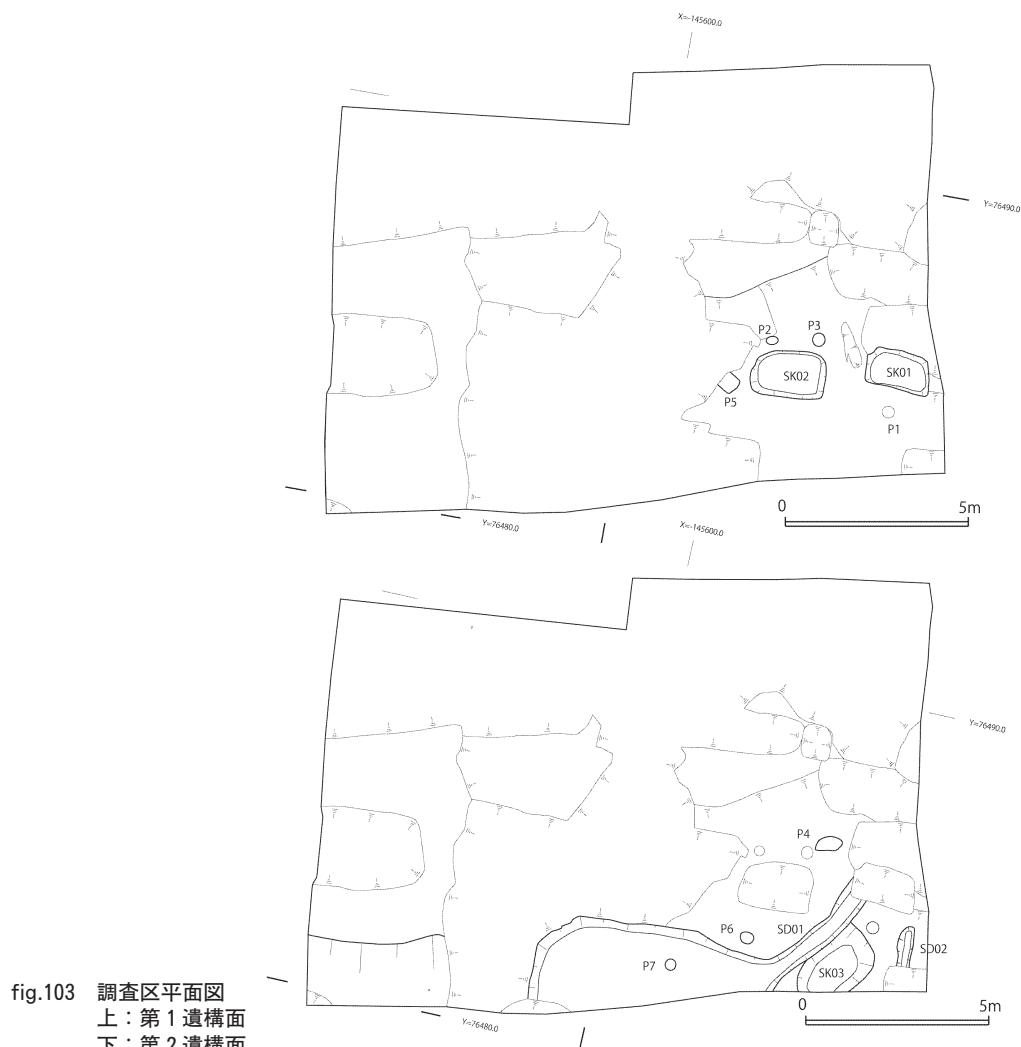




fig.104 SK01全景



fig.105 第2遺構面全景

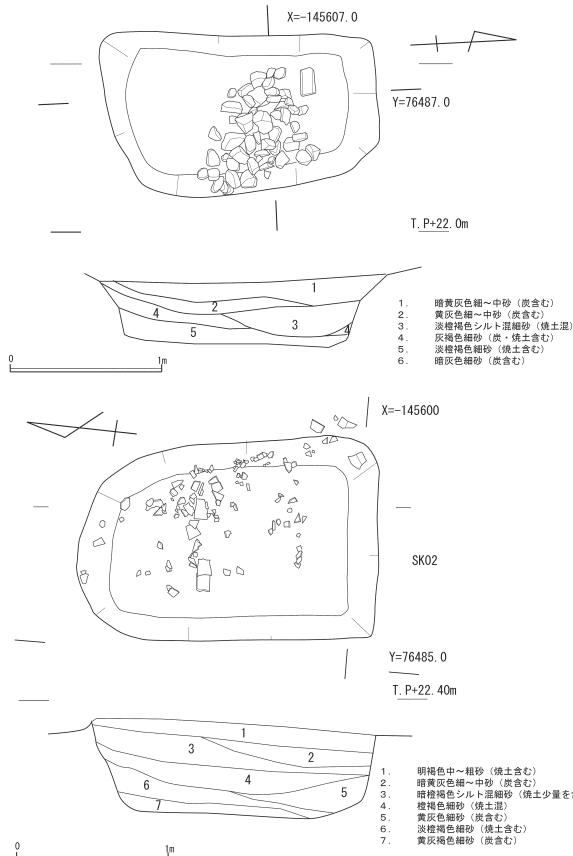


fig.106 遺構平・断面図 上：SK01 下：SK02

第2遺構面 暗灰褐色シルト混細砂下面で確認された第2遺構面では、ピットと土坑を確認している。

ピットはいずれも直径0.2~0.3mの円形で、弥生時代と考えられる。落ち込みは、調査区西端で確認したもので、現地形にあるように、東から西への傾斜する中で部分的に弥生時代の層が堆積してできたものと考えられる。

土坑（SK03）は、長辺2.2m以上、短辺1.3m、深さ0.5mを測る。溝（SD01）と切り合った関係にあり、溝に先行するものである。出土遺物から、縄文時代後期と考えられる。

溝（SD01）は、幅0.6m、深さ0.1mを測る。南東から北西へと流れ、落ち込みへと続くと考えられる。時期としては、出土遺物から、縄文時代後期と考えられる。

出土遺物としては、SD01ならびにSK03から出土した縄文土器がある。

1は狭い間隔で沈線を施し、縄文を施している部分とすり消した部分がある。口縁部が強く内湾することから、器形としては注口土器を考えられる。2~14・17~22は、外面に貝殻条痕を付ける鉢と考えられる。15は口縁部が山形に少し隆起するような鉢の口縁部と考えられる。16・23は口縁外面に縄文が施されている。24は胴部中央に沈線で細い区画帯をつくり、その中に縄文を施すものである。25は外面に貝殻条痕を施す底部である。

これらの縄文土器は北白川下層の範疇にあり、縄文時代中期でも後半に相当する。

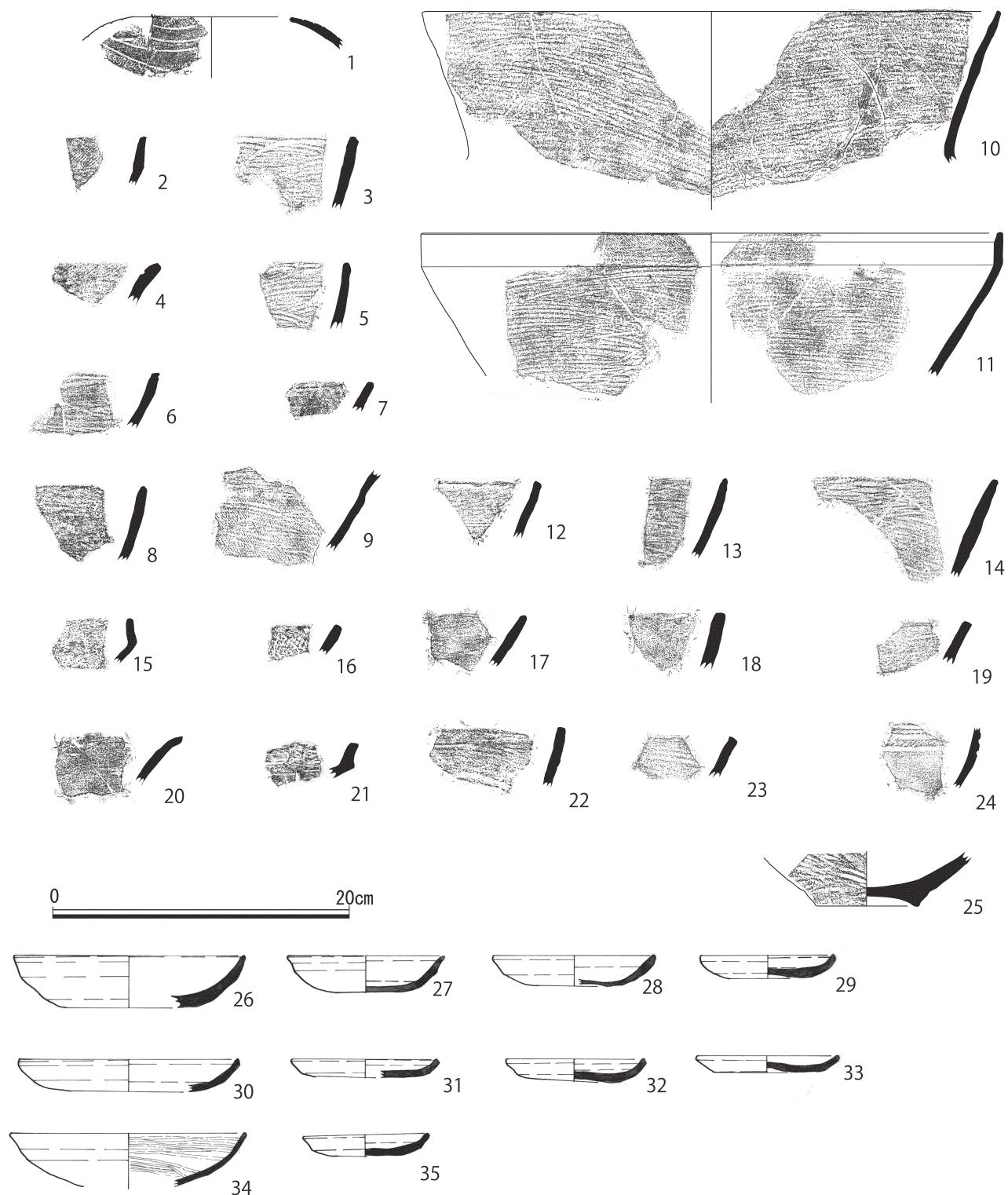


fig.107 出土遺物実測図

1～9：SD01 10～25：SK03 1～25：縄文土器 26：SK01 27～29：包含層
30～35：SK02 26～33・35：土師器 34：瓦器

26はSK01出土の土師器皿である。体部外面上半から2段のナデが施されており、口縁端部はまっすぐ外上方に伸びる。端部は明確な三角形を呈さない。30～33・35はSK02出土の土師器である。体部外面上半から2段のナデが施されており、口縁端部はやや内湾ぎみに外上方に伸びる。口縁端部は三角形状を呈する。

34はSK02出土の瓦器である。内面には暗文が認められ、口径は15cm以上であるが、器高は減少しているタイプで、やや扁平な印象を受ける。これらからSK01・02ともに祇園遺跡のSX07における出土遺物のII-1期に相当するものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、平安時代末の遺構と遺物を確認した。土器の整理を進めてから最終的な結論となろうが、現時点では、土師器は京都系土師器に属するもので、祇園遺跡周辺での出土が中心ではあるが、やや時期幅を持つものである。しかしながら、今回の調査で、祇園遺跡と同時期の土師皿が出土し、それも京都系土師器に属するものである意義は大きいと考えられる。

その上で、確認された、地山削り出しの部分とそれに沿うように立てられた柱、さらに削り出された地山から下がった部分で確認できた土坑が、一体のものであるかどうかは更なる検討が必要であろう。

また、緩やかに傾斜する地形の西側にて弥生時代の包含層を確認し、弥生時代の落ち込み1、ピット5基を確認している。ピットに関しては、建物となる可能性は低い。また、土坑（SK03）・溝（SD01）からは、縄文時代中期の土器が確認されている。

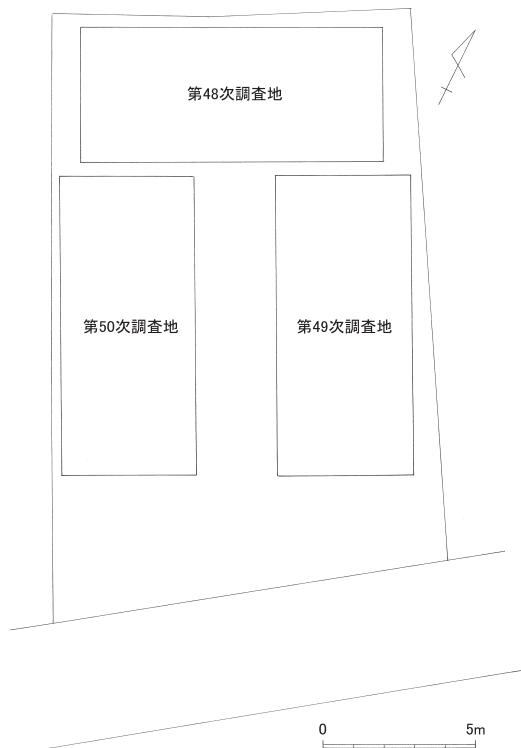
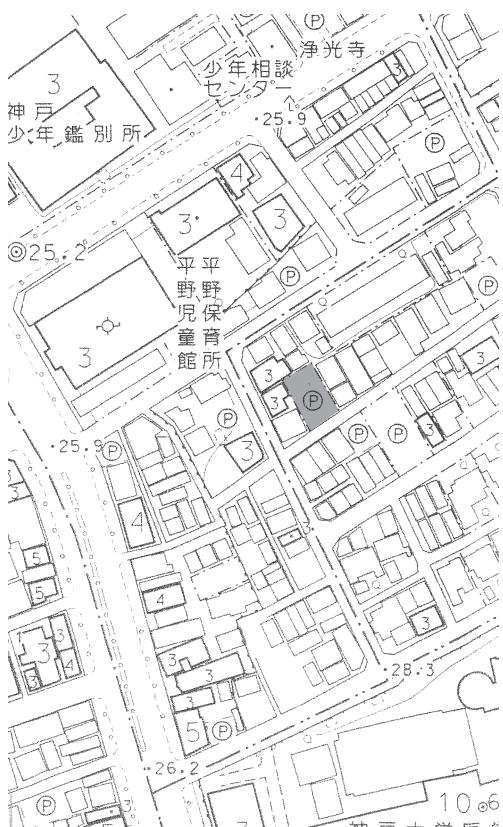
落ち込みに関しては、一定量の土器が出土しており、接合作業によっては完形に復元される可能性も残されている。なお、近隣の30次調査ならびに38次調査でも弥生時代中期の土坑などが確認されており、弥生時代中期の遺構が今回の調査区周辺にまで広がっていることも確認できた。また、縄文時代の遺物は、これまでに6・19・36次調査でも確認されているが、今回の調査区で確認されたことにより、本来、楠・荒田町遺跡の中でかなりの範囲に広がっていたと考えられるようになった。

11～13. 楠・荒田町遺跡 第48・49・50次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は六甲山系南麓の丘陵端部および段丘上に位置し、昭和53年度以来、47次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。近年の26次、46次調査において、平安時代後期の大規模な二重壕が検出されており、福原京関連遺跡である同遺跡の諸相が徐々に明らかになりつつある。

今回、同一事業地の中で続けて個人住宅建設に伴う調査が発生した。それぞれ調査次数を付して実施したが、ここではまとめて調査成果について概要を記す。



2. 調査の概要

第48次調査

調査の概要

平安時代後期の遺構、平安時代後期～鎌倉時代初頭、古墳時代後期の遺物が検出された。

遺構面は1面のみで、ピット、溝、土坑、落ち込みなどの遺構が検出された。また、遺構埋土、遺物包含層より遺物が出土したが、その大半が土器類で、平安時代後期（概ね11世紀後半前後）に属するものが多い。

基本層序

箇所によって異なるが、現地表面より-60～90cmは盛土および攢乱土が存在し、その下層が、旧耕土層、遺物包含層の順で存在する。遺物包含層は2層（上層：濃褐色砂質土、下層：濃褐色粘砂土）存在し、下層（濃褐色粘砂土）を除去した面が遺構面（現地表面-120～150cm・標高26.6～26.7m）となる。尚、遺構面の下層については、遺構面になりうる層位、遺物を含む層位は確認されなかった。

遺構・遺物 検出された遺構は、ピット30ヵ所、溝1ヵ所（SD01）、土坑1ヵ所（SK01）、落ち込み4ヵ所（SX01～04）である。

ピットはいずれも小規模なもので、径0.2～0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。1間程度の間隔で並ぶものもあるが、建物としてのまとまりは確認できなかった。埋土中より土師器、須恵器、黒色土器の小片が出土しており、概ね平安時代後期のものと考えられる。

溝は1ヵ所（SD01）のみ検出し、幅約0.7m、深さ約0.1mを測る。埋土中より土師器、黒色土器の小片が出土しており、概ね平安時代後期のものと考えられる。

土坑も1ヵ所（SK01）のみである。平面形が橢円形を呈し、長径約1.2m、短径約0.8m、深さ約0.1mを測る。埋土中より土師器、須恵器、黒色土器の小片が出土しており、SD01などと同様、概ね平安時代後期のものと考えられる。

落ち込みは4ヵ所（SX01～04）検出した。SX01～03は、比較的小規模なものと推測されるが、SX04は全長5.0m以上、深さ約0.2mを測る。いずれも土師器、須恵器の小片が出土しており、概ね平安時代後期のものと考えられる。

出土遺物は、遺構内、遺物包含層を含めて平安時代後期に属する土師器、須恵器の小片が多いが、黒色土器の小片も数点認められる。また、釘と考えられる鉄製品も旧耕土層、遺物包含層より出土した。また、古墳時代後期（6世紀中～後半）の須恵器の小片も認められた。

第49次調査

調査の概要 平安時代後期の遺構、平安時代後期～鎌倉時代初頭、古墳時代後期、弥生時代中期の遺物を検出した。

遺構面は1面のみで、落ち込み2ヵ所（SX04・05）を検出した。遺構の番号は隣接する48次調査地に連続するように付し、同調査において検出した遺構と同一遺構と考えられるものについては同番号を付した。また、遺構（落ち込み）埋土、遺物包含層より遺物が出土したが、その大半が土器類で、平安時代後期（概ね11世紀後半前後）に属するものが多い。

基本層序 48次調査とほぼ同様で、現地表面より-0.6～1.4mは盛土および攪乱土が存在し、その下層が、旧耕土層、遺物包含層の順で存在する。遺物包含層は3層（上層：濃褐色砂質土、下層：濃褐色粘砂土、最下層：濃褐色粘質土）存在し、最下層（濃褐色粘質土）を除去した面が遺構面（現地表面-1.4～1.5m、標高26.6～26.7m）となる。

遺構・遺物 SX04は調査区北端で検出した落ち込みである。48次調査において検出したSX04と同一遺構と考えられる。今回の調査では、わずかな傾斜が確認された程度である。埋土中より、土師器、須恵器の小片が出土している。概ね平安時代後期のものと考えられる。

SX05は幅約7.5m、深さ0.4mを測る大規模な落ち込みである。埋土中より、土師器、須恵器、黒色土器の小片が出土しており、平安時代後期に属するものがみられることから、同時期の遺構と認められるものの、数量的には古墳時代後期のものが多い。

出土遺物は、SX04、05のみならず、遺物包含層からも多く確認されており、その大半が土器類で、平安時代後期（概ね11世紀後半前後）に属するものが多い。土器の中には陶

磁器（白磁）の破片もみられる。また、古墳時代後期（6世紀中～後半）に属する遺物が、48次調査よりも数多く確認され、さらに僅かではあるが、弥生時代中期に属するものもみられる。その他、釘と考えられる鉄製品も旧耕土層、遺物包含層より出土した。

第50次調査

調査の概要 平安時代後期および古墳時代後期の遺構、平安時代後期～鎌倉時代初頭、古墳時代後期、弥生時代中期の遺物を検出した。

遺構面は1面のみで、ピット、溝、土坑、落ち込みなどの遺構を検出した。遺構の番号は隣接する48・49次調査地に連続するように付し、同調査において検出した遺構と同一遺構と考えられるものについては、同番号を付した。また、遺構埋土、遺物包含層より遺物が出土したが、その大半が土器類で、平安時代後期（概ね11世紀後半前後）に属するものが多い。

基本層序 48・49次調査とほぼ同様で、現地表面より-60～110cmは盛土および攪乱土が存在し、その下層が、旧耕土層、遺物包含層の順で存在する。遺物包含層は2層（上層：濃褐色砂質土、下層：濃褐色粘砂土）存在し、下層（濃褐色粘砂土）を除去した面が遺構面（現地表面-120～130cm・標高26.6～26.9m）となる。尚、遺構面の下層については、遺構面になりうる層位、遺物を含む層位は確認されなかった。

遺構・遺物 検出した遺構は、ピット10ヵ所、溝1ヵ所（SD02）、土坑2ヵ所（SK02・03）、落ち込み1ヵ所（SX05）である。

ピットは大小さまざま規模なものでなものが存在し、径0.2～0.7m、深さ0.15～0.3mを測る。出土遺物は少なく、土師器の小片を数点確認した程度で、時期も不詳である。

溝は1ヵ所（SD02）のみ検出しており、幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。埋土中より、土師器、須恵器の小片が出土しており、概ね平安時代後期のものと考えられる。

土坑は2ヵ所（SK02・03）検出した。SK02は平面形が橢円形を呈し、長径約1.1m、短径約0.8m、深さ約0.1mを測る。埋土中より土師器、須恵器の小片が出土しており、SD02などと同様に、概ね平安時代後期のものと考えられる。SK03は、調査区西端部で検出し、大半が調査区域外に広がることから、詳細な規模は不明であるが、西壁際で幅約3.4m、深さ0.4mを測る。埋土中より土師器、須恵器の破片が数多く出土しており、古墳時代後期（6世紀中～後半）に属するものと考えられる。

落ち込みは1ヵ所（SX05）検出した。東側に隣接する49次調査地において検出したSX05と同一遺構と考えられる。今回の調査においては西側の肩部が検出されたものの、遺構の性格等については不明である。49次調査と同様に、概ね11世紀後半前後に属する遺物が出土したが、数量的には古墳時代後期のものが多い。

出土遺物は遺構内、遺物包含層を含めて平安時代後期および古墳時代後期に属する土師器、須恵器の破片が多い。また、僅かではあるが、弥生時代中期に属するものもみられる。

3. まとめ 今回の調査においては、平安時代後期（11世紀後半前後）の遺構が検出された。これらの遺構は、福原遷都（1180年）と約100年の隔たりが認められるが、過去の同遺跡あるいは周辺の遺跡（祇園遺跡、大開遺跡など）の調査において、同時期の遺構、遺物が数多く

検出されていることから、六甲山南麓の中核的地域（集落）と考えられる。また、京都系土師器皿の影響をうけた非轆轤（手づくね成形）土師器皿が数多くみられ、胎土が極めて精緻な、「手の字状口縁」の土師器皿をはじめとする、いわゆる京都産（都産）のものも多く含まれることから、都と密接な関係にあることが窺える。今回の調査は、調査区がかなり限定的であったことから、集落の一部を垣間見たにすぎないが、今後の周辺での調査の進展によって、様相を明確にできるものと考えられる。

また、古墳時代後期（6世紀中～後半）に属する遺物がみられることがから、近接地に同時期の集落の存在を肯定するものと考えられる。

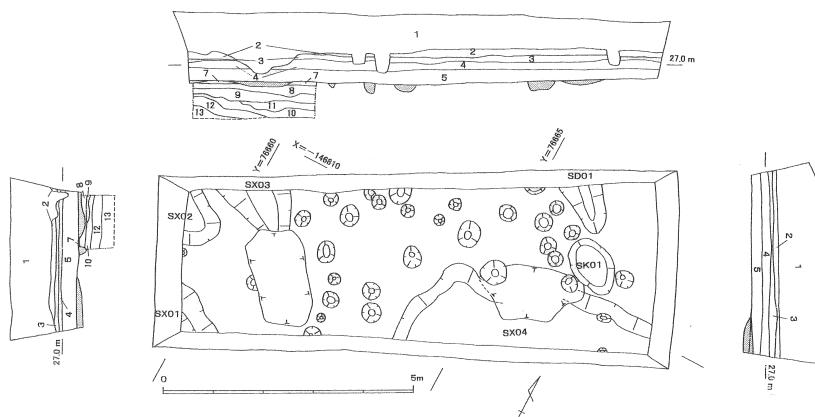


fig.110 第48次調査
調査区平・断面図

- 1. 盛土・擾乱土
- 2. 灰色砂質土（旧耕土層）
- 3. 灰褐色砂質土（旧耕土層）
- 4. 濃褐色砂質土（遺物包含層・上層）
- 5. 濃褐色粘砂土（遺物包含層・下層）
- 6. 濃褐色粘質土（遺物包含層・最下層）
- ※網掛け部分は遺構埋土
- 7. 濃褐色粗砂混り粘砂土（遺構面ベース層）
- 8. 灰褐色粗砂混り砂質土
- 9. 褐色バイラン土
- 10. 淡茶色砂質シルト（硬質）
- 11. 茶褐色細～中砂（硬質）
- 12. 淡褐～濃褐色バイラン混り砂質土
- 13. 褐灰色バイラン混り砂質土

- 1. 盛土・擾乱土
- 2. 灰色砂質土（旧耕土層）
- 3. 灰褐色砂質土（旧耕土層）
- 4. 濃褐色砂質土（遺物包含層・上層）
- 5. 濃褐色粘砂土（遺物包含層・下層）
- 6. 濃褐色粘質土（遺物包含層・最下層）
- ※網掛け部分は遺構埋土

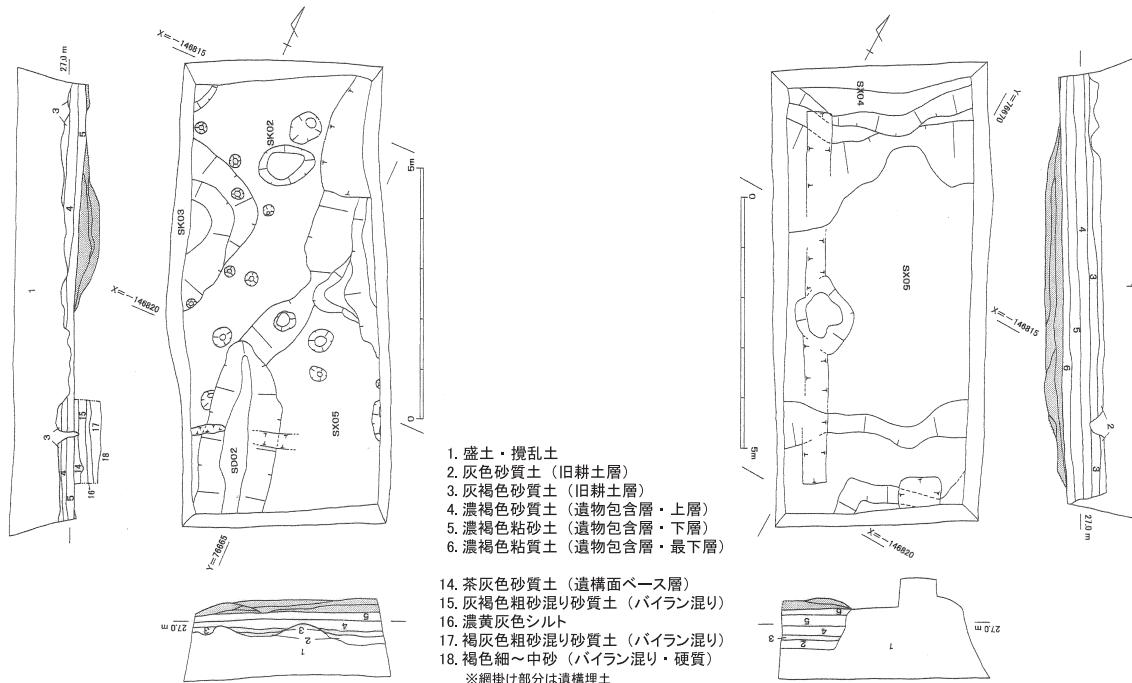


fig.111 第50次調査調査区平・断面図

fig.112 第49次調査調査区平・断面図

14. 兵庫津遺跡 第53次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。古くは「大輪田泊」と呼ばれ、文献上にもたびたび登場し、特に平安時代後期に平清盛により経ヶ島が築造され日宋貿易の拠点とされたことは著名である。中世には兵庫（島）と呼ばれるようになり、寺社勢力の庇護のもと瀬戸内海運の主要港として栄えた。また室町時代前期には明との通商の窓口として整備され、『教言卿記』など当時の日記には將軍足利義満の兵庫下向の記事がたびたび登場する。15世紀半ばに起こる応仁・文明の乱により港としての機能は一旦荒廃し、国際貿易港としての機能を堺に譲るとされているが、近年の発掘調査の成果ではこの時期に兵庫津の町の衰退を裏付けるに足る資料はみつかっていない。

戦乱の世になると兵庫津は商品の流通といった経済的な面ばかりでなく、兵員や軍需物資の輸送など兵站的な面からも戦国大名達によって着目され、有力な豪商が保護育成された。天正8（1580）年に兵庫の町は織田信長方の軍勢による花熊城攻めの際に攻撃されるが、この後は織田・豊臣の勢力下、町の城郭化が進められ、現在の中央市場跡地周辺に兵庫城が築かれ、町を取り巻くように巡らされた都賀堤と掘割や遺跡の北西の寺町はこの名残とされている。

慶長元（1596）年に発生した「慶長伏見地震」により大きな被害を受けたことが当時の記録から指摘されていたが、発掘調査においても地震の痕跡が検出されている。その後、復興した近世の兵庫津は、当時の経済の中心地で大消費地でもあった大坂の外港としてだけでなく、西国との人の往来、物資の流通量の増加に伴って物資の集積地として、さらには西国街道の宿場町として発展を続け、宝永8（1711）年には人口2万人をかぞえる国内でも有数の都市となる。

やがて幕末の慶応3（1867）年に兵庫（神戸）開港をむかえ、明治時代になると初代兵庫県庁が兵庫陣屋跡に置かれるが、新川運河の開削によって北西の3分の1ほどが削平され、現在はその姿を止めていない。一方、開港に伴って整備されていった遺跡東方に隣接する波止場や旧居留地の建物などの歴史的景観は今なおミナト神戸のシンボルとなっている。



今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は平成9年度に実施した第14次調査地の南に隣接する場所にある。先の調査では、近世の町屋群をはじめ中世の倉庫施設などが確認されている。調査地の現在の住居表示は「七宮町」であるが、これは1970年代後半の区画整理等によるもので、それ以前は、南側の街路を挟む区域を鍛冶屋とする両側町の呼称が残されていた。「鍛冶屋町」の地名は文安2（1445）年の『兵庫北関入船納帳』にみられる「かちや辻子」とされる由緒ある地名であり、近世には有力な商家が建ち並ぶ地域であったとされる。

2. 調査の概要 調査区は東西18m、南北12mの長方形に、北西寄りの部分に4m四方の張り出し部分が付属する。調査区南辺は南の道路面より約3.5m北に入った位置に設定した。調査では10面の遺構面が確認されたが、この張り出し部では工事による掘削深度の関係から第7遺構面までの調査に止めた。

基本層序 調査区の基本層序は、地表面（T.P. 3.1m）より表土、盛土下に旧表土があり、さらに灰白色砂が堆積し第1遺構面の基盤層である赤褐色の焼土層に至る。灰白色砂の上には部分的に黄灰色土がみられる。第1遺構面の一部の遺構はこの黄灰色土及び灰白色砂をベースとしており、T.P. 2.7～2.5mを測る。焼土層には火災により発生した焼土塊を多量に含んでおり、火災直後の整地層と考えられる。この焼土層の下には、調査区の西及び中央から南東部分にかけて焼失した建物の建築材などの炭化物層が確認でき、第2遺構面となる。第2遺構面は町屋建物群の基盤となっており、床部分は薄く堆積する灰色土によって構成される。

以下、層厚0.3～0.4mの整地土である盛土ならぬ「盛砂」黄灰色砂を挟んで淡茶褐色シルトの第3遺構面となる。なお調査区の東より3分の1ほどの部分においてはこの「盛砂」がほとんど認められず、敷地に段差が設けられていたと考えられる。

第3～8遺構面の基盤層以下においては上面で確認されるような明確な砂による整地層は認められず、焼土の混じったブロック状の土を含む暗褐茶色～褐灰色の土がそれぞれ0.2～0.3m堆積し、遺構面直上に部分的に焼土の堆積を伴い各遺構面となる。とくに第7・8遺構面の上には焼土による整地が確認された。第9遺構面は、砂堆の上に堆積した中世の遺物を多く含む灰褐色粘質土を基盤とする。さらに第10遺構面は、黄灰色砂の砂堆上で検出された遺構面でT.P. 0.2m前後を測る。この高さでほぼ湧水点に達しているようで、遺構埋土を掘削すると内部は急速に湧水によって満たされる。黄灰色層以下の堆積では、遺構や遺物は確認されなかった。

以下、各遺構面で検出された主な遺構について記述する。なお、平成23年度に『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』を刊行している。詳細については参照されたい。

第1遺構面 建物に伴うと考えられる礎石や埋桶遺構をはじめとする土坑、井戸などが確認された。
町屋建物 調査区の中央部から東部において、調査地の南側に現存する街路に取り付くと考えられる町屋建物を3棟以上確認した。さらに調査区の西側においても確定できなかったものの残された礎石などから1～数棟の建物が存在したと考えられる。

SB101 調査区の中央、SB102の西に接する町屋建物である。南北6.5m以上、東西1.5mの規模で、調査区外の南側にさらに拡がる。礎石は東壁面ではSB102の礎石と接するように据えられている。

- SK109** 調査区西部の中央に位置する長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.7mの楕円形の掘形をもつ埋桶遺構である。掘形の断面は逆台形で、平坦な底部の中央に桶を据えている。底板及び東側の側板の痕跡が認められた。桶の内部には魚骨を多く含んだ砂や砂礫が幾層も堆積している。ゴミ穴として使用されていたと考えられる。
- SE106** 調査区西部に位置する長軸1.8m、短軸1.6m、深さ1.9mの歪な掘形をもつ井戸である。主に40cm前後の花崗岩の自然石が使用される石組みの井戸で、内径は径60cmほどである。西側を攪乱により削平されている。内部には粘土や砂が互層になって堆積している。
- SX101** 調査区（II区）の中央部に位置する東西2.8m、南北3.6m以上、深さ1.6mを測る長方形の掘形をもつ地下式の施設である。内法は南北2.9m、東西1.9mの範囲で床面に東西方向の板材が敷かれている。板材は腐食が激しく、使われた枚数などは確認できなかったが、厚さ約2cmでところどころに鎌状の金具が打ち込まれていた。床板を固定するためのものか、転用された材に本来使用されていたものか不明である。
- 壁材には、幅17~24cm、高さ24cm前後、長さ1.2~1.8mの石材が積み重ねられて使用されている。東壁の南寄りで7段、西壁の北寄りで4段が残存していた。なお南及び北壁では確認されなかった。石材は上面がカマボコ状に凸面をもち、底面はこれに合わせて凹面に加工され組み合わされている。
- 焼土層** 調査区のほぼ全域を覆う炭や焼土塊を多量に含む層である。火災に伴う整地層と考えられる。整地時に埋桶等の溝などを利用して瓦・焼土塊・炭化材などを投棄した廃棄土坑を伴う。
- SK201** 調査区西部の中央部に位置する、東西2.4m、南北2.0m、深さ1.8mの遺構である。埋土には、火を受けた陶磁器類と共に焼土塊や瓦などが多量に投棄されており、火事の後片付けに伴う廃棄遺構と考えられる。
- 第2遺構面** 第2遺構面は前述の焼土層の直下において確認された遺構面で、灰色土を基盤層とする。火事で被災した建物とこれに伴う遺構が多く検出された。遺構面には高温によって赤変、また黒く煤けた部分が拡がり、上面には炭化物の堆積などもみられる。
- 焼土面** 調査区の中央部から東にかけてと西端部分で火事によって焼け落ちた町屋の炭化物の堆積が層厚数cm認められる。炭化物には、柱材や板材などが含まれる。調査区の一部では、炭化物層の上に20~30cmの火を受けた石が散在しているのが認められた。おそらく板葺き屋根に載せられた置き石であったと思われる。
- また焼けた壁材も多く出土したが、調査区の南東隅において出土した壁材は65×60cm、厚さ5~7cmのもので、比較的壁の構造等が特定できる破片であったため発泡ウレタンで梱包して取り上げた。
- 町屋群** 第1遺構面に引き続き、町屋建物や倉庫と考えられる礎石建物も検出された。なお基本層序でも触れたとおり町屋が築かれる敷地は、調査区の東3分の1ほどを境として西側が約0.4m嵩上げされた段が造られている。
- SB202** 調査区の中央部に位置する礎石建物である。東西2間、南北4間が確認された。北辺および西辺の礎石は後世の攪乱のため削平されたと思われる。
- 礎石は1.0m間隔で0.8×0.5×0.3mの大きな石が据えられ、部分的に間や脇に小さい石を並べている。検出状況から礎石の上面中央部の柱が乗る部分以外の礎石の大半は黄灰色

粘土によって被覆されていたと考えられる。

SX207 SB201の西側の礎石列に接するように堀込まれた幅1.0m、深さ0.1~0.2mの溝状の遺構である。掘形の壁は火を受けた痕跡は認められず、埋土には焼けた瓦や炭化物が含まれるが、さらに火災の瓦礫を含む土坑SK203・207などによって切られている。火災後に礎石列を抜き取るために掘り込まれた可能性がある。

SK209 調査区の南西端に位置する、東西2.1m、南北0.8m以上、深さ0.7mの掘形をもつ埋桶遺構と考えられる。掘形の東寄りに径1mの円形で垂直に落ちる木桶と思われる跡が認められる。内部の埋土には、魚骨が多く含まれていた。

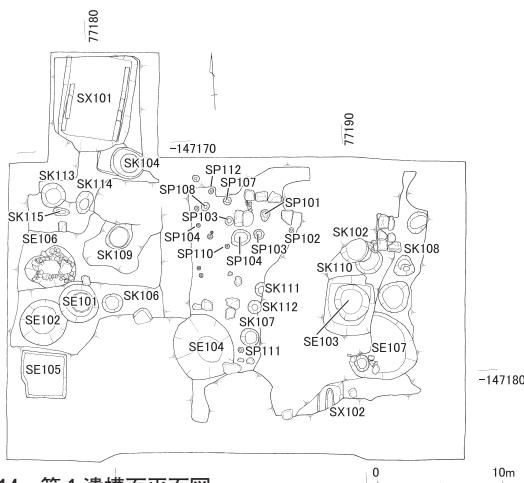


fig.114 第1遺構面平面図

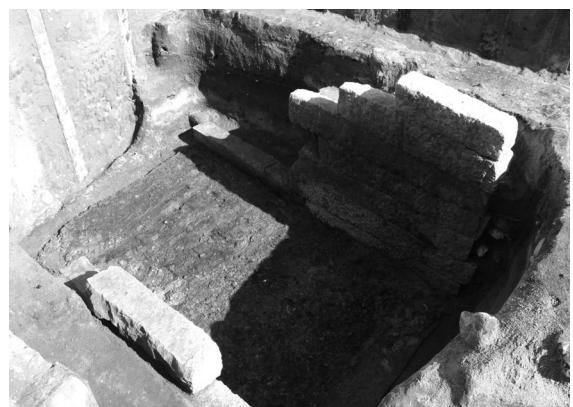


fig.115 SX101全景

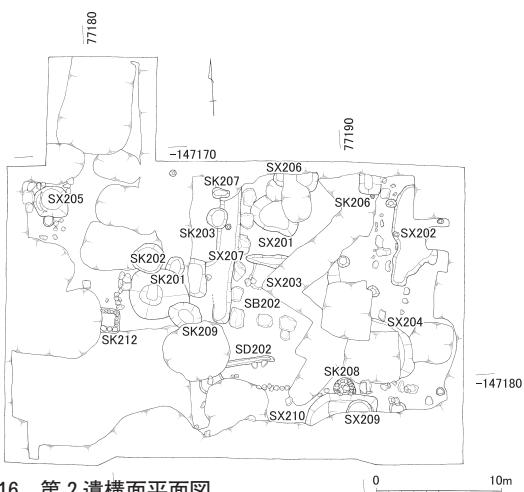


fig.116 第2遺構面平面図



fig.117 SB202全景

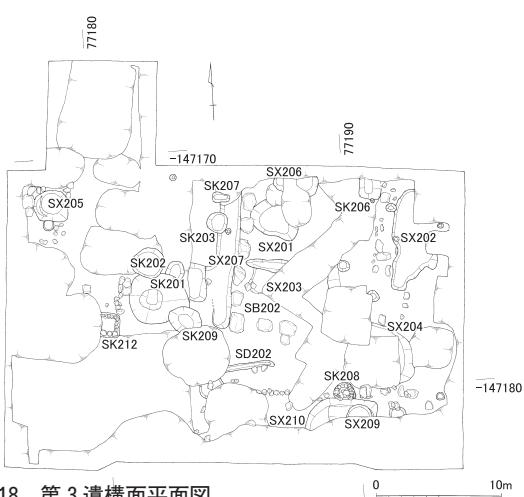


fig.118 第3遺構面平面図

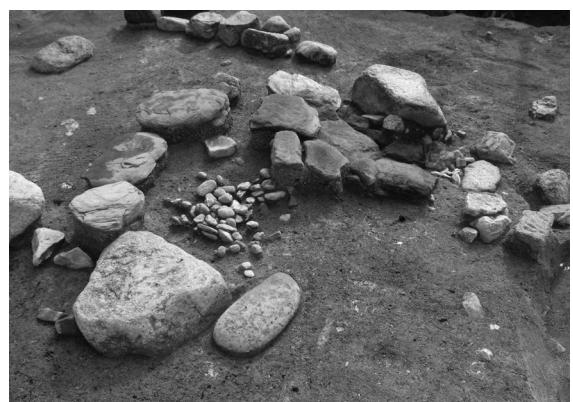


fig.119 SX303全景

第3遺構面	第2遺構面下に堆積する盛土（砂）と考えられる白灰色砂等の下に存在する淡茶褐色シルトを基盤とする。第1・2遺構面同様の町屋群とそれに付随すると考えられる土坑や石組遺構が検出された。
町屋群	調査区南部の西半分を中心として礎石列が認められる。2~3棟の建物が存在していたと考えられるが、個々の建物を抽出することはできなかった。
SX303	SB302の南西隅において検出した集石遺構である。礎石で囲まれた0.5m四方ほどの範囲に数~10cmの玉砂利が薄く敷かれている。玉砂利は硬質の滑らかなもので、色は白、暗青灰色、赤灰色、黄灰色が混じる。掘形は不明瞭である。周辺には焼けた石が散在する。
SX304	SB303の南において検出した集石遺構である。0.5×0.9mの範囲に数~10cmの玉砂利が薄く敷かれている。SX303と同様に玉砂利は硬質の滑らかなもので色は白、暗青灰色、黄灰色が混じる。
第4遺構面	第3遺構面の基盤層である淡灰茶色土と部分的に堆積する灰白色砂の下の淡灰褐色土を基盤層とする遺構面で石組遺構、土坑などが検出された。とくに調査区中央部においては多くの土坑が切り合って検出されている。
SK402	調査区の中央部に位置する東西0.6m、南北0.8m、深さ0.05mの浅い土坑である。漁獵具の錐と思われる鉄製品が多く出土した。
SK405	調査区の中央部に位置する長軸1.2m、短軸1.4m、深さ0.25mの土坑である。埋土には瓦や木切れなどが含まれていた。
SK409	調査区西部の中央に位置する、東西2.6m、南北2.5m、深さ0.85mの埋桶遺構である。掘形のやや東寄りに内径1.3m、残存高0.8mの木桶が据えられている。底板と側板の一部が残存していた。
SX404	調査区西に位置する南北1.5m以上、東西1.3m、深さ0.65mの掘形をもつ石組遺構である。内法は東西0.6m、南北1m、深さ0.6m、長方形の石組みである。石組は東面の上段が崩れているものの10~60cmの石を中心として4段程度が積まれている。石積みは密であるがとくに面を取るなどの加工は施されていない。底部は素掘りのままである。 内部には砂や粘土が堆積しており、建物に伴う貯蔵庫、ゴミ穴などの施設と考えられる。
第5遺構面	第5遺構面は、焼土を含んだ暗灰色土を基盤とする遺構面で、T.P. 1.4m前後を測る。礎石建物や土坑などが検出された。
町屋建物	調査区中央部の南半分を中心に礎石が確認された。とくに中央部の南端では、土間状の遺構がみられた。
SB501	調査区中央部の南に位置する礎石建物である。東西4m、南北5.5m以上で、東側に幅1.1mの土間状の遺構を伴う。南寄りの部分に部屋の仕切りと考えられる東西の礎石列が存在する。また南側の部屋には炉跡状の遺構SK504がある。礎石は重複して検出されているため補修や建替えが行われているようである。
SK504	調査区中央部の南に位置する0.5m四方の土坑である。中央に径0.15mの円形の窪みがある。遺構内には粘土が貼られ焼土や炭が堆積する。炉跡のような遺構と考えられる。
SK514	調査区中央部の南に位置する径1.5mの円形の土坑である。攢乱によって北側約3分の1を削平されている。断面形は台形で、埋土の下層には炭層がみられる。

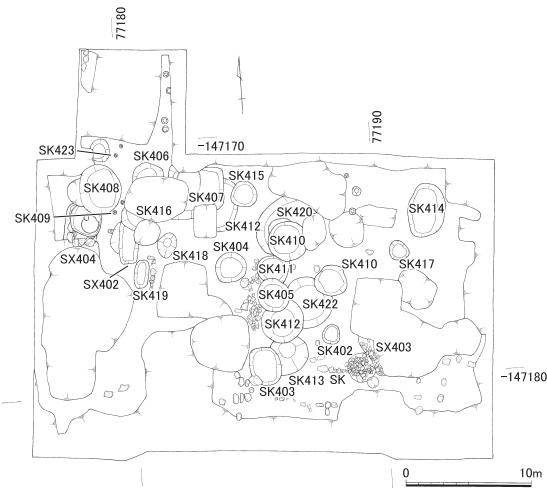


fig.120 第4遺構面平面図



fig.121 SX404全景

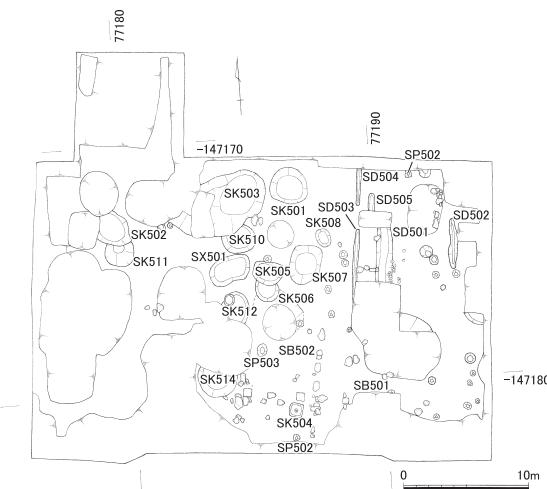


fig.122 第5遺構面平面図



fig.123 SB501全景



fig.124 SB501
磐石転用五輪塔（火輪石）

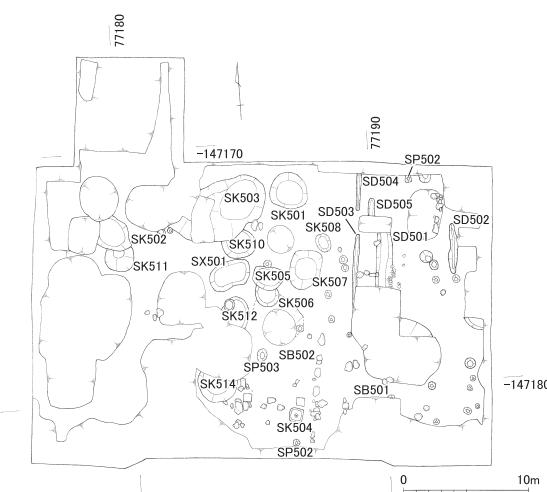


fig.125 第6遺構面平面図

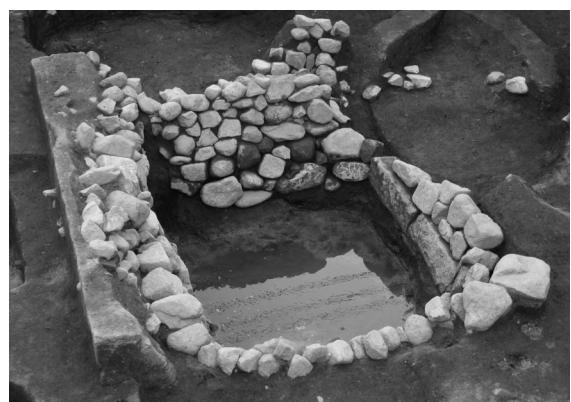


fig.126 SK602全景

- 第6遺構面** 第6遺構面は灰黄色土を基盤層とする遺構面で、石組遺構や集石遺構などが検出された。
- SK602** 調査区中央部に位置する東西2.8m、南北3.1m以上、深さ1.1mの掘形をもつ石組遺構である。西面および南面には改築の痕跡が認められる。最終段階での内法は東西1m、南北1.7mを測る。当初の規模は一回り大きく1.7m四方の正方形であったと考えられる。南の先行する石組遺構SK605を拡張、もしくは一部を利用して築いた可能性がある。
- 石組みは底部の1～2段に大きな石を据え、その上に長さ20cm前後の石を中心として3～5段積んでいる。使用される石材には転用と思われる柱状のもの、石臼や五輪塔などが含まれていた。底部は素掘りのままで特に加工はみられない。内部には砂や粘土が堆積しており、下層には完形や完形に近い唐津焼の碗・皿や中国製青花皿などが出土している。
- SK603** 調査区中央部の南端に位置する東西1.1m、南北1.6m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。掘形の壁は垂直に近く、底部は平坦である。形状から桶等の据えられていた痕跡の可能性がある。埋土には焼土が含まれる。
- SK604** 調査区の南西隅に位置する、東西2.2m、南北1.4m以上、深さ0.1mの土坑で、北側を攪乱によって削平されている。焼けた石や炭化物とともに骨が出土している。
- 第7遺構面** 第6遺構面より焼土塊を多く含んだ整地層を挟んで0.2～0.3mほど下のT.P. 1.0m前後の灰褐色土を基盤とする遺構面である。バラス敷の礎石建物や埋甕遺構などが検出された。
- SB701** 調査区東部の西に位置する礎石建物である。南北6.0m、東西2.7m以上の規模で、西辺に幅20～30cmの平らな石を用いた石列を中心に脇に小振りの石を使用した石列を伴い、また内部にも間隔をあけて礎石を配置し、その間をバラス状の小礫で覆う構造をとる。
- この遺構については、密集した並行する礎石列や土台部分へのバラスの敷き込みなど通常の礎石建物とは違う特異な構造をもっている。礎石列は加重に耐えるため、バラス敷きは防湿の効果を期待したものと思われ、倉庫施設ではなかったかと考えられる。
- なお類似の構造をもつ遺構は、隣接する第14次調査をはじめ平成9年度に実施された兵庫県教育委員会による調査においても確認されている。
- SD701** SB701の西辺に沿ってはしる幅0.2～0.45m、深さ0.05～0.15mの溝である。北方向に浅くなり、SB701の3分の2くらいで無くなる。
- SK701** 調査区の中央部に位置する東西1.4m、南北1.8m、深さ0.9mの楕円形の集石遺構である。掘形内には、長さ10～30cmの自然石が充填されている。土器などの遺物は僅かしか含まれていない。
- SK710** 調査区の東壁の南寄りの部分に位置する径1m、深さ0.9mの埋甕遺構である。SB701を切っているようであるが、土留工事の際に東側3分の2および掘形の大半が削平されており確証を得ない。
- 第8遺構面** 第7遺構面から焼土混じりの整地層を挟んでT.P. 0.6m前後で第8遺構面となる。この遺構面は淡褐色砂質土～シルトを基盤層とする。第7遺構面とよく似た構造をもつバラス敷の建物をはじめ石敷遺構、石組遺構などが検出された。
- SB801** 調査区の北西部に位置する幅0.5mのL字状の石敷き遺構である。東西方向の石列は北側に面をもち2.8m分を検出した。また南北方向は西側面を削平されているようであるが、2.2m分を検出した。掘形は深さ0.3mほどの箱形で、拳大の石が3段ほどにわたって積ま

れている。土蔵など倉庫施設の基礎と考えられる。

- SB802 調査区西部の南に位置する東西5.0m以上、南北3.6m以上の礎石建物で、上面のSB701と同じような構造をもつものと考えられる。全体に削平を受け残りは悪いものの、南辺および西辺の一部に礎石列が残り、内側はバラス混じりの粘土が厚さ0.1~0.15mほど敷かれている。

SX803 調査区中央部の北端において東西3.0m、南北2.3mの範囲で集石がみられる。掘形は不明瞭で東側には礎石状の平たい大降りの石が接して5基並ぶ。バラス敷の礎石建物に類似した建物の一部の可能性がある。

SK801 調査区の北部に位置する東西2.1m、南北1.9m、深さ0.4mの四角い掘形をもつ石組遺構である。最終堆積には黄灰色砂の堆積がみられる。また北側の石組は内部に崩れ込んでいる。内法は東西1.6m、南北1.1mで、使用されている石は拳大の石が多く石組みも雑である。集石遺構SK813・814を切って築かれている。

SK813 SK801の南辺に切られる東西1.2m、南北1.0m以上、深さ0.6mの土坑である。10~20cmの石がびっしり詰められていた。

SK814 北側をSK801に東側をSK813に切られる土坑である。径1.0m、深さ0.6mである。SK813と同様に掘形内には石が詰まっている。

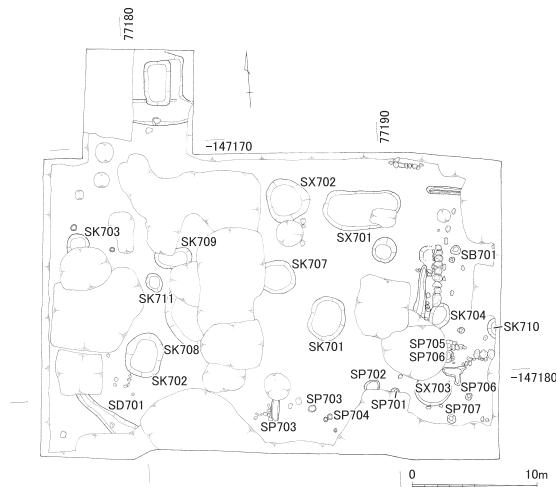


fig.127 第7遺構面平面図

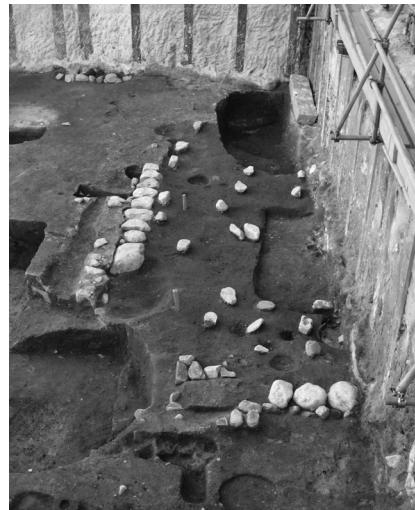


fig.128 SB701全景

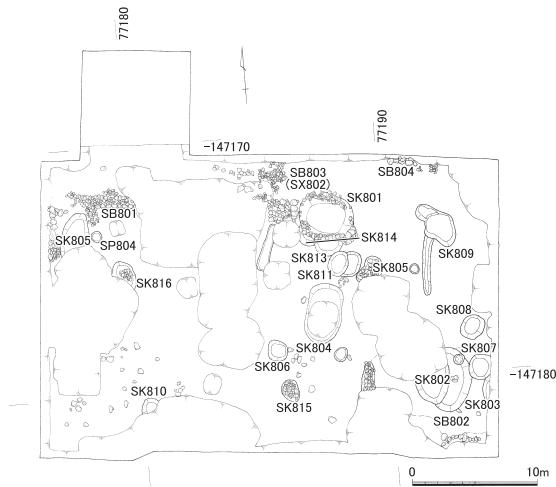


fig.129 第8遺構面平面図



fig.130 SB801全景

- 第9遺構面** 砂堆のうえに溜まった褐灰色シルト層を基盤とする遺構面で、概ねT.P. 0.4mを測る。埋甕遺構をはじめ集石土坑や礎石建物などを検出した。
- SB901 調査区の北辺に沿って礎石列が認められる。建物の一部である可能性が高い。
- SK902 調査区西部に位置する東西0.9m、南北1.0m、深さ0.2mの土坑である。掘形内には、10～20cmの石が詰まっている。
- SK903 調査区西部の西端に位置する、埋甕遺構である。掘形は、径1.0m、深さ0.4mの円形である。大型の甕が据えられている。上半部については削平のため欠損したと考えられる。同様の埋甕遺構であるSK904と東西に2基並んで検出された。内部には焼土や炭混じりの土が入り込んでいる。
- 甕の内部から、土師器皿が多量に出土している。完形のものが多く一時に投棄されたものと考えられる。
- SK904 SK903の西に隣接する埋甕遺構である。掘形は径0.8m、深さ0.2mの円形の土坑である。SK601と同様に甕が据えられている。SK903より小振りの甕である。
- SK905 SK904のさらに西に隣接する東西0.8m、南北0.5m、深さ0.25mの土坑である。土師器の甕、皿、羽釜などが出土している。
- 第10遺構面** 淡黄褐色砂の砂堆上で検出された遺構面である。ベース面が砂層のため軟弱であり全体に遺構の残存悪く、調査区の北西側に向かって僅かに砂層が落ち込んでいく。なお、この遺構面より数cm下がると湧水点に達するため、掘形が確認できなかった遺構もある。
- またこれ以下の堆積においてトレンチ調査を実施したが、遺構や遺物は確認されなかった。
- 礎石列** 調査区の北壁沿いに礎石を検出した。およそ東西方向に集約されるものの、直線的に並ばない。
- SK1001 調査区の北西に位置する東西1.0m以上、南北1.0m以上、深さ0.15mの土坑で、一部調査区外に拡がる。
- SP1007 調査区の西部に位置する、東西0.6m、南北0.5m、深さ0.1mの土坑である。北側をSP1006によって切られている。完形の土師器皿が10数枚出土している。

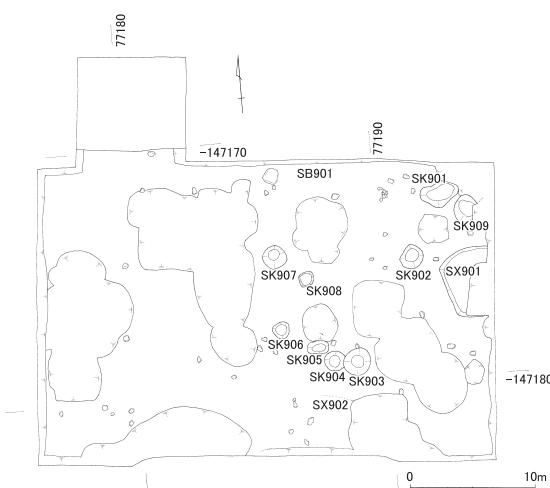


fig.131 第9遺構面平面図



fig.132 SK902全景

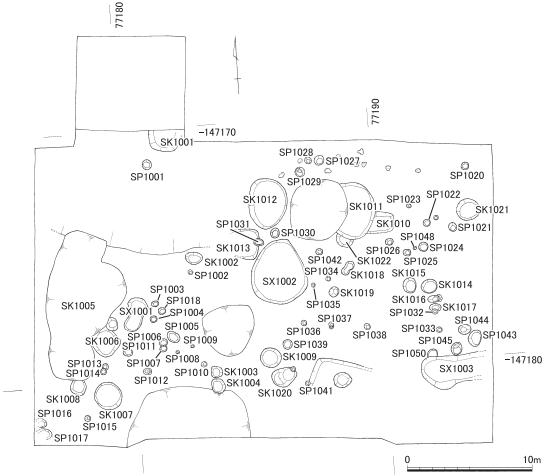


fig.133 第10遺構面平面図

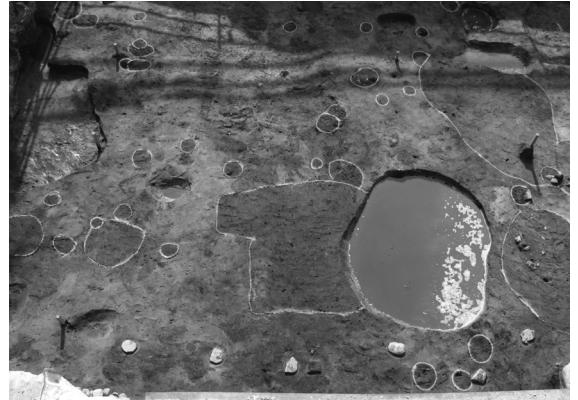


fig.134 第10遺構面東半全景



fig.135 SP1007遺物出土状況

3.まとめ

今回の調査においては、近代以降の攪乱などによって削平されていたものの13世紀から近世後半にかけての10面におよぶ遺構面と多様な遺物が確認された。

調査対象部分は推定される近世の街路から奥に入った場所にあたり、兵庫津の町屋に特徴的な街路に主屋が取り付くという建物配置からすると屋敷地の中ほどから後側の、いわゆる「裏」の部分に相当する。

また、第7および8面において検出されたSB701やSB803などのバラス敷きの礎石建物は、すぐ北の第14次調査地の第6遺構面でも同様の構造をもつものが確認されており、時期的にも齟齬をきたさない。位置的にも10数mしか離れておらず、一連の倉庫群として捉えることができよう。

さらに、第8遺構面において検出したSX801やSX802のような集石遺構についても、土蔵などの石敷基礎と考えられる。類似の遺構については、博多遺跡群などで確認されている。今後、関連する資料の蓄積によってこれらの遺構の時期や性格について明らかにしていく必要がある。

15~17. 若松町東遺跡 第3・4・5次調査

1. はじめに

若松町東遺跡は、平成19年度にJR新長田駅南側の若松町3・4丁目での震災復興市街地再開発事業に伴い、新たに発見された遺跡である。苅藻川や妙法寺川などの中小河川によって形成された複合扇状地上に立地している。

平成19年度の試掘調査に引き続き実施された第1次調査、次年度の2次調査では縄文時代晩期～弥生時代前期・中期の土坑・ピット・溝、平安時代中期頃と考えられる掘立柱建物を検出し、縄文時代晩期から弥生時代中期までの居住域、ならびに平安時代の居住域が若松町3丁目の街区の中心をほぼ南北に貫く微高地に存在することが予想されている。

これまでに再開発ビルの建設予定地において、既存の建物の撤去等が完了した部分から順次調査を行っている。今年度は3箇所で調査を実施し、それぞれに次数を付した。



今回の調査は、市街地再開発に伴うもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分について実施した。現地表面から旧耕作土までは重機により掘削を行い、それ以下の遺物包含層・遺構面までは人力により掘削・検出を行った。

2. 調査の概要

第3次調査

調査の結果、縄文時代晚期から弥生時代前期と平安時代の柱穴、溝、土坑を確認した。

基本層序 盛土・耕土の下層に2～3層の旧耕土が存在し、その下層に遺物包含層である灰褐色シルト質細砂および暗褐灰色砂質シルトが堆積している。遺物包含層は、北側ではほとんど存在せず、南東方向に向かって徐々に堆積が厚くなっていく。また、調査地南西隅でも堆積が厚く、0.2m程度の厚さである。遺物包含層の下層の濁茶灰色砂質シルト・乳黃灰色

～黄褐色シルト質細砂の上面が遺構面となっている。現地表面から遺構面までの深さは、北側で0.8m前後、南側で1.0m前後である。ただし、安定した堆積ではなく、ところどころに洪水砂と考えられる灰色および暗褐色砂礫が堆積している状況が見られる。遺構面以下については、洪水砂以外の部分では、暗灰色系と乳黃灰色系のシルトの水平堆積が遺構面下1.5m近くまで見られた。

fig.137 第3次調査
調査区平面図



溝

主に調査地の東部、西部で大小26条確認されている。

東部で検出されたやや北に振る東西方向の溝群は、おおむね幅0.2m、深さ0.1mを測り、暗灰色砂質シルトが堆積している。土師質の土器細片が出土したが、時期が判断できるものは確認されていない。いくつかの溝の底部には幅0.2m、長さ0.05mほどの鋤跡と考えられる痕跡を確認しており、おそらく耕作痕と考えられる。これらの溝の間を縫うように掘削されている真東西方向の溝（SD04）は、検出長約26m、幅約0.4m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、土師質の土器細片が出土している。北接する平成19年度調査では、今回と同様に土器の細片とサヌカイト片が出土しており、弥生時代と推定されている。平成19年度調査検出部分を含めると30m以上の長さで直線的に掘削されており、集落の区画溝、もしくは道路側溝のようなものと推定される。また、東端で検出されているSD01は、やや東に張り出すように弧を描く南北溝で、検出長約18m、幅1.0～1.6m、深さ0.3m程度を測る。東側でテラス状に緩く傾斜し、中央ではやや深くなる。埋土は黒灰色シルトで、弥生土器・突帯文土器・サヌカイト片が出土している。この溝についても北側で検出されており、全長でおおよそ30mに及ぶ。

一方、西部では、北側を中心に蛇行する溝が多く検出された。規模はおおむね幅0.3m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土は、粗砂が混じる淡茶灰褐色シルト質極細砂が堆積する。わずかに弥生土器と考えられる土器細片が出土している。南側では、東部でL字状に南に曲がる溝（SD23）を検出した。平成19年度の調査でも検出されており、全体ではクランク状の形態を呈する。全長は約25mを測る。埋土からは弥生土器の小片が出土している。

土坑

21基の土坑を検出した。形状はやや崩れた橢円形を呈するものが多く、全長は、1.0～

2.0mで、深さは0.1m前後を測る。埋土は、暗灰褐色系の色調を呈し、上層の遺物包含層と類似している。SK05からは、片岩製のタタキ石と砂岩円礫が数個並べ置かれた状態で出土している。また、SK21からは、小型の大型蛤刃石斧が出土していることが特記される。石斧は、刃部の一部、基部が欠損している。

落ち込み 不整形な落ち込みを7箇所で検出した。いずれも土坑と同様に0.1m前後の浅いものであった。埋土からは、弥生土器と考えられる土器細片が出土している。

ピット 400基近くのピットを検出した。直径0.2m前後を測るものが多い。半数以上のピットが0.1m程度の浅いへこみ状を呈するものであった。大半は、弥生土器と考えられる小片が出土しているだけであったが、P215からは、貼付突帯を施した弥生時代前期後半頃の壺片が比較的まとまって出土している。また、西部では、深さ0.2～0.3mを測る柱穴が多く見られたが、建物と関連するものかどうかは現段階では明らかではない。

小結 今回の調査では、縄文時代晩期および弥生時代前期の柱穴、溝、土坑と、平安時代以前の溝、平安時代の柱穴、時期不明の耕作溝を検出した。

縄文時代晩期および弥生時代前半の遺構については、柱穴などは主に調査地の西部で集中して確認されており、第1次・2次調査地の側に遺跡の中心があったことが明らかになった。それとは対照的に中央から東部では、柱穴などは西部に比べ検出数が減じている。東部で検出されたSD01・02などの南北溝は集落の境界を画するものであった可能性が高い。また、SK05で出土した片岩製のタタキ石をはじめ、大小の片岩がわずかではあるが出土している。産地等は不明であるが、弥生時代の地域間の交流を示す資料として重要である。タタキ石は、その材質から、大開遺跡や戎町遺跡で見つかっている石棒と同様のものであった可能性が指摘できる。

SD04は、出土した土器が細片のため時期の特定できないが、御蔵遺跡や水笠遺跡では、古墳時代～奈良時代の掘立柱建物は真北方向を意識して築かれていることがわかっている。SD04も真東西方向に近い方向で掘削されていることから、先の建物と同様の時期のものと推定される。

平安時代については、第1次調査で確認された掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を検出したが、ほかの建物は検出されなかった。調査地南半に堆積する遺物包含層から平安時代後期以降の土器も確認されていることから、平安時代後半には、湿地状の地形もしくは、耕作域として利用がなされていたものと推定される。

また、東部で検出された耕作痕と考えられる溝について、時期の明確な遺物が確認されていないため、正確な時期は不明であるが、大橋町遺跡で検出された鋤溝とほぼ直行する方向性などから古墳時代から飛鳥時代頃と推定される。

第4次調査

調査の概要 盛土および旧耕作土については重機によって掘削を行い、遺物包含層および遺構については人力により検出等を行った。残土の仮置きなど調査地の都合上、南北2分割して調査を実施した。調査の結果、縄文時代晩期および弥生時代前期の竪穴住居状遺構・土坑・埋甕・柱穴、中世の掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・耕作痕など多くの遺構が確認された。

基本層序 現地表面下に、盛土、旧耕作土が堆積し、北側ではその下に第1面の遺構面となる灰褐色シルト質細砂（西側では細砂）、さらに下層に第2面となる灰茶色質細砂が堆積する。一方南側では、旧耕作土の下に弥生時代の遺物包含層および第1面となる暗灰褐色シルト質細砂・灰褐色砂質シルト、さらにその下に第2面となる灰黒色細砂～粗砂・淡灰茶色シルト質細砂が堆積している。第2面は茶色系と乳黃灰色シルトおよびシルト質細砂が堆積する部分と灰色と暗灰色砂礫が堆積する部分とが縞状に見られる。縄文時代晚期以前の流路に起因する堆積の違いであろうと考えられる。

また遺構面以下については、遺構面から下約2.8m程度まで掘削を行った結果、2.0mあたりまでは、乳黃灰色粘土と暗灰色シルトが交互に堆積し、さらにその下には青灰色砂質シルトおよびシルトが堆積していた。

検出した遺構は、中世の区画溝および耕作痕跡、平安時代後期の掘立柱建物1棟、柱穴、弥生時代後期以降の溝、縄文時代晩期～弥生時代前期の掘立柱建物1棟、竪穴住居状遺構4基、土坑36基、ピット175基、弥生時代前期以前の河道を1条検出した。



fig.138 第4次調査第1遺構面平面図

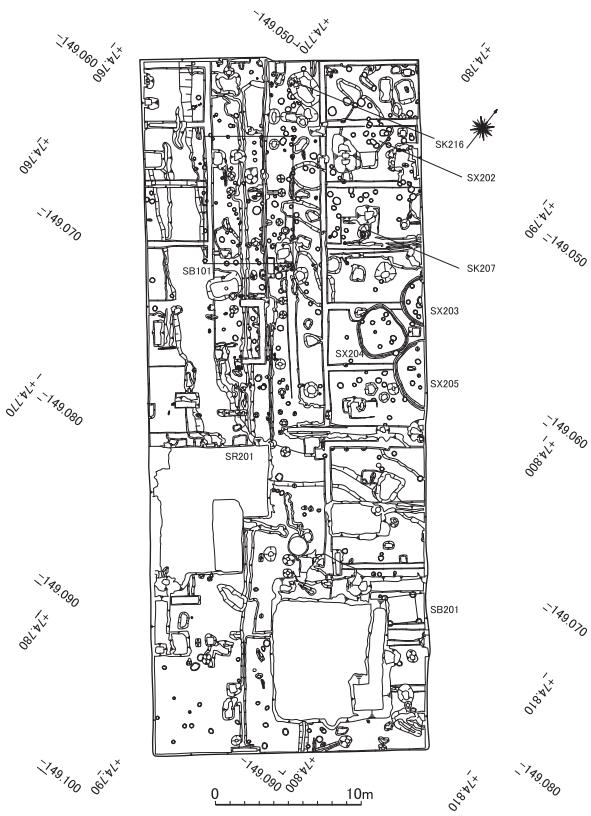


fig.139 第4次調査第2遺構面平面図

清

調査区全体で中世の耕作に伴うと考えられる溝が検出された。

調査地の西側で検出されたSD101・102は、検出長約47.0m、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る平行に掘削された溝である。その間隔は約3.0mを測る。南側では再掘削が行われたような堆積状況が確認される。また北側では、SD101・102に近接してSD113・114が掘削されており、ある程度の期間同様の区画が踏襲されていたものと考えられる。また、これらの溝に直行する東西方向の踏み跡状の溝であるSD112は一部で途切れているが、全長約35.0m、幅約0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。これらの溝からは平安時代後半~鎌倉時代の

ものと考えられる土器が出土している。一方、調査地の北部東半分では幅0.2m、深さ0.1~0.05mを測る南北方向の浅い溝が10条あまりの溝が検出されている。埋土が直上層の黄灰色シルト・シルト質細砂が堆積しており、中世以降の耕作溝と考えられる。また中央付近で、これらの溝に削平されるように真北方向の検出長約7.0m、幅0.2~0.3m、深さ約0.1mを測る溝が1条検出されている。埋土からは、弥生時代後期と考えられる土器が出土している。

掘立柱建物 SB101は、調査地北半で検出された4間×3間の総柱の掘立柱建物である。柱穴の直径は約0.2m、深さ0.3~0.5m、柱間は一部では異なる部分があるが約1.8mを測る。大半の柱穴の埋土は、乳黄灰色シルトがブロックで混じっていた。柱穴からは、完形の土師器皿などが出でおり、平安時代後半ごろのものと考えられる。

SB201は調査地東半分南側で検出された1×1間の掘立柱建物である。柱穴は、直径約0.4m、深さ0.2mを測り、柱穴間は柱穴中央間で約2.0mを測る。柱穴からは、弥生時代前期と考えられる土器が出土している。

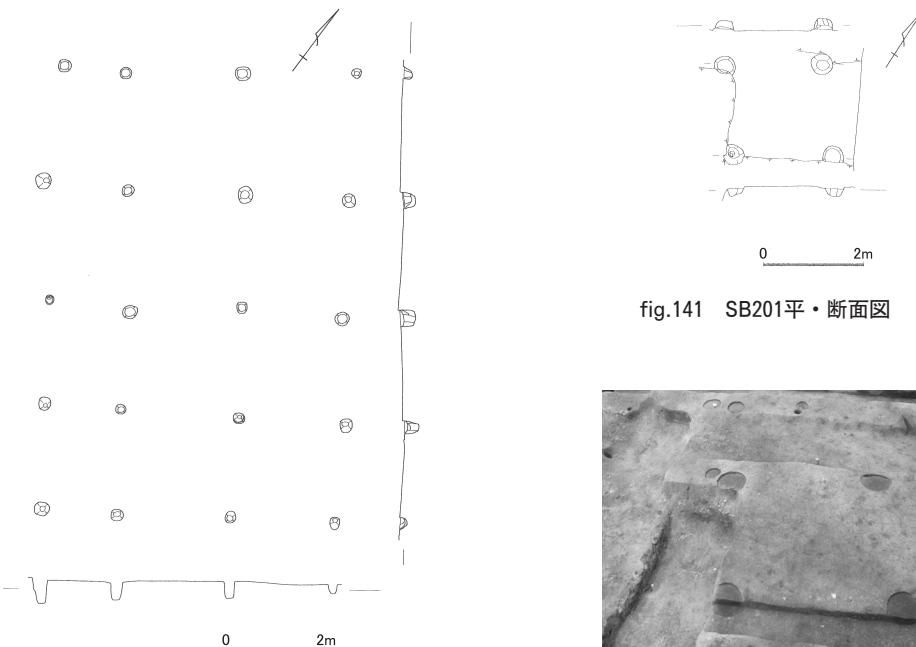


fig.140 SB101平・断面図



fig.141 SB201平・断面図

竪穴住居状遺構 3.0~5.0m程度の不整形な竪穴住居状の落ち込みを中心部付近に3ヶ所、北端で1ヶ所検出した。

北部で検出したSX202は不整形な隅丸方形状を呈する遺構で、1辺が約3.0m、深さ0.1mを測る。遺構内にはピットが見られるが、上層からの掘り込みと遺構に伴うと考えられるが非常に浅い凹み状を呈するものであった。また、周壁溝や中央土坑など付帯施設も見られなかった。埋土からは、弥生土器と考えられる土器細片が出土している。

中央部で検出したSX203~205はきわめて近接しているため、時期差があるものと考えられる。SX203については、全体を検出しており、長径3.6m、短径3.0mの橢円形で、深さ0.2m程度を測る。幅0.2mの周壁溝がまわる。床面にはピットが9基検出されたが、柱

痕跡はなく、深さも0.1~0.15m前後と浅い。埋土からは、弥生土器と考えられる土器細片が少量出土した。また、SX205は東壁際で検出され、全体のおおよそ半分を検出したと考えられる。形状は円形で直径約5.0m、深さ約0.2mを測る。北側の一部では切れているが、幅0.2m程度の周壁溝がまわる。床面には、5基のピットを検出したが、わずかに1基のみが直径0.2m、深さ0.2mを測るが、それ以外は明瞭な痕跡が見られない。埋土からは、弥生土器と考えられる土器が出土した。

土坑

主に調査地の北から中央にかけて多く検出されている。大半は、SK206・208・218は、調査地北端から中央で検出された土坑群で、長さ約2.0m、幅0.8m、深さ0.4~0.6mを測る。埋土は、暗灰色砂質シルト～濁オリーブ灰色シルト質極細砂で、下層では遺構面と類似した色、質になる。SK208からは、弥生時代前期の円弧文が施された土器片、SK218からはハケ調整が施された土器底部が出土している。断面の形状はいずれもやや崩れた箱形を呈している。またこれらの土坑からは、堅果類の種子などは確認されていない。

埋甕

SK207は調査地北半で検出された縄文時代晩期の埋甕で、土坑の掘形は直径0.7m、深さ0.2mを測る。土坑の底に口縁部を南に向けるように突帯文土器の甕を横に据え置き、その後、土器の底部から体部下半部の部位をかぶせた状態で出土した。また口縁部については、他の土器の破片が出土しておらず、開放状態であったものと考えられる。そのため、少なくとも2個の土器が使用されていると考えられる。底部の打ち欠きなどは不明瞭であった。甕内には淡赤茶色シルト質細砂が堆積していた。

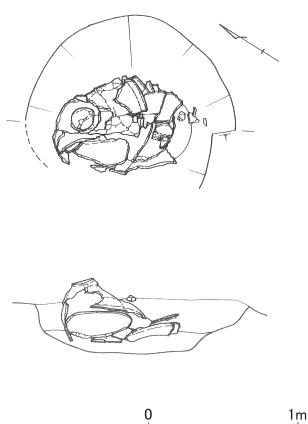


fig.143 SK207平・断面図

fig.144 SK207検出状況
(断面)



fig.145 SK207検出状況



ピット

調査地全体で、175基のピットを検出した。特にSB101の周辺で検出したものは、SB101の柱穴と同規模のものが多く、先述したように建て替え、もしくは別の建物を構成したものと考えられる。また、北東部でもまとまってピットが検出されており、建物が存在した可能性があるが、今後検討する必要がある。

河道

SR201は、調査地北西隅から南流し、調査地中央付近で、東に流れを変える河道である。検出長約42m、幅約1.0~3.0m、深さ0.6mを測る。埋土は下層から中層は、茶褐色砂礫で、上層は暗褐色粗砂が堆積している。土器細片のみが出土しており、時期は不明であるが、

東端付近でSK206に一部削平を受けているため、弥生時代前期以前のものと考えられる。

小結

今回の調査では、縄文時代晚期および弥生時代前期の竪穴住居状遺構・土坑・埋甕・柱穴、中世の掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・耕作痕など多くの遺構を検出した。

縄文時代晚期および弥生時代前期については、竪穴住居状遺構・土坑をはじめ比較的多くの遺構が確認された。

竪穴住居状遺構は、直径が3~4m程度と規模が小さく、周壁溝が備わっているが、明瞭な柱穴や中央土坑など竪穴住居に付帯する施設が欠如しているため現在のところ竪穴住居と断定はできない。1間×1間のSB201については、弥生時代のものであるとすれば、その規模から竪穴住居のようなものである可能性も考慮する必要があると考えられる。

土坑は、深さが0.1m程度の浅い落ち込み状のものと、深さ0.3~0.4mの比較的深いものが確認されている。後者についてはSK206・208・218がそれにあたる。これらについては埋土から種子、骨などが確認されておらず、食料貯蔵穴・墓の可能性は低い。また、これらの土坑は、形状・規模が同様である上、ほぼ等間隔に配置されているように見え、環状に土坑が配置されていた可能性がある。

埋甕は、土器の形態から長原式に並行する時期のものと考えられる。現在のところ墓のようなものと考えられるが、周辺での類例を調査し、その性格を検討する必要がある。

平安時代については、区画溝と考えられる南北溝や鋤溝、4間×3間の総柱建物(SB101)を1棟検出した。南北溝は、調査地内を現在の地割りに沿って南北に確認されており、同規模の直行するSD112が区画溝と捉えるならば、現況に近しいものであったと考えられる。切り合い関係から、SD101・102などの南北溝や東西溝SD112のほうが建物より新しいものであり、鎌倉時代以降ものと推定される。また、平安時代ごろと考えられる柱穴は、北側で主に検出されており、建物が建てられた範囲は、南には広がらないものと考えられる。

第5次調査

調査の概要

今回の調査地の北側では、平成20年度に実施された第2次調査において多数の掘立柱建物に付属するとみられる柱穴が検出されている。また南西側で実施した第4次調査では、平安時代中頃の掘立柱建物1棟と縄文時代晚期の埋め甕を伴う土坑や竪穴住居3棟が確認された。このように若松町3丁目から4丁目の南北に伸びる微高地には、第1次調査の当初から予想された縄文時代から平安時代の集落遺跡が連綿と分布しており、今回の調査地点においても、同様の遺跡が展開していると予想された。

調査区は現在確認されている若松町東遺跡の南西部に位置する。震災後の整地層、近代～戦前の建物基礎、整地層の下に近世～近代の旧耕作土が堆積している。その下に調査区北西部では、茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土の遺構面がみられる。一方、調査区東部および東南部では厚さ5cm～25cm前後の縄文土器・弥生土器・須恵器を含む黒灰色粘性砂質土が堆積し、この遺物包含層は北西部から南東部により分厚く堆積している。したがって茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土の遺構面は緩やかに北西から南東に傾斜している。検出遺構は、北西部の茶褐色砂と南東部の黒灰色粘性砂質土上面で柱穴と考えられる小型ピット群や溝を検出した。この小型ピット群の検出した遺構面の標高はT.P. 5.0mで、ほぼ調査区域内

では平坦である。この第1遺構面において掘立柱建物9棟、溝4条を検出した。

さらに黒灰色粘性砂質土の遺物包含層を除去し、茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土の遺構面を精査した結果、39ヶ所の柱穴状ピットを検出したが、ピット内からの明確な遺物はなく、掘立柱建物としてのまとまりも欠いている。(第2遺構面)

第1遺構面 掘立柱建物

- SB01 調査区南辺中央で検出した南北4.0m以上(2間以上)、東西5.0m以上(2間以上)の掘立柱建物である。南北の柱間は北より1.6m+2.4m、東西の柱間は2.5m等間を計測する。柱掘形は直径0.35~0.5mの円形で、深さ0.3~0.4m前後を残す。建物の北西よりに東柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。
- SB02 調査区南辺中央東側で検出した南北4.7m以上(2間以上)、東西6.0m以上(3間以上)の掘立柱建物である。南北の柱間は2.3m等間、東西の柱間は西より1.8m+1.8m+2.4mであるが、北西の隅柱は現代の攪乱によって滅失するものの、両側に沿うように柱を建て据え替えているものと推定される。柱掘形は直径0.4m前後の円形で、深さ0.3~0.4m前後を残す。建物の南西よりに東柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。
- SB03 調査区中央東側で検出した南北6.9m(6間)、東西5.7m(3間)の南北棟の掘立柱建物である。南北の柱間は北から2.4m+1.8m+1.8m+1.2m+1.2m、東西の柱間は西より2.1m+1.8m+1.8mを計測する。柱掘形は高位にあたる北西側の掘形は直径0.5m前後、深さ0.5m前後の円形、低位の南東側の掘形は直径0.25m前後、深さ0.25m前後を計測することから北西から南東に削平を被っていると考えられる。建物の棟方向は、北39°西を探り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。
- SB05 調査区東辺中央部で検出した南北3.9m以上(2間以上)、東西2.1m以上(1間以上)の掘立柱建物である。南北の柱間は北から2.1m+1.7m、東西の柱間は2.1mを計測する。柱掘形は直径0.3~0.4m、深さ0.25~0.4mを残存させている。建物の南西よりに東柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。
- SB06 調査区北部西よりに検出した南北4.5m以上(2間以上)、東西6.0m(3間)の東西棟と推定される掘立柱建物もしくは南側部分1間分が柵列、別棟建物であることも考えられ、当該建物が南北1間以上、東西3間の掘立柱建物の可能性もある。南北2間以上、東西3間以上の場合、南北の柱間は北から2.4m+2.1m、東西の柱間は西から2.4m+1.8m+1.8mを計測する。柱掘形は建物の北部で一辺0.6m前後、深さ0.4~0.5mを残す方形掘形であるが、南側近代の攪乱を受けた掘形は直径0.3~0.4m前後、深さ0.3m前後の円形掘形を残存させている。東柱は南北には揃わないが東西に並ぶ柱が2ヶ所確認でき、総柱の掘立柱建物と考えられる。建物の方向は梁方向で、北39°西を探り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。
- SB07 調査区中央部西よりに検出した南北4.2m(3間)、東西4.5m(3間)の東西棟と推定される掘立柱建物である。南北の柱間は北から1.5m+1.2m+1.5m、東西の柱間は西から

1.5m + 1.8m + 1.5m を計測する。柱掘形は直径0.4~0.5m、深さ0.3m前後の円形掘形である。束柱は直径0.25m前後、深さ0.2m前後の小型の柱掘形を設け総柱建物としている。建物の棟方向が南北棟とすれば、建物方向はほぼ真南北方向と考えられる。

SB08 調査区中央部西よりSB07に重複して検出した南北5.1m（3間）、東西4.7m以上（3間以上）の南北棟と推定される掘立柱建物である。南北の柱間は北から1.5m + 1.8m + 1.8m、東西の柱間は西から1.5m等間を計測する。柱掘形は一辺0.5~0.9m、深さ0.3m前後の方形掘形である。束柱と想定される柱は一辺0.25~0.5m前後、深さ0.2m前後の不定型の柱掘形を設けたとみられるが、通りは不揃いであり総柱建物かどうかは検討を要する。建物の棟方向が南北棟とすれば北39° 西を取り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。

SB09 調査区北西部隅に検出した南北6.0m以上（3間以上）、東西4.5m（3間）の東西棟と推定される掘立柱建物もしくは柵列の隅部である。建物もしくは柵の北西側は調査区外になる。南北の柱間は北から2.7m + 1.8m + 1.5m、東西の柱間は1.5m等間を計測する。柱掘形は一辺0.3~0.7m、深さ0.2m前後の方形掘形である。柱列方向はほぼ真南北方向と考えられる。

溝SD01 調査区のほぼ中央を南北の敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘りこまれた状態で検出された。幅0.6~0.75m、深さ0.12~0.15mの断面形皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は調査区の南側では不明確であり、明確に検出できず、削平された可能性もある。

溝SD02 SD01の東側約2.0m（心間距離）に平行して、調査区のほぼ中央を南北の敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘りこまれた状態で検出された。幅0.8~1.1m、深さ0.25m前後の断面形が皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、中層に褐灰茶色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積する。溝は攪乱を被りながらも深さ0.05m前後で、調査区の南側に浅く続く。

溝SD03 SD02の東側約2.5mに、やや方向を東に振り、調査区のほぼ中央東寄りを南北に敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘りこまれた状態で検出された。幅0.5m、深さ0.1m前後の断面形が椀状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は攪乱を被りながらも深さ0.05m前後で、調査区の南側に浅く続く。

溝SD04 SD02 の東側約4.0m（心間距離）にSD01・02に平行して、調査区の東側を南北の敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘りこまれた状態で検出された。幅0.9~1.1m、深さ0.25m前後、断面形が皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる。溝は調査区の半ばから南側では不明確であり、明確に検出できず、削平された可能性もある。

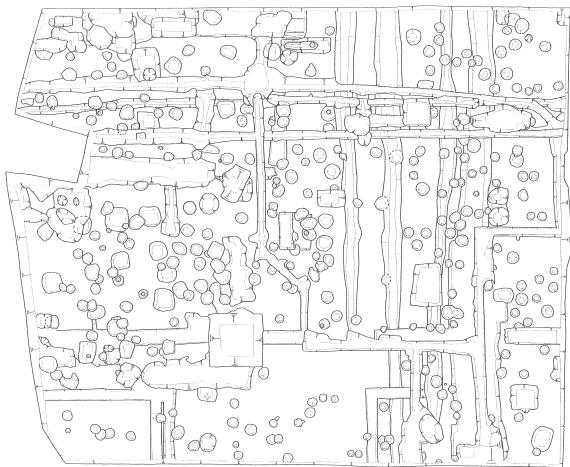


fig.146 第5次調査第1遺構面平面図

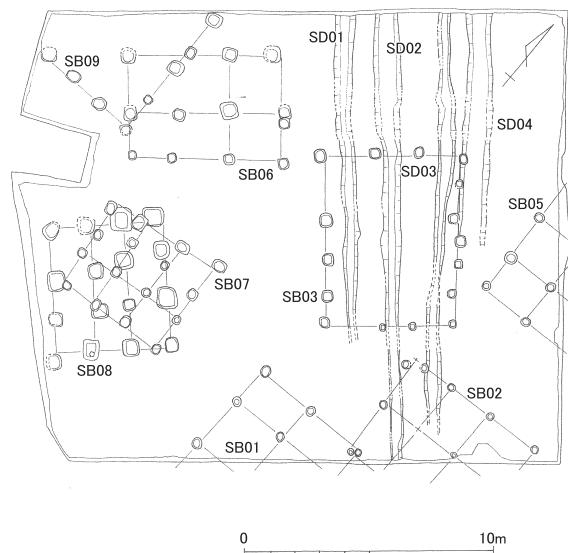


fig.147 第5次調査主要遺構配置図

第2遺構面 第1遺構面を形成する黒灰色粘性砂質土を除去した結果、調査区の北西部から南東部に傾斜する淡黄色粘性砂質土の基盤面を検出し、37ヶ所の円形小型ピットを検出した。ピットは直径0.3m前後で、深さ0.2~0.3mを計測する。特に調査区南西部、南東部で検出したピットの中には柱痕跡を残すものも含まれている。

小結 今回の調査地は、第1次調査の第5区調査地の南側にあたる。第1次調査の第5区調査地では多数の柱穴群が検出されたが、後世の攪乱、削平のため建物としてのまとまりを欠く検出状況であった。今回の調査においては、真南北を採用する建物群と現在の街路方向に近い方向を採用する建物群を検出した。この両建物群の時期差は、真南北を採用するSB07が街路方向に近い方向を採用するSB08の柱掘形を切ることから、街路方向に近い方向を採用する建物群が先行して建てられた可能性が高い。しかしながら、出土遺物からみれば建物を検出した遺構面である黒灰色粘性砂質土からの遺物が、わずかに須恵器甕腹片がみられるのみで、柱穴の埋土からは弥生土器細片が出土しているだけである。したがってこれら建物群の時期、性格については、周辺調査の柱穴埋土からの出土遺物、建物方向など遺構の検出状況、建物の復原についても、検討が必要であろう。

第2遺構面については、今回の調査区の西側の第4次調査地の北半部において、黒灰色粘性砂質土の下面で縄文時代晩期～弥生時代前期の竪穴住居および土坑が検出されていることから丹念な精査を試みたが、ピット等を検出するのみで、当該時期の遺構は検出されなかった。

3.まとめ 平成19年度より実施している同事業地での調査においては、今年度に実施した各調査地の北西側において縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構、平安時代の遺構などが確認されていたが、今回の各調査地においてもそれらと同時期の遺構の広がりが確認された。若松町3丁目から4丁目の南北に伸びる微高地には、縄文時代から平安時代の集落遺跡が断続的に分布している様相が明らかになりつつある状況といえる。

18. 戎町遺跡 第67次調査

1. はじめに

戎町遺跡は昭和62年の第1次調査を契機にこれまで、66次に及ぶ発掘調査が行われた。その結果、弥生時代における西摂平野西端の拠点集落としての様相が明らかとなってきた。今回の調査地点である寺田町周辺は、平成13年度に神戸国際港都建設事業鷹取東第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う試掘調査により、遺跡の範囲が広がった地区である。当該地の西側に接する道路は区画整理事業に伴う第56-2次調査として調査結果が報告されている。そのため、その調査成果から、今回の工事の影響で遺跡が損壊される範囲を対象に発掘調査を行うこととなった。



2. 調査の概要

基本層序

現地表面から0.2~0.5mは盛土及び搅乱土である。その下層には層厚0.3mの黄灰色の砂質土を中心とした旧耕土層が数層あり、その下層が層厚0.1mの弥生土器を多く包含する暗灰色石混じり粘質土となっている。その下層には0.06mの灰褐色粘質土の遺物の少ない土壤化層があり、その土層の下に遺構を検出した暗灰色シルト質極細砂が続いている。遺構検出面の標高はT.P. 10.60m前後である。

検出遺構

検出した遺構は、溝4条と土坑1基、ピット6基である。溝は調査区のほぼ中央を南北に真っ直ぐ流れるSD01と、そのSD01に交わるSD02、調査区西端で東西方向の短く幅の狭いSD03、そのSD03と直交するSD05、調査区南端でSD06を検出した。

SD01

SD01からは多くの弥生時代中期の土器片が出土した。規模は北端部の幅が1.2mで、南端部の幅が0.45mを測る。北端と南端の底部には、流れを二分する背があり、流れの筋を変えていたものと推定される。溝の深さは検出面から北端で26cm、南端で8.5cmを測る。

- SD02** SD02はSD01に弧を描くように交わる溝である。溝の幅は0.5~1.0mを測る。溝の深さは検出面から北端で16cm、南端で13.5cmを測る。SD01に比べると溝の底が浅くなっている。遺構の切り合いからSD02が先行し、後にSD01が流れたものと考えられる。なお、調査区南東隅で溝を検出し、SD04としたが、溝の深さ、規模、流れの方向からはSD02の続きであり、同じ溝と判断した。
- SK01** SD01とSD02が交差する地点、SD01の底部を掘り窪めた長楕円形の土坑が検出された。SD01の流れる方向に楕円形であり、長径1.2m、短径0.55m、遺構面からの深さは0.35m、SD01の底からの深さは0.15mを測る。水辺での祭祀に伴う遺構と考えられたため、玉類などの微細な遺物の検出を試みて、埋土を土壤洗浄して選別を行ったが出土しなかった。
- SP01~15** 当初15基のピットを検出したが、断ち割り調査を行った結果、大半が深い凹みであることが判明した。しっかりとしたピットとなつたものはSP01・03・07・10・13・15の6基だけである。

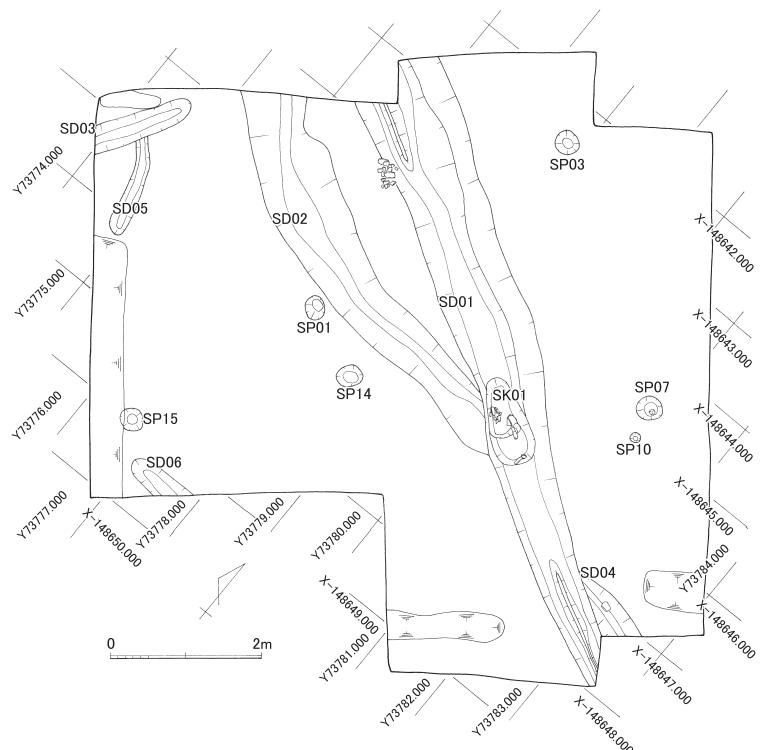


fig.149 調査区平面図



fig.150 SD01・02及びSK01検出状況

3. まとめ

今回の調査区は、周辺の街路部分が神戸国際港都建設事業鷹取東第二地区震災復興区画整理に伴う発掘調査の成果と今回の検出遺構を整合してまとめとする。

今回の発掘調査では、北西から南東に流れる真っ直ぐな溝であるSD01が注目される。この溝の延長を周辺調査区の検出遺構にあてはめると、56-2次調査のI区で検出された溝、さらに35-9次調査区にも同じ方向で溝が連なっている。同じ溝であるかどうかは距離が離れており判然としないが、平面図上では方向と位置関係が一致している。確認できる総延長は60mであり、同一の溝であれば長大な溝といえる。また、35-2次調査と50-3次調査では、今回のSD01と直角に交わる同様の真っ直ぐな溝が検出されている。またSD01の方向と寺田町1丁目の調査区で検出された鋤溝群の方向が一致している。これらの鋤溝については、明確な時期が特定されていないが、弥生時代中期以降に耕作地として利用された可能性が高い。このことから寺田町周辺で検出された弥生時代中期の集落には、すでに規則的な区画が意識されていたことは第35・38・50・56次調査結果から報告されていたが、そのことを補足する資料が今回の調査においても検出することができた。今回の調査区は集落を画する地点であり、遺構や遺物が比較的希薄であったことも土地利用の差異と考えられる。

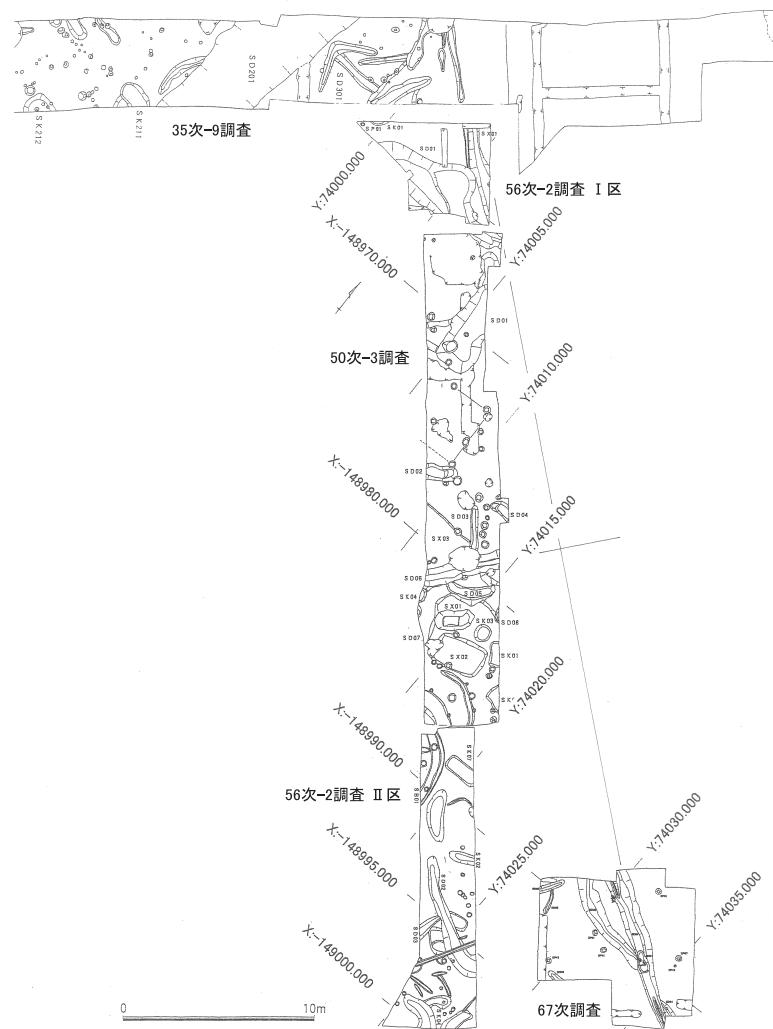


fig.151 第67次調査地周辺の遺構

19. 出合遺跡（試掘調査）

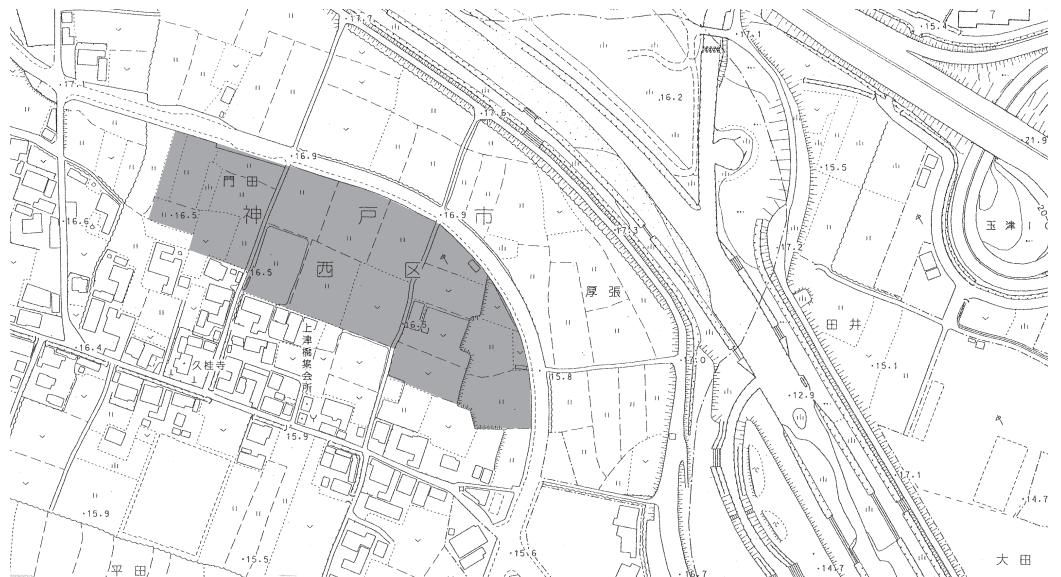
1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域の右岸の沖積地から段丘上に広がる旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。昭和52年度にはじめての発掘調査が実施され、試掘調査のほか、これまでに44回の発掘が行われている。平成15年度から始まった圃場整備事業に伴う試掘調査、発掘調査では、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代の遺構・遺物が確認され、遺跡の範囲、時代など、その内容が明らかになりつつある。

今回の試掘調査は、昨年度から引き続き実施したもので、宅地開発計画地域の5地点にトレーニング（第9～13トレーニング）を設定し、遺構の時期、密度と遺構面の面数等を確認するための調査を行った。

2. 調査の概要

今回の試掘調査は前年度試掘調査を実施できなかった宅地開発計画地域の東部を対象とし、5地点に調査区（第9～13トレーニング）を設定し、確認調査を行った。耕作土及び旧耕土を重機で、それ以下を人力によって掘削した。確認された遺構は壊さずに埋め戻すという方針で調査を行ったため、下層の遺構面については上の遺構面で遺構のない部分のみの調査となった。



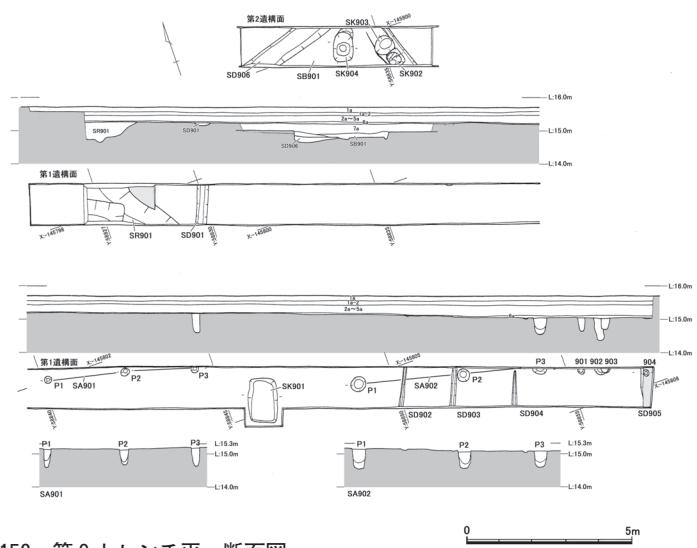


fig.153 第9トレンチ平・断面図

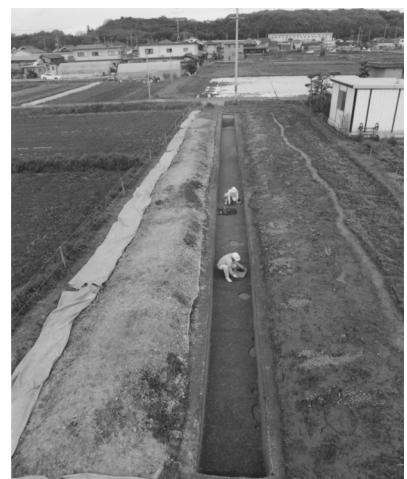


fig.156 第9トレンチ全景

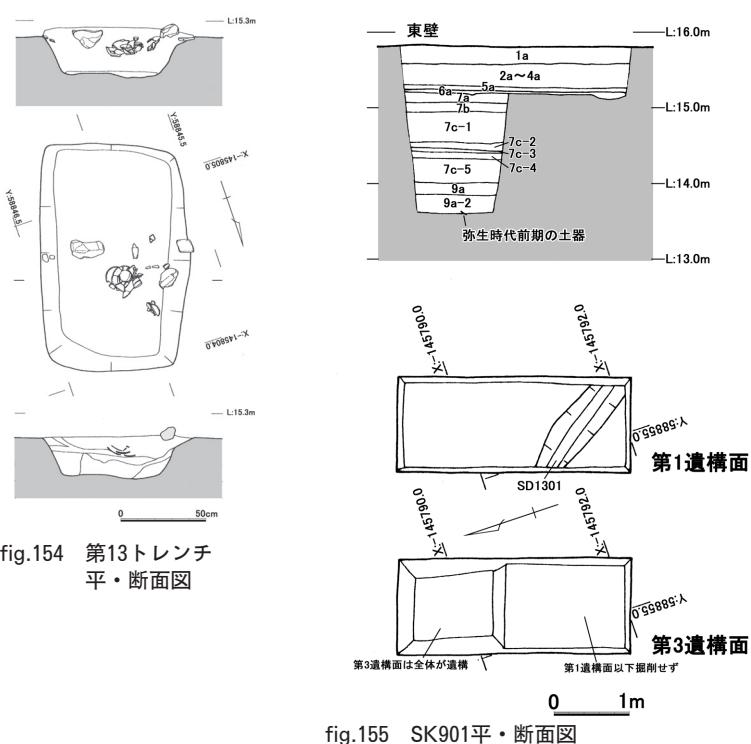


fig.154 第13トレンチ平・断面図

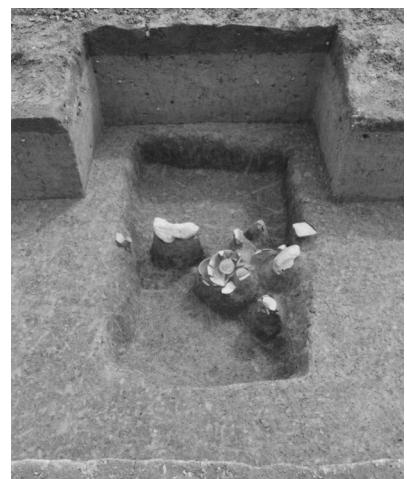


fig.157 SK901全景

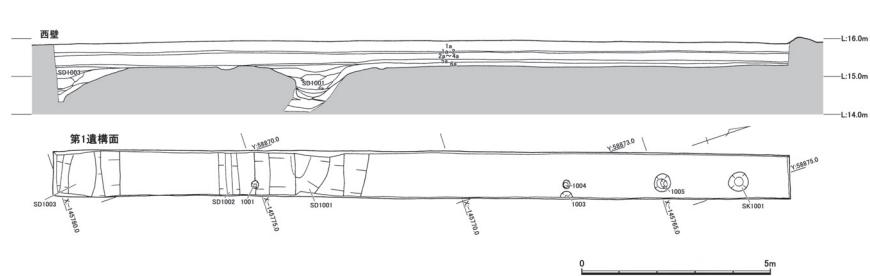


fig.155 SK901平・断面図

fig.158 第10トレンチ平・断面図

1a: 現表土（水田耕土） 1a-2: 床土 2a~4a: 旧耕土
5a: 中世の表土（灰色シルト質粘土） 6a: 古墳時代前期～中世の表土（灰色シルト質粘土）



fig.159 SK1001全景

11・12トレンチでは現・旧耕土の下層はすべて砂礫層で、遺物等も確認されなかった。

第9トレンチ 長さ33m、幅1.2mの東西方向のトレンチ。旧耕土下に薄く残る6a層下面で第1遺構面が検出される。この面では古墳時代前期から中世までの掘立柱建物となる可能性のある柱穴列、溝・土坑などの遺構が確認された。SK901は南北1.32m、東西0.9m、遺構面からの深さ0.22mを測る土坑で、平安時代の遺物が出土した。7a層下で検出される第2遺構面はトレンチの西寄り、長さ5.6mの範囲について調査を行い、古墳時代前期の竪穴住居、土坑等を検出した。第3遺構面については調査を行っていない。

第10トレンチ 長さ19.0m、幅1.2mの南北方向のトレンチである。6a層下面で第1遺構面が検出される。6a層及びこの面の遺構からは古墳時代前期から中世までの遺物が出土し、第1遺構面では焼けたスサ入り粘土塊が多く出土した平安時代前期の土坑（SK1001）のほか、柱穴、溝等の遺構を確認した。第2遺構面以下については調査を行っていない。

第11・12トレンチ

第11トレンチは延長8.0m、幅1.5mの東西方向、第12トレンチは長さ4.5m、幅3.5mの調査区である。ともに旧耕土層以下は砂礫層＝河川堆積であった。両トレンチは明石川寄りの一段下の段丘面にあり、この面は明石川の旧流路にあたり、遺跡は存在しない可能性が高い。

第13トレンチ 長さ3.1m、幅1.2mの南北方向のトレンチ。6a層下面で第1遺構面が検出される。この面での遺構としては溝が検出されている。7a層下面の第2遺構面では調査面積が狭いこともあってか、遺構は検出されなかった。地表下約1.8mで検出される9a層からは、比較的多くの弥生時代前期の遺物が出土している。その下面の第3遺構面に該当すると思われる面は、調査部分全体が遺構埋土にみえる黒褐色シルトであり、この土層（9a-2層）にも弥生時代前期の土器が含まれる。調査範囲が遺構の中に収まっている可能性、あるいはこの面に対応する表土層が厚く形成されている可能性が考えられる。なお、掘削深度の関係で9a-2層を掘り切ることはできなかった。

3.まとめ

先年度及び今回行った試掘調査によって遺跡の存在する範囲と遺構面の時代・面数について確認することができた。

計画地の東部、第11・12トレンチを設定した段丘面が一段下がる部分は旧河道にあたり、遺跡の存在は確認されなかったが、それ以外の事業地内に遺構・遺物が分布することが判明した。

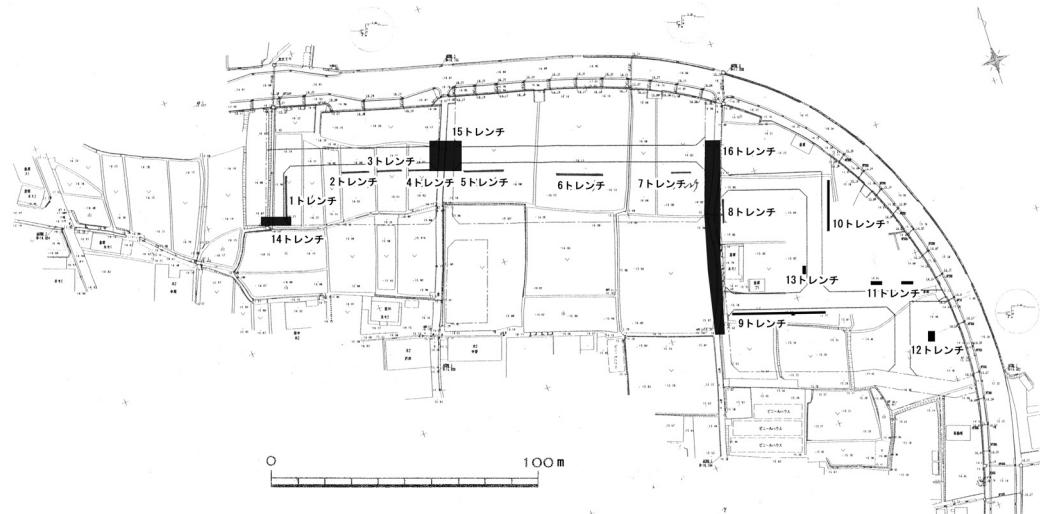
遺構面は3面が確認されている。6a層が第1遺構面に対応する表土層で、この下面が第1遺構面となる。同様に第2遺構面に対応する表土層が7a層、その下面が第2遺構面、第3遺構面に対応する表土層が9a層、その下面が第3遺構面となる。それぞれの時代は第1遺構面が古墳時代前期から中世あるいは近世まで、第2遺構面が弥生時代前期以降古墳時代前期までで、第3遺構面が弥生時代前期となる。

20. 出合遺跡 第45次調査

1. 調査の概要

今回の発掘調査は上津橋地区宅地開発事業に伴うもので、宅地造成により遺跡が損壊される部分について、本年度は工事計画との関係で、そのうち3地点について行った。

トレンチ名は前年度および本年度行った試掘調査のトレンチ番号を引き継ぎ、第14トレンチ～第16トレンチとした。



基本層序

試掘調査によって確認されたように3面の遺構面が検出され、以下記述する遺構・遺物が確認された。なお、第14トレンチおよび第15トレンチでは、第2遺構面・第3遺構面間に表土層を形成する可能性のある土壤化層（8a層）があり、第15トレンチではこの層下で自然流路を確認しているが、8a層からは出土遺物もほとんどなく、今次の調査においては遺構面として認定しなかった。基本層序は以下のとおりである。

1a層：現表土（水田耕土）（上面標高：14トレンチ約16.2m、15トレンチ約16.1m、16トレンチ16.0～15.7m、以下同様。）

2a～5a層：旧耕土（下面標高：約15.8m、15.7～15.5m、15.5～15.2m）

6a層：古墳時代前期～中世の表土層。下面が第1遺構面（下面標高：約15.8m、15.7～15.5m、15.5～15.2m）

7a層：古墳時代前期までの表土層。下面が第2遺構面（下面標高：第1面と同一、約15.2m、15.1～15.0m）

8a層：（弥生時代前期以降古墳時代前期以前の）土壤化層（下面標高：約15.0m、14.9m、なし）

9a層：弥生時代前期の遺物包含層。厚い洪水砂（8c層）に覆われる。下面が第3遺構面（下面標高：14.4m、14.3m、14.7～14.3m）

第14トレンチ 事業地の西部に位置する南北4m、東西14.5mの調査区である。

第1・2遺構面 耕作地造成による削平のためか、他のトレンチで確認された6a層および7a層が存在せず、現耕土及び旧耕土（1a層～5a層）直下、7c層上面で第1遺構面・第2遺構面の遺構が検出された。竪穴住居2棟・掘立柱建物1棟・溝・土坑・柱穴などの遺構がある。

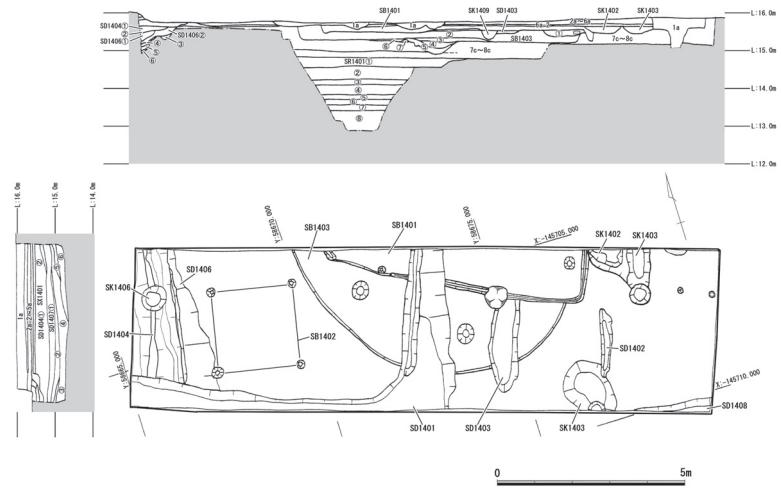


fig.161 第14トレンチ
平・断面図

SB1401 トレンチの中央部に位置する、東西辺7.0mの方形の竪穴住居。SB1403と切り合い関係にあり、SB1403よりも新しい。遺構検出面から床面までの深さは約0.1m。幅約0.1m、床面からの深さ約0.1mの周壁溝を巡らす。住居の大部分は北側の調査区外で、柱穴等は確認していない。埋土および貼り床内から弥生土器あるいは古墳時代初めと思われる土器の小片が出土している。

SB1402 トレンチ西側に位置する掘立柱建物。東西1間、南北1間分が検出された。柱間は南北、東西とも2.1mである。主軸方向をN-12°-Eにとる。柱穴は径約0.2mの円形のもの。遺構検出面からの深さは0.1~0.25m。P3以外の柱穴から土器の小片が出土している。

SB1403 トレンチの中央部に位置する径約7.5mの円形の竪穴住居で、SB1401と切り合い関係にあり、SB1401よりも古い。住居の北半分は調査区外に拡がっている。埋土が遺構面のベースとなる土とほとんど区別がつかず、床面近くまで面を下げる段階でようやくこの遺構を確認したが、調査区北壁での土層観察により他の遺構と同じ面から掘り込まれていることを確認している。本来の遺構検出面から床面までの深さは0.38m。床面の中央部付近に焼土や炭を含んだ炉（中央土坑）が存在する。柱穴は3基（P1~3）を確認した。いずれにも柱痕が確認でき、その径は15~22cm。柱穴自体の径は0.45m前後で深さ0.25~0.5mを測る。その配置から、全体では5本ないし6本の主柱穴をもつと考えられる。周壁溝は確認されなかった。中央土坑は東西径1.5m、床面からの深さ0.4mを測る楕円形の土坑。北半分は調査区外。断面形はすり鉢形で、下層に炭・焼土が堆積している。炉の周囲は幅0.15~0.2m、高さ5cmほどの堤状の高まりが廻らされ、さらにその外側に幅0.4~0.5m、深さ数cmの浅い溝が廻らされる。下層の炭層を水洗したところ焼け米・炭化種子・サヌカイト片・赤石英片・サヌカイト製石錐などが出土した。床面上から弥生時代中期と考えられる鉢形土器などが、また凹み石や弥生時代後期後半の土器片が床面から浮いた状態で出土している。

SD1401 トレンチの中央を南北方向、南辺でL字状に曲がり西へのびる溝。幅1.1~1.4m、遺構検出面からの深さ数~10cmを測る。SB1401・1403より新しい。

SD1402 トレンチ中央やや東寄りを南北方向にのびる溝。幅0.3m、遺構検出面からの深さ0.17mを測る。SD1401に並行し、両者の間隔は約3.9m。

SK1401~1403 SD1402の延長方向にはSK1401~1403などがあり、これらは上位を削平された溝遺構の

底の深い部分が遺存したものである可能性がある。

SD1403 トレンチ東寄りに位置するSD1401に並行し南北方向にのびる溝。両者の間隔は1.0~1.5m。調査区の南東隅で東西方向にのびる溝（SD1408）の肩が検出されており、SD1402あるいはSD1403に続くものと考えられる。

SD1404 トレンチ西端、埋没したSD1407とほぼ重なる位置に南北方向で掘削される溝。SD1405の西に隣接し並行する。溝の東半を検出したが、西岸は調査区外。幅0.8m以上、深さ0.15m以上。古墳時代後期、5世紀代の土器が多く出土している。

SD1405 トレンチ西端、SD1404の東に並行し南北方向にのびる溝。幅0.6~0.8m、深さ0.3mを測る。埋没したSD1406とほぼ重なる位置に南北方向で掘削される。古墳時代後期、5世紀代の土器が多く出土した。

遺構の埋没状況からSD1404・1405は同時に存在したものと考えられるが、両者の埋没後、ここで土坑（SK1406）が掘削され、厚い部分で5cmを超える炭層が形成されるほどに大がかりに火が焚かれる（SX1401）。炭に埋もれる状態で古墳時代後期の遺物が出土している。

SD1406・1407 トレンチ西端で検出された溝。土層の観察からはSD1406がSD1407よりも古いように見えるが判然としない。やや方向を違えるがともに南北方向にのび、SD1406は幅約1.0m、遺構検出面からの深さ約0.4mを測る。SD1407の西岸は調査区外となり、幅を確認できないが0.5m以上ある。遺構検出面からの深さは約0.7mを測る。古墳時代初め頃の土器が多く出土している。

第3遺構面 第14トレンチでは遺構面に対応する旧表土層9a層及び遺構面のベースとなる9c層が確認できず、そこに相当する層位は全域が礫層となっていた。トレンチの範囲全体が自然流路にあたっているものと推察される。この礫層からは摩滅した弥生土器と考えられる小片が極少量出土している。

第15トレンチ 事業地の中央西寄りに設定した東西辺・南北辺ともに約13.5mの正方形の調査区である。大畦を利用した現況の農道が調査区の中央を南北方向に縦断する。

第1遺構面 旧耕土ないし6a層下面=7a層上面で検出。溝・土坑・柱穴等が確認されている。

SD1501 農道となっている現況の南北方向大畦に重なる位置にのびる溝。幅2.2~2.4m、断面逆台形で深さ0.6~0.7mを測る。現況の農道と西3分の2が重なるが、本来の大畦の位置は現況よりも西にあったことが、農道の土層断面の観察から確認でき、大畦東側の側溝であると判断できる。溝底の粘土層から室町時代の土器・曲物が出土している。なお、大畦西側に対応すると思われる側溝は今回の調査区内では確認できなかったが、後述するSK1502~1504がそれに関連する遺構であるかもしれない。

SD1502 SD1501の西に並行する幅1.6~1.8m、深さ約0.1mの溝。SD1501に比べ浅く、調査区南壁から北へ8.3mの地点まで続き、そこで途切れる。室町時代末あるいは戦国時代までの遺物が出土しているが、その中に古代の平瓦片と須恵器円面硯片がみられた。

SK1501 調査区の南東隅において検出された不整形の土坑。東西約1.4mを測る。南北は0.7m以上（北半分が調査区外）。土師器小皿が重なった状態で出土している。

SK1502～1504 調査区西部で検出された大型の土坑群である。すべて西調査区外に拡がり、全体の形状は確認できなかったが、隅円方形の形状を呈すると思われ、相接するような位置関係にある。SK1502が南北4.5m、東西1.9m以上、遺構検出面からの深さ0.4m、SK1503が南北4.0m以上、東西1.7m以上、深さ0.4m以上、SK1504が東西4.0m以上、南北3.0m以上、深さ0.5mを測る。遺構の東辺が大畦にほぼ併行して連なり、同じ目的で大畦の西を大きく掘削した遺構と考えられるが、具体的な目的は判然としない。中世の遺物が少量出土した。

SP1505 調査区の南西隅で検出された一辺0.38m、深さ0.44mの隅丸方形の柱穴。径約0.1mの柱痕が認められる。

SP1511 調査区の北東隅で検出された0.5×0.28m、深さ0.3mの楕円形の柱穴。掘方の底中央に礎板状の大礫が据えられる。SP1512と切り合い関係にあり、SP1511の方が新しい。

SP1513 調査区の北東部で検出された径0.42m、深さ0.3mの柱穴。径0.26mの柱痕が確認された。

SP1514 調査区の北東部で検出された径0.2m、深さ0.31mの柱穴。径0.13mの柱痕が認められた。

SP1536 調査区の北東部、SK1501を切る径0.22m、深さ0.37mの柱穴。径0.16mの柱痕が確認できた。

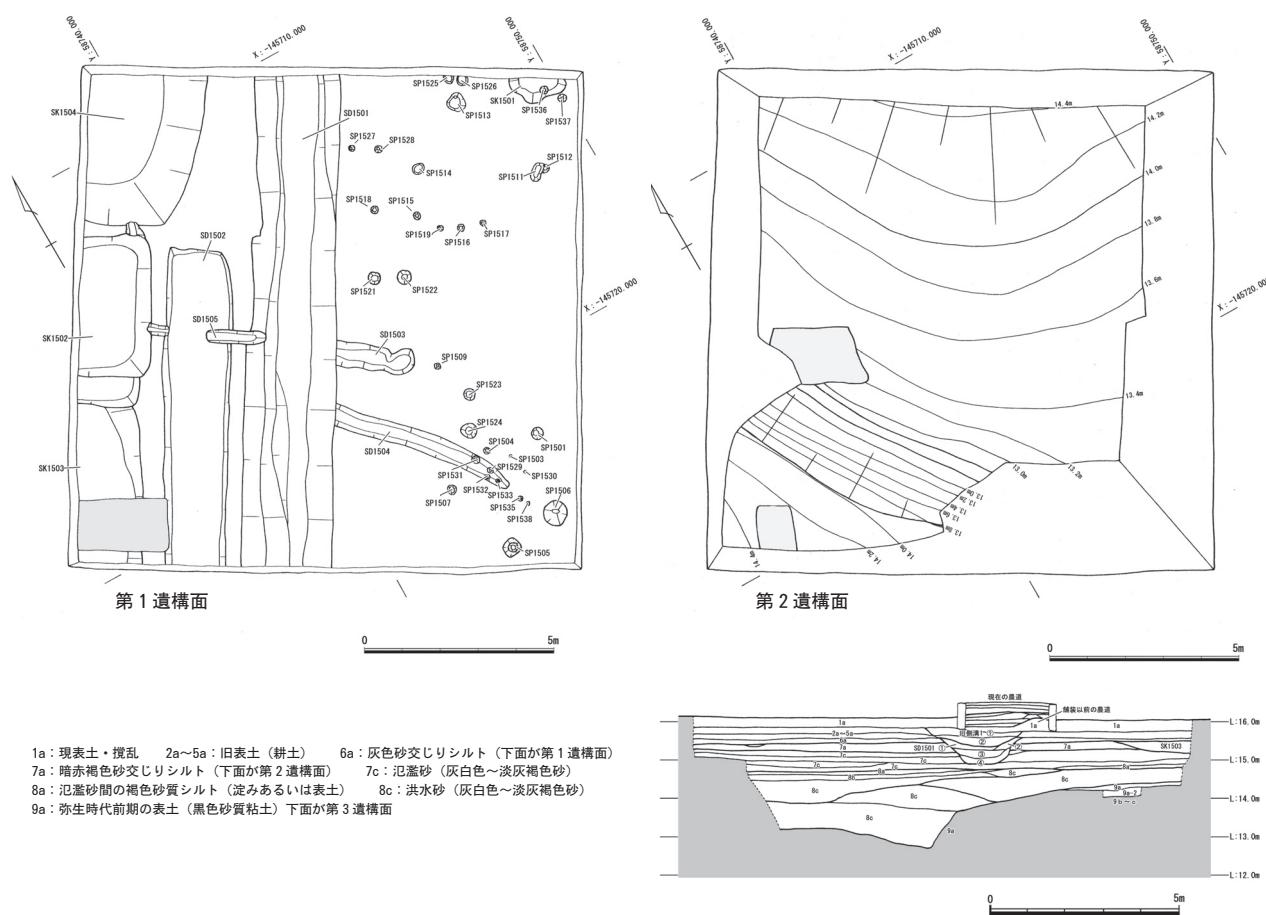


fig.162 第15トレーニング調査区平・断面図

第2遺構面 第1遺構面の基盤層である7a層直下の7c層上面において検出した遺構面。遺構は少なく、調査区の北東部において溝・土坑などが検出されたに留まる。

SD1506 幅約0.4m、長さ約1.9m、深さ約0.2mの溝で、東西方向に伸びる。埋土上半から古墳時代前期の土器がまとめて出土した。

SP1505 東西0.9m、南北0.66m、深さ0.16mの隅丸方形の土坑。

SP1506 東西0.4m、南北0.5m、深さ0.12mの土坑。

第3遺構面（上） 第2遺構面の基盤層となる暗灰褐色砂交じりシルト層の下は厚い氾濫砂に覆われ、この下面で砂にパックされた状態の谷状地形が検出された。

SR1501 北西から南東にのびる谷状地形。調査区の南西で南岸肩を検出したが、北岸肩は調査区外となる。上端の幅は13mほどになると思われる。谷上端の標高は14.4m～14.0mほどで、谷底は約12.9m。したがって両者の比高は1.1m～1.5mとなる。谷の表面全体に厚く9a層が堆積しており、その状況から、流水あるいは湛水していたものではなく、水のない空堀状の地形であったと思われる。

第3遺構面（下） 第3遺構面の表土層である9a層部分は工事影響レベル以下であるため、調査の対象からははずれるが、一部トレンチ調査で9a層を掘削し、下層の状況を確認した。9a層からは弥生時代前期の遺物が出土したが、谷斜面ということもあってか、その下面での遺構の検出はなかった。

第16トレンチ 第15トレンチ上の大畦の一町東となる大畦に重なる幅1.5～6.0m、長さ87mの南北に長いトレンチである。

第1遺構面 溝・大溝（自然流路？）・土坑・柱穴等を確認した。古墳時代前期から近世にかけての遺構がある。

SD1601・1602・1606・1610・1611・1612

トレンチ北半に位置する。北側は南南西に伸びるもののがSK1604付近でゆるく屈曲し、南に方向を変えてのびる。この状況は農道となっていた現況大畦の形状をなぞるものもある。幅0.5～0.7mを測り、SD1602またSD1601の北部には牛と推定される蹄跡が密に残されている。大畦の東側溝が数次にわたり掘りなおされたものと考えられる。

SD1608・1614～1616

トレンチ中部に位置する耕作痕（鋤溝）と推定される溝状遺構。南にあるSD1617に並行するような形で南南東方向に伸びる。幅0.4～0.5mで深さ約5cmと浅い溝でそれぞれの溝の間隔は1.6m～3.0mほどを測る。最も南にあるSD1616とSD1617の間隔も3.0mで、大畦の側溝と推定したSD1610と切り合い関係にあり、SD1610の方が新しい。

SD1604 トレンチ北部に位置する蛇行して南東行する断面箱形の溝。幅約1.5m、遺構検出面からの深さ約0.8mを測る。底面から馬歯が出土した。

SD1607 トレンチ北部に位置する南東行する断面船底形の溝。幅約3.7m、遺構検出面からの深さ約1.0mを測る。

SD1635 トレンチ中部に位置する幅約2.0m、深さ約1.2mの断面箱形の溝。溝の方向はN-70°-Wである。

- SD1636 トレンチ中部、SD1614に接してその北側に並行する位置に伸びる断面船底形の溝。幅約1.1m、遺構検出面からの深さ約1.1m、底は狭く、断面薺研形を呈する。溝の方向はN-43°-Wである。
- SD1617 トレンチ中部にある幅約2.3m、深さ約1.0mの断面船底形の溝。溝の方向はN-12°-W。
- SD1618 トレンチ中部、SD1617とSD1619に挟まれる位置に伸びる断面薺研形の溝。幅約1.1m、遺構検出面からの深さ1.1m。溝の方向はN-31°-W。
- SD1619 トレンチ中部に位置する。幅約6.6m、遺構検出面からの深さ2.1m、断面薺研形の大きな溝である。溝の方向はN-51°-W。SD1620と切り合い関係にあり、SD1619が古い。北岸上位では据え置かれた状態の、また溝底付近では上から転落した状況の古墳時代初めの土器が出土している。
- SD1620 トレンチ南部に位置する。断面船底形の溝。幅約1.2m、遺構検出面からの深さ約0.5m。溝の方向はN-23°-W。SD1619と切り合い関係にあり、SD1620が新しい。
- SD1621 トレンチ南部に位置する断面船底形の溝。ゆるく弧を描きながら南北行する。幅約0.5m、遺構検出面からの深さ0.12~0.28m、溝の方向はN-23°-W。SD1620と切り合い関係にあり、SD1621が新しい。
- SK1604 トレンチ中部、SD1601の屈曲する地点の東側にある土坑。円形とすれば径4.5mほどと推定される。SK1604付近にはSD1613・SD1622・SK1603等、浅い不整形な遺構が集中する。

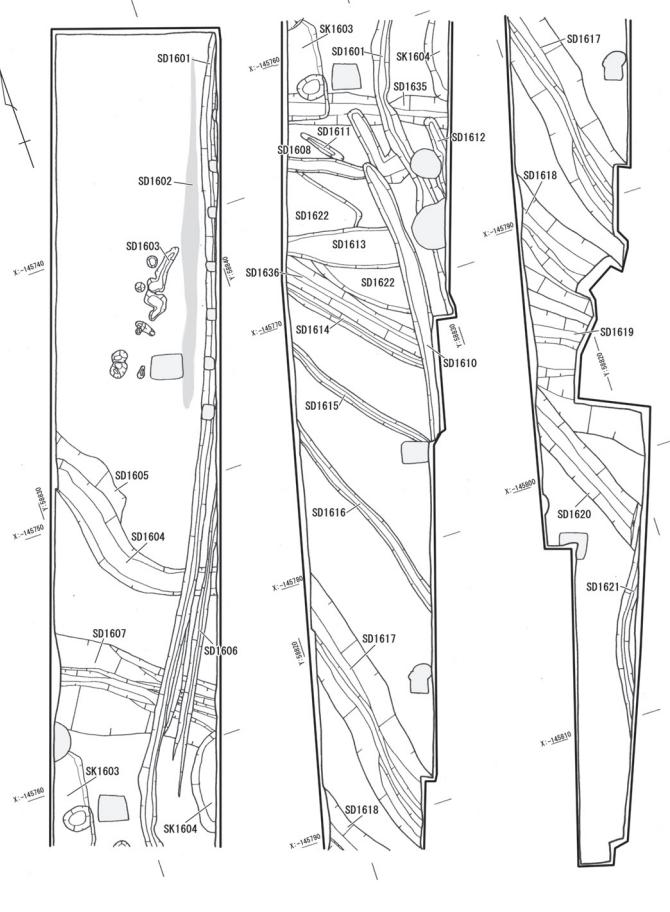


fig.163 第16トレンチ第1遺構面平面図

第2遺構面 耕作痕（鋤溝）・溝・竪穴住居・掘立柱建物・土坑等を確認した。古墳時代前期の遺構を主体とする。

SB1601 トレンチ中部に位置する。南北3.6m（柱間2間）、東西4.1m（柱間2間）以上の規模をもつ掘立柱建物。東部は調査区外に拡がる可能性がある。柱間は南北1.7～1.8m、東西1.8～2.0m。南北方向はほぼ座標北に合致している。

SB1602 トレンチ中部に位置する方形の竪穴住居と推定している。遺構検出面から床面までの深さは約0.15m。幅約0.28m、床面からの深さ約0.1mの周壁溝を巡らす。小型丸底壺など古墳時代前期の土器が出土している。柱穴は確認できなかった。

SD1628・1624～1626・1634

トレンチ北部に位置する1.0～2.0m間隔で並行する幅約0.4m、遺構検出面深さ約0.1mの溝群。溝の方向はおおよそN-48°-E。鋤溝の可能性がある。

SD1627 トレンチ北部に位置する幅0.5m、深さ約5cmの溝である。溝の方向はおおよそN-19°-Eである。SD1633と切り合い関係にあり、SD1627の方が新しい。

SD1629・1631・1632

トレンチ北部に位置する約1.6m間隔で並行する幅約0.3m、深さ約0.1mの溝群。溝の方向はおおよそN-34°-E。鋤溝の可能性がある。

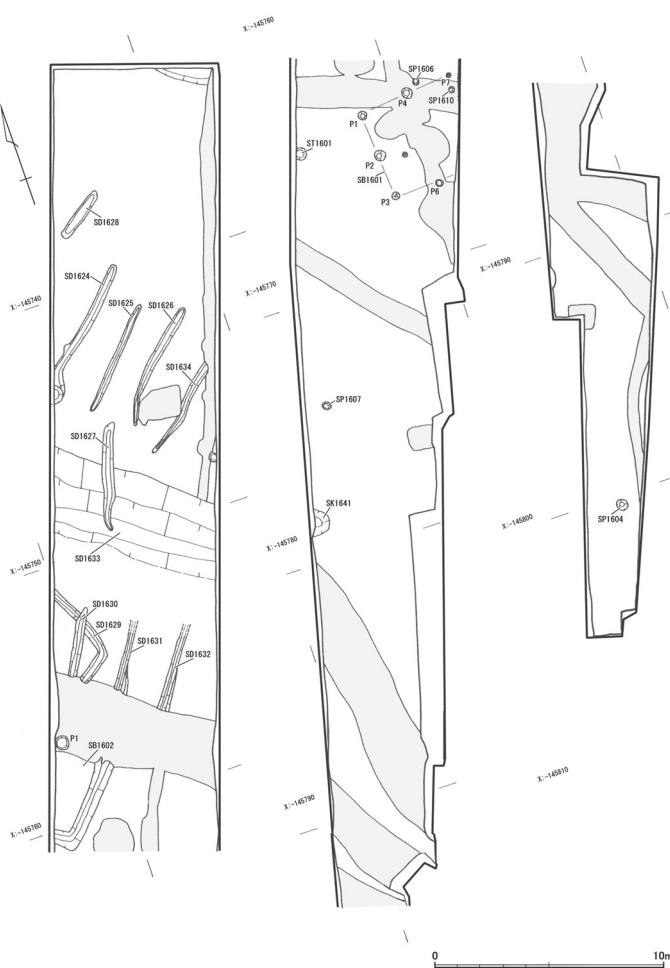


fig.164 第16トレンチ第2遺構面平面図

- | | |
|--------|--|
| SD1630 | トレンチ北部に位置する幅約0.4m、深さ約0.1mでほぼ直角に屈曲する溝である。南西からN-54°-Eに伸びるものが屈曲してN-23°-Wとなる。SD1629と切り合い関係があり、SD1632の方が古い。 |
| SD1633 | トレンチ北部に位置する幅約4.0m、深さ約1.3mの溝である。溝の方向はN-57°-W。SD1627と切り合い関係にあり、SD1633の方が古い。北岸で古墳時代前期の土器がかたまって出土している。 |
| ST1601 | トレンチ中部に位置する土器棺墓。高杯脚部を打ち欠いたものと円礫数個を墓坑底にならべ、その上に高杯杯部で蓋をした正位の土器棺を据える。古墳時代前期に属する。 |
| 第3遺構面 | 調査区の中央部分に大きな谷状の落ち込みがあり、その南北には竪穴住居・土坑・溝・柱穴など多数の遺構がある。弥生時代前期後半に多くが属している。 |
| SB1603 | トレンチ北部に位置する。東西約3.7m×南北約4.5mのプラン不整橿円形の竪穴住居で、遺構検出面から床面までの深さは0.1mほどである。西側の一部をSR1601に切られる。床面の中央には炉である可能性を考えられる浅い土坑がある。約0.7m×0.5mで、埋土中には焼土が確認できる。柱穴は2基検出されたが、いずれも掘り込みは浅い。また西側約半分には、幅約0.35m、深さ数cmの周壁溝と考えられる溝状遺構が確認された。 |



fig.165 第16トレンチ第3遺構面平面図

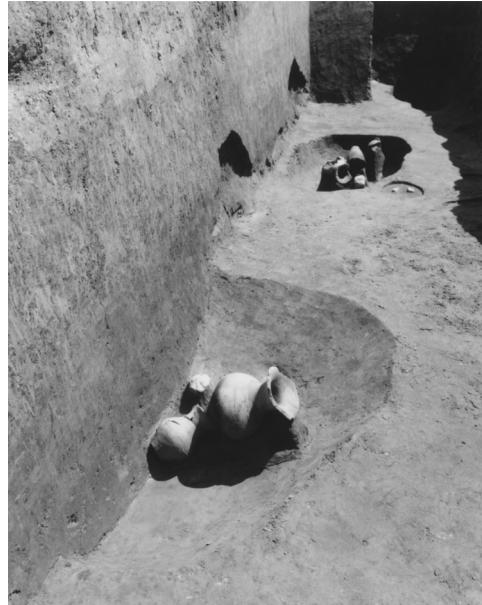


fig.166 SK1606・1607全景

- SB1604** トレンチ北部に位置する。住居中央の炉跡P1（中央土坑）の両端に一对の柱穴が存在する松菊里型の竪穴住居。径約7.0mの円形で、遺構検出面から床面までの深さ約0.3mを測る。北側を第2遺構面のSR1633によって搅乱され、西側の一部は調査区外となる。住居壁のやや内側で住居の輪郭より一回り小さい幅0.15~0.2mの周壁溝、また多数の柱穴が確認されており、住居の建て替えが行われたものと推測される。長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さ約0.5mを測る中央土坑の埋土には炭・焼土が多量に含まれるが、これを水洗した結果、焼米数十点のほか、サヌカイト片・チャート片などが確認された。
- 径約1.0mの、円形の土坑2基が住居北西部（P2）と北東部（P3）にある。P2の床面からの深さは約0.45m、P3は約0.4mである。
- SK1605** トレンチ南部に位置する。南北約1.2m、東西0.5m以上、遺構検出面からの深さ約0.28mのプラン円形の土坑。西側約半分は調査区外に拡がる。
- SK1606** トレンチ南部に位置する。南北約1.4m、東西0.9m以上、遺構検出面からの深さ約0.35mの隅円方形の土坑。東側約半分は調査区外に拡がる。ほぼ完形の弥生時代前期の壺2個体が出土した。
- SK1607** トレンチ南部に位置する。南北約1.4m、東西約0.8mのプラン橢円形の土坑。遺構検出面からの深さ約0.35m。弥生時代前期の甕・壺が出土した。
- SK1608** トレンチ最南部に位置する。南北0.8m以上、東西0.5m以上のプラン隅円方形の土坑。遺構検出面からの深さ約0.4m。西部および南部は調査区外に拡がる。
- SK1609** トレンチ南部に位置する。南北約0.8m、東西0.5m以上、遺構確認面からの深さ0.4mの土坑。西部は調査区外。
- SK1611** トレンチ北部に位置する。東西約2.5m、南北約1.6m、遺構検出面からの深さ約0.35mの隅丸方形の土坑。
- SK1614** トレンチ北部に位置する。南北約1.5m×東西約1.0m、深さ約0.38mの隅丸長方形の土坑。底面は平坦で、東側の壁が一部オーバーハングして立ち上がる。SB1603と切り合い関係にあり先行する。埋土の中層～下層には炭が多く含まれ、炭化した材や土器などが出土地している。形状から貯蔵穴と考えられる。
- SK1616** トレンチ北部に位置する。径約1.2m、深さ約0.28mの不整円形の土坑。北側を自然流路SR1601によって削られる。
- SK1617** トレンチ北部に位置する径約0.9m、深さ約0.23mの不整円形の土坑。
- SK1618** トレンチ北部に位置する約1.0m×約1.8m、深さ約0.34mの土坑。
- SK1619** トレンチ北部に位置する。2.8m×1.5m以上、深さ0.2mの不整円形の土坑。東半分は調査区外に拡がる。
- SK1620** トレンチの北部で東壁にかかる土坑。1.8m×0.5m以上、深さ0.6mで、南側0.8mほどの範囲が深く掘り込まれ、壺や甕など遺物が多く出土している。遺構の北側は底面が一段下がる部分があり、別の土坑と切り合っている可能性が考えられるが、土層観察では切り合は確認できなかった。
- SK1629** 1.1m×0.8m、深さ0.35mの土坑。上面をSK1619に削られる。
- SD1637** 幅約0.4m、深さ約0.2mの溝。SK1620・SK1618およびSK1620・SK1618によって削ら

れる。

- SD1633 幅0.65～0.75m、深さ0.14mの溝。
- SD1641 南北方向に走る幅0.3～0.5m、深さ数cm～10cmの溝。SK1623・SD1642によって削られている。
- SD1642 幅0.7m前後、深さ0.14～0.4mの土坑。

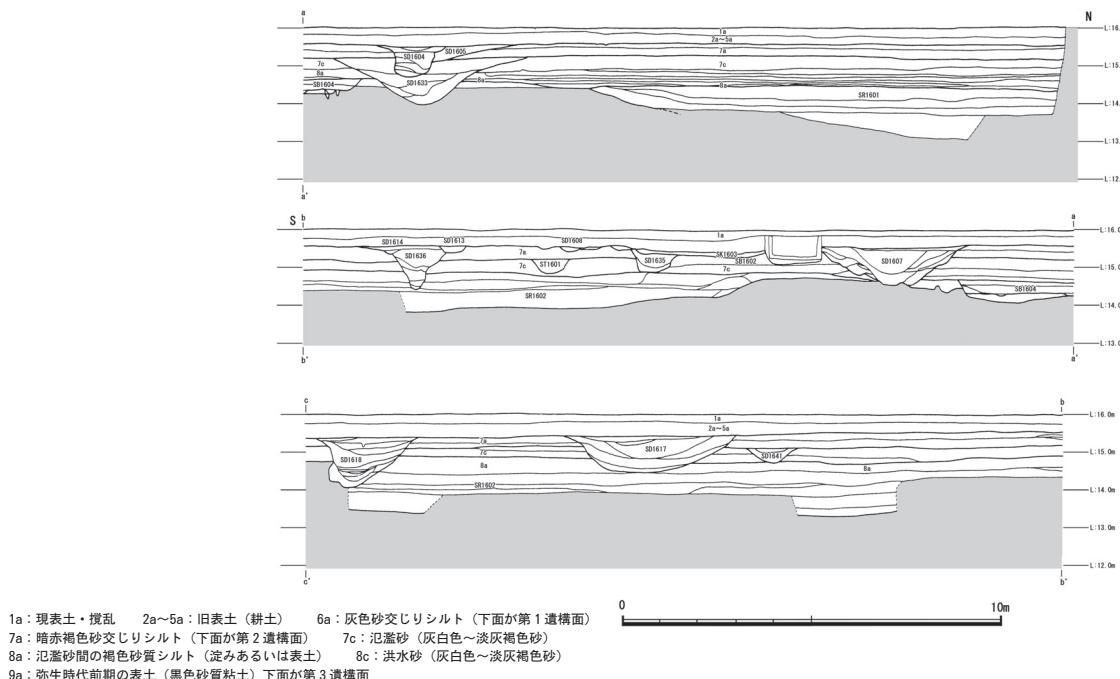


fig.167 第16トレンチ西壁土層断面図



fig.168 第16トレンチ第3遺構面全景

3. まとめ

昨年度実施した試掘調査に引き続き、今回の発掘調査においても多数の遺構・遺物が確認された。特に北東端の第16トレンチにおいては、第3遺構面において弥生時代前期の竪穴住居等、密集した状態で弥生時代前期後半の遺構が存在することを確認した。引き続き来年度行われる調査により、遺跡の様相がより明らかになるものと予想される。



fig.169 出土遺物実測図

1 : SD1501 2・3 : SB1602 4・5 : SD1623 6・7 : SK1606 8・9 : SK1607 10 : SK1620
 (1 : 須恵器〔円面鏡〕 2・3 : 土師器 4~10 : 弥生土器)

21. 今津遺跡 第23次調査

1. はじめに

今津遺跡は昭和55・57年の宅地造成工事に伴って実施された発掘調査によって知られるようになった遺跡である。この第1・2次調査では弥生時代中期の竪穴住居、木棺墓、土坑墓、土器棺墓、土坑、大溝が検出され、弥生時代前期から中期後半までの土器や石器が多量に出土した。以降、22次の発掘調査が実施され、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居、溝、土坑、古墳時代後期の溝、土坑、中世の掘立柱建物などが検出されている。おおむね明石川沿いの南北に伸びる微高地上には弥生時代前期から中期の遺構・遺物が集中し、この微高地の東側を南北に旧い河道が流れ、高津橋丘陵の西縁を縁取る低位段丘とを画している。

今回調査を実施した地点は、平成19年度に実施された第21次調査地の北東側宅地146m²のうち土壤改良実施部分について実施した。

当該地は、弥生時代前期から中期の遺構・遺物が集中して出土した第1次・第2次調査地の北東側、微高地の東側縁辺部にあたる。また古墳時代から中世の掘立柱建物が検出された第9～13次調査地の西側にあたる。



この暗褐灰色粘性砂質土層の下層には、黄灰色粘質土、堅緻な灰黃色砂質土、明黃灰色砂質土が順次水平に堆積し、遺物等は検出されなかった。



fig.171 調査区北半全景

3. まとめ

今回の調査地は、弥生時代中期の竪穴住居が数多く建てられた微高地の東縁にあたり、古墳時代前期から中世の集落が存在したと考えられる段丘西辺との間には、旧河道地に起因する沼沢地のような低湿地であった可能性がある。したがって当該地の東側に弥生時代中期集落の中心部があったと推定される。また、当該地においては今回検出されなかったが、水田等に利用された痕跡がある可能性があり、検証していく必要がある。

22. 新方遺跡 第49次調査

1. はじめに

新方遺跡は明石川と伊川が合流する北側、東西1.5km、東西2.0kmの範囲の沖積地に広がる弥生時代から中世に至る集落遺跡である。

当遺跡は山陽新幹線建設に伴う分布・試掘調査により初めて遺跡の存在が確認され、昭和45年に発掘調査が始まり、これまでに50回近い調査が実施されている。そして、今までの調査成果により、明石川流域における弥生時代前期から始まる大規模な拠点集落として周知されるようになってきた。

今回の調査は、集合住宅建設に伴う地盤改良により、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲約170m²について実施した。今回の調査地の標高は約10mである。

2. 調査の概要

今回の調査は試掘調査を行った結果、事業地の北半については遺構・遺物が確認されなかったため、遺物包含層が確認された南半のうち地盤改良により埋蔵文化財に影響が及ぶ約170m²を調査対象として発掘調査を実施することとなった。但し、耕作土上面から深さ約0.6mが工事影響深度であるため、この深さで調査を終えている。なお、周辺の調査結果から下層には遺構・遺物が遺存していると予想される。

調査は耕作土、旧耕土を重機により除去し、以下の層は人力により遺構・遺物の検出作業を行った。

基本層序

調査地の基本層序は耕作土（標高約10m）、中世から近世の旧耕土である暗黃灰色砂質土・灰黃色砂質土の順であるが、調査区南東側では旧耕土層下で東側に落ちていく流路状の堆積が見られる。旧耕土層下には、灰褐色砂質シルトの遺物包含層が堆積し、そして遺構面となる茶褐色砂質シルトとなる。この遺構面で工事影響深度となる。



遺構

茶褐色砂質シルトの遺構面では、中世の溝状遺構、平安時代の土坑と流路状の落ち込みを確認した。

- SD01** 調査区の南東側で検出された南北方向の溝である。幅1.8m～2.0m、深さ0.54～0.6mを測り、断面形状がU字状である。埋土である暗灰黄色砂質シルト層からは鎌倉時代から室町時代の遺物が出土している。
- SK01** 調査区の南端で検出された楕円形の土坑である。遺構は調査区外に広がるため全体の規模については判らないが、幅1.8m、深さ約0.2mを測る。埋土である暗褐灰色砂質シルトからは平安時代の遺物が出土している。
- 流路状遺構** 調査区の東側中央から南端中央付近に向かって検出され、東側に落ちていく流路と考えられる。検出幅5m以上を測るが、工事影響深度の関係で完掘できていない。上層の黒褐色礫混じりシルトから中世の須恵器・土師器、弥生土器が出土している。



fig.173 調査区平面図



fig.174 調査区全景

3. まとめ

今回の調査は工事影響深度の関係上、第1遺構面で調査を完了している。調査地の東側で平成3～6年度に実施された発掘調査では、中世、奈良時代、古墳時代後期、弥生時代中期の4面の遺構面を確認している。

調査の結果、第1遺構面で検出した平安～室町時代の遺構の密度は希薄であり、溝、土坑、流路状の落ち込みを確認したのみである。

SD01は南北方向に延びていく溝で、中世の耕作地に伴う用水路の機能を有し、土地区分の方向を反映していた可能性が考えられる。

周辺の調査の結果でも、この時期に該当する遺構としては、耕作痕、ピット、流路などが確認されている。また、調査地の南東側では平安時代末～鎌倉時代の建物1棟が確認されるなど集落の存在を窺わしているが、調査件数が少ないこともあって今まで詳しい状況はわかっていない。

23. 南別府遺跡 第3次調査

1. はじめに

南別府遺跡は、1973年にはじめて調査された遺跡であり、今回で3次調査となる。

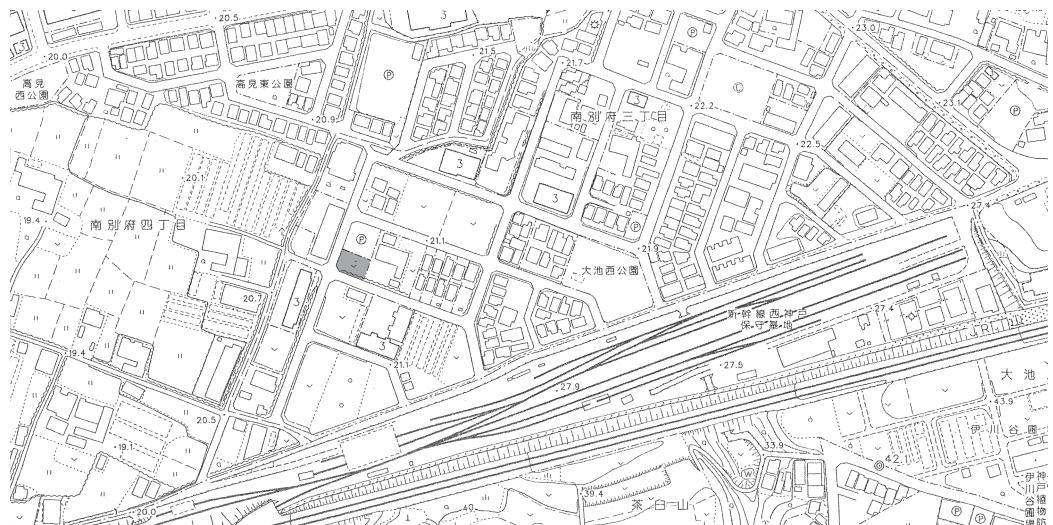
これまでの調査では古墳時代後期末～奈良時代の溝、中世の掘立柱建物等が確認されている。特記できる遺物では、平安時代の瓦も出土している。未だ調査事例の少ない遺跡であり、中世の掘立柱建物を確認しているものの、奈良時代にも集落等が存在すると考えられるが、まだ掘立柱建物等は確認できていない。

今回は共同住宅の建設に伴い、土壤改良により遺跡が破壊される部分について発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

調査区内の基本層序は、攪乱・盛土、旧耕土、淡黄褐色砂質土（近世耕土）、黄灰褐色砂質土（近世耕土の床土）、灰色砂質土（奈良時代～平安時代頃を主とし、中世までの遺物を含む遺物包含層）、暗灰色シルト質極細砂（奈良時代～平安時代頃を主とし、中世までの遺物を含む遺物包含層）、暗黄灰褐色砂質土（遺構面基盤層、無遺物層）となっている。

今回の調査区での遺構面の標高はT.P. 19.2mである。より下層については、T.P. 17.2mまで断ち割り調査を実施したが、遺構と遺物は確認できなかった。



- SK03 円形の土坑で径0.24m、深さ0.28mを測る。灰白色砂質土が堆積している。遺物は時期不明の土師器が細かな破片で出土している。
- SK04 不整円形の落ち込み状の土坑である。土坑の南半は調査区外に拡がる。幅0.18m以上×0.53mで、深さ約0.1mを測る。灰褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。
- SK05 不整円形の落ち込み状の土坑である。土坑の南半は調査区外に拡がっている。幅0.22m以上×0.48mで、深さ0.14mを測る。灰褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。
- 出土遺物** 遺物包含層からは主として奈良時代～平安時代の遺物が出土しており、少量ではあるが弥生土器（後期）、古墳時代後期の須恵器、中世の須恵器も破片で含まれている。弥生時代後期の土器や古墳時代後期の須恵器も含まれる事実から、周囲に弥生時代後期、古墳時代後期の集落が存在する可能性も考えられる。
遺物の主体となる奈良時代～平安時代で器種の判断できるものでは、奈良時代の須恵器で蓋と杯、土師器で高杯の脚部、平安時代の須恵器で蓋と杯の底部等である。
また奈良時代では、須恵器の杯底部外面に「器」銘のある墨書き土器も出土した。この墨書き土器の底部の調整はヘラ切りである。

遺構出土の遺物は少なく、遺構の時期が判断できる遺物も出土していない。その為、遺構の時期は基本的に不明である。

3.まとめ

今回の3次調査では、落ち込み状の土坑と浅い流路状の溝等を検出したが、奈良時代～平安時代に確実に遡る遺構は確認できなかった。遺物包含層からは奈良時代～平安時代頃を主に、多量の遺物が出土している。調査地の周囲に建物等が存在することは明確である。他に、この遺物包含層から奈良時代の須恵器杯の底部外面に「器」銘の墨書き土器が出土したことが特記できる。第1次調査では平安時代の瓦も出土している。奈良時代～平安時代の墨書き土器も瓦も、一般的な集落では基本的に希少な遺物である。

南別府遺跡で、奈良時代～平安時代にどの様な遺跡が拡がっていたかは未解明であるが、考察する一助となる資料が出土したことは、今回の調査成果の一つである。

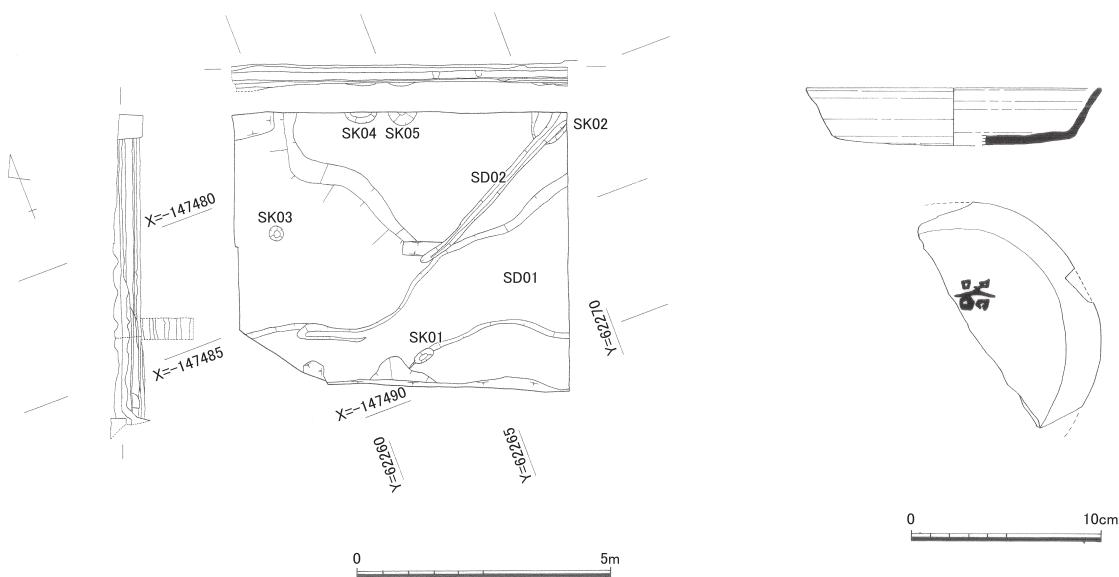


fig.176 調査区平・断面図

fig.177 出土墨書き土器実測図

24. 南別府遺跡 第4次調査

1. はじめに

南別府遺跡は明石城の立地する丘陵の北、伊川左岸の沖積地に立地する。伊川は遺跡の北を西南西に流れ、およそ3kmで明石川と合流する。伊川左岸、本遺跡の東約1.5kmの丘陵上には弥生時代中期後半と古墳時代初頭頃の集落として知られる池上口ノ池遺跡がある。伊川の対岸には弥生時代中期の土坑、平安時代の掘立柱建物・墓などの遺構、弥生時代、奈良時代～平安時代の遺物が確認された北別府遺跡が存在し、さらにその東に弥生時代前期から後期にかけての集落遺跡として知られる池上北遺跡が存在する。

南別府遺跡は1973年に行われた試掘（第1次調査）ではじめて調査が行われ、引き続き住宅の建設に伴い第2次調査が行われた。第1次・第2次調査では、古墳時代・奈良時代・平安時代、さらに中世から近代に至る遺構・遺物が確認されている。時期は特定できなかつたものの、柱穴の形状・大きさ等から古代のものと推定される掘立柱建物をはじめ、溝・土坑などの遺構が検出されている。特筆される遺物としては、平安時代、11世紀第4四半期の神出古窯址群田井裏1号窯出土の軒平瓦と同范の瓦などがある。その後長く発掘調査が行われなかつたが、本年度に至り今回の調査地の南西160mの地点において第3次調査が行われた。この調査においては、溝・土坑が検出されたが、建物等の顕著な遺構は確認されていない。一方、遺物としては、弥生時代後期～中世の土器類があり、この中に奈良時代の「器（以下欠損）」の墨書き土器（須恵器杯）、脚柱部面取りの土師器高杯など、一般的の集落遺跡からは出土例の少ない遺物が存在している点が注目される。

fig.178 調査地位置図
S=1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴い、遺跡が損壊される部分についてこれを行い、2面の遺構面を確認した。古墳時代後期の遺構が主体になる第1遺構面では溝、土坑、鋤溝などが、古墳時代初頭の第2面遺構では竪穴住居、土器溜まり、土坑、溝、柱などの遺構を検出した。以下、主だった遺構について記述する。

調査区内の基本層序は、現耕土の下に数枚の水田土壤（2～3層）が確認でき、下層の水田床土（3a～2層）の下面=4a層上面が第1遺構面となる。第2遺構面は4a層下面で検出できる遺構と4b層下面で検出されるものの2種があるが、4a層は4b層へ漸移的に移行するもので、また両面の遺構はともに古墳時代前期のものであることから、同一の遺構面として認識した。

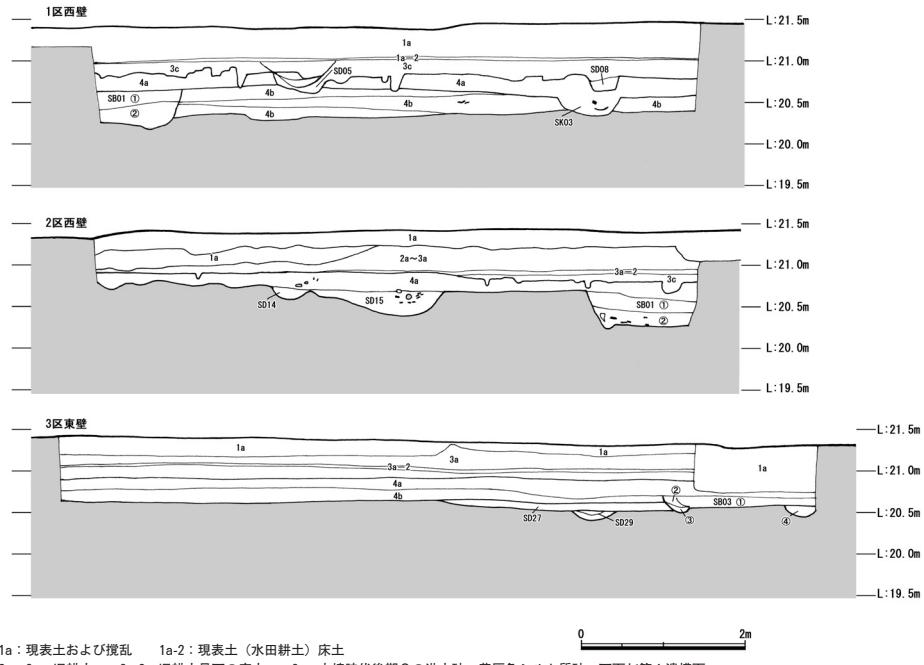


fig.179 調査区土層断面図

第1遺構面 古墳時代中期以降の遺構を確認した。1区に遺構が集中する。東西方向の溝が多く併行し、また重なる位置で存在する。2・3区では顕著な遺構は少なく、ほとんどが浅く広い凹みあるいは溝を検出した。

SD02 1区に併行して存在するSD01・03・05等を切る形で蛇行する溝。幅約0.8m、遺構面からの深さ約0.2m。2区のSD09が同じ溝であると考えられる。洪水の際の水みちである可能性が考えられる。1区のSD04も同様の遺構であろう。

SD07 1区北部で検出された幅1.3m、遺構検出面からの深さ5cmほどの溝状遺構で、SD08、SK01と切り合い関係にあり、SD07の方が新しい。底面に多くのクワの打ち込みと推定される痕跡を確認した。方向の確認できるものは西向きに東から打ち込まれている。クワ先であればその幅は約0.15mと推定できる。

SD08 1区北部で検出された幅約0.4m、遺構検出面からの深さ約0.2mを測る断面箱形の溝で、径約1.0mの円形、遺構検出面からの深さ約0.5mの土坑SK01につながる。古墳時代中期の遺物が出土している。

第2遺構面 古墳時代はじめの遺構を検出した。竪穴住居3棟のほか、柱穴、土坑、溝、土器溜まりなどの遺構を検出した。

SB01 1区南西隅、2区北西隅で検出した南北4.6mを測る方形の竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約0.4m。床面壁際に幅0.15mほどの周壁溝があぐる。南北軸はN-8°-Wである。

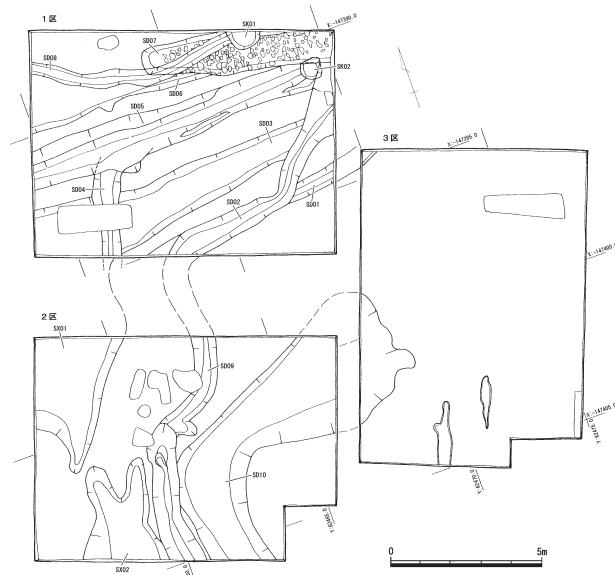


fig.180 第1遺構面平面図

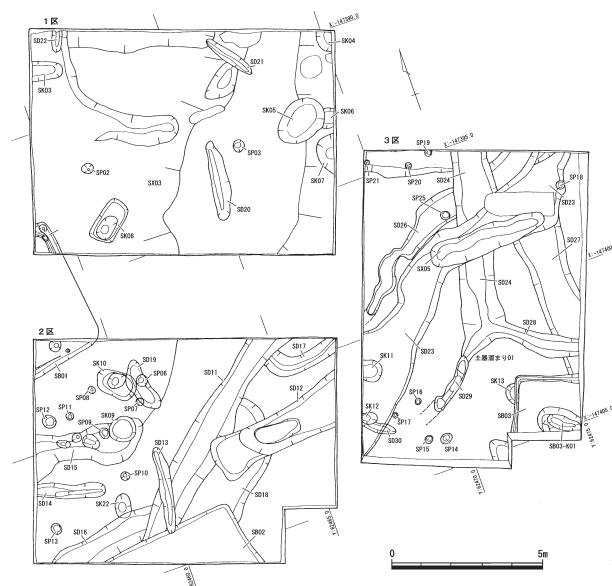


fig.181 第2遺構面平面図



fig.182 1区第1遺構面遺構検出作業



fig.183 2区第2遺構面全景

- SB02** 2区南部で検出した北辺4.6m以上、東辺2.5m以上の方形の竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約0.2m。南北軸はSB01と同じでN-8°-Wである。
- SB03** 3区南東隅で検出した北辺4.6m以上、東辺2.5m以上の方形の竪穴住居（写真20）である。遺構検出面からの深さ0.15m、床面壁際に幅0.15mほどの周壁溝がめぐる。住居址内には、長径1.3m以上、短径0.9m以上、床面からの深さ0.38mを測る大きな土坑が存在する。この土坑の中からは小片である多くの土器片が出土した。住居址の床面で建物に伴う柱穴を精査したが検出できなかったことから、この土坑は柱の抜き取り痕である可能性もある。建物の南北軸はN-20°-Eである。
- SD11** 2区で検出された幅約1.2m、遺構検出面からの深さ約0.2mの溝。土器がまとまって出土する部分が点的に存在する。
- SK11** 3区西南隅で検出した直径0.7mの円形の土坑。遺構検出面からの深さは約0.2mを測る。土坑内から土器片が多く出土した。
- SX05** 3区北半で検出した溝状の遺構。SD23と重なるが、その部分だけSD23の浅い底面と比べ極端に窪んだ形状をしており、溝というよりもむしろ狭長な土坑状の遺構と考えられる。南北長約4.0m、東西幅0.7~0.9m、遺構検出面からの深さ0.19mを測る。

SP21

3区北西隅で検出した直径約0.2mのピットで、柱材が遺存していた。この柱材は縦0.4m、柱材の底面で最も残りの良い部分での直径が約0.15m。柱は若干南に傾くことが柱 자체、また柱痕により確認できる。遺存する柱の上部は腐食により痩せている。

土器溜まり1

3区の南半において確認。第2遺構面に対応する表土層である4a層中に東西5.5m、南北4.0mほどの範囲に土器が集中して出土するものである。壺などの底部が上を向いた状態のものが複数見られるが、人為的に置いたものではなく、投棄されたものと考えられる。これらの土器溜まりの土器を取り上げると、Y字状の溝が検出された。SB03を避けるよう溝があるようであり、その最終堆積として土器溜まりが形成されているようである。



fig.184 2区SB02全景

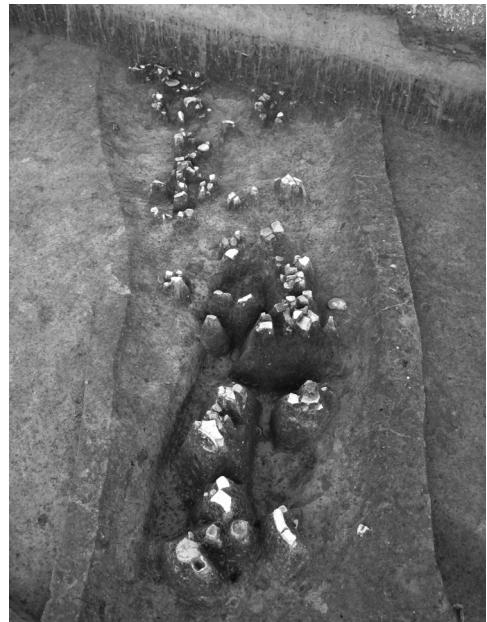


fig.185 2区SD12遺物出土状況

3.まとめ

第2遺構面において古墳時代初頭の遺構・遺物が多く確認された。これまでの発掘調査の成果により、南別府遺跡は古墳時代後期から近世に至る時期の遺跡であるという認識であったが、今回の調査によりこの認識は第1遺構面についてのものであり、下層に古墳時代前期の遺構面が存在することを確認できたのは新たな知見である。

この遺構面に対応する表土層である4a層は厚く、土壤化もかなり進行していることから、第2遺構面は長期にわたり存続したものと推察される。今回の調査地においては竪穴住居・溝をはじめ、濃密に遺構が存在しており、ここがこの時期のムラ中心部の一角であったと考えられよう。

なお、第1次・第2次調査においては、下層を確認するためのトレーナーを入れており、この際の記録写真には4a層に対応するだろう土壤化の進んだ土層も確認できる。この際には遺物の出土は記録されていないことからすると、この地点は遺構・遺物の希薄な地点であったと考えられる。

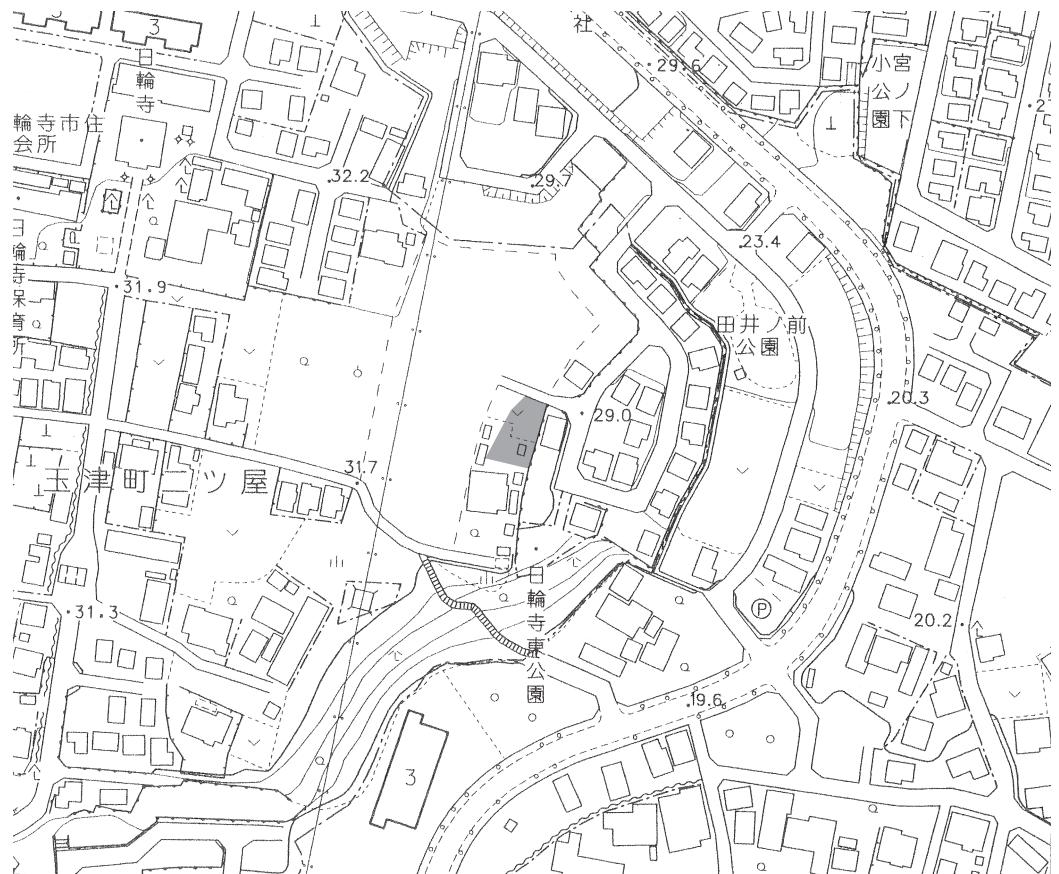
25. 日輪寺遺跡 第14次調査

1. はじめに

日輪寺遺跡は、神戸市西区玉津町小山に所在する弥生時代、平安時代、中世の集落遺跡である。遺跡は明石川と櫛谷川の合流地点のやや北側の丘陵部の末端付近に立地している。

これまでに13次にわたる調査が実施され、特に今回の調査地に隣接する地区において実施した第4～7次調査では弥生時代末から古墳時代前期にかけての竪穴住居が約40棟検出されており、当遺跡における最盛期の状況が知られている。また同調査では中世の遺構・遺物も確認されており、日輪寺との関連も考察されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、新築建物部分（1区）と進入路切土部分（2区）の2ヶ所について実施した。



2. 調査の概要

今回の調査対象地は先述のとおり2ヶ所に分かれており、残土置場を確保するため1ヶ所ずつ調査を実施することとした。最初に調査に着手した南側の調査区を1区、続いて調査を実施した北側の調査区を2区と呼称する。

1区

検出遺構は弥生時代末頃の竪穴住居1棟、落ち込み状遺構1基、ピット約40基である。

SB01

調査区西半部で検出した竪穴住居で、長辺（東西方向）6.15m、短辺（南北方向）4.7mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.35m程度を測る。内部でベッド状遺構や周壁溝、ピットや土坑などを検出した。

ベッド状遺構は全周し、やや歪な長方形を呈する。ベッド状遺構の上面で検出したピットや土坑は住居内の東半部に偏っている。ベッド状遺構は盛土によって形成されている。

ベッド状遺構の内部では中央土坑、土坑、ピットを検出した。中央土坑は長辺1.34m、短辺0.75m、深さ0.15mを測る。埋土中にはわずかに焼土を含むが、炭は出土していない。また壁面も焼成を受けた状況はみられない。

中央土坑の東・西側で中央土坑を挟んで対照的な位置でピット（P5・7）を検出した。ともに径0.3m前後、深さ約0.5mを測る。このP5・P7が主柱穴の可能性が高いものと考えられる。そのほか周壁溝を南辺の西半分と西辺で検出している。

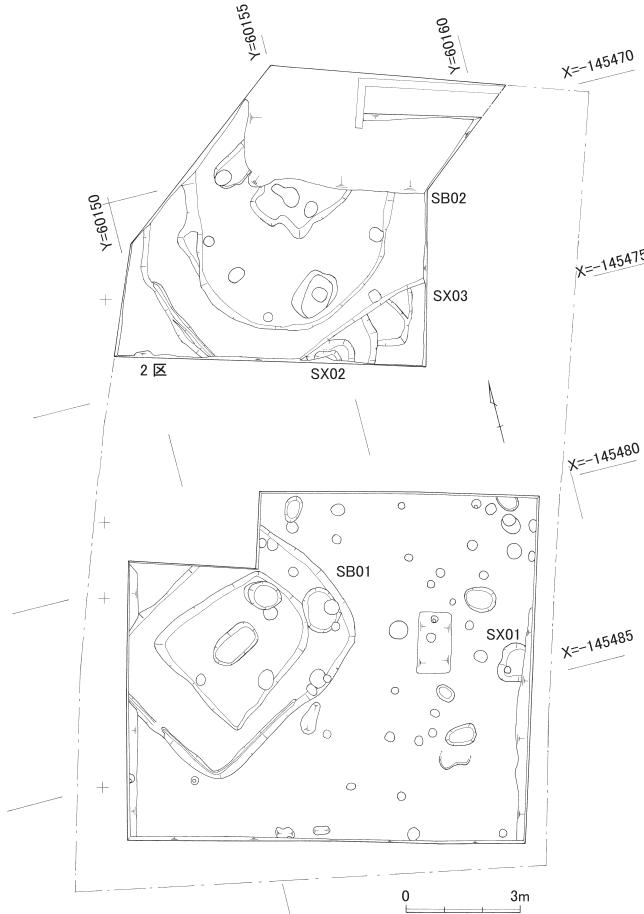


fig.187 調査区平面図

SB01の埋土中からは28リットル入りコンテナ20箱以上の弥生時代末頃の土器が出土した。これらの土器の大半はSB01が廃絶される際、あるいは廃絶された後に土砂とともに廃棄されたものと考えられる。出土遺物の中には銅鏡が1点含まれる。また出土土器には吉備系や丹波系の土器が少量ながら含まれている。

SB01の床面付近においても、中央土坑の上面やP5の上面などから弥生時代末頃の土器が出土している。埋土中から出土した土器と床面付近出土の土器との間にどれくらいの時期差が存在するのかは現時点では明確ではない。今後の整理作業の進展をまって検討を加えたい。

SX01 調査区東端部で検出した落ち込み状遺構である。東側が調査区外に延びるため正確な規模は不明である。検出した規模は長辺1.04m、短辺0.67m、深さ0.10mを測り、南西部の底面で深さ約0.10mを測るピットを検出している。弥生土器が少量出土している。

ピット ピットは約40基検出している。掘立柱建物として明確なまとまりは見出せていない。内部から土器が出土したものとしているものがあるが、出土しているものでも小片のため、それぞれのピットについて明確な時期を示すことは現地点ではできない。弥生時代のものが多く含まれると考えられるが、隣接地での調査では平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物も確認されているため、今回検出したピットの中に平安時代ないし中世のものが含まれる可能性も考えられる。なお、今回の調査地の西側で実施した第4次調査地との間には未調査部分があり、また1区内でも主に東半部に偏ってピットが存在するため、第4次調査で検出された掘立柱建物やピットとの関係も現段階では不明である。

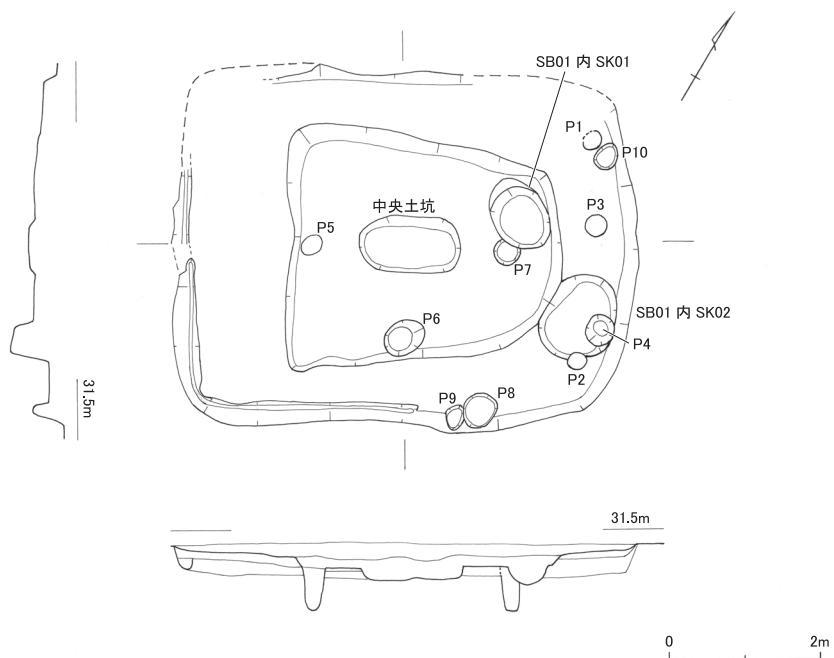


fig.188 SB01平・断面図



fig.189 SB01全景

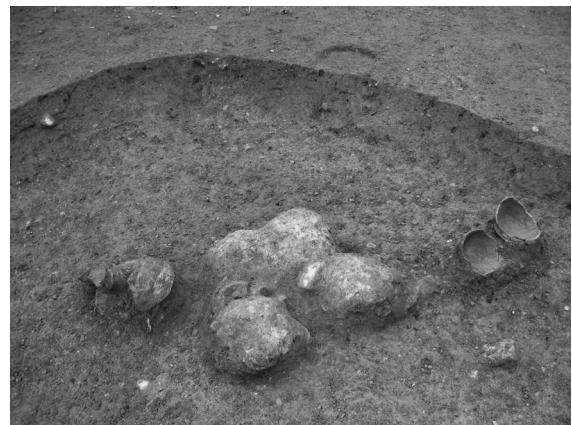


fig.190 SB01遺物出土状況

2区

切土部分の調査区で、調査面積は約68m²を測る。北側の現況道路部分について第5次調査を実施しており、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居や土坑などが確認されている。竪穴住居のうちの1棟は今回の調査区へと続くものであり、2区においても第5次調査と同様に当該時期の集落域が確認されることが調査前から予想されていた。

調査の結果、竪穴住居1棟、落ち込み状遺構2基を検出した。

SB02

2区のほぼ全域が第5次調査から続く竪穴住居にあたっている。第5次調査ではSH21と呼称されていた竪穴住居であるが、今回の調査ではSB02と呼称する。

第5次調査では、床面出土土器から弥生時代後期の竪穴住居であり、平面形が多角形を呈するものと報告されている。

今回検出した部分においても第5次調査時と同様にベッド状遺構やピットを内部で検出した。住居の平面形はやや歪な六角形を呈しており、ベッド状遺構も南東部はやや幅が狭くなっている。検出面からの深さは0.5m程度を測り、遺存状態は良好といえる。1区のSB01と同様に埋土中からは多量の弥生時代末頃の土器が出土しているが、床面付近やベッド状遺構上面付近から完形に近い土器も出土している。特に中央部東端の床面付近では高壊が正位置で据えられた状態で出土した。竪穴住居の営まれていた時期を示すものとして特に重要である。このほかベッド状遺構上面も含めて小型の甕や短頸壺などが出土地していながら、後述するピットの上位やすぐ隣からいずれも出土していることも注目される。ピットでは柱痕が残るものは認められなかったため柱は抜き取られた可能性が高いが、抜きとったあとで柱穴の近くに土器を置いた可能性も考えられる。



fig.191 SB02全景

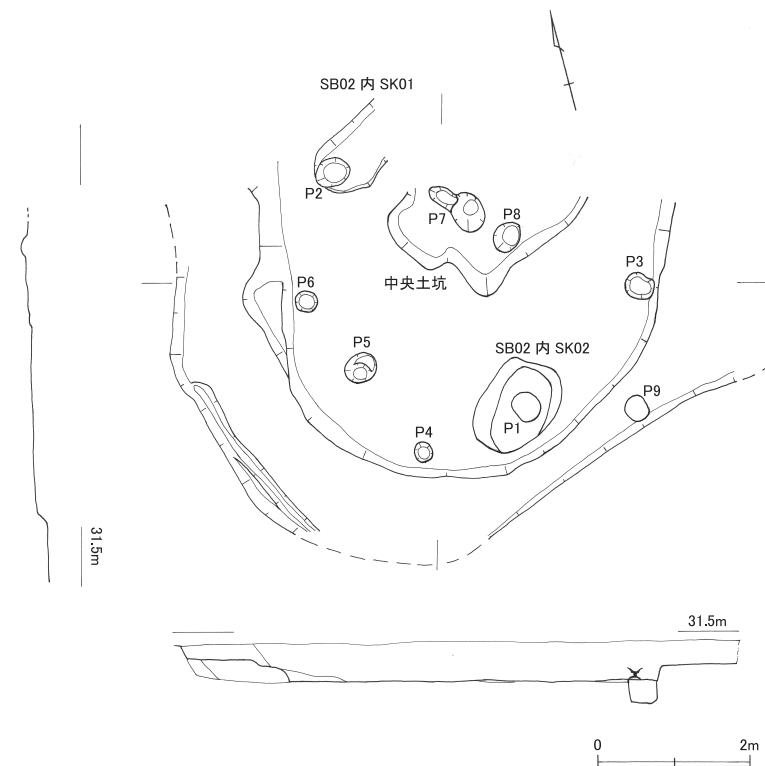


fig.192 SB02平・断面図

そのほか周壁溝を南西部で検出した。南側は調査区外へと続くが東側では検出していなかったため、今回の調査範囲の中では部分的にしか存在しなかったものと考えられる。なお第5次調査時においては、周壁溝は北側壁際で検出されている。

SB02においてベッド状遺構より内部で中央土坑、土坑2基、ピット8基を検出した。ピットのうち2基は中央土坑の内部で検出し、また土坑(SB01内SK01・02)の内部でもそれぞれ1基ずつ検出している。ピットの深さには浅いものと深いものがあり、この状況は第5次調査でも認められるが、主柱穴の認定については今後両調査成果を合わせて考えていきたいと考えている。

また住居の営まれた時期についても、第5次調査では弥生時代後期とされているが、今回の調査でベッド状遺構の上面や床面から完形の土器が数点出土しており(fig.193)、これらの土器から判断すれば、庄内式併行期まで下がる可能性が考えられる。今後の整理作業を待って改めて検討したいと考えている。なお、SB02出土土器の中には河内あるいは讃岐の胎土をもつ破片が数点存在しており、わずかな量ではあるが、他地域との交流を物語る遺物といえる。

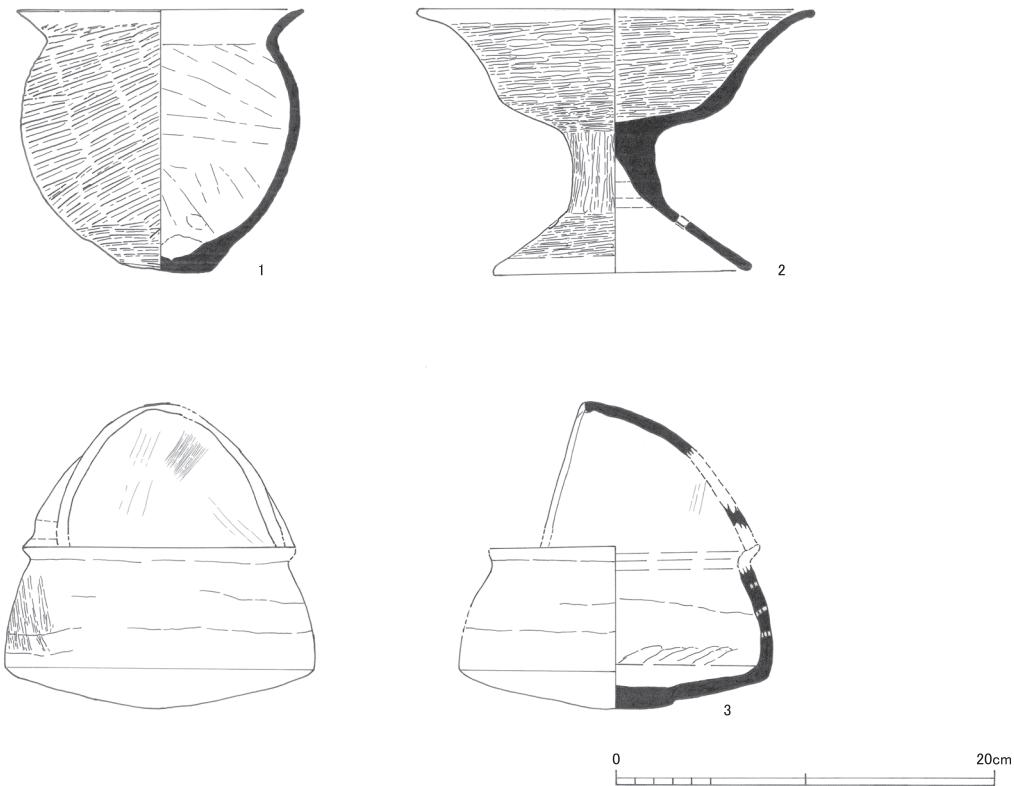


fig.193 SB02出土遺物実測図



fig.194 SB02遺物出土状況（復元）

SX02

調査区南東部で検出した落ち込み状遺構である。西側をSB02によって失われており、また南側は調査区外に延びるため本来の形状や規模は不明である。検出面からの深さは約0.60mを測る。遺構の性格については不明である。前述のとおりSB02と切り合い関係があり、SB02より古いものと考えられるが、出土土器からは時期差は明確ではない。今後整理作業の進展を待って検討したい。

SX03

調査区南東部で検出した落ち込み状遺構である。北側をSB02、西側はSX02によって失われており、本来の形状や規模は不明である。検出面からの深さは0.20m程度を測る。遺構の性格は不明である。

3. まとめ

今回の調査では弥生時代末頃の竪穴住居2棟、落ち込み状遺構3基、ピット約40基を検出した。前述のとおり今回の調査地に隣接する地区において実施したこれまでの調査でも弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が約40棟検出されており、今回の調査成果もこれまでの調査成果を補強するものとなった。

特に今回検出した竪穴住居2棟はSB01で0.35m程度、SB02では0.50m程度の深さを測り、遺存状況が良いものであるが、加えて埋土内より多量の当該時期の土器が出土している。当遺跡は丘陵上に立地しており、自然環境のみで土砂が大量に住居内に流入することは考えにくいため、住居の埋土は人為的に埋め戻された土壤と判断される。この土砂や土器の投棄が単なる個々の住居の廃絶に伴うものかあるいは集落全体の移動などに伴うものかについては即断できないが、今後考察を加えていく必要がある大きな課題である。

今回の調査成果により弥生時代後期～古墳時代前期の集落域がさらに（南）東方向へ広がることが明らかとなった。今回の調査地の東側は現況の擁壁を挟んで低くなってしまい、この部分に集落域が広がるかどうかは疑問であるが、南側は今回の調査地と同様の丘陵状地形が続いていることから、さらに当該時期の集落域が続くものと予想される。以上のように今後の周辺地における発掘調査の重要性がさらに高くなったものといえよう。

III. 平成22年度の保存科学調査・作業の概要

平成22年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

楠・荒田町遺跡

46次

壕断面土層転写

兵庫区楠・荒田町遺跡の第46次調査では、平安時代後期の館を区画する壕が検出された（p.76参照）。壕は調査区をほぼ東西に横切る二重壕で、検出レベルでの上端幅400cm、深さ175cmを測るV字形壕（SD01）と、上端幅180cm、深さ170cmのU字形壕（SD02）で構成される。立地や規模から、平氏の館に関連する遺構である可能性が示唆された。こういった遺構の重要性から、壕の横断面土層を転写し保存することとなった。

転写対象とする壁面は調査区のほぼ東端で、壕主軸に直交して設定した畔の東側壁を転写することとなった。転写範囲は二重壕の横断面の全幅と全高、さらに遺構周囲の基盤土層を包括する範囲を剥ぎ取る必要がある。よって、設定した幅は約6.8m、高さは2.6mに及んだ。

壁面を垂直に削り出し、表面をできるだけ平滑に仕上げておく。ここに転写用の樹脂として、ポリウレタン系合成樹脂（トマック NS-10）を刷毛塗りする。1回目の塗布が完了し、ある程度硬化の進んだ段階で、寒冷紗を補強材として貼り込んで行く。その後もう一度トマック NS-10を塗布し、今度はガラスファイバークロスを貼り重ね、最後にもう一度トマック NS-10を上塗りして完了する。樹脂の硬化後、塗膜を付着土壤ごと剥がし取れば、調査現場での作業はほぼ完了である。

転写土層は神戸市埋蔵文化財センターへ搬入し、表面に付着した余分な土壤を水洗した。最終的に木製パネルに貼り付けて保管するため、あらためて遺構土壤の状況を確認し、採寸した上で、貼り付け用の木製パネルを作製した。



fig.195 転写用樹脂塗布作業

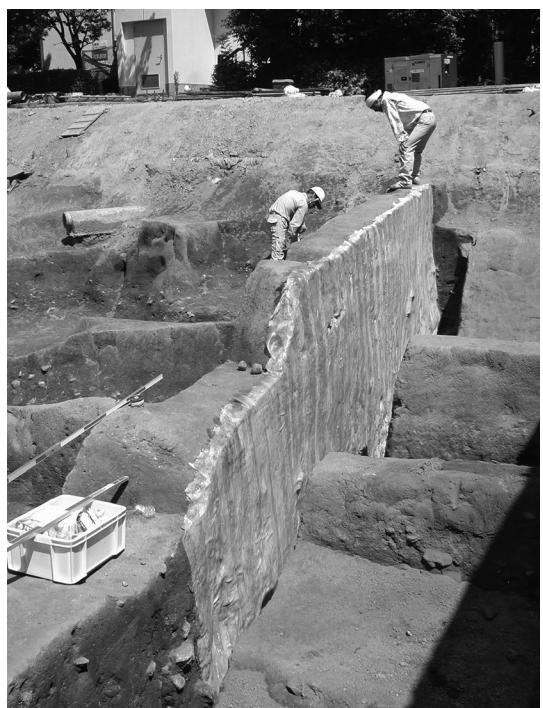


fig.196 塗布作業完了

剥ぎ取った土層は、エポキシ系合成樹脂（アラルダイト AER2400+ハードナー HY837）を用いて、木製パネルに接着した。剥ぎ取り塗膜の背面には凹凸があり、木製パネル平面になじませるため、樹脂にはフィライトマイクロバルーンを增量材として混和した（fig. 197）。硬化した後、パネル周囲からはみ出した部分を鋸、ディスクグラインダーなどで切除、調整した。また付着した土壌の剥落防止のため、シリカ系土壤強化剤（OM25）を刷毛塗りした（fig.198）。

完成した転写土層パネルは常時埋蔵文化財センター収蔵庫に保管しているが、平成24年1月から平成25年1月までの1年間、神戸市兵庫区に開設された「KOBE de 清盛歴史館」において展示された。同館では平清盛と神戸との関わりをテーマとした展示が行なわれたが、その一環としてこの転写土層は、平氏関連の屋敷遺構のスケール感を実感できる、有効な展示物となった。



fig.197 貼付作業



fig.198 土壤強化剤塗布作業



fig.199 完成状況

遺物の保存科学

金属製品の保存

住吉宮町遺跡

49次

東灘区の住吉宮町遺跡では、これまでに5～6世紀前後の古墳が60基以上検出され、古墳群を形成していたことが判明している。平成22年度に実施した49次調査においても同時期の遺構を検出しており、谷状の落ち込みの中からは、祭祀に伴うと考えられる遺物が相当量出土している。この内の金属製遺物について、保存科学的な処置を施した。

金属製遺物は全点が鉄製品であり、器種構成は大刀（1点）・鉄斧（1点／fig.200～202）・刀子（1点）・長茎鎌（1点）・鉄釘数点と、厚さ2.0mm前後の鉄錠と推定できる鉄片多数である。

これらに対し、X線透過観察によって内部構造の調査を行なった。これは、遺物の製作に関する情報の獲得に加え、腐食劣化の程度を可視化するのが目的である。結果、鉄斧については鋳造品であることを示唆する劣化構造を確認したが、それ以外の遺物は鍛造品である可能性が高いことが判明した。また腐食が相当程度進行していることも確認されたため、通常の保存科学的処置を実施することとなった。

遺物は表面に生じた腐食生成物（サビ）及びこれに伴って取り込まれた土砂をクリーニングするが、その前に現状記録のため写真撮影を行なった。付着物などの除去には、ダイヤモンド粒子を電着した回転式の精密グラインダーを用いた。また細かいクラック内部などに生じたサビの除去や表面の最終仕上げには、エアーブレイシブを用いた。

クリーニング完了後は、遺物内部に残留する塩化物イオンなど、腐食促進因子となる物質の除去のため、アルカリ溶液（水酸化リチウムの2%エタノール溶液）に約3ヶ月間、常圧浸漬し、これらを溶出・除去した。

脱塩処置を終えた遺物は、物理的なストレスに耐えうるよう構造的な強化を施す必要がある。そのためにアクリルエマルジョン樹脂（パラロイド：NAD-10）を含浸させた。含浸には減圧含浸装置を用いている。

合成樹脂の含浸、乾燥後は、金属酸化防止剤とハイバリアチューブを合わせたシステム（三菱ガス化学：RPシステム）に封入し、恒温（21.5°C）恒湿（RH50%）の収蔵庫にて保管している。

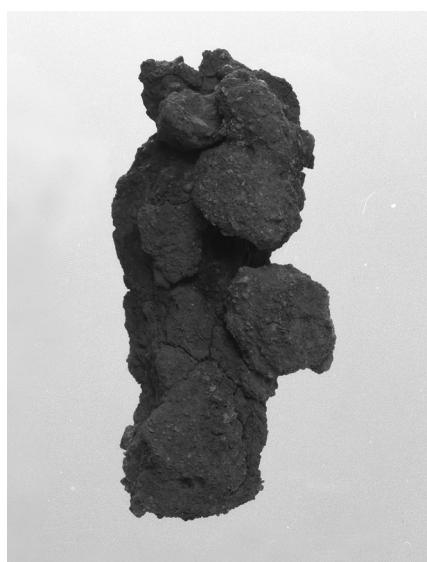


fig.200 鋳造鉄斧（処理前）



fig.201 同左（X線透過画像）



fig.202 同左（処理後）

金属製品の復原 遺跡より出土する遺物は程度の多寡こそあるものの、いずれもが劣化を免れ得ていない。
本山銅鐸 金属製品も土中に埋蔵されている間に生物的・化学的な腐食作用によって劣化していることがほとんどである。平成元年、東灘区本山遺跡で出土した四区袈裟襷文銅鐸（本山銅鐸・fig.203）は、土坑底に横たえられた状態で発見された。X線透過調査の結果、内部は腐食が比較的進行していなかったものの、表面は褐色の腐食層に覆われ、鋳造時の状況を留めてはいなかった。

銅鐸は保存科学的処置を施され、埋蔵文化財センターにおいて展示・公開されてきたが、出土から20年を経た平成22年度、銅鐸が製作された当時の姿を再現するため、復原鋳造を実施することとなった。

本山銅鐸の製作された時代、鋳型は本来粘土型を彫刻して製作するが、今回は原品により近いものとするため、既存のレプリカを型取りして元型を作製し、これを踏み返して補刻を加えた土製鋳型を用いた（fig.204）。またこれに合わせた中型を作製して設置し、裾を上に倒立させた状態で鋳造を行なった。湯口は2箇所で、内部で湯が分散して全体に回るように設計されている。ガス抜き穴は設けていない。

銅鐸の素材となる青銅であるが、本山銅鐸は母材の定量分析を実施していないため、詳細な復元はできていない。今回、若干時期は下るが滋賀県大岩山4号銅鐸の分析データを元に、銅85：錫8：鉛7（重量比）と設定した。

湯は1,136°Cまで過熱、溶解したものを、2つの取瓶に分けて、2箇所の湯口から同時に一気に注ぎ込む（fig.205）。鋳込みのおよそ5分後、鋳型を取り外した。湯が均一に回り、鋳込みの成功したことが確認できた。その後、鐸周囲に生じたバリや鋳肌の荒れを調整、研磨し、作業を完了している（fig.206）。研磨された表面の色調はほぼ黃金色を呈する。なお、これら鋳型の製作および鋳造作業は、「和銅寛」に依頼して実施した。

完成した復原品は企画展等で原品とともに展示し、埋蔵前後の状態比較に供するなど活用しているが、今後、古代技術の解明を進める上で調査に活用されることも期待される。



fig.203 本山銅鐸



fig.204 復原鋳型

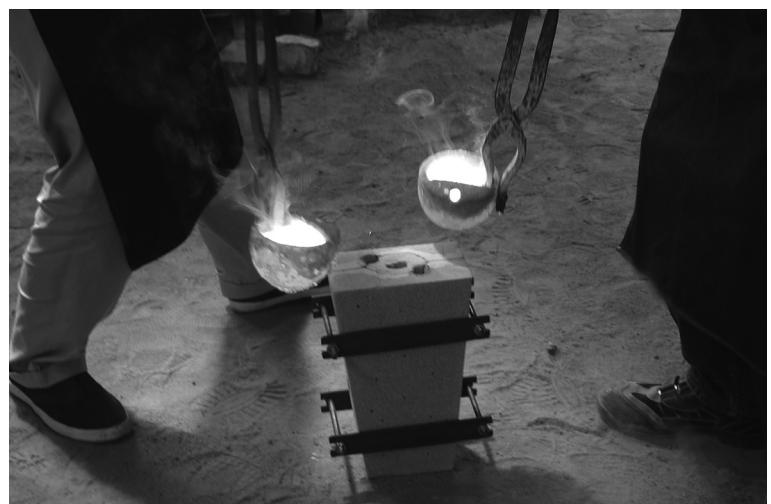


fig.205 鋳込み



fig.206 完成品

表12 平成22年度出土金属製品・木製品一覧

	遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
金属製品	住吉宮町	47	鉄製鉗具、鉄釘、鉱滓	16
	住吉宮町	48-1	鉱滓	1
	住吉宮町	49	鉄刀、鉄斧、鉄鎌	106
	城ヶ口	1	鉄釘、炉壁材	8
	楠・荒田町	46	鉄釘、鉱滓	11
	兵庫津	53	銅錢、銅製品、鉄製品	1625
	日輪寺	14	銅鏡、鉄釘	5
	出合	45	煙管、鉄釘	6
木製品	生田	7	曲物、板、杭	11
	南別府	4	柱材	1
	出合	45	剣形?、曲物、柱材、杭	6

表13 平成22年度自然科学分析一覧

遺跡名	次数	分析項目	資料数
旧神戸外国人居留地	1	花粉分析	1点
		プラントオパール分析	2点
		振動流堆積物調査	—
		モルタル・コンクリート分析	6点
		木材樹種同定	7点
		放射性炭素年代測定	3点
楠荒田町	46	花粉分析	32点
		寄生虫卵分析	7点
		珪藻分析	23点
雲井	32	花粉分析	4点

表14 平成22年度出土動物遺存体一覧

遺跡名	次数	主な出土動物遺存体	点数
住吉宮町	47	哺乳類	5
城ヶ口	1	哺乳類、貝類	2
兵庫津	53	哺乳類、魚類、貝類	800~
計807点~			

平成22年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成25年3月 印刷

平成25年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 株式会社 興文社

TEL 078(924)9800

神戸市広報印刷物登録 平成24年度 第348号 (広報印刷物規格A-6類)



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008

